Lost　Blue

氷月　晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ

【Ｎコード】
Ｎ０５７３Ｘ

【作者名】
氷月　晶

【あらすじ】
”それは、かつてあったことなのか、あるいはこれから起こることなのか。”
天空姫と地龍神、二柱の神が創りし＜力＞満ちる世界。
しかし今、その均衡は崩れ、物語は紐解かれる。

これは、あるオンラインゲームによって起こった「事件」によって、世界の裏側を見ることになった少女のお話です。
元々は私、‘Ｓａｓｓｙ－ｔａｌｋｅＲ’氷月　晶が運営しており

ます辺境サイト「幻想協奏曲」のオリジナルサイドで連載しておりますＷｅｂ小説です。無断転載ではございませんので、どうぞご安心してお読みください。

なお、これは１０年以上前から書きはじめた（！？）お話ですので、Ｐｒｏｇｒａｍ　０、１、２辺りは惨々たる文体です……。本当に申し訳ない。ですが無理に弄るとお話が壊れてしまいそうなので、矛盾や明らかにおかしいところを多少解消しただけで投稿しました。読みづらいとは思いますが、見捨てないで頂けたなら幸いです。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　かくて世界は作られたり

それは、時を超えた過去の話か、それとも遥か彼方の未来の話か。

あるとき、２人の神が１つの次元を賜わった。

２人の名は、天空姫と地龍神。

２人はその何もないそこに、１つの世界を創り出そうと試みた。

とはいえ、一緒に頂いた光の種に少し手を加えてやった所、勝手に出来上がった。

だから２人は、更に手を加えて自分たちと同じような存在を創ってみようと試みた。

いろいろなものが出来たので、２人は楽しんでそれらに名前を付けた。

しかし、目的のものはまだ出来ない。

そこで２人は、発想を変えてみることにした。器を先に創るのでなく、魂を先に創ろうと。

そして、天空姫は天空姫、地龍神は地龍神で２つのものを創り上げた。

それは、ふたつでひとつの愛しいもの達。

だから2人は、手放すことが出来なかった。暫く自分たちの側におくと決めたのだ。

そして世界が安定し、天空姫と地龍神の創った者達が繁栄を謳歌し始めた頃。

2人は最愛の初子達に、世界を見せてやることにした。

そのときに、ようやく気がついたことがある。

世界は、力に満ちていた。

2人の力の残滓だった。それが、「人間」と呼ばれる者達に宿っていたのだ。

2人はそれに、あと少しだけ手を加えた。人間がその力を、傷つかずに扱えるように。

だからその力は、「人の祈りを叶える力」と呼ばれている。

だが力に奢る者は必ずいるもので、そのために神を害そうと試みる者達が出てきた。

そのために天空姫は囚われ、深い深い眠りにつくこととなった。

いま、彼女がどこにいるのか、定かではない。

地龍神はそのことに嘆いた。だが、そのままではいられない。

最愛の伴侶が戻ってくるまでは、自分ひとりで世界を支えなければならないのだから。

だから、自分を手伝うものとして6人の精霊を作った。

彼らには、自分を手伝うものを1人、あるいは1つづつ選ぶ権利を与えた。

彼らは＜門＞と呼ばれる神殿に住まい、世界を支える手伝いをすることとなった。

世界は何とか安定した。

しかし、その均衡は崩れようとしている。

危ういバランスを保つ天秤を押してしまったのは、1人の魔導士が作った1つのゲーム。

そのゲームの名は……

「Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ」

Ｐｒｏｇｒａｍ　０　運命（さだめ）の歯車

「……は？　ゲーム？」
新聞の向こうから少女の声がする。
少女は食卓の上を左手だけで探っていた。
「ギョーギ悪いよ。食べきってから読みな！」
「だったら珪ちゃんも本置きなよね。いっつもあたしばかり言って」
ようやく見つけたマグカップを口元に運ぶ。
「どっちもどっちでしょ！　２人共取り上げっ！」
母親らしき女性が、新聞と本を同時にひったくった。
「あぁあっ、ちょ、ちょっとお母さん！　タンマタンマ、それでレポート書くんだよ！」
「後で読めばいいでしょ。ちょっとぐらいはお母さんの話聞いてよ」
すねたような母親の顔。２人は静かに姿勢を正した。
新聞をとられた幼げな少女は、マグカップをテーブルに置いて、口を開いた。
「んで、ゲームがどうしたのよ、お母さん？」
「実はね、また新作を出すことになったんだけど、そのテストプレイを……」
「あー、私はだめだわ。レポート終わってないもん」
そう言って、『珪ちゃん』――珪都はフォークを持ち直し、また食べ始めた。
「……沙紗は？」
沙紗と呼ばれた少女は、少し考える風にして、それから頷いた。
「良いよ、あたしは。……そのかわり……」
ずいっ、と真正面の母親の鼻先に手を出す。
「…何？　家庭当番代われってコト？」
「当ったりィ！　１ヶ月分代わってもらうわよ、掃除に洗濯、それから食事……ってワケでちょーだい」

くるっと手をひるがえす。
それを見て、母親はにっこりと笑いながら「００」と書かれたシールのついたメモリースティックを彼女の手に置いた。
「あれ？　てっきりＤＶＤ－ＲＯＭかと思ったんだけど」
「あぁ、オンラインゲームだからね、それＩＤ入りなのよ。今のところ１００しかないモニターの為のものよ。起動させれば、自動的にこっち繋がるから」
「ふーん。大多数で１つの同じゲームをやるんだね」
「そーよ。大事になさい」

女子ばかりの教室には、冬だと言うのに活気で満ち溢れている。
沙紗――如月　沙紗は、同じクラスの親友に今朝の出来事を聞かせていた。
「で、これがそのスティックなのね」
「あんまり乱暴にしないでよ、梓」
メモリースティックを中指と人差し指で持ち上げる少女――梓に、沙紗は呆れた様に注意した。
「わかってるってーの！　でもいーよねー。親がゲーム会社の子ってさ、ゲームもらえるじゃん」
肘で友人の脇腹をつっつく梓。
「今回のゲーム、どんな設定よ？」
「えー、言うのぉ？」
「聞かしてよ！」
わざともったいぶる沙紗の袖をつかんで、梓は思いっきり腕をゆすった。
「だぁーっ、やめなさい、言うって！　えっとね……」
カバンをかき回し、八ッ折の紙を取り出す。
勢い良く広げたそれは、かなりデカイ。

「えーっとぉ……あった。『世界各地の神殿を回って、Ｌｏｓｔ Ｂｌｕｅを取り戻せ！』　……だって」
「……『Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ』って、何よ？」
「遺跡らしいよ？」
沙紗は取扱説明書を素早くたたみ、机の上に放り出した。
「泉野、如月！！」
びくっ、と首をすくめる沙紗と梓。
前方を見ると、自分達の担任が立っていた。
「な……中立先生ぇ……」
「仲が良いのも成績が良いのも結構だが、朝礼の時ぐらい静かにできんのかお前らは！」
バシッ、ベシッ。
「～～～ったー……」
「何も名簿録ではたかなくたって良いじゃん！」
梓が中立に言う。
「だったら静かにしなさい、泉野」
言う通り静かになった梓達の後方で、クラスメイトが幾人か笑う。
中立は何も言わず、教卓に戻った。
「さて、これで前半の大テストが終わったワケだけど……」
そこまで言うと、教室のそこかしこで声が上がった。
「まだ話は終わっていないわよ」
「結果はー？」
「男子と女子、どっちが上だったのさ、先生！」
せっかちな娘達が騒ぎ出す。
「上位５０名中、女子は２７名、男子は２３名いたわ。こっちの最高は……」
一気に静まり返り、中立の言葉を待つ女生徒達。
中立はゆっくりと生徒達を見回すと、ぺろっと手元の紙を開いた。
「如月　沙紗！　４８９点で２位よ」
沙紗に視線が集まる。沙紗自身は、自分が注目されているのをあ

まり気にせず、ぽつっとつぶやいた。
「満点取り損ねたな～。５００狙ってたのに…」
そのつぶやきを聞いて、梓はばしっと沙紗の右腕をはたく。
「……痛いっつーの」
「この点でまだ満足しないの？　鈍欲ねぇ」
「そりゃ、興味対象だもん。どこまでいけるか。ところで瑠璃ちゃん。１位誰？」
沙紗は中立に向き直って問う。
「１位？　１位は……４９５点で、高村　圭一って子ね」
「あぁーーーっ！負けたぁーーーー！！」
大声で叫び、立ち上がる。
教室に居た誰もがひいてしまったのは、言う間でもない。

さて、昼休み。沙紗は友人とともに食堂で昼食を取っていた。
「はぁ～、大恥かいちゃった……」
はぐっ、とフォークに刺した卵焼きを頬張る沙紗。
隣で梓も弁当をつついている。
「あんな大声出すからよ。……食堂で叫ばないでよ」
「わかってるわ、よっ！」
言いながら、沙紗は１口サイズの鶏肉を突き刺した。少々硬い。
「ちょっと火ィ通しすぎたかな？」
「いいんじゃないか？」
すうっと後方から大きな手が伸びてきて、フォークを持った右手を持ち上げた。何も言わず、沙紗は目で追う。
鶏肉は、いつも沙紗が目にしている高さよりもずっと上で、後方の男の口に収められた。
そこで、男は沙紗から手を離した。
「沙紗の味付けは良いね。ちょっと薄味だけど……」
「圭一くん」
見上げた先にいた男――高村　圭一は、ペロッと下唇を舐めた。

彼は沙紗の幼馴染で、沙紗が油断していると時々こういう無作法をやってみせる。
「やっぱり薄かった？　時間無かったから……」
「ちょっと」
背後から、ものすごく不審な声がかかる。
そこで、沙紗は梓がいた事を思い出した。
「何よ、『圭一くん』って！　親衛隊の私でさえ恐れ多くて呼べないのに～！！」
梓の大声に、周囲が3人に注目する。沙紗はため息を1つ、ついた。
（自分が、叫ぶなって言ってなかったっけ？）
沙紗は呆れ顔のまま、圭一を見上げた。
「で、どうしたの？」
圭一はにっこりと笑う。
「沙紗、今回の前期テストも負けたよなぁ？　それで、今回のペナルティだけど……」
「な……何よ」
「おごって？」
約、5秒後。
「……は？」
「だから、昼飯おごってよ」
「それだけ？」
「そ。それだけ」
相変わらずにこにこと沙紗を見ている圭一。
その要求にホッとした沙紗は、急にとてつもなく恥ずかしくなった。その理由は、前のペナルティが「頬にキス」だったから。
なるべく圭一に顔を見られないように立ち上がる。
「沙紗、どこ行くの？」
やっと興奮が収まったらしい梓が問う。
「ランチ買いに行くの」

「あんたの？」
「違う。圭一くんの」
「いってらっさーい。……抜け駆けしないでよ」
梓の言葉に反応せず、沙紗は手をひらひらと振って、圭一と一緒にその場を後にした。
カウンターで、圭一は炒飯にスープが付いたＢランチを注文する。
計５００円なり。
沙紗は財布を開けて硬貨を取り出しながら、圭一に話しかけた。
「ねぇ、圭一くん？」
「ん、何？」
「圭一くんってさぁ、『Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ』知ってる？」
「あ、知ってる」
トレイに炒飯と中華スープをのせて、圭一は歩き始めた。
「持ってるよ、俺。……で、どーし……」
「ホントに！？　やったぁっ、一人目発見！」
飛び上がるかと思うと、嬉しそうな声を出す沙紗。
（……成る程、今度の興味対象か……）
「『Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ』のモニター探しか？」
「何よ、急に」
「あんたの新しい興味対象」
「ん、当たり。蒼洋の中にも何人かモニターがいるって聞いたからね」
沙紗はテーブルに戻ると、自分も席を１つずらした。
「何してんだ？」
「ちょっと梓にサービスしてんの。圭一くんここね」
いままで自分の座っていた席を指す。
圭一は納得いかなそうな表情をつくる。
（……人の気も知らないで……）
しかし、そんなことはおくびにも出さない。
圭一は表情を一変させると、いつもの水面の様な笑みを浮かべて、

梓に声をかけた。
「ここ、良いかな？　えっと……」
「いっ、泉野です！　泉野　梓」
「じゃ、泉野さん、ここ良い？」
「もちろん！」
「ありがとう」
頬を紅潮させてうなずきまくる梓に、とびっきりの笑顔を圭一は見せた。
座ると、すぐに食べ始める。沙紗は小声で圭一に話しかけた。
「……（ねぇ、圭一くん？）」
「（何？）」
「（放課後あいてる？）」
「（放課後？……今日はクラブはないから、あいてるな。んで？）」
「（コンピューター室に行きたいの。いい？）」
「（……ああ、『L・B』ね。やるの？）」
「（やりたい）」
「（OK、放課後な。俺そっち行くわ）」
「（やめときなよ。、あたしがそっち行く。コンピューター室そっちにあるし）」
圭一がうなずいた。
（……視線が痛いなぁ……）
改めて圭一の人気ぶりを痛感する沙紗であった……。

放課後。
「高村ぁっ！　客だぞ、客！！」
「あぁ？」
友人の騒ぐ声に、圭一はつい読みふけっていた本から目を上げた。
「客？　俺にか」
「おぅ。あの如月さんが、困ったように『あの、圭一くん……じゃ

なくて、高村くんいますか?』ってよーーっ!」
友人の身振り手振りとモノマネを見て、本を閉じ、立ち上がる。
ガラッっと音を立ててドアを開けると、予想通り人垣が出来ていた。
「え……え〜っと、だからぁ、高村くん……」
「いーじゃん、いーじゃん! あんなネクラは放っといて、オレと……」
「いーやっ! ぜひ僕と……」
(……やっぱり)
沙紗だ。比較的やせた体と、可愛らしい、しかしどこか刺のある顔立ちと性格で男子の人気を集めているのを彼女は知らない。
「おい、てめぇら!」
集団の真後ろから割り入って、騒ぎの中心に出る。
圭一は、そこで沙紗の肩を引き寄せた。
「俺の沙紗に、何か用?」
「け……圭一くん、何言って……」
「いやぁ、悪い悪い。待ってる間だけ……と思ったら、つい読みふけっちゃってさ」
にっこりと笑って沙紗の言葉を遮る圭一。沙紗は一転、呆れ顔だ。
「気持ちはわかるけど……こっちも男子校舎に来づらいんだから、出来ればすぐに気付いてよ」
「はは……。とにかく、用意してくるよ。待ってて」
圭一が集団をぬって教室に入ると、騒ぎは一気に鎮静化した。
沙紗はほっとして、ほぐれかけたリボンをほどき、髪を結い直す。
「沙紗」
カバンを肩に引っ掛け、圭一は近寄ってきた。
「さて、とっとと行こうぜ」

目的地は、東校舎・コンピュータールーム。沙紗達の通う私立蒼洋学院では理系・情報系・男子の教室は東に、文系・家政・女子の

教室は南校舎にある。授業のときはともかく、放課後などの自由時間に校舎を跨いで移動するのはかなり恥ずかしいものがあるのが、この進学校唯一の不満の種だ。

「あ、先客がいるぜ」

「先生だったらやだなぁ」

苦笑する沙紗。圭一もうなずいて、ドアを開けた。

「先生じゃないことを祈るよ……ラッキー、中等部の子みたいだ」

「この時間に？」

沙紗は靴をゲタ箱に放り込み、中を覗いた。

ミラー・ゴーグルをつけて、キーボードをたたいている人物が見える…が、女子制服のリボンタイ以外は全て私服のようだ。

「中等部で私服かぁ……勇気あるね、あの女の子」

「あ、女？」

「……よく見なさいよ」

くだらない話をしながら、２人は中等部の少女の後方に陣取った。メモリースティックを押し込み、手早くミラー・ゴーグルをパソコンにつける。

「それじゃ、アクセス開始！」

２人同時に、”中央”（セントラル）――沙紗の母親、理彩が勤めている『ポプリポット・カンパニー』にアクセスし、完了するまでにゴーグルを付けた。

「……一体、どんなストーリーなんだろ……」

沙紗の独り言が聞こえたのか、後方の少女はゴーグルをはずし、ぽつりとつぶやいた。

「それは、貴方が創り出すんですよ。世界は、貴方の手の内にあるんですから……」

Ｐｒｏｇｒａｍ　０，　Ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　０　運命（さだめ）の歯車（後書き）

初稿は何と２０００年。
当時はパソコンがやっとカラーになって普及してきた頃で、記録媒体といえばフロッピーディスクでございました。流石に初稿のままではこのオンラインゲーム隆盛の現代から見れば時代差が大きすぎるので、最新稿ではメモリースティックに変更してあります。

Ｐｒｏｇｒａｍ　１　ＧＡＭＥ　ＳＴＡＲＴ

ミラー・ゴーグルを通して見るのは、コンピューターで創られた、電脳世界だ。

くらくらする程色彩やかなポリゴンが躍り狂う。

色彩のトンネルをくぐり抜けると、そこはすでに“中央”（セントラル）――オンラインゲームの管理者の一般的通称だ――の管理する、ゲームのオープニング画面であった。

ポン、と軽い音が響いて、ダイアログボックスが開く。

＞ＩＤナンバーを入力して下さい＜

沙紗と圭一はそれぞれ００と２５を入力した。

＞ようそこ、オンラインＲＰＧの世界、『Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ』へ！　新規登録者は、こちらへお進み下さい＜

空間に浮かぶ２つのドアの内、左側のドアがぼんやり光る。

「すすめっていわれても……どーやって行けっていうのよ？　マウスポインタもないし……」

沙紗が圭一の服を引っ張ると、圭一は困り切った声で言った。

「俺に聞くなよ！　……とりあえず、ドアの方でも見とこーぜ」

「う、うん」

沙紗達がドアを見つめると、すーっとドアが自分に近付き、音もなく開いた。

「すごい……」

２人共、思わず呟いた。それだけで、今までのゲームとは何かが違う。

＞キャラクター設定をします。まず、キーボードでプレイヤーの名前を登録して下さい＜

「「……」」

無言でキャラクター設定を開始する。

身長、髪の色・長さ、目の色、顔立ち……設定事項は山程あった。

だが、目線を察知するゴーグルを付けた上で“中央”側が予測変換を行っている為、そんなことは雑作もない。
決めることといえば、キャラクターの年齢、性別、名前、それからゲーム内での職業（ジョブ）くらいだ。何か間違っているようなら、最終確認のときに修正すれば良い。
「年は……16、性別は女で、名前は……サシャでいいや」
「無難だな。俺も、ケイくらいにしとくかな」
「ねぇ、ジョブどうした？」
困り果てたように、沙紗はゴーグルを跳ね上げる。
「ん、俺？　魔導戦士にしたけど」
「細分化されてるほうよ。あたしどれにしよっかなぁ……魔法は捨てがたいし、でも剣士も良いし……」
「ま、いつも使い慣れてるモンを切り捨てろって言う方が無理だよな。その点で言わせてもらえば、このゲームちょっとおかしいと思うけど……俺、方陣術使いにした。慣れてるし」
「方陣術？　珍しい、支援系にしたの？」
方陣術というのは地術に属し、魔法陣を駆使するものだ。魔法陣の内部に効果を及ぼすものが多く、基本的に支援・防御を得意とする＜術＞である。
「自分も戦うけどな、武器が槍だし。パラメータ調整できるみたいだから、前線にも出れるようにしておくよ」
「それはとりあえず、圭一くん本人が方陣術士じゃない。ものすごくちょうどいいものを見つけるなんて、良いなぁ……」
沙紗はゴーグルをはずし、形の良い唇をとがらせた。
圭一も同じ様にゴーグルをはずし、ひやかすように笑った。
「一番下に魔法剣士ってあるぜ。あんたにはそれが良いんじゃないか？」
「えっ、ホント？」
慌てて探す沙紗。
「ウソ言ってどうする」

笑う圭一と沙紗の後ろから、急に声が投げかけられた。
「……後ろのお二方」
ギクッとする2人。そろりと後ろを見ると、先に入っていた少女がこちらを見ていた。
「楽しげなのはよろしいですが、あんまりはしゃぐと、声を聞きつけて先生が来てしまいますよ」
にっこりと少女が笑う。
「は、はぁ……」
「ご忠告どうも……」
一応、笑っておく沙紗と圭一。もし傍目から見るものがあれば、異様な空気を感じ取ったことだろう。
「……あ」
急に少女は思い出したように手を打った。
「私、姫月　怜香っていいます。中等部3年なんです」
おっとりと微笑んで、少女は自己紹介をする。沙紗もとりあえず取り繕って、少女に応じた。
「あたしは、如月　沙紗。高等1年だよ」
「同じく高等1年、高村　圭一。宜しくね、姫月さん」
圭一は怜香に向かって微笑んだ。沙紗は何も言わない。
「あぁ、怜香で構いませんよ。これから一緒に冒険することになるでしょうし」
「「……は？」」
2人は呆けた顔で怜香を見た。彼女はまた笑う。
「キャラ設定が終わったのなら、あとは家でプレイした方が良いですよ。先生、来ますから」
言いながら、メモリースティックを取り出し、ミラー・ゴーグルをコンピューターから引き抜いた。スティックには、小さなＩＤナンバーらしきシールがくっついている。
「それでは、また」
てきぱきと道具をしまうと、さっさと怜香は帰っていった。

「……一体何だったの？　あの子……」
「さぁ……帰った方が良さそうだな」
「そうだね。帰ろっか」

「ただいま」
沙紗が誰もいない玄関で声を上げると、キッチンからフライパンと菜箸を持った若い女性――長姉の沙都花が出てきた。
「あぁ、お帰りなさい、沙紗ちゃん。学校どうだった？」
「可もなく不可もなく。良いことって言えば、学年2番くらいだよ」
「それは相当すごいことだと思うんだけど……」
沙都花が眉根を寄せる。対する沙紗は、靴を脱いでぱっと笑った。
「へへっ、すごいでしょ」
「まぁね。それより、学校どうなの？　いじめられたりしてない？　沙紗ちゃんはすごく人見知りする子だから心配だわ」
心配そうな沙都花。
沙紗は、そんな姉を安心させるようにふわっと微笑う。
「そこまで心配することないって。大丈夫だよ、友達いるし」
「それに、圭一くんも、でしょ？」
「何でそこに圭一くんが出てくるの？」
心底疑問そうな妹の姿に、沙都花はくすくす笑った。
「沙紗ちゃん、早く手洗いとうがいして、着替えてらっしゃい。お姉ちゃんも早く御飯作っちゃうから」
「はぁーい」
軽く手を上げ、沙紗は階段を上っていく。その途中、きゅう、とお腹の虫が鳴いた。
「……あの後先生が来なかったら、お小言言われずに、早く帰ってこれたはずなのに……そして今ごろ御飯食べてたはずなのに！」
そうなのだ。あの姫月　怜香と名乗った少女がコンピュータールームから出たのと入れ違いに、教室管理の――しかもよりによって高等部の――教師が姿を現し、やれ学年1位2位だからと暢気なも

のだ、ゲームに気を向ける余裕があるなら勉強しろ、と盛大に嫌味を言われたのだ。

渋い顔で軽く頭を振り、嫌な思い出を頭から追い出すと、部屋に入ってぽいっと鞄を放り出す。

「何着て降りよっかな？」

言いながら、黒いモヘアのセーターとオフホワイトのショートパンツをクローゼットから引っ張り出した。

「……よし、これで良いね」

暫く睨みつけて納得すると、沙紗は制服を脱ぎはじめた。

上着を脱ぎ捨て……ふと、部屋の片隅にある姿見に、背中を映す。

「まだ……消えない……」

彼女の背には、翼をたたんだように見える痣――幼い頃に負った火傷の名残が大きくあった。

「ただいま」

「お帰り、圭くん」

圭一は沙紗の家からそう離れていないマンションに住んでいる。

女性の声を聞きながら足元の靴を数えてみると、いるはずの人の数より2足足りない。1足は自分のものだ、とすると……。

「あれ、姉貴は？」

「まだみたいだよ？　お兄ちゃん、おかえり」

ドアの裏からひょっこりと顔を出す少女。手には漫画の単行本がある。

「んー……ったく、お前またトイレに本持ちこんでたのかよ」

目の前の少女に対して、圭一は呆れ顔を作った。

「いーじゃん、これ小夜の本だもん」

「あーそーかい」

圭一は小夜子（さよこ）をやり過ごして自分の部屋に鞄とループタイを放り込んだ。

「着替えないの？」

「電話し終わったら着替えるさ」
すたすたとリビングに向かって歩く圭一。小夜子もついていく。
「子機使うよ」
キッチンとリビングを隔てるカウンターに手を伸ばし、コードレス電話の子機をつかんで、リビングのソファーに陣取った。
そらで電話番号を押す。
「え、何々？　カノジョん家に電話するの？」
「んなわけないだろ。センパイだ、センパイ。邪魔すんなよ、小夜子」
「はい、はい、聴きませんよー」
「言ってるそばから聞き耳たててんじゃねーよ！」
真横に座る小夜子に、逆側にあったクッションを投げつけた。と、同時に相手に繋がった。
『はい、木谷です』
「あ、和己？　俺だよ、俺」
『お、珍しいな、圭一。メール族のお前が電話かよ』
「ま、たまにはそう言うこともあるさ」
『さようか。ところで、何の用だよ？』
先輩、という割には、随分うちとけた話し方だ。
それもそのはずで、高村　圭一と1歳年上の木谷　和己、そして如月　沙紗は昔からの友人同士である。
「なぁ、和己。確か、『Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ』のモニターになったって言ってたよな？」
『あぁ、沙紗ちゃんのお袋さんから頼まれたからな、郵便で。これからユーザー登録しようとしてるところ』
微かに響くコンピューターの音を、圭一は電話の向こうから聞き取った。
小夜子は圭一に近付いて、会話を聞き取ろうとした。
「小夜、おまえはチビとでも遊んでろよ」
「だってチビってば、まだ寝てるんだもん！」

チビ、というのは、ペットのハムスターの名前である。
「なら起こせよ。もうじきメシの時間だろうが……って、あいつ待ってるぞ」
「あ、ホントだ！」
ハムスター大好きの小夜子は、大慌てでペレットの袋を引っ張り出してペットの下へと駆け付ける。
やれやれ、と圭一は頭を振りながら溜息をついた。
「やっと騒がしいのがいなくなった……和己？　悪かったな。話の腰折っちまって」
『別に気にしちゃいねーよ。お嬢と口ゲンカはいつものこったろ？』
抑えがちの笑い声が聞こえてくる。
『で、どうした？』
「あー、そのゲームさぁ、晩メシの後からできるか？」
『出来るぜ？　じきに設定終わるし、明日土曜だから夜更かしできるしな』
「じゃあさ、８時頃に、ゲームの中で会おうぜ」
『おぅ。また８時頃な』
通話終了。圭一はコードレスの子機を元の場所に戻した。
「あれ、電話終わったの？　な～んだ」
小夜子が手の中でチビを転がしながら、残念そうに口唇を尖らせる。
「遊んでから盗み聞きしよっかなーって思ってたのに」
「ばーか、お前が裏かけるほど俺は甘くないぞ」
クックックッ…と押し殺した声で、圭一は笑う。
「圭くん、小夜子、そろそろ御飯よ。用意が出来るまでに、圭くんは着替えて、小夜子は手を洗ってらっしゃい」
「はーい！」
「ん。……あ、俺の御飯少なめにしてくれる？　食べたらすぐ引っ込むし」
涼子は、圭一の瞳を見て、一瞬身をすくませた。

子供の様に綺麗な、薄青のかった彼の瞳に、幽かな、刺すような光が浮かんだ気がする。
しかしその印象は、圭一が目瞬きをするとすぐになくなった。
「涼子さん?」
「え…えぇ、わかったわ。ちゃんとしとく」
「ありがとう。着替えてくるよ」
それきり、くるりと圭一は背を向けた。
涼子は小さく溜息をつくと同時に、圭一の心の中身を見てみたい、と思う。だが、それは叶うべくもない。
人の心を読む魔法など、この世には存在しないのだから。

机に置いたデジタル時計が、「P．M．8：03」と刻んでいる。
「ちょっと遅くなったな」
圭一は、自分の部屋で1人、呟いた。
パソコンを起動しアクセスする間に、さっさとミラーゴーグルを付けてしまう。その内側は、すでにきらびやかなネットの世界だ。
＜IDナンバーを　入力して下さい＞
無機質にディスプレイに浮かぶ文字を、ゴーグルごしに見つめる。
＜データ・クリア　右側のドアにお進み下さい＞
ほんのりと光るドアを見ると、昼間の倍以上の速さで近付く。
「え?ちょっと、早過ぎ……」
ギリギリまで近付くと、ドアに丸く蒼い紋様が描かれているのが解った。しかしすぐに取手が回り、観察する間もないまま真っ白な空間に放り出され……それと同時に、圭一の意識も吹っ飛んだ。
その後しばらくして、まぶたを突き通す光のまばゆさに、彼は瞳を開いた。
「あ、起きた?」
帽子を被った見覚えのあるような少女が、圭一をのぞき込んだ。
圭一はゆっくり起き上がる。
自分の置かれている状況がわからない。

「大丈夫？　『ケイ』」
（……ケイ？）
「俺は、圭……！！！」
自分の名を言おうとして、服装に驚いた。
（俺はこんな服、持ってないぞ！？　大体、どこに売ってんだよ……）
圭一は、硬めの布地で作られた立て襟の長衣（ローブ）を着ていた。目の前の少女の方は、短めのワンピースに共布の帽子、そして腰にはショートソードが吊られている。
「びっくりしたでしょ、圭一くん。……圭一くん、で合ってるよね？」
「その声……沙紗、なのか？」
少女――沙紗がうなずく。そして、程近い地面の「光」を指差した。
「気が付いたら、あの紫の魔方陣の上に立ってて、魔方陣から出たら、圭一くんも出てきたの」
「魔方陣から？」
またうなずく。圭一は沙紗と共に、魔方陣に近付いた。
「圭一君、何の方陣かわかる？」
「これは……空間方陣だな、中級の……転送陣？」
片膝をついて、圭一は確認する。文字を指差しながら、沙紗に説明し始めた。
「ほら、ここに描くのは転送先で、こっちが自分の今いる場所。紫色だから、ここは転送先だな」
「何て書いてあるの？」
「ちょっと待って。ラグ…『ラグナロク・アルカディア』……？」
圭一は立ち上がり、長衣の膝あたりをはたく。
「あれ？　どっかで聞いたような……？」
「あれだろ、神話の」
「神話……あ、あぁ！」

苦笑気味の圭一の目の前で、沙紗がぽん、と手を打ち鳴らす。
「そうよ、魔導の授業で聞いたんだわ！　世界の名前があんまり長ったらしいんで、すっかり忘れてた」
「……あんたらしーわ」
呆れて髪をかき上げる圭一。
（それにしても、転送陣？　同じ世界で転送陣を描くことなんて、そもそも出来ないはずなんだが……）
「……圭一くん？」
「あ？」
思わず思考に没頭していた圭一を、沙紗が不思議そうに覗き込む。
「どうしたの？」
「いや、ちょっと考え事……それより、周りが何かおかしくないか？」
「うん、何か……いるよね」
自然、２人は死角を無くすために背中合わせになった。
茂みが、不意にがさりとゆれる。
「３つ教えて…走ろっか」
「ＯＫ、沙紗」
微かに膝を曲げる。
「いち……」
「にぃ……」
じりっと足元の地面を踏みしめ、圭一はナイフを取り出した。
相手は狼らしい。うなり声が聞こえる。
「「さんっ！！」」
圭一が先を行き、手にしたナイフで枝葉をできる限り払う。
沙紗はとにかく、転ばないように走っていく。
「どこまで走れば良いのよ！」
「知るかっ！　とにかく走れ！！」
走っているだけで良い訳がない。
このままではいつか追いつかれる。そう思った矢先……。

「うわあっ！？」
目の前に光と、景色が広がった。崖である。
圭一は足を滑らせ、崖から落ち……かけた。ナイフを持っている右手を、沙紗がつかんでいる。
「圭一くん……！」
「悪い……ドジった」
足場を探すが、見つからない。
（やばいな……）
沙紗が自分を支えていられるのは、恐らく剣士としてのパラメータ調整の賜物だろう。だが、少女の細腕でいつまで持つものか。
砂利のきしむ音が近付いてきた。が、狼とは違うようだ。
「お嬢、何してんだ？」
沙紗は、振り返って背後の男を見上げた。後方に少年もいる。
「何してんだ、って……見てわからない？！」
のん気そうな口振りに、ムッとして声を荒らげる沙紗。
「おぉ恐、そんなに怒らなくても良いじゃないか。手伝ってやったら、何かくれる？」
男は片膝をつき、沙紗の頬に触れた。
（……この声は……）
「和己っ！　てめぇバカやってないで、とっとと助けろォっ！！」
「っ、圭一！？　一体何やってんだよ？」
崖下からの声に驚いて、男――和己は慌てて崖を覗き込んだ。
「狼に見つかって、走って逃げてきたんだ」
「はぁ……。潤一、上げてやってくれ」
呆れ顔で圭一の話を聞き、後ろの少年、潤一に声をかけた。
「ＯＫ！　……天（あま）かける風の精霊たちよ……」
彼の持つロッドの宝珠が輝き、圭一の体は重力に逆らい、浮き上がる。
沙紗が引っ張ると、崖の上に降り立った。
「な、何だよその女みてーな格好は！！」

和己は圭一の服装を見て、大笑い。圭一は無視して、ナイフをヒップバッグにしまい込み、代わりに３０ｃｍあるかないかの小さな棒を取り出した。
「うーむ、これは……杖か？　マトモなもんじゃないな、方陣術士の初期装備……」
「でもよ、そろそろお客さんが到着するぜ？」
和己は軽い口調で言いつつ、両足に結わえつけたダガーをそれぞれ手にした。
圭一は棒の真ん中あたりをひねり、２ｍほどになったそれを振り構えた。
「……」
和己はふと、片手を口許に当てて考える仕草を見せる。
「……なぁ、お嬢？」
「何？」
「危険なことなんだが、お前さん陽動はできるか？」
「あたしを何だと思ってるの？　これでも剣士よ」
沙紗はそう言ってニッと笑うと、腰に下げたショートソードを抜き払った。
「おーし、じゃあ潤一、お前はお嬢を手伝ってやれ……来るぞ！」
茂みから狼が飛び出してきた。
これが普通のゲームなら、今頃戦闘用の画面に変わっているだろう。
「Ｈｅｙ，ｈｅｙ，ｈｅｙ！　Ｃ，ｍｏｎ，ｂｏｙ！　（こっちにおいで！）」
横ざまに跳び、剣をちらちら振り回す沙紗。
彼女の声を聞くと、圭一は杖を地面に突き立て、左手を当てた。
ぼおっと左手の中心が光り、杖も淡く輝く。
「空間方陣……結界陣っ！」
一瞬で圭一を中心に光のドームが構成される。
直後、潤一の魔法が炸裂した。

「炎舞！！」
戦闘、開始だ。

「……これで、ラストぉっ！」
最後の1頭の額に、和己が的確にダガーを投げつけた。
「……お、終わったぁっ！」
動くものが何もなくなって、真っ先に言葉を発したのは潤一だ。
ばたっ、とその場に座る。
「何だぁ、もうバテたのかよ？」
からかいながら笑うのは、和己だ。潤一はロッドで叩こうとしたが、簡単に和己に足で止められた。
ムッとして、見上げて言う。
「しょうがないじゃん、魔法使いはそんなもんさ！　……ところで兄ちゃん、そっちの2人、誰？」
「あぁ、こいつは圭一。兄ちゃんのダチな」
和己はがしっと圭一と肩を組む。
「方陣術士のケイ。それが、こっちでの名前だ」
圭一は杖を元通りにしてバッグにしまい、ニッと笑った。
「で、そっちのお嬢が……あー、どっかで見たことあるんだけどなぁ……」
モウロクしたかね、と頭を掻く和己。
「何言ってんだか……和己、彼女を忘れたのか？　いつも3人一緒だったのに」
圭一は呆れて溜息をついた。
「……3人、一緒？」
沙紗は小さく苦笑する。
「仕方ないよ、ゲームだもの。それに昔とは、多少なりとも顔も声も違うから」
沙紗はショートソードを鞘にしまい、口を開いた。
「あたしは魔法剣士サシャ。覚えてない？　和くん」

「……え？」
目を丸くする和己。

7年前の、夏のある日。
ノースリーブのワンピースの下に包帯を巻いた黒髪の少女が、幼い和己と1つ年下の圭一を見ていた。
「じゃあ、行ってくるね」
少女は明るく笑ってみせた。
「手紙、絶対くれよな」
「うん、わかってるよ」
泣きそうな和己の方を、圭一が軽く叩く。
「泣くなよ、和己」
「泣かねーよっ」
くすくすと笑う少女。その時、母親が車の中から呼んだ。
「火傷治ったら、すぐ帰ってくるよ」
姉にドアを開けてもらい、中に入る。
窓を開けて、顔を出した。
「そしたら、また遊ぼーね！」
ばいばい、と少女は手を振った。

「あの、沙紗ちゃん……？　沙紗ちゃんも帰ってきてたのか！　ひょっとしてそのキャラデータ、今のカッコがモデル？　ずいぶん見違えたな！」
まじまじと和己は沙紗を見た。
「何時帰ってきたと思ってんだよ。去年だぜ、去年」
呆れる圭一。沙紗は笑う。
「いやぁ、おばさんからの連絡って、つい昨日きた郵便だけだったから……」
「ごめんね。色々忙しくて、手紙とか出せなかったの」
「そうだったのか。……改めて、オレは盗賊（シーフ）のカズキ。こっちのチ

ビ助は従兄弟なんだ」
ぴっ、と和己が潤一を指した。潤一はぱっと立ち上がる。
「僕は召喚士のジュン！　召喚士っていっても、魔法もちゃんと使えるから安心して良いよ」
屈託なく笑う少年。
沙紗は、ひそかに顔をしかめた。先程は一緒に戦ったとはいえ、彼は初対面で、信用ならない。
怖い。沙紗の心の奥底で、何かが揺らぐ。
（……信じられる？初めて会ったこの子を）
「……大丈夫か？沙紗」
圭一がそっと耳打ちする。驚いて、ビクッと体が震えた。
「あっ、……うん」
沙紗は気丈に笑うが、内心では笑顔になっているかと怖かった。
「宜しくね、潤一くん……ジュンくん」
握手した手は、殆ど変わらない大きさなのに温かかった。

Ｐｒｏｇｒａｍ　１，　Ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　１　ＧＡＭＥ　ＳＴＡＲＴ（後書き）

初稿は２００１年２月が最終。
当時のノートに書いたイラストの隅っこに「２００１，２，３」とありました。

Program 2 School Life

「Ｈｉ，　Ｓａｓｓｙ!」
登校途中、背後からの声に沙紗は振り向いた。
人波を縫って走ってくるのは、１つ上の友人、北川　夏美。治療のためにアメリカへと渡った頃からの親友だ。
「おはよう、夏美。毎度、よくこんな沢山の人間の中からあたしを見つけるわね。感心するわ」
「うふふ、サシィを見つけるのは得意なのよ。Ｈｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ？（元気？）」
肩に手をかけ、笑顔の夏美。沙紗も笑い返した。
「うん、すっごく元気だよ。夏美も元気そうだね」
ややオーバーアクション気味に手を広げて沙紗が言うと、夏美は空いている手を額に当て、大きく溜息をついて歩き出した。
引っ張られて沙紗も歩く。
「ダメダメ、日本語じゃなくて英語で返さなきゃあ」
「ここは日本だよ」
「だからこその英語なのよ!　英語が恋しいこっちの身にもなってチョウダイ」
わざとらしくよよ、と泣き真似を見せる夏美。
何となく気持ちがわかるのか、沙紗は困ったように微笑んだ。
「まぁ、仕方ないといえば仕方ないんだけどねぇ……あ」
沙紗の肩から手を離し、ぽん、と手を打つ。
「今度は何？」
沙紗は片眉を上げて首を傾げる。首許で結われた長い髪が、さらりと揺れる。
「サシィだったら『Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ』って知ってるかな。ワタシ、ちょっと前にポプリポット・カンパニーのβテストのモニタに応募したんだけど、あろうことかそれに受かっちゃってね？」

夏美が可愛らしく首を傾げながら話すと、沙紗は目をキラキラさせて夏美を見た。
「……それ、ホント？」
「ホントだよ」
夏美が頷いてみせると、沙紗はこっそりとガッツポーズをとる。
人前で滅多にしないその行動を見る限り、彼女はよっぽど嬉しかったらしい。
夏美は、そんな1つ下の親友の姿を微笑ましく思う。
かつての彼女は、そんな行動は決して取らなかった。人間不信にも近かった沙紗の笑顔を初めて見たのは、日本人学校で出会ってから丸1年以上経ってからだ。
「で、知ってるんだね、その様子だと」
「もちろん！　あたしもモニターだよ。あぁ、嬉しいな。こんな近くに3人も……」
まるで祈る様に手を組み合わせ、沙紗は言う。
彼女の唯一の難点は、このとことんまで自分の好きなものを追い尽くすタチだろう。この点に関しては、いかに付き合いの長い者でもいささか引き気味になる。
「……サ、サシィ？」
その時。
「あれ？　そこにいんのって沙紗ちゃんか？」
「え？」
くるりと沙紗が振り返る。
「おぅ、おはよ。久しぶりだな」
和己だ。彼は沙紗達に追い付くと、自転車を降りて歩きはじめた。
「おはよう、和くん！　こんなすぐに逢えるとは思わなかったよ」
「俺も同感。あの後圭一のやつに髪形とかは聞いといたんだけど、見つからないと思ってたぜ。……ところで、圭一と違ってオレは昔の呼び方のままかい？」
「あ……嫌だった？」

「嫌っつーか……何かなぁ、ガキのままのような気がして落ち着かねぇな」

軽く肩を竦める少年の様子に、沙紗は眉根を寄せて考えた。

「じゃあ、和己、くん……言いにくいな、これ。ともかくあの後、どうだった？」

あの後、適当な町の宿で休息を取った沙紗は、いつの間にかパソコンの前に座っていた。何時間とあったような体感時間に比べ、実際時間は1時間程度。

気味が悪くて問うてみたのだが、和己からの答えはおよそ期待とは違っていた。

「あの後？　……あの後って、何？　何かあったか？」

「え？　お宿で寝た後、よ……？」

「あぁ、セーブの後？　フツーにパソの電源切ったけど。……どうした？」

同じ状況だったと思っていた沙紗の目が丸くなる。

「あ、あ、ううん。何でもない」

（おかしいな、ログインの方法が違うのかしら？）

しかし、世間というものは考える時間を与えない。

「ねぇ、サシィ。この人誰？」

疎外感でも感じたか、夏美がひょこっと首を突っ込んでくる。

「なかなかお似合いじゃない？　サシィと……」

じぃ～っと、夏美は和己の顔をみつめた。

「あ、ひょっとして北川　夏美ってひとか？

オレは木谷　和己。同じ高2だよ」

「……なんでワタシの名前知ってんの！？」

驚く夏美。さらりと和己は返事する。

「沙紗ちゃんから手紙来た時、写真見た。一緒に写ってる日系の子、お前さんだろ？」

「えぇ～！　サシィってば、写真送ったのぉ？」

かくして、平和でごく普通の一日が、今日も始まる。

「おはよう、沙紗！」
「あ、梓。おはよ」
後もう少しで教室、というところでぽん、と肩を叩いたのは、クラスメイトの梓だった。なにやら切羽詰った様子だ。
「ねぇねぇ、ちょっと聞いてよ～」
斜め後ろから、沙紗の左側に移動してくる。
「高村さんが、いないのっ！」
「……は？」
心底真面目な――むしろ切羽詰ったような梓の表情に、沙紗は思いっきり不審げに顔を歪めた。
「どこにもいらっしゃらないのよ、沙紗ぁ～！！」
梓は沙紗の肩を掴み、だだっ子のようにぐいぐい揺さぶる。
「えっ、ちょっ、待って、梓！」
肩をぐるりと回して手を外すと、沙紗は梓の両肩をつかむ。
「順に話す！」
正面を向かされた梓は、半泣きで沙紗の顔を見上げた。
「あのね、私ね、今日もサッカー部の練習見に行こうと思って、グラウンドに行ったの……そのぉ、タオル持って…」
「うんうん」
手をもぞもぞさせながら話す梓の背を押して、沙紗達はＳ１－Ａと書かれた教室――――６階建ての南校舎で、４階の東端に位置する――に入っていった。
沙紗は自分の席に鞄を置くと、すぐに右を向いて座り、続きを促した。
「サッカー部の名コンビ、知ってるよね？　高村さんと、木谷先輩…なんとなくバランス悪いなって、練習見てたら…」
膝の上に手を揃え、がくーっとうなだれる梓。
「見てたら…どうしたの？」
「コンビが揃ってなかったのよ！　高村さん、朝練休んでたの！」

「……何かあったかね」
沙紗が溜息混じりに零した途端、梓ががたっと立ち上がった。
「それだけ?!　沙紗って冷たい……！」
周囲の視線が2人に集まる。
沙紗は慌てて立ち上がり、梓を教室から引きずり出した。
「梓、グラウンドに行こうよ。始業には、まだ充分時間あるし」
「え?」
「サッカー部のヒトに訊こうよ。それが一番早いっ」
逃げるように廊下へ出てから、梓は沙紗の腕をつつく。
「沙紗」
「ん……?」
エレベーターのボタン下のスロットルに、高等部生専用のＩＤカードを突っ込んで、沙紗は降下のボタンを押す。
「沙紗さ、高村さんと知り合いよね?　何か知らない?」
「仕事かな……と思うんだけど」
「仕事ぉ?」
梓は驚いて目を見開いた。
「まさか、高校生だよ?」
「高校生でも１０時までなら働けるわよ。ま、知らないんなら別にいいけど」
目線を合わせず、エレベーターに乗る。
「……沙紗、何知ってるの?」
「べっつに～?　ところで、梓は何を訊く?　けっ……高村くんのことだけ?」
「あ、あと練習のスケジュール聞きたいです!」
「……わかったよ」
友人のミーハーぶりに、沙紗は小さく溜息をついた。
「グラウンド広いわね。何だってうちの学校、こんなムダに敷地あるのよ」

冬日の光を手で遮りながら、沙紗はぼやく。
「でもどこでサッカー部が練習してるのかって、すぐにわかるよね」
「うん。部室見えるし」
そろそろと、しかし足早に歩き始める2人。
「そして何でわかるってさ……」
「アレよね、絶対……」
即席のコートの周囲には、女子の垣根ができていた。
『きゃあ～、○○先輩！』だの『××さん、カッコイー！』だの、騒々しい事この上ない。
(嫌だなぁ……頭が痛くなりそう)
人ゴミの苦手な沙紗に、垣根を突っ切る勇気はない。
「沙紗、大丈夫？こういうの苦手でしょ？」
「いっそコレが男だったら、目をつぶって走り抜ければいいんだけど…」
髪に手をやってため息をつく。梓は沙紗の背中を軽く叩いてやった。
「部室の方から迂回しようよ。あっちは人垣切れてる」
「うん、そうして」
そして同じ頃。
つい先刻まで後輩達へ指示を飛ばしていた和己が、ふと足を止めた。
「先輩？」
「何でもねぇよ。練習続けてろ」
追っ払うような仕草で促すと、和己は人垣と逆の位置にいる女生徒2人に走り寄った。
「よう、沙紗ちゃん」
沙紗は和己が近付いてくるのを見て、軽く笑い、手を上げた。
「何かあったか？」
「ん、特に何でもないんだけど……圭一くんは？」
「来てねぇよ。仕事だとさ」

おどけたように肩を竦める和己にやっぱり、という表情をする沙紗。
梓はあからさまにうなだれた。
「沙紗ちゃんは予想してたっぽいな。……そっちのお嬢、誰？　沙紗ちゃんの友達か？」
「泉野　梓よ。あたしの友達」
「そう。宜しく、梓ちゃん」
ぱちっ、とウインクする和己。
「こっ…こちらこそ！」
反射的に梓は頭を下げた。持ったままのタオルが、胸の辺りでぐしゃぐしゃになる。
「ところで、御用はそれだけ？」
「あともう1つ訊きたいんだ。練習のスケジュール教えて？」
「なになに？　沙紗ちゃん何かくれるのかい？」
「ざ～んねん！　あたしじゃないんだな。こっちの彼女が訊きたがってるのよ」
ぽんっ、と沙紗は梓の背中を叩いて押し出した。
「ふーん、マジで残念だなぁ……」
名残惜しそうに（というより物欲しそうに？）沙紗を見て、和己はハーフパンツのポケットからぼろぼろの紙切れを取り出し、梓に渡した。
「それに一週間のスケジュール全部書いてあるぜ。」
「この小っちゃいのに、ですか？」
不思議そうな梓に、和己はにっと笑う。
「ぼろぼろでワリィけどな。……そろそろ戻らにゃ」
ちら、とコートを見る和己。
「あ、ごめんね？　引き止めちゃって。あたし達もそろそろ行くわ」
「あぁ……そうだ、沙紗ちゃん」
歩き出していた足が止まる。
「また、3人で遊ぼうな。なかなかオフ重ならないと思うけど、怪

我ももうないんだし、思いっきり……な？」
嬉しそうに聞こえる、和己の声。
7年振りに聞く、幼なじみの声。
「約束だったろ？」
（……確かに、あたしは言った。今でもしっかり覚えてる）
沙紗は思わず口許をゆるませる。
「うん、約束……また、遊ぼうね！」
振り返り、彼女は勝気そうな笑顔を見せた。

何事もなく過ぎて、昼休み。
木谷　和己は、友人と屋上で弁当を広げていた。
「おい、木谷。何か鳴ってねぇ？」
「ワリィ、オレのだわ」
制服ズボンのポケットから、携帯電話を取り出す。
「はいはーい♪……なんだ、圭一かよ」
『なんだ、って……お前、誰だと思ったんだよ。いい加減電番登録しやがれ』
ふてくされた声を出す圭一に、和己は喉の奥で笑う。
「仕事、どうだ？」
『まぁまぁ……』
「元気ねえなあ、若いモンが」
『1歳しか変わらないのに言われたくねぇよ』
「……何いらついてんだよ？」
試しに訊いてみると、小さなため息が聞こえてきた。
『風邪引いて頭が痛いんだよ。それに加えて本日スケジュールが詰まっててさぁ……休みてー』
「詰まってるって、どれくらい」
『1日で録音からＰＶまでやりましょう強行ツアー』
「うへっ……」
思わず和己は奇声を上げてしまった。

「苦労話はお前が学校に来たら聞いてやるって」
慌てて立ち上がって、柵まで移動する。
「体壊すなよ」
『もう壊してるって。風邪引いてるっつったろ』
「あーぁ。ま、がんばれや」
『んー。……あ、夜にはネット繋ぐから』
「ＯＫ。そいじゃまた、ゲームで」
軽い電子音と共に通信を切り、元いた場所に戻る和己。
「今の誰だったんだ？」
「ダチだよ、ただの」
「ホントかぁ？」
ひやかす様に、肘でつついてくる。和己は英単語帳で一発はたくと、食べかけの弁当をかき込んだ。

（午後の授業って、ネムイのよねぇ……）
時々眠りそうになりながら、北川　夏美は６限目の英語の授業を聞いていた。
アメリカ育ちの彼女にとって、日本の英語は口語ではないので解り辛いのだ。
（もっとフランクなのを教えればいーのに）
口許を隠して欠伸をする。
（でも、聞かないワケにはいかないし……Ｔｅｓｔきらぁい）
「北川、どうした？そんなしかめっ面して」
「えっ？」
ぎくっ、とする夏美。まさか『口語じゃないから解らなくて気が抜けてる』とは言えない。
「いっ、いえいえ、何でもアリマセン！」
思わず声が上ずった。
「そうか。じゃあ２行目を訳して」
「はぁ……」

とりあえず、夏美は教科書を持って立ち上がった。
「えっと、Ａｈ……先生、『ｍｕｃｈ　ｍｏｒｅ』はどう訳しましょ？」
本人は大真面目。
その様子に、周囲は苦笑を禁じえなかった。
「長谷川先生？」
「……お前ねぇ、本当に帰国子女かい？」
夏美はぺろりと舌を出す。
「だってこんなの、滅多に使わないんだもん」

放課後。
姫月　怜香は、吹奏学部の根城である音楽室にいた。
「怜香、ちょっと音弱くない？」
目の前の友人から指摘され、怜香はアルト・サックスを下ろした。
「そうかしら？」
「うん。ひょっとして、調子悪い？」
「そんなことないけど……ただね、この楽譜ってブレスが少ないじゃない？　強くすると息が続かなくて。多分そのせいだと思う」
首を竦める怜香。
「成程ねぇ……先生に掛け合ってみようか、ダメ元で」
「そうね。麻里、頼め……」
（――ガシャン）
怜香は耳の奥で、何かが砕ける音を聞いた気がした。
「麻里……今、何か……？」
「え、どうしたの？」
友人・麻里が、訝しんで怜香を覗き込む。
（音、ガラス……窓？）
怜香は何事か考え込んで、グラウンド側の窓を見た。
「すいませんけど、そっち側の窓、開けてくれません？」
「え、何を突然」

「寒いのに……」
窓側で練習していた一年生が不平を言う。
「いいから開けて！　ケガしますよ」
「はーい……え？」
ばたばたと窓を開けた後、１人の男子が不思議そうな顔をした。
「姫月先輩、ケガって……」
そのとき。
彼の頭の真横を何かが通り過ぎ、目の前の怜香が咄嗟に麻里の頭を庇った。
その何かが教室のドアにぶつかるのと、怜香の眼鏡が床に達したのは、ほぼ同時。
すばやく麻里が眼鏡を拾い、怜香に渡した。
「ほれ、怜香」
「ありがとう」
怜香は俯いて眼鏡をかけ直すと、すっと立ち上がって周囲を見回す。
「皆、ケガないですね？」
部員達は無言で縦に首を振った。
「……すげぇ、姫月先輩って何モン？」
頬を擦りながら、先程の男子が隣の友人に耳打ちする。
「ほら、あれだよ。先見（せんけん）。予言者の家系ってやつだ」
「ひゃー、マジモン？　さすが蒼洋、魔導士だらけだ」
「お前だってそうだから招聘食らったんだろうが」
「まぁ、そうだけどさ」
男子が溜息をついた頃、吹奏楽部の部長が拾ったものを手に窓から身を乗り出した。
「野球部ーっ！　気を付けろ！！」
部長が何か――白い野球ボールをグラウンドに放り投げる。
「姫月、また助けられたな。サンキュー」
「大したことじゃないですよ、これくら」

「いやいや、感謝、感謝だよ。よし、皆！　今日はこれで終わりだ。解散！」
ぱんぱん、と部長が手を鳴らす。
緊張がほぐれ、学生特有のにぎやかさが復活する。
怜香は、微かに笑った。

木谷　潤一は、家路を急いでいた。
「姉さん、ただいま！」
「お帰り、潤」
ダイニングに入ると、姉が料理をしていた。
「もうちょっと待っててね。あと少しだから」
「うん。あ、洗濯物、たたもうか？」
弟のありがたい申し出に、彼女は背中越しに菜箸を振った。
潤一は奥の方にある自分の部屋で着替えてから、リビングの洗濯物の前に座り込んだ。
慣れた手つきで、数をさばいていく。
「御飯できたよ」
「ん、あと1枚……よし、終わりっと」
両膝を両手で叩き、潤一は立ち上がった。

「ごちそうさまっ！」
潤一は食べ終わるなりちゃっちゃと食器を片付ける。その動作は淀みなかったが、姉の目は少し不満げに細まっていた。
「と、ゆーわけで……」
「こら待て」
早速部屋に飛び込もうと言うときに呼び止められて、潤一は恐る恐る振り返る。
「あんた、最近御飯食べたらすぐに部屋に引っ込むけど、何してん

の？」
　不思議そうな姉の問いに、潤一はにっこり笑う。
「ん？　ゲームだよ。学校の友達とやってるんだ」
「オンラインゲームってヤツ？」
「そうそう。“中央”で管理されてはいるけどね」
　嬉しそうに話す潤一を見て、彼女はくすくす笑い出した。
「じゃあ、そのゲームをクリアするまで、晩の片付けを免除してあげる。その代わり、先にお風呂入るのよ。それと、内容を姉さんにも教えてね」
「わかった。サンキュッ、咲姉さん！」
　平和な夜は、更けていく。

Ｐｒｏｇｒａｍ　２，　Ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　２　Ｓｃｈｏｏｌ　Ｌｉｆｅ（後書き）

初稿は２００１年なのは確実。ただしこの章がいつ終わったのかは不明です（苦笑）

海外（アメリカ）で反省の半分くらいを過ごしている子というのは、果たしてどのくらい英語が混じるものなんでしょうね。

Ｐｒｏｇｒａｍ　３　６人の冒険者

魔方陣の上に、白く淡い光が集まり、少女特有の優しい形を創っていく。
「――――よしっ」
ぱちっ、と少女の眼が開く。
その瞬間、光は消え去り、少女のすべてが色付いた。滑らかな白い肌に生成りの服をまとい、その腰にはショートソードが吊られている。
「ゲーム開始だぁ♪　おはよ、皆」
服と共布の帽子を押さえ、ぴょん、と魔方陣から跳び出す少女。
「おっしゃ、これで４人全員揃ったな」
ナイフをいじっていた少年が立ち上がった。
「んじゃ、行ってみよー！」
拳を振り上げてはしゃぐ少女の姿に、３人の仲間が思わず微笑んだのは言うまでもない。

「ねぇねぇ、あれって村じゃないかな？」
「村ってゆーか、町？」
ジュンの発見に、サシャがツッコミをいれる。
「沙紗ちゃんが正解。あれはクレスタの町、だな。地図が合ってりゃ」
カズキが地図を見ながら言う。
「やっとまともな場所に着いたな」
ケイは少々疲れ気味のようだ。僅かだが、息が上がっている。
「何だよお前、若いもんがー」
カズキが笑うのに、ケイは不満そうに口許を歪める。
「おっかしいな、『魔導戦士』だからそんなに体力低いはずないんだけど」

「あ？」
カズキが、さも訳がわからない、と言いたげな顔を作った。
「お前、パソの前で何やってんだ？」
「え……？」
噛み合わない会話に、ケイの目が丸くなる。
「圭一くーん、和己くーん！」
「２人ともーっ、早く早く！」
しかしケイとカズキの違和感は、サシャとジュンの急かす声でうやむやになってしまった。

クレスタの町は、喧騒と活気に満ち溢れていた。
「すっげぇな。店ばっかり」
カズキが感心した様に声を上げる。
「商店街みたいな感じかなぁ？」
「ちょっと回ってみたいな。何があるんだろ？」
サシャも年頃の女の子。目にも鮮やかな果物や布地に心惹かれているようだ。
「あ、でも装備を先にどうにかしないと、この先やばくない？」
ジュンの言葉に、サシャは残念そうな表情を作った。
「……やっぱり？」
「仕方ないさ。……おっ、ここだな」
カズキが楯に剣を重ねた看板を見つけて、一同は鍛冶屋に入る。
「やっぱり、出来るだけ良い物が欲しいよね、和兄」
「そりゃそうだろ。沙紗ちゃん、どうだ？　良いモンあった？」
「うん」
手にした長剣を持ち上げて、サシャはポーズを取ってみせた。
「いーなー、ミスリルソード。でも高い……」
「ははは、隣国ならもっと安いんだがな」
気のよさそうな店主が、剣を磨きながら言う。
「隣国？　１つの国じゃなかったんだ、この大陸」

ジュンがそう言うと、店主は小さく笑い声を零した。
「ああ、そうさ。ここはマール王国。隣はパスティア皇国ってんだ。代々女王が統治している、美しい国なんだと」
「行ったことはないんですか」
ケイの言葉に、店主は深く頷いた。
「国境辺りの森は特に危ないからな、行きはしないよ。もっとも、傭兵を雇うのにいくら払ってもいい、って奴等もいるから、俺達は品物に困らなくて済むんだが。そのかわり、とんでもなく高い値がついちまう品も出てくる」
と、サシャの持った剣を見た。
「それは、比較的安いシロモノだよ、お嬢さん」
店主の気取った言葉に、サシャが頬を赤らめる。
「気に入ったんなら、その剣をあげよう」
「えっ、でもお金……」
「見たとこ駆け出しだろう？　人の好意は素直に受けておきなさい。あぁ、あまり危ないことをしちゃあいけないよ。女の子なんだから」
「……はーい」
はたして、サシャはタダでミスリルソードを手に入れたのだった。

どんっ。
「おっ、と」
全力疾走してきた少女の体当たりを受け、カズキがよろめく。
「あ、ごめんなさいっ……」
少女は辺りを見回すと、慌てた様子でケイの後ろに隠れる。
ふと少女の走ってきた方向を見ると、彼女と同じくらいの少女が走ってきた。
「失礼ですが、私と同じくらいの年頃の女性を見ませんでしたか？！」
身形のいい娘だ。仕立ての良さそうなワンピースを着て、長い髪

は邪魔にならないように高めの位置に結われている。
「……いや、見てないぜ」
少女の問いに、カズキが答えた。
「そうですか～……あぁ、どこにいかれたんですか、リーフ王女ったら……」
がくーっ、と見るからに落ち込み、とぼとぼと歩いていく。
少女が人ゴミの中に消えると、ケイは体の緊張を解いて、少しかがむ。すると、一体どうやってはりついていたのだろう、先の少女が背中から降りてきた。
「えへへ、ありがとう」
にこにこと少女は笑う。歩いていこうとする彼女の腕を、カズキが捕まえた。
「おっと……何が理由で城を抜け出したりしたんだ、リーフ王女？」
「ぎくっ」
「え、お姫様?!」
今更のように、ジュンが声を上げた。

「友達に会いに、ねぇ……」
一通り彼女の言い分を聞いて、微妙なしかめっ面を続けるカズキ。
「な、何よぅ……」
町の中心にある噴水が、涼やかな音を響かせている。
その周りに置かれているベンチに座り、リーフ・マール・リヴィアス王女――このマール王国における、最高の王位継承者だ――は目の前の少年達を上目遣いで見上げた。
「あなた達には関係ないでしょ、ほっといてよね！」
「いや～、『袖触れあうも多少の縁』とゆーだろ？」
「何それ？」
無意識に頭をかきながら発したカズキの一言に、リーフはきょとん、とする。

「え～っと……どういう意味だっけ？」
「バカ」
助けを求める様に見てきたカズキを、ケイは一蹴した。
「言葉自体間違ってる。それを言うなら『袖振り合うも他生の縁』……『ちょっとした出来事でも前世の縁による』って意味だよ。ぱっと意味出てこないんなら使うなよ」
「はは、わりわり……じゃなくて！」
ぐるりとリーフの方に向き直り、びしっと指を突きつける。
「お嬢！　お前さん、さっき『国境を越えて隣国へ行く』って言ったな？」
「う、うん」
よく憶えてるなー、と思いながらリーフは首を縦に振る。
「隣国ってのは？」
「パスティア皇国よ」
「そこがほっとけねぇ理由だよ。国境の森は危ないって聞いた」
「大丈夫、武器は持ってる」
「そりゃ狼1匹ぐらいなら平気だろうよ。でも2匹、3匹…5匹いたら？　対処しきれるかよ」
「そ、それは…」
論破されてしまい、リーフは黙りこんでしまった。
「ほーら、な？　ムチャなんだよ。オレ達だって、1人じゃどーにもできねぇんだぜ？　諦めるか、誰かに護衛頼むかしろよ。その方が良いって」
ぽんぽん、とカズキはリーフの頭を軽く叩く。
「……そこまで言うんなら……」
（諦めてくれたか）
下を向いて言うリーフの様子に、カズキがほっとしたのもつかの間。
さっきとは逆に、リーフがびしっと指を突きつけた。
「あなたたちについてきてもらうわ！　見たとこ冒険者の様だし、

これなら文句ないでしょ！！」
「はぁ！？」
鬼の首を取ったようなリーフと呆れて物も言えずに髪をかき上げるケイに挟まれ、カズキはしばらく居心地悪そうに立っていた。
ところで、話に加わっていなかったサシャとジュンはというと…
…暢気に噴水で子供達と遊んでいたのだった。

「……本当にこっちで合ってるのかよ」
クレスタの町で手に入れた地図と、リーフから借りた方位磁針（コンパス）を見比べながら、カズキがぼやく。
「コンパスは？」
「さっきからずっとぐるぐる回ってるぜ。ほら」
「あらら……」
サシャがのぞき込むと、確かにコンパスの針はぐるぐる回り続けている。
「最近、ずっとそうなの。この前も商隊が迷ってたのよ。太陽も見えないから、方位を推測するのも難しいのよね」
リーフが困ったように言う。
「え、今日だけのくもりじゃないの？　この空って」
ジュンが空を指差した。
「ううん、最近はいつも雲で真っ白よ。……ん？」
何かに気が付いたリーフがきょろきょろ辺りを見回すと、サシャ達は耳を澄ませて身構えた。
葉擦れの様な音がする。しかも、それがどんどん大きくなってくる。
「そうら、来た来た！」
カズキの一言で、皆が一斉に散開した。
ケイを中心に、前方をサシャとリーフが、後方をカズキとジュン

がそれぞれ固める。
「結界陣っ！」
光のドームが形作られると、それぞれが自分の武器を手にした。
「今回は梟か」
「行くわよ！」
1羽がサシャに襲いかかり、サシャは剣を横に薙ぐ。
リーフはサシャを援護するように、三日月形の武器を振り回す。
「頭、気ィ付けろよっ！」
カズキはそう言うと、ダガーから持ち替えたブーメランを飛ばす。
「ギャアッ！」
一方の羽を刈り取られた1羽が、地に落ちた。
サシャがとどめをさす。
「風牙！」
ジュンが風の刃を飛ばす。が、梟たちに易々と避けられてしまった。
「風刃乱舞っ」
今度はケイが。何羽かは傷を受けたが、それだけ。
「あ、あっち行け、こら！」
「きゃあ、いたいいたい！」
前線の2人は、自分達にたかる梟を払うのに必死だ。
その内の1羽が、何を思ったかケイに向ってきた。
「うわっ！」
（避けられない……！）
ケイは思わず、目をつぶってしまった。
そのとき、何かが風を切る音があたりに響いた。
「ピーッ！！」
何かが突き刺さる音。次いで、断末魔の悲鳴。
目を開いた時には、すでに梟は落ちていた。
「矢……？」
仲間の中に、弓矢を使う者はいない。

「一体誰が……」
2本、3本と飛んでくる。今度は火矢だ。
正確に、梟に当たっていく。
「ほらほら、ボサッとしない！　今のうちだよ」
「援護します。こちらは気にせず、集中してください！」
真っ正面から走ってくるのは、2人の少女。
1人は弓を左手に持って、髪をポニーテイルに結わえている。
もう1人は火矢に使ったらしい火を、右手に灯していた。
「ありがとうっ！」
敵方に隙が出来て落ち着いたサシャは、一言告げると高々と跳びあがり、梟を薙ぎ払う。
「行きますっ、火炎弾！」
「全てを焼き尽くす炎の精よ、私に力を！」
間髪入れず、少女とリーフの魔法が炸裂した。
全てが地に伏すまで、それほど時間はかからなかった。
「早かったね、兄ちゃん」
「さっきまであれだけ苦労してたってのに……」
ジュンとカズキがポツリと呟く。
「あー、終わった終わった。人数いるとラクだねぇ」
ポニーテイルの少女が、思いっきり伸びをしながら言った。
「倒したの、殆どあんたじゃないか」
ケイがすねたような表情で、髪をかき上げる。
「そう言えば、危なかったね、カレ」
「仕方ありませんよ。あれは結界を突破しようという本能でしょうから」
自分たちが加勢するまでのケイの様子を思い出した相棒に向かい、魔道少女は軽く肩を竦めて見解を述べる。
「どういうこと？」
ジュンが不思議そうに首を傾げた。
「えっと……結界というものは、外からは入れるけど、中からは出

られないものなんです。しかもその解除方法は、術者が自分から解除するか、さもなければその人を倒すか」
「じゃあ、あの梟達ってこの場から逃げたかったのかな」
少女の丁寧な返答に、ジュンは更に問いかける。
「それもあるでしょうけど……限られた空間で有利になるのは――……」
少女の講釈がとうとうと続く中、サシャはケイにそっと耳打ちした。
「……圭一くん、そうなの？　結界って中から出られないもの？」
「この世界では、多分な？　実際の、俺達が使う『結界』……『魔法陣』は基本的に出たり入ったりは自由さ。攻撃用に敷いた魔法陣なんて特にな」
「攻撃用？」
「あぁ。俺、左手に丸い痣あるだろ？　二重円に三角２つの星型がくっついたやつ。あれはね、結界張るより攻撃のほうが得意な雛型なんだよ」
「……ふうん」
納得したのか、しないのか。ともかく、サシャはそのことについて考えるのはやめた。
ふと気が付けば、講釈は疾うに終わり、雑談に移行しているようだ。
「そういえば、あなた達は？」
「あ」
振り返ったサシャが問うと、ポニーテイルの少女が、握った右手を左の掌に軽くぽんと打ちつけた。
「自己紹介、まだだったね。ワタシはナツミ。見ての通りの戦士だよ」
「レイ、です。魔導士です」
（ナツミにレイ……まさか、ねぇ……）
頭の隅に名前が引っかかり、サシャは人知れず思案する。

「俺はケイ」
「オレはカズキだ。よろしくな」
「ジュンっていうんだ」
「リーフ・M・リヴィアスよ。隣国に着くまでパーティーに入れてもらってるの」
「あたしはサシャ。宜しくね」
とりあえず、自己紹介（といっても名前だけだが）を終わらせ、一行は先に進むことにした。

Ｐｒｏｇｒａｍ　３，　Ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　３　６人の冒険者（後書き）

初稿は２００１年９月２５日最終。そしてここでノートも１冊目が終わりました。

Ｐｒｏｇｒａｍ　４　＜基層＞（イエソド）

「あーぁ、Ｉ’ｍ　ＳＯ　ｔｉｒｅｄ！（すごく疲れた！）」
そう言って、ナツミは宿のベッドにダイブした。
「行儀悪いよ、ナツミ。靴くらい脱ぎなさい」
すかさず母親のようにたしなめるサシャの言い方に、レイとリーフは思わず吹き出した。
「むぅー」
ナツミは口唇を尖らせる。
「サシィってば、マミィみたい」
その言葉に、旅装を解いていたサシャの手がふと止まった。
「その呼び方……どこで聞いたの」
「Ｈａ？」
きょとんとするナツミ。一拍置いて、その顔は見る見るうちに喜色に染まっていった。
「Ｙｏｕ　ａｒｅ　”Ｓａｓｓｙ”？　如月　沙紗？！」
「う、うん」
勢い込んで迫ってくるナツミに、サシャは咄嗟に頷く。
すると、がばっとナツミが抱きついてきた。
「うわぁっ、嬉しい！　こんな早く会えるなんてっ！」
立ち上がって、沙紗に抱きつくナツミ。
「わ、わ、わ、こら、夏美！　苦しい離せぇ！」
サシャがナツミを闇雲に叩く。
そんな2人を見て、リーフ達は自分達のベッドの上で笑い転げた。
そこに、木製のドアをノックする音が響く。
「おーい、お嬢たち。下に情報収集行くぜ」
カズキの声だ。
「い、行きたいんなら、助けてぇーっ！！」

切羽詰った少女の声。
ドアを開けたカズキが見たのは、ナツミにしっかと抱き締められ、頬に擦り寄られているサシャの姿だった。

サシャを何とか解放させ、宿と直結している大衆食堂に降りた頃。
どうやら夕食時のようで、そこにはすでに人が溢れていた。
「おぉ、すげぇな」
おもちゃを見つけた子供のように目を輝かせるカズキ。
「いらっしゃいーっ！」
忙しなく動き回るのは、恐らくこの食堂の看板娘だろう。
その様子を見てか、ジュンがくすっと笑う。
「作りこまれてるね」
すぐ側でその言葉を聞いたサシャは、不思議そうに首を傾げた。
「だってそうじゃん。これ、ゲームでしょ？　しかもベータ版。そんなに作りこむ必要ないのに」
くすくすと笑いながら言う少年に、そう言えばそうだよな、とカズキやナツミが頷いた。ケイとサシャだけが訳も解らず、その目が不安そうに互いを見、泳ぐ。
その時。
すれ違った男の半身と、ジュンの肩がぶつかった。
「あ……っと」
体の軽いジュンが後ろによろめいたにも関わらず、言葉もないまま男は立ち去ろうとする。
「……おい、今何やった」
質問、というより、『何かをした』と言う確信を持ったケイの声に、男の足が止まる。
「何やったって、訊いてるだろ？」
「……まさか？」
サシャの小さな声に、ケイがほんの僅かに男から目を逸らしたその時。

「あっ！」
「こら待て！」
男が駆け出し、カズキも走り出した。咄嗟にそれを追ってナツミが走り出す。
「どうしたの？！」
「何ですか、一体？」
まだ訳の解らないリーフとレイがケイに問う。
「スリだ、行くぞ皆！」
ケイも2人を追って走り出し、一同は食堂を飛び出した。

恐ろしい程の速さで、男は街中をすり抜けていく。
カズキ、ケイ、ナツミの3人は、つかず離れず男を追いかける。
「ちっくしょ、鬼ごっこ、かよ……」
カズキが途切れがちの声で呟いた。
後ろから残りの4人がついて来ているのが判る。
振り返って気遣う余裕はない。
僅かずつ、だが確実に、互いのペースが落ちてくる。
しかし男の足は止まらない。
やがて景色は町のものから林のそれへと変わり、石畳は舗装されていない土の林道へと変わる。
「きゃあぁっ！」
「夏美！」
転んだらしい、痛々しい音に、ナツミの甲高い悲鳴と、サシャの声。
「お2人は先に行って下さい！」
レイの声も飛ぶ。
カズキは舌打ちする。
「圭一も気を付けろよ、足元」
しかしケイが応える前に、カズキの視界からその長身が消えた。

「う、わぁっ！！」
言われた矢先に、張られた紐に引っ掛って派手に転ぶ。
飛び込み前転のようにうまく転がったものの、質量からくるダメージは相当のもののようだ。
「っ、先に行け！」
「おぅ、無茶すんなよ！」
親友の無事な姿を確認することなく、カズキの姿は見る見るうちに宵闇に紛れていった。
それを見届けると、ケイは腹立ち紛れにナイフを取り出し、まだピンと張られているブービートラップに八つ当たりした。わぁっ、という声が少し離れた藪の中から聞こえる。それは、あの男には仲間がいるということを教えていた。
それからおざなりに長衣（ローブ）のほこりを払い、ケイはようやく立ち上がった。
（背中が痛いやら引っ掛けた方の足が痛いやら……散々だな、チクショウ）
「圭一くん！」
「あぁ、沙紗」
目を上げると、少女たちとジュンが駆けてきた。
「……何してたの」
「転んだ」
訝しげなサシャにケイはあっさりと返す。
「リーフ」
「何？」
「あんた、街に戻って警察……違うか、警備隊か誰か呼んできてくれ」
途中を言い直しながらのケイの言葉に、リーフは唇を尖らせた。
「わたしだけ仲間ハズレ？」
「流れ者の俺達より、仮にも王女のあんたの方がよっぽど信頼されるだろ？　頼む」

「どうにも途中が引っかかるけど……わかったわ、すぐに戻ってくる。そこで待っててよ！」
名残惜しそうにきびすを返し、少女は町に向かって駆けて行く。
普通の話し声ならもう聞こえないだろう所まで言ったのを見届け、
「よし、行こう」
と、ケイが頷きながら言った。
「ええっ？！」
「な、何で何で！」
ナツミとジュンが抗議の声を上げる。
レイは逆に、納得したように頷いた。
「……それが一番良いでしょうね」
「だろ？　リーフが足手纏いにならないとは限らないからな」
ケイの言葉に、２人は更に抗議の声を強めた。
「夏美、ジュン君。リーフが怪我したらどうする？」
サシャが口を開くと、ぴたりと抗議が止まった。
「Ｏｈ，　Ｉ　ｓｅｅ．．．（判った……）」
「僕等のせいになるのか」
ようやく納得したらしい。
「でも良いワケ？　リーフ、『待ってて』って言ってたじゃない？」
眉根を寄せて、ナツミがケイを見上げる
「俺は同意してないから。ほら、行くぞ」
長身の少年はしれっと言うと、さっさと歩き出した。
ナツミその後ろ姿を見て、サシャの耳元でポツリと呟く。
「……策士だ、こいつ」

一方、その頃。
カズキは男を追って、大きな建造物の中を歩いていた。
「あのヤロ、何処に行きやがった……？」
確かに此処まで追ってきたのだ。居ないはずがない。
月明かりが差し込む薄暗がりの中、少年の影だけがゆっくりと動

く。
動くものは自分だけ、聞こえるものは自分のものだけ。
（足音うるせぇ……）
そう思いながら、カズキは片耳に手を当て、足元を見た。
目に入ったのは、石造りの床とそれを踏みしめる自分のブーツ。
肩を竦めて左足のダガーをベルトごと外し、腰回りに留め直しながら周囲を見渡す。
その視線が、ピッタリと止まった。
「……え？」
突き当たりの壁の石が、光っている。
「マジかよ、おい」
呆然と呟きながら、少年は歩み寄って手を触れた。
目を焼かないその光は、石から離れるように消えて、右上の石に移る。
「……？」
首を傾げ、また光に触れる。光もまた離れ、別の場所に移る。
右手の方へ――神殿の中心へ。
追いかけっこは唐突に終わった。
別の突き当たりで、光は動かなくなったのだ。
「あれ？」
何度つついても、何の反応も見せない。
「せっかく楽しくなってきたのに」
心底がっかりした、という風に呟くカズキ。
ふと思いついた、『押してみる』という選択肢を実行しようと、もう一度手を伸ばした。
「何をやっている！」
低く響く、男の声。
カズキは反射的に、右手をダガーの柄に当て、臨戦態勢で振り返った。
現れたのは3人。ローブを着てはいるが、どう見たって目つきは

普通の神官の類ではないだろう。
「民間人が入って良い場所ではないぞ」
体格の良い男が、高圧的にカズキを見下す。
「何だよ。まだガキじゃねぇか」
右側のひょろりとした男がランプを目の前に翳す。
「へっえー、えらい可愛らしい顔してるじゃねぇか。娼館に売ったら高いぜぇ、これは」
たじろぐカズキを見て男が発した、笑い声を含む下卑た声が袋小路に反響する。
「こっ、こいつだ！　俺を追ってきたのは」
最後の小柄な1人が、声を上ずらせて後ずさった。
「へぇ、こいつがかよ。それじゃあ、見過ごすテはねぇなぁ」
丈高の男は舌なめずりをすると、右手をカズキに向けて握り込んだ。
途端に、その手の甲を傷付けかねない勢いで金属の刃が飛び出す。
（来るか？！）
カズキもダガーを鞘から引き抜き、構える。
「オラァッ！！」
男は勢い良くカズキの顔目掛けて右手を突き出す。
ガツッ。
対して少年は、しゃがみ込む要領でそれを避けた。そのまま両手を床につき、それを軸にして、中央の男に足払いをかける。
「うおっ」
「わぁあっ！」
ものの見事に後ろの男を巻き込んで転ぶ。
「こ、こいつめ！」
ローブ男は身を起こし、カズキを睨み付けた。
「ルーイ！」
そう呼ばれた爪男が、壁から刃を引き抜いて和己に斬りかかる。
（『コチラへ！』）

カズキの耳に、頭の中に、少女のものらしい声が響き渡った。
気を取られて反応が遅れ、咄嗟に立ち上がった少年の頬に紅い線が走る。
逃げ遅れた栗色の髪が数本、はらはらと石の床に落ちる。
（『ヒカッテル石ニ剣ヲ！　早ク！！』）
声に言われるまま、カズキは右腕を振り上げ、背にしている石の壁を、己の胸部と同じ高さにある石の光を突き刺した。
不意に、背中へ服越しに伝わっていた冷たい感触が消え、カズキはものの見事に後方回転する羽目になった。
「ぅわぁっ、いててて……」
四つん這いの状態で頭をさする頃には、既に壁は元通り存在していた。
「どうなってんだよ？」
訳が判らない、とでも言いたそうな表情を浮かべ、カズキは片膝を立てて座り込んだ。
（今度は、逆に静かだな）
先程とは比べ物にならない。
その静寂は、突如響いた鎖の擦れる音で破られた。
カズキはびくり、と肩を震わせ、恐る恐る背後を振り返ると……。
「……あたしの声、聞いてくれたの？」
そこに居たのは、立ったまま磔にされて両手首を鎖と枷で戒められた少女だった。
「……誰だ？」
「セラフィータ。貴方は？」
「カズキ」
「そう。……こちらに」
じゃらり、と鎖を揺らし、セラフィータは手招きした。
そろりとカズキは立ち上がり、壁の少女に近づく。
「助けてくれって言ったの、お嬢、だよな？　どうすれば？」
「手枷に窪みがあるの、判る？　そこに石を填めるの」

「石？」
少年は首を傾げる。
「そう」
少女は少し考えるようにすると、辛うじて動く手で真正面の祭壇を指し示す。
「あちらの祭壇に、手をかざしてちょうだい。大丈夫、すぐにわかるわ」
有無を言わさぬ口調。カズキの方も、抵抗なく祭壇に向かう。
「だって、あなたはそのために呼ばれたんだもの、『わたし』に」
その声は恐らく、小さなものだったろう。だが石造りの建物と言うものは小さな音すらも反響し、増幅し、彼方へと届ける。
え、とカズキが振り向きかけたとき、祭壇からのまばゆい光が彼の目を眩ませた。

「サシャ！」
歩きながら何気なく顔を上げたジュンが、大声でサシャの名を呼ぶ。
「あれ！」
慌てて指し示される方向に、皆が目を向ける。
そこには、薄く紫がかった光の柱があった。
「……Ｔｈａｔ'ｓ〝Ｊａｃｏｂ'ｓ　ｌａｄｄｅｒ〟？（あれって、天使のはしご？）」
「そんなわけないでしょ、第一今は夜よ？」
ナツミの言葉に、サシャがすかさず突っ込んだ。
レイは緊張した面持ちで、じっと光を見つめている。
「Ｈｅｙ，ｗｈａｔ'ｓ　ｗｒｏｎｇ？（ねぇ、どうしたの？）」
ナツミは後ろを振り返り、レイに声をかける。
「え？　あ、何ですか？」
細い肩をそびやかせ、鮮紅色の瞳を瞬かせるレイ。
「どうかした？」

「あ、何でもないです」
覗き込むナツミから、少し視線をそらす。
「ｒｅａｌｌｙ？（本当？）」
ナツミは心配そうだ。
レイは頷き、目を細めて微笑んでみせた。
「とにかく、行ってみませんか？　道の先ですし、カズキさんはそこにいるかもしれませんよ」
誰も、異存はなかった。

「……ねぇ、ホントにここに兄ちゃんいると思う？」
道の先に現れた石の建物を見上げ、ジュンがポツリと洩らす。
「それを確かめに来たんだろ。先にめげるなよ」
軽く少年の頭をこづくケイ。
「だって、すごい静かだよ？　兄ちゃんどころか、誰もいなさそう」
「……いえ、少なくとも管理する誰かはいるようですよ」
そう言ってレイは戸口に近付き、扉にはまっているガラスを覗いた。
「戸のガラスも綺麗なものですし……そこのクモの巣だって何も掛かってないでしょう？」
と、すぐそばの玄関灯を指差した。
「昨日か今日か……それぐらいに出来たものだと思いますよ。クモって、１日で巣を作れるんだそうです。それだけなら数日前って予想も立ちますけど、森の前なんでその予想じゃ何か掛かってないとおかしいと思うんですよ」
どうですか？　と首を傾げるレイ。
「成程な。で、どうする？」
扉に近付いたケイが、皆の顔を見回す。
「どうするって、そりゃやっぱり入るんでしょ？」
「げぇっ、入るのォ？！」
「ちょ、ちょっとワタシ嫌かも……」

離れ気味の3人が騒ぎ出す。
「こういう時って、リーダーが最終決断下すんでしょうけど……私達のパーティって、誰がリーダーなんでしょうね？」
ナツミとジュンの騒ぎ振りを眺めながら、レイが切実な問題を口にした。
ぴたっ、と騒ぎが止む。
「……い、言っとくけど僕はムリだよ？」
両手を振ってジュンが否定する。
「ワタシだって無理だよ。サシィにツッ込まれない自信ないし」
肩を竦め、ナツミはサシャを見遣った。
「ワタシ、サシィが一番適役だと思うんだけど」
ナツミに倣って皆がサシャに視線を集めると、サシャはおろおろと仲間達を見回した。
「え、あ、あたしは圭一くんの方が適任だと思うんだけど」
「俺ムリ。バンドでもサッカーでも聞くほうだから」
と、ケイはレイを見る。
「私がなったって、皆さん聞かないでしょ」
苦笑するレイ。
「消去法でも適性でも、サシャさんが一番ですよ」
「あぅ……」
暫くの間、サシャは逃げ腰で皆を睨んでいたが、やがて軽い溜息と共に肩を落とした。
「わかった、わかったわよ。なれば良いんでしょ、リーダーに」
額に手を当て、頭を振るサシャ。
「さ、リーダーさん。決めて下さい。入るか、入らないか」
レイがサシャに手を差し出す。
サシャは扉に近寄りがてら、レイの手を軽く打った。
「決まってるじゃない、入るのよ」
ニッと笑ってレバーハンドルに手をかける。
勢い良く回そうとすると……。

「うぎゃっ！」
思いっきり扉が開き、見事なまでにサシャの顔面にヒットした。
ばらばらと出てきたのは、明らかにローブが似合っていない男が3人。
その中で一番後ろに居る1人は、どこかで見た覚えのある顔だ。
5人に目もくれず逃げようとするのを、サシャに先頭の首根っこを捕まえられ、立ち往生するハメになってしまった。
「人の鼻っ柱折る勢いでドアぶつけといてぇ……何も言わないでどっか行こうってぇっ？！」
怒り心頭といった顔で、サシャは怒鳴る。
「う、わ、ごめんなさいごめんなさいっ！　もうしないからどうかーっ！！」
何を勘違いしたのか、一番後ろに居た小柄な男――確か、サシャ達が追っていたのは彼だったはずだ――が、ジュンの財布と袋に詰めた何かをサシャの足元に放り出し、真後ろで土下座した。
暫く冷視していたサシャは、無言で手を放す。すると、3人はわき目も振らずにくんずほぐれつ逃げていった。
後には僅かな木々のそよぎだけ。
怒鳴ったはずのサシャも、他の4人も、その様子に呆然とした。
やがて小さく嘆息すると、サシャは腰を折って足元の戦利品を拾い上げ、財布の方をジュンに投げ渡す。
「とりあえずこれは持っていくとして……改めて、入るわよ」

何事もなく、大きな広間にたどり着く。
「どれ程の広さかは判りませんが……ここが建物の中心だと思いますよ」
レイが、やけに高い天井に開けられた天窓を見上げて言う。
広間の中程から見渡してみると、扉の正面には祭壇らしきものがあり、大きなタペストリーが飾られていた。

「Ｔｈａｔ' ｓ　ａ　ｃｈａｐｅｌ？（礼拝堂？）」
「かなぁ？」
顔を見合わせて首をひねるナツミとサシャ。
見に行こうとサシャが一歩踏み出すと、祭壇の方から突風が吹き荒れた。
同時に派手な音を立てて、両開きの扉が閉まる。
（……おかしい！）
普通、風というものは通り道が無ければ止む。扉が閉じた今、風の道は殆ど無くなったも同然なので止むはずなのだ。
誰よりも前に立っていたサシャは、風に煽られそうになったのを踏み止まり、右腰に吊った剣の鯉口を切り、柄に左手を当てた。
眇めた瞳はじっとタペストリーを見据えている。
その時、天窓からさぁっと満月の光が入って来、タペストリーを照らした。
同時に風が止み、痛い程の沈黙が流れる。
それでもサシャは、タペストリーに描かれた獣から目を離さない。
静かに、左手を握りこむ。
『あぁーあ、これだけ脅せば、逃げると思ったのに』
不意に、少女のものらしい残念そうな声が響いた。
驚いて周囲を見回す５人。
何気なく顔を上げたレイは、タペストリーを見て怯えた表情で口元を押さえた。
風はもう止んでいるのに、波打ったのだ。
薄く紫がかった光が、布の上に波紋として広がる。
「何が起こるって言うんだ……？」
先程からの緊張でからからになった喉を無理矢理湿らせ、ケイが掠れた声を出した。
波紋は不安定に脈動を見せる。
一際強くなった時、中心部から「何か」が出てきた。
サシャは万が一に備え、皆を背に一歩下がる。

その「何か」は、初め猛禽に見えた。
しかし、それはすぐに全員の頭の中で否定される。
翼の後ろに少女を乗せたその獣の後半身は、まさしくライオンのそれだったからだ。
「あれ……グリフォン？」
小さくレイが呟く。
「まったく、いつまで経っても人間って単純よね」
馬鹿にした様な物言いの少女は、うっとおしそうに長めのショートヘアを掻きあげると、嫣然と微笑んだ。
「誰？！」
「初めまして、そしてさようなら。私はミラ……貴方たちを阻む者」
少女はサシャに答えてそう言うと、すいっと右手でサシャ達を指した。
「……やっておしまい」
冷たく響く声に、グリフォンは身体を宙に浮かばせた。
ヒュウッ、と音がする。その音に素早くケイが反応し、サシャの前に出た。
「結界陣っ！」
取り出したスティックを長くのばして左手に持ち、腕を伸ばして目の前にかざすと、その腕に右腕を交差させ、間一髪で魔方陣を発動させた。
グリフォンはぱかっと嘴を開き、青白い光弾を2発連続で放つ。
ケイは片目を閉じて衝撃に耐え、着弾の光に隠れてナツミが弓を引く。
やすやすと矢を避けられて射手が舌打ちするのも束の間、尖った爪が目的目がけて振り下ろされ、狙われた剣士は自らの剣を引き抜いて受け止めた。
「踏み潰しちゃえ」
ミラはくすくす笑ってグリフォンに命じる。
サシャは床とほぼ水平になった剣を、右拳も使って支える。

すでに膝が震えている。
「潰されて……たまるかぁーっ！」
そう叫ぶと、右手を外して相手の足を滑らせ落とした。
だが反撃に転じようとした瞬間、剣ごと鳥の足で蹴飛ばされてしまう。
「ぐあぁっ！」
小柄な体は仰向けに倒れて2，3m程床を滑り、サシャは体をくの字に折って咳き込む。
「沙紗っ」
慌ててケイが駆け寄り、抱き起こした。
プロテクター――女性剣士用の防具だ――を着ているとはいえ、衝撃はかなりのものだったらしい。サシャは苦しそうに胸を押さえ、大きく息を吐いた。
「火炎弾っ」
高い声が響いてロッドが軌跡を描くと、炎の塊がグリフォンの目元で炸裂した。と同時に、背にしていた扉も閃光をはらんで吹き飛んだ。
「レイ、何したんだよ！」
「い、今の私じゃないです！」
慌てふためくジュンとレイ。
「なぁんだ、もう出て来ちゃったの？　もう少しくらい時間稼ぎ出来ると思ったのに」
「へっ、ご期待に添えなくて残念だったな。ったく、人の都合も聞かずに閉じ込めやがって」
吹き飛んだ扉の向こうには、チャラチャラと手の中で小さな石を弄ぶカズキと、メイスを握り締めたローブ姿の少女が居た。
「ふん、誤算だったわね。あんた、『練成術』持ってたんだ」
グリフォンに跨った少女の顔から、初めて笑みが消えた。
「偶然気付いただけだけどな。ご期待に添えず残念、ってヤツか」
少女とは逆にニィッと自慢げに笑うカズキ。その後ろから、1人

の少女が顔を出した。丁寧な刺繍を施された長衣（ローブ）を来ているからには、彼女こそがこの建物の主人だろう。

「セラフィータ様……どうかお静まり下さい！」

高めの少女の声が、僅かの間場を支配し、消えてゆく。

その間にカズキは投石袋――羊飼いが使うような、小さな袋に紐が2本くっついたもの――に石を引っ掛け、紐を掴んで回し始めた。

クッ、と笑うミラ。

「バッカじゃないの？」

その言葉を合図としたか、カズキは十分に遠心力を持った投石袋の紐を1本だけ手放し、石を放り出す。

まるで意思を持ったかのように飛んでいくそれは、ミラのすぐ傍で真っ白に輝いた。

「きゃあぁっ！！」

その光は、サシャ達7人の目は焼かず、ミラと名乗る者の姿を変容させた。

濃い灰色をしていた髪は月明かりに淡く透き通った銀色に変わり、苦しそうに顔の左半分を押さえる手の隙間から垣間見える瞳は驚くほど鮮やかな紫を見せる。

「く、そぉ……覚えてなさい！」

忌々しげに言葉を吐くと、グリフォンの体が輪郭を失くした光になった。

対して少女は糸が切れたように意識を失い、現実味をなくした獣の上から落下する。

「あっ……」

一同が動き出そうとした瞬間、少女の背には淡く紫に色付いた翼が現れた。

落下速度は緩まり、足から床に横たわる。

ふっ、と光が消えると、光源は満月の光のみになった。

「ん、う……」

翼を生やした少女が、目を覚ます。

「セラフィータ様っ！」
名を呼びながら駆け寄るのは、戸口で懇願していたローブ姿の少女。
「……アリス？」
目にかかる前髪をかき上げ、セラフィータは目を細める。
次いで、６人に目を向けた。
「貴方たち……」
驚いたような声色。
しかしすぐに、表情がぐっと引き締まる。
「とうとう来たのね。待っていたわ、貴方たちを」

６人が改めて通された部屋は、先程戦闘の場となった祭室とは違い、随分と明るくされた場所だった。
ふかふかのソファに並んで座り、ナツミはそわそわと落ち着かなげに周囲を見回していた。
「夏美」
たしなめるような声にサシャを見る。彼女は今、上着を脱いで防具を外し、借りた毛布を肩に羽織っていた。
「もうちょっと落ち着いて」
「だぁって……」
頬を膨らませて背凭れに体を預け、栗色の髪をいじり始めるナツミ。
「ごめんなさい、待たせて」
部屋の扉を開いて姿を見せたのは、薬瓶を抱いたセラフィータと、ティーセットを持ったアリスだ。
「どうかしら？　さっきの治癒術で、少しは痛み引いた？」
「少しだけ……」
「ごめんなさいね、水術は得意でなくて。薬湯を持ってきたわ……痛みと炎症に良く効くから、どうぞ」
「ありがとう」

サシャはセラフィータから薬を受け取り、口を付ける。
「ぐいっといっちゃえ」
見ていたナツミが茶々を入れ、ちろりとサシャが横目で睨む。
「じゃあ飲んでみなさいよ。ほらぁ」
ナツミへと瓶を傾けてみせるサシャ。他の4人とアリスは、その様子にふと微笑む。
「セラフィータ様のお話が終わりましたら、ココアでも飲んでお休み下さいな」
低めのテーブルに紅茶を入れたカップを5つ、主人の為に1つ用意しながら、アリスは笑って言った。
「出来れば今欲しいかな、これ苦そうだし」
向かいにセラフィータが座るのを見ながら、サシャは苦笑いした。
「少し話を聞いてくれたら、すぐに出させるから」
「そうだな。今もらって体あったまったら寝るだろ、あんたの性格だと」
セラフィータとケイが2人でサシャをなだめる。
サシャが大人しく薬を半分ほど飲むと、カズキが口を開いた。
「……で、何なんだよ、話って」
セラフィータが、軽く微笑む。
「その前に確認したいことがあるの。この世界のこと、どれくらい知ってる?」
6人は、何か情報はあったかと考えをめぐらせた。
「名前……くらいは」
「同じく」
一番初めにしたことが魔方陣の文字を読んだことであるケイと、傍にいたサシャが最初に答えた。
「マール王国とパスティア皇国が隣同士で、パスティア皇国の特産品がミスリルだってことー!」
ジュンは元気良く手を挙げて発表する。
「召喚魔法があるってことは知ってるぜ」

隣の従弟を小突いて答えたのはカズキ。
「んー……ほとんどナイ、です」
しかめっ面でこめかみを押しながら、ナツミが答える。
「魔法を使える人と使えない人が居るってこと位は知ってます」
レイが静かに答えた。
「……つまり、皆殆ど知らないって事か……」
一人掛けのソファに座ったセラフィータは、肘置きで頬杖を突いて考え込んだ。
「質問形式にしましょうか」
苦笑し、両手を広げる。
それを合図にしたように、落ち着かないそぶりを見せていたナツミが元気良く手を挙げた。
（手を挙げなくても良いんだけどねぇ…）
「何かしら？」
「キミは、何者？」
真剣な顔でナツミが言うと、セラフィータの表情がふと引き締まる。
「私はここ＜基層＞（イエソド）で世界の守りの一角を司る、闇天使セラフィータよ」
そう言うと、セラフィータは微笑んだ。
今度は6人がきょとんとする番だ。
「……天使？」
流石のサシャも目を丸くする。
「まぁ、役職名ね。ここでは最高位の神官だと思って。他には？」
スッ、とサシャが戸惑いがちに手を挙げる。
「結局の所、ここは一体どういう世界なの」
セラフィータの顔から、笑みが消える。
「12の神殿を守りの要とする、双子の世界の片割れ」
「……は？」
「貴方たちは12人の天使と神の加護を受けて、最後の神殿を開く

のよ」
冗談だろ、と言いかけ、少女の真剣な表情を見たケイは口を噤んだ。
「後は…進む間においおいわかってくるでしょ。もう休むといいわ」
そう言うと、呆然とする6人を残してセラフィータは立ち上がった。
「魔方陣を発動させておくわ。目が覚めた頃には気力も体力も回復してるはずだし、安心して休んでちょうだい」
サイドテーブルに置かれたランプの1つに火を入れ、少女は廊下の暗がりに消えた。
(彼女、何を言いたかったの……?)
暗がりを見つめ、サシャはぼんやりとそんなことを考える。
「サシィ」
そっと肩に手を置かれるまで、皆が既に立ち上がっているとは気付かなかった。
「どしたの、どこかイタイ?」
心配そうなナツミ。
いつものように、顔を覗き込んできて問い掛けてくる。
「ほんの少し、ね? 大丈夫だよ」
サシャは微笑し、皆に倣って席を立った。

真正のものに近い闇の中、サシャはココアで満たした暖かなマグカップを手にして、ベッドの上に体を起こしていた。
案内された寝室は当然のことながら男女で分けられ、同室の女子2人は既に熟睡している。当然ながら、起きているのはサシャだけだ。
彼女は今、ココアを少しずつ喉に通しながら、セラフィータの言葉を頭の中でリピートしていた。
「変な、話……」
ぽつりと、口の端から洩らす。

（学校でユーザーが見つかったら……訊いてみるのも良いかもね）

そんなことを考えながら、カップをサイドテーブルに置いて布団に潜り込んだ。

Ｐｒｏｇｒａｍ　４，　ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　４　＜基層＞（イエソド）（後書き）

初稿はおそらく２００１年の９月以降。
何故２冊目に日付を書いていかなかったのか……！！

Program 5 Research

A．M．８：００。
普段なら学校に行っているだろうこの時間に、高村圭一はテレビニュースを見ながら遅めの朝食と洒落込んでいた。
とはいっても、家に居るわけではない。自分の場所だが、自宅ではないのだ。
広く取られたリビングには楽譜が散乱し、ソファの上にはクラシック・ギター――聞くところによると、エレキギターと構造が同じらしい――が放り出されている。散々たる現状だ。
（この収拾、どうつけよう……）
「……沙紗に頼んじゃおうかなぁ」
目の前の状況を見て考えたことに、言葉は自然とつながった。
その瞬間、誰に聞かれたわけでもないのに少年の頬が紅く染まる。
誤魔化すかのように、慌てて時計を見る。アナログ時計は、その長針をすでに全体の４分の１進めていた。
「げっ、やばい！　あと１５分！？」
ワザとらしく妙に大きな声を上げ、トーストの残りを口に押し込んで身支度を始める。
（今日は午後オフだし、終わったら学校行くぞ、絶対！）
忙しい中でも、少年の頭の中は至って平和のようだ。

「よーっす、沙紗ちゃん」
制服に自前のコートを着込んで学校までの往路を急ぐ沙紗に、元気良さそうな自転車少年が追いつく。
「おはよ、和己くん……って、サッカー部の朝練は？」
「今日は無し」
器用に沙紗の横にぴったり寄って、これまた器用に速度を合わせる。

「圭一くんは？」
首を傾げる沙紗に、和己は携帯電話を渡す。
「？」
くるくると、二つ折りの携帯電話を回して眺める沙紗。
和己は思わず吹き出す。
「何してんだ」
「いや、ちょっと……こう、だよね」
ぱかっ、と軽い音を立てて開き、沙紗はディスプレイを見つめた。
「まさかケータイ持ってない訳じゃねーだろ？」
「実はその『まさか』。……あ、メール来てるよ」
「この時間なら、多分圭一だな。見ていいぜ」
和己が自転車を降り、押しながら沙紗の手元を覗いた。右手に持ち、左手でボタンを押していく動作をながめやる。
「コードレス使ってるみてぇだな、そのやり方」
「携帯電話使ったことないしね」
手元を指差され、ははっと苦笑いする少女。
「外での連絡手段無いんじゃ不便じゃねぇか？」
「手段自体はあるよ。モバイルパソコン持ってるから、あたし」
沙紗はそう言いながら、開封されたメールを見た。
＜午後は行く。連絡よろしく。　K＞
“K”は“圭一”の頭文字だろう。
「……K・TでもT・Kでもなく、Kですか……」
「判りづらいよなぁ！　いっつも言ってるのに直さないんだぜ？それ」
同じイニシアルを持つ少年はけらけらと笑い、隣の少女を急かして学院へと向かった。

時は移ろい、正午。
教師が風邪をひいて休んだ為に、沙紗がいる高等2年A組は4限目が自習となった。

監督の代理教師が居るといっても、教室内は半無法地帯となっている。
単行本を手から手へと回し、机を突き合わせて喋りこみ、音楽を聞きつつ寝こけ……沙紗はＭＤウォークマンで邦楽の新曲を聞いていた。
プレイヤーは自分の物だが、ディスクは泉野　梓のものなので早く聞いてしまいたいのだ。
梓の丸文字で書かれた歌詞を目で追い、左手の人差し指で机を叩いてリズムを取る。
ふと、沙紗の手が止まる。
「どう？　沙紗。Ｅｖｅｒｌａｓｔｉｎｇ　Ｔｒｕｔｈの新曲は♪」
様子を見て、梓が身を乗り出してきた。
顔にはしっかり「良いよね？」と書いてある。
沙紗は「そうだね」と微笑むと、イヤホンを外して立ち上がった。
「どしたの？」
「ん、ちょっと図書館にでも行こうかと」
「私も行こうか？」
「梓は次の時間の課題やってなさい。次当たるんでしょ？　せんせーい、許可下さいな」
う、とうめく友人を尻目に監督役の教師に問うと、教師は気前良く頷き、破り取ったノートのページに自分の名前を書いて沙紗に渡す。
「何しに行くんだ？」
クラスと名前を書き込む沙紗を見て、教師が首を傾げた。
「……ちょっとした調べ物です」
「そうか、頑張れよ」
教師の激励に丁重にペンを返して微笑むと、少女は紙を持って教室を出た。
蒼洋学院は、同じ名を冠した学院都市の真ん中にある。

学業の中心ともなっているこの学校は、初等部、中等部、高等部、大学部という四つの区分で構成されており、それにある程度の施設がついているのでかなりの敷地を占有している。

「……っんとにムダに敷地広いんだから……」

南校舎から図書館に行くまで、冬日溢れる中庭を突っ切っておよそ5分。沙紗は左手で紙を弄びながら、厚いガラス戸を押して建物の中に入った。

カウンターの前を通り過ぎ、種類別の配架地図を覗き込む。

「そこのお嬢さん、今授業中でしょ」

背後の声に、沙紗はぴくりと肩を震わせた。

「授業どうしたの」

「自習中……です。ここに来る許可は貰ってきましたけど」

振り向くと、そこには白衣を着込んだ女性が立っていた。

「じゃあ、その許可証見せてくれる？」

不思議そうに瞬きをする沙紗。

とりあえず、紙を渡す。

女性は二度読み返し、沙紗の胸元にあるタイブローチを確かめた。

「……はい、わかりました。御自由にどうぞ」

軽く頷き、貰っておくよ、と白衣のポケットに紙をしまった。

「……何が可笑しいんですか」

沙紗はずっとニヤニヤしている相手の顔をじっと睨んだ。

「いいや、別に」

女性はゆるくかぶりを振った。

それに対して、沙紗は不審そうに眉をひそめただけでその場を離れる。

「……無愛想な子だねぇ」

1人残された彼女は、微かにウェーブのかった短い髪をさらりと梳いた。

本棚の間から戻ってきた時、沙紗は両腕の中に何冊もの本を抱え

ていた。
自習用にと配置された４人掛けの机に陣取り、手当たり次第に文献を引いていく。
目次を見、ページを開き、ある程度読んだら広げたまま置いて次へ。
そんな単調な作業を繰り返している内に、先刻の女性が音もなく近付いてきた。
「何してんの？　お嬢さん。こんな難しい論文ばっかり広げて」
女性は沙紗の正面に座り、間近にあった英語の論文集を手に取り、ぱらぱらとめくる。
「授業の調べもの……な訳ないね。専門用語ばっかりだわ、これ。辞書が有ったって高校生にこれは無理だよ」
顔をしかめてばさっと本を放り出す女性を、沙紗は顔の下半分を読みかけの本に隠して見つめた。
「……読めるんですか？」
「読めますよ？　ある程度は。これでも神学専攻で、論文読み漁ったし。ここらへんのは全部読んだかな」
意外そうに目を丸くする沙紗に、女性は優しげな笑顔を見せた。
「もし良ければ、何を調べたいのか教えてくれないかな。わたしはここが勤務先だし、いろんなこと調べてあげられると思うよ」
にっこりと笑顔を見せた女性に、思わず頷いて応じてしまう沙紗だった。

「――で、司書さんに手伝ってもらうことになったの」
「ふーん」
食堂の片隅で昼食をつつきながら、沙紗は先程の図書館での話をしていた。
話し相手は、右側に座ってフォークを握っている圭一だ。
「何を調べるつもりなのかわかんないけど、良かったな、調べやすくなって」

「うん。でも……良かったのかな？　司書さん使って」
沙紗は首を傾げ、左手に持った箸でエビフライを口に運ぶ。
「司書ってのは利用を手伝う為にいるんだろ？　あっちが手伝うって言ったんだから、使わせてもらえばいーの」
圭一はスパゲティを口に運ぶ。
「……そういうものなの？」
「そういうモンなの」
ずいっと、フォークを沙紗の鼻先に突きつける圭一。
「あんたさぁ、もっとしたたかになった方が良いぞ？」
（そうじゃないと、変なところで危なっかしくて見てられない……その上どっかからかトンビにさらわれかねないし！）
沙紗は綺麗な薄墨色の瞳にフォークの先を映しこんで、ぱちぱちと瞬きした。
そのまま視線を圭一に移し、首を傾げてみせる。
「んー……ま、いいけどね……」
いささか芳しくない少女の反応に控え目な苦笑いを見せ、圭一はまた自分の昼食に向き直った。

放課後といえば、クラブ活動の時間である。
「さっしゃっちゃ～ん♪」
例によって例のごとく、梓は沙紗にすり寄ってきた。
「なっ、何よ。気色の悪い」
たじろぐ風を見せる沙紗。
「あのねぇ、今日ね、高村さんがクラブに出てるんだって～」
「だから何なの？！」
「一緒に行こぉ～？」
すでに腕を拘束されている。
（触らぬ神と抵抗しない暴走状態の梓にたたりなし……）
妙に長い、しかも何か間違った格言を頭に浮かべ、沙紗は長く溜

息をついた。
　ここ2、3年の付き合いで、操状態の彼女に抵抗しないのが得策なのを良く知っている。
「やっぱり何か用意してるの？」
　コートの襟元に付いているベルトを締めながら沙紗が訊くと、梓はすかさず鞄の中からタッパーを出した。
「もちろん、このとぉーりっ！」
「何、それ」
「レモンのお砂糖漬け」
　にっこりと嬉しそうに言う梓。
「頼みの綱はアンタだからね、沙紗！」
「勝手に決めるなっての」
　呆れ気味に言うと、沙紗は梓の肩を押して教室を出るように促した。

「あーん、もういっぱい居る！」
　フェンスを取り囲む人だかりを見て、梓が悔しそうに言う。
「……どうするのよ」
「強行突破に決まってるでしょ！　……沙紗には悪いと思うけど」
　あまりにも乗り気じゃなさ過ぎる沙紗の腕を引き、梓は早足で歩き出した。
（あの静かな昼休みが懐かしい……）
　引っ張られるままに歩く沙紗は、ふとそんなことを思った。
　いつもなら昼食を一緒にする梓が居なかったのは、珍しく真面目に彼女がクラブ活動をしていたからだ。
　彼女の所属クラブは写真部。新聞部と結託して何かとやらかす彼らは、校内の人気者の写真を取っては密かに売り捌いているという話である。
　それはさておき、2人は無事に人垣を抜けて移動式フェンスの傍までたどり着いた。

この間来た時よりも騒がしい。
それもそのはずである。
彼女達の視線の先に、蒼洋学院の最強コンビとまで言われる二人が居るからだ。
「あっ」
コンビの片割れである圭一が、小さな声をあげる。
きゃあきゃあ騒がれてやりにくそうにしていた彼が、とうとう蹴り損ねたのだ。
「お前でもあるんだな、失敗」
「当たり前だろ」
和己にからかわれ、困った様子でボールを取りに走る圭一。
「高村さんだぁっ」
「こっち来たよぉ～」
ボールはちょうど、沙紗達の目の前にある。
圭一はボールを拾って立ち上がり、そこでようやく沙紗に気付いた
「うわー、珍しいもの見たな」
目を丸くし、少女の姿を見下ろす。
「なーにが」
「如月沙紗のサッカー部見学」
「引っ張られて来ただけよ……」
沙紗は上目遣いで圭一を見上げ、肩を竦めて見せる。
「……どうしたの」
「あぁ、いや……こんなうるさいのに、聞こえるんだな、って思ってさ」
「当たり前でしょ、変なやつ。こんな近くにいて聞こえない訳ない」
大仰に溜息をつく沙紗。
大袈裟に呆れて見せる反面、圭一が言った言葉を改めて反芻していた。
“聞こえてる”。
圭一の言葉は“聞こえている”。

梓の言葉も、和己のものも、夏美のも、周囲がどれほどうるさくとも空気の「揺らぎ」を増幅して聴くことが出来る。
しかし逆に、騒ぎ声は“感じている”のだ。点と線で結ばれた形のイメージとして。
“聞きたく”ないから“感じ取る”。
声は音として聞き取り、意味はイメージとして感じ取る。
波動術士という特殊な魔法使いである沙紗にとって、世間は別の意味で煩い。
「ちょっと、沙紗！」
思考の海に沈みかけていたところを、梓の大声が引き上げた。
「あ……何」
沙紗は何度か目瞬きし、隣に立つ梓に目を向けた。
「せめて聞いてなさいよね……」
梓の呆れ混じりの声に、沙紗は肩を竦める。
その様子を、圭一は笑いを噛み殺しつつながめていた。
「ん、何？」
沙紗が圭一を振り返って微笑むと、圭一もにっこり笑った。
「一緒に遊ばない？　サッカーもどき」
「何で『もどき』なの？」
「人数足りないから。今１チーム４人でも足りないくらい」
「で、あたしに入れって？　この格好で？」
白いロングコートの裾をめくってみせる沙紗。
中身は、コートとお揃いの白いブーツと、ミニスカートだ。
「俺の服貸すしさ。なぁやろうよ」
圭一は沙紗と目線を合わせるように少しかがみ、小さく甘えた声を出した。
「どうしようかな……」
ちらりと横目で梓を見ると、口元が「断るな」と動いた。
少年に向き直り、沙紗は頷く。
「じゃあ、部室に来て」

走っていく圭一の背中を見て歩き出そうとすると、梓が沙紗のコートを捕まえた。
「……何よ」
一抹の不安が沙紗の脳裏をよぎる。
「差し入れ持ってって♪」
期待に満ち満ちた笑顔。
結局、沙紗は辺り一帯の人々からの貢物を持って行く羽目になった。

「案外こざっぱりしてるんだね」
「うちのマネージャー、やけに気合入れてるからな。……それにしても、あんた何でこんなモン引き受けてきたの」
圭一は少々苦い表情で、中央のテーブルに積まれた差し入れを指した。
「だって、断れなかったんだもん」
「断れなかったんじゃなくて、断らなかったんだろ。相変わらず、身内が絡むと甘いんだから」
可愛らしく頬を膨らませる少女を背にして、少年は自分のロッカーを開いて手で示す。
「どうぞ」
「どうも。どれを使えば？」
「左端の長袖。洗濯したっきり使ってないから……あぁ、シャツも脱いどけよ。汗かいて風邪引くとまずいし」
そう言うと圭一は、沙紗に対して後ろ向きにテーブルに腰かけた。
コートと鞄はテーブルに置き、沙紗はまずブーツを圭一のスニーカーに履き替えた。スカートをジャージのズボンに穿き替え、上着の留め金を丁寧に外してシャツごと脱ぐ。
そうしてあらわになった背には、変色だけとはいえ火傷の疵痕が残っている。
その時、差し入れを整理しようかと思い立ち、ふと圭一は上半身

をひねった。偶然にも沙紗の背を目にして辛そうな表情を見せ、無意識に己の左腕――かつては彼も沙紗と共に、この位置に酷い火傷を負ったのだ――を掴んだ。

口を開くが何も言えず、少年は静かに少女に近付く。

そして、するりと少女の肩を抱きしめた。

相手の肩に顔を埋めるようにし、沙紗から表情は見えない。

沙紗は一瞬驚きを見せ、ふわりと笑う。

「……なーにやってるのよ、えっち」

そう言うと、己の左肩にある少年の右手に、同じく右手で触れた。

「かわいい彼女が居るって、ウワサで聞いたわよ？　こんな所で、浮気しないの」

「ちぇ、何だよそれ」

そっと力を込め、右手を下ろさせると、圭一は素直に腕をほどき、そっぽを向いてしまった。

「フラれたからってすねないのー」

くすくす笑い、上着をかぶる沙紗。

「すねてねーよっ」

圭一は、かみつかんばかりの勢いで反応を返す。

「あははっ、何も牙むき出しにしなくて……」

沙紗が言い切る前に、２人の足元がふらついた。

思わず２人して天井を見上げる。

「……何だ？」

「地震……じゃなかった？」

取りあえず服を整えながら、沙紗は首を傾げた。

「……もう揺れないみたいだし、さっさとここ出るか」

瑞兆ではないだろうが、何かの前兆とも考えにくい。

気にすることもないだろうと考えた沙紗は、

「うん」

圭一の提案に承諾の意を示した。

翌日。

「……あたしさぁ、ここまで程度の低い嫌がらせ初めてされたわ」

食堂で買い込んだ昼食を利き腕で抱え、パックジュースのストローをくわえたまま、沙紗は梓にむかってぼやく。

梓は申し訳なさそうに苦笑いを零した。

「何せ全校女子の半分くらいのやっかみ買っちゃったもんね……ゴメン、考えナシで」

現在位置、南校舎屋上。

食堂から追い出されてしまったので、ここに来たという訳である。

「あぁ、まぁ良いんだけど……全校女子の半分？」

「サッカー部自体のファンクラブよ。その一部が高村圭一親衛隊」

「うげ、何それ」

わざとらしく舌を出して嫌悪感を示し、珍しく私服を着込んだ――蒼洋学園は私学であるため、学年章のタイブローチをつければ私服での登校が許されている――沙紗はむき出しのコンクリートの床に座って足を投げ出した。

「後の半分は何？　無関心でも決め込んでるの？」

「違うわよ。崇拝対象が違うから、関わってこないだけ」

梓は沙紗に比べて情報通だ。

「……その崇拝対象って、いったい何なの」

だから、沙紗は梓に自分の知らないことを訊く。

「生徒会よ」

「……？」

「ほら、２組の結城君」

「……」

人名を出されて、沙紗は視線を彼方の空へと彷徨わせた。

「ん、んー……駄目だ、思い出せない」

額を押さえる様に軽く手を当て、かぶりを振ってみせる。

「少なくとも去年何度か遭ったことあるはずよ？」

梓は呆れかえり、溜息混じりに言う。
「沙紗って本当に、勉強以外には……ん？」
屋内へと続く扉が、目の前で音をたてて開いた。
「噂をすれば何とやら、ってかな」
「影がさす、でしょ」
まるで興味を無くしたかのようにそっけなく梓に応えると、沙紗は抱えていたものを降ろし、昼食を開始すべく菓子パンの袋を取り上げた。
外に出てきたのは、日本人らしい漆黒の髪に深い瑠璃色の瞳を持つ少年だった。冬だと言うのに汗をかき、息を弾ませている。慌てて扉を閉じ、そのまま背をついて大きく息を吐き出した。
「ハァイ、結城君。相変わらずモテモテねぇ♪」
「その言い方はよせ」
冷やかし半分で声をかけた梓に、少年は忌々しそうに応じて舌打ちした。
「……給水塔の後ろに隠れたら？　口裏合わせぐらいなら協力してあげる」
億劫そうに、沙紗は少年を見上げて言葉を口にした。
「悪い」
少年は申し訳無さそうな表情を見せると、即座に給水塔、つまりは沙紗達が座っている場所とは反対側に向かっていった。
彼の背中が視界から消えた一瞬の後。
今度はもっと大きな音を立てて扉が開かれた。
「あれ？」
わらわらと出てきた少女達が首を傾げる。
「居ないよ？」
「本当にこっちだった？」
彼女達の視界の中には、立ったまま背の高い手すりにもたれている梓と、その足元に座り込んでパンを食べている沙紗、この二人しかいない。何度見てもそれは変わらないのに、女の子達はまだ諦め

ようとしない。
「……い」
小さな声で呟いた沙紗を、訝しげに眺める梓。
「うるさい」
凛と響く、透き通った声。
決して大きいとは言えない、だが有無を言わせない響きを持つその声で、少女達は弾かれたように沙紗を見て黙り込んだ。
「目的のものが無いと判断したんなら、さっさと別の所に行ってくれない？」
黒いスラックスに包まれた脚を片方だけ体に引き寄せ、好意的とは言えない視線を少女達に向ける。
気圧された少女達は、慌てて屋上から出て行った。
たっぷり２０秒程経ってから、沙紗は眼を閉じる。
「もう、良いんじゃない？」
大きめの声で穏やかに言うと、給水塔の裏から先程の少年が出てきた。
「本当に助かった、ありがとう」
気まずそうに言う少年。
「別に……利害が一致しただけだし」
すぐ近くで立ち止まった影の主を一瞥すると、沙紗は何事もなかったかのように、二つ目のパンに食いつく。
「機嫌を損ねたようだな」
少年は沙紗の様子を見て苦笑する。
「あぁ、大丈夫よ。結城君が怖いだけだろうし」
「梓！」
にやにやと意地の悪い笑みを見せて結城少年に言う梓を牽制しようと、沙紗は大慌てで声を荒らげた。
「はいはい。これ以上は言いませんよ」
梓は表情を一変させ、「やれやれ」と肩をすくめて少年に苦笑を見せた。

「ゴメン、ゴメン。紹介忘れてたわ。結城君、この子が如月　沙紗。私と同じA組よ」
まだやぶ睨みでこっちを見ている沙紗の頬をつっつきながら言う。
「中高生徒会会長の結城だ。宜しく」
差し出された手が、沙紗の視界に映る。
少女は首をめぐらせて少年の掌を見、握手に応じた。
「よろしく」
ほんの僅かな時間だけ握り、すぐに手を離す。
冷たい水の気配。
（この人、水術が得意なんだ……）
珍しいものを見たと思いながら、相手の顔を見つめる沙紗。
「何だ？」
先程までの様子を考えれば長すぎる時間こちらを見ている少女に、結城は首を傾げた。
「ううん、何でもない」
沙紗はかぶりを振った。
まだまだいろんな人がこの学院にいる、と思いながら。

「あぁ、いたいた」
昼休みも終わりに近付き、教室へと急いでいた沙紗達を引き止めたのは、いつか聞いたアルト・ヴォイス。
「探したよ、えー……如月さん」
立ち止まって振り向いた先に、微笑を湛え、白衣を着込んだ女性がいた。
その胸元には大きめの名札をつけ、手には紙束を持っている。
「司書さん？　どうしたんですか」
「予想外に早く調べ物が終わったんで、結果報告にきたんだよ」
紙束をひらひらと示して見せる女性。それを見て、沙紗の目は丸くなった。
「頼んだの、確か昨日でしたよね？」

「うん。あれからネットから文献からあたってみたんだけどね、出てくる出てくる。まぁ、殆どが神話の授業内容からもう少し突っ込んだようなものばかりだったけど」
「十分ですよ！　もらっても良いですか？」
「良いよ。あげる為に持ってきたんだし」
沙紗は差し出された束を受け取り、早速目を通し始めた。
ところどころに注釈が書き込まれている。そればかりか、ラスト2，3枚は全て手書きだ。少々鋭角がきつい字だが、読みにくくはない。
「……よくまぁ、ここまでやりましたね」
「ん？　そりゃあ可愛いコのためなら頑張るもん、わたし」
（……可愛いコ……？）
「とりあえず、ありがとうございました」
普通、女からは聞かないような言葉を敢えて聞き流し、沙紗は深々と頭を下げた。
「また何か調べ物があったら言いなさいね。んじゃ」
女性はひらりと手をひらめかせると、背を向けて去っていった。
代わりに、少し離れていた梓が寄ってくる。
「アンタはまた何を調べ始めたのよ」
眉をひそめ、呆れた顔を見せる梓。
「いや、ちょっとゲームの関係でね」
「ほどほどにしなさいよ？」
上目遣いで自分を見る梓の姿に、沙紗は世話好きの長姉を思い出した。
小さく微笑む。
「わかってるよ。体調崩すほどやり込みはしませんって」
沙紗は茶化すように言うと、梓を急かして教室に入っていった。

Ｐｒｏｇｒａｍ　５，　ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　５　Ｒｅｓｅａｒｃｈ（後書き）

初稿は２００２～３年です。結構かかっています。
当時は高校生でしたから、内職で書いたのが殆んどかな……（爆）

Ｐｒｏｇｒａｍ　６　新たな出逢い

「どこよ、ここぉ……」

いつも通りの手順で再開したはずだった。

しかし、今サシャが立っている場所は、前後左右どこを見ても木と草ばかりだ。前回眠ったはずの神殿は、影も形もない。

（……そう言えば、ついこの間のコンピューターウイルス騒ぎで、セーブフラッグ役に立たないかもってお母さんが言ってたな……）

セーブフラッグというのは、「Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ」を終了するときにどこで終わったのかを示す一種の目印である。休息――宿屋に入っていようと野宿だろうと――を取ると自動的につくのだ。

（変なシステムよね、まったく……）

普通、オンラインゲームはログインすると、安全な町が出発点になる。そのことを考えると、「Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ」は１人用のテレビゲームに近い。

（……それにしたって、よりにもよってあたしのデータがエジキに……）

ちら、と足元にある魔方陣を見やる。紫色の文字は、一方通行である証だ。実は少し文字列を変えるだけで行き来が出来るようになるのだが、サシャには方陣術の詳細な心得がないし、あったとしてもする気は起きない。

そこで、ふと全身を見回してみる。

右腰にミスリルソード、左腰に鋼の短刀、後ろに道具入れ。胸に手を当てればちゃんとプロテクターを着込んでいるし、手で探れば帽子もある。ついでに膝当てもつけている。

（完全装備……とりあえずは、歩ける……）

サシャは静かに息を吐き出して、不安な気持ちを何とか抑えようとした。

しかしそんなことはお構いなし、とでも言うように、少女の背後

から草摺りの音が響く。
思わず肩をそびやかすサシャ。
少女はそぅっと短刀に手をのばし、逆手に握ると、左手で鞘を押さえて、引き抜きざまに勢い良く振り向いた。
正視した瞬間目に映ったのは、驚きの表情を見せている金髪の少年。
「……ひと？」
「オンナぁ？」
すっとんきょうな声をあげる2人。
「……助かったぜ。これでモンスターか何かだったらどうしようかと思った…」
少年はふーっと大げさに溜息をつき、頭を掻いた。
「こっちだって助かったわよ。あーびっくりした」
サシャは帽子を脱いで、口元を覆った。
現実とは違う短い髪が、少女の動きにつられてさらりと揺れる。
「あなたもランダム要素でここに来たの？」
「多分な。セーブデータがぶっ壊れたらしい。ったく、これくらい何とかしろよ、＜中央＞（セントラル）……」
ランダム要素、セーブデータ。こんな言葉が通じるのは、ユーザー以外にはありえない。
帽子に隠して、サシャは安堵の溜息をついた。ついでに短刀もしまう。
「ねぇ、一番近い町までどれくらいあると思う？」
帽子をかぶり、具合を確かめながらサシャが問うと、少年は肩を竦めた。
「さぁな。地図はあるが場所がわからねぇからな……」
「じゃあ、適当に方向定めて進む？」
「それが一番……ってなんでおまえが仕切ってんだよ」
呆れる少年。
サシャはぴ、と人差し指を立ててみせた。

「旅は道連れ、世は情け」
「あ？」
「町までは一緒に行動しましょ。ね？」
愛らしい顔立ちに笑みを浮かべ、首を傾げるサシャ。
「地図を持ってるってことは、盗賊なんでしょ？　剣士が一緒だったら、とりあえず町までは安泰だと思うけどなァ……」
わざともったいぶって言う少女に、少年は大きく溜息をついた。
「……わかったよ。とりあえずは町までな。おまえ、名前は？」
「サシャよ」
「おれはキョウ。暫く、頼むぜ」

「……キョウ」
「あ？」
下生えをかき分けながら進む最中、サシャがキョウを呼び止めた。
「何か聞こえる」
キョウが振り返ると、サシャは斜め後ろの方を見ている。
「何かって、何だよ」
「さぁ……行っちゃ駄目？」
すでにそちらへ体を向けているサシャを見て、キョウは「ハッ」と強く息を吐いた。
「疑問形の意味ねぇじゃん。どうせ行くつもりなんだろ？」
呆れた口調を装っていても、言外には「付き合ってやる」という気配があった。
「ありがとっ」
サシャは嬉しそうな笑顔を見せ、今度は自分が先導を始めた。
歩くこと暫し。
「……泣き声、か？　コレ」
「多分……」
音源へと近づくにつれ、明らかになってくる音の正体。どうやら幼い子供のものらしい。

「で、アレは一体何だと思う？」
キョウが木に隠れて指差したのは、１人の男。
困り果てた表情をしている彼は、足許の幼女を扱いかねているようだ。中途半端に腰をかがめ、だからといって幼女の頭を撫でてやっている訳でもない。
「父親、ではないわよねぇ……」
少年と同じように身を隠しつつ、少女も２人の様子を見守っている。
暫しの間見ていたが、これでは埒が明かない。
「……あなた、何してるの？」
サシャは堂々と木の陰から出ると、青年に呆れた口調で声を投げかけた。
しかし、その声にいちはやく反応を見せたのは、青年ではなく泣きじゃくっていたはずの幼女。
「おねぇちゃまっ！」
言うが早いか駆け出し、サシャの足にすがりついた。
「あっ……っと」
サシャはその衝撃でわずかによろめき、己の腰よりもなお低い幼女の頭を覗き込んだ。
「んー……と、ごめん。あたしはあなたのお姉ちゃんじゃないよ」
「サーリアおねぇちゃまじゃないの？」
すがりついたまま顔を上げ、今にも泣きそうな顔を見せる。
「何か、心当たりはないか？　その子は私が来る前からずっと泣いていたようなのだが」
青年は苦り切った表情でサシャに問う。
「残念ながら、ないわ。この子の名前は？」
「訊き出せたと思うか？」
幼女の頭を撫でながらのサシャの問いに、青年はかぶりを振った。
サシャはそっとしゃがみ込み、幼女と目線を合わせてにっこり微笑む。

「お名前は？」
「セレスはね、セレスタインっておなまえよ」
サシャの優しい笑みに安心したか、幼女は初めて笑顔を見せた。
「おねぇちゃんは？」
「お姉ちゃんはね、サシャって言うの」
「おにぃちゃんたちは？」
セレスタインの笑顔が、いつの間にか出てきたキョウと青年に向けられた。
「スイ……だ」
「キョウ」
そっけなく答える2人。
どうやら彼らにとって、子供というものは勝手が違うようだ。それでも、確かに表情は和らいでいる。
「……で、結局の所どうするつもりなんだよ、サシャ」
「連れて行くしかないでしょう？　2人が4人に増えたっておんなじおんなじ」
「同じじゃないだろ、おい……」
あっけらかんと言うサシャに対し、キョウはげんなりとした表情を見せた。
彼の顔には、明らかに「冗談じゃない！」と書いてある。
サシャはセレスタインをゆっくりと抱き上げた。
「当たり前じゃない。こんな小さい子、ほっとけないでしょ？」
対する彼女の顔には、「当然だ」と書いてあった。
一触即発の不穏な空気を破ったのは、スイの咳払い。
「何でも良いが、2人共。その前に左の手首を見せてくれないか？」
「……良いけど？」
「一体何だよ」
今日は不審そうにしながらも手首からバンダナを外し、サシャは右腕でしっかりとセレスタインを支えると、口を使ってベルトを外し、指抜き手袋を取った。

その瞬間、何を見たかったのかに気付く。
左手首の内側に、「００」と白っぽい字が浮かんでいた。
先に見せたキョウの手首には、「９９」とある。
「見せてもらうぞ……あぁ、やはりそうか」
スイは納得し、サシャの手首から手を離した。
サシャはじぃっとスイを見る。
「……私のものも見せろ、と？」
視線に気付いてスイが問うと、サシャはうんうん、と頷いてみせた。
スイはローブの袖を少しめくって見せてくれる。
そこにあるのは、「０３」。
「私も、同じだ」
かすかに笑うと、スイはサシャからセレスタインを抱き取った。
「ありがと」
サシャは礼を言うと、手早く手袋をはめ直す。
「……おい、サシャ。まさかおまえ、チートキャラじゃねーよな？」
バンダナを巻き直したキョウが、訝しげにサシャへ問う。
「あたしが不正なキャラクターだっていう根拠は何よ」
「公募で割り振られるＩＤに、ダブルオーなんてなかったはずだぜ」
「あぁ！　あたし、応募してもらった訳じゃないんだよ」
キョウを宥めるように、サシャは穏やかな声で答えた。
「ではどうやって手に入れたのだ」
スイまで話に加わってくる。
「うちのお母さん、関係者なの。それで家事１ヵ月と引き換えにもらったって訳」
「くっだらねー取引条件だな……」
「甘いぞ、家事１ヵ月はハンパじゃないんだから」
キョウの突っ込みに、サシャは素早く応える。
「関係者か……ならば、監視の為に自分用にと作ったのかもしれないな」

スイは2人の漫才に付き合う気はないらしい。
「まぁ、今は関係ない。行くぞ、2人共」
「おー」
「はいはーい」
歩き始めて、サシャはふと思い出した。セレスタインを、スイへと預けっ放しだったことに。
サシャは似合わないな、と心の中で呟いた。

「ったく、いつになったらここから出られるんだか……」
暫定パーティーを組み、歩き出してからおよそ1時間と少し。まだまだ森が終わる気配はない。しかもセレスタインを連れていることで、少なからず本来の移動速度より遅くなっている。
「キョウ、今のでそれ何回言った？」
幼い子供と手を繋いでいる為、体勢的に一番辛いだろうサシャが答えた。
「おまえ、よくその状態で歩けるな」
「抱っこよりマシなんだよ？　これでも」
「2人とも、一時（いっとき）でもいいから黙って歩けよ」
呆れたスイの声が、2人のやりとりを遮った。
「ならもうちょっと速くならないか？」
キョウの不満の矛先は、先導役になっているスイに向いたようだ。
「速くしてやろうか？　簡単なことだぞ」
至極当然そうにスイが言う。
キョウが不思議そうに首を傾げる前で、スイは少し腰をかがめてセレスタインを脇から持ち上げた。
「ほらな」
「早くちゃんと抱っこしてあげようよ……」
下手をすればそのまま歩き出しかねない青年に、サシャがぽつりと呟いた。
スイが素直にセレスタインを抱くと、セレスタインはバラ色の頬

をふくらませる。
「セレス、スイのおにぃちゃんより、サーシャおねぇちゃんのほうがいいなぁ。やわらかくて気持ちいいもん」
「つべこべ言うな。……お姉ちゃんが疲れるだろう」
「お姉ちゃん」という一瞬、スイが顔をしかめたのは気のせいか。
「おにぃちゃん、おねぇちゃんのことキライ？」
表情の変化を目敏く見つけたセレスタインは、可愛らしく首を傾げた。
「……会ったばかりでわかる訳がない」
「ふぅん？」
後ろ2人は必死に笑いをこらえつつ歩いている。
「おっ、お前ら仲良いな……」
明らかに震えているキョウの声。
反論の一つでも言ってやろうとスイが振り向く。と、色鮮やかな碧眼に白い狼の姿が映った。
それも、サシャの真後ろ、そう離れていない位置にいる。
（近過ぎやしないか……？）
身長の関係のせいか、スイが何か下にあるものへ視線を向けたのに一番早く気付いたのは、サシャだった。
最小限の動きで目線を追い、左足を少しずらして後ろを見る。
「……あれ、あなたいつから付いてきてたの？」
「まず敵性があるかどうか考えろよ、サシャ！」
「それよりも限界距離を越えていることを気にするべきじゃないのか？！」
サシャの言動に、キョウとスイがほぼ同時に突っ込んだ。
奇しくも、内容はほとんど同じである。
しかし、サシャはお構いなしでその場にかがみこみ、狼の頭に右手を置いた。
固まる男2人。
狼は攻撃する様子を露ほども見せず、むしろ少女の手に頭を擦り

付けた。
サシャも相手を脅かさないように、ゆっくりと片膝を地につく。
「ごめんね、あなたの住処を騒がせちゃって」
そっと手を動かして狼の頬あたりを撫でると、狼は鼻で掌を押してペロッと指を舐めた。
その様子にサシャは微笑み、また頬のあたりを撫でてやる。
「あなたなら、わかるかな？　ここが何処なのか」
サシャが穏やかに問うと、狼は少し間を置いて一声鳴くと、サシャの袖を軽く噛んでぐいっと引っ張った。
傍目から見ても、「こっちだ」と言っているようにしか思えない。
「何処に連れて行く気だ？　そいつ……」
慌てて立ち上がるサシャの動きを目で追いながら、訝しげにキョウが言った。
「ついて来いって！　セレスタインの家を知ってるって言ってる！」
「えっ」
「本当か？」
引っ張られ、ふらつきながらのサシャの言葉に、スイとキョウが驚きの声をあげる。
「それどころか、お姉さんが探してるって！！」
『はぁっ？！』
……事の真偽はともかくとして、3人は狼を先導に走り出した。

「セラフィータ様」
軽い食事を終え、取り敢えず旅装を整えているケイ達5人とセラフィータの所に、アリスが手紙らしい巻物を持って現れた。
1人座ったままのセラフィータが巻物を受け取り、封印の紐を解いて広げる。
「……案内人の出動要請？」
セラフィータの眼が、不思議そうに少し見開かれる。
「どうも迷った人が何人かいるみたいですね。ここにまで要請が来

たってことは、この森の奥にも誰かいるんでしょうか」
アリスの言葉に、セラフィータは軽く溜息をついた。
「大体予想はつくわね……全く、娘には本当に甘いんだから……って、あの人娘しかいないか」
苦笑し、呆れたようにセラフィータは言う。
「どうせ、もう行ったんでしょう？」
「はい、シリウスが。急いで飛んでいっちゃいましたよ」
「……この場合、仕事熱心なんじゃなくて公然と遊びに行けるからでしょうねぇ……」
はぁっ、と大いに溜息をつく。
「ね、ね、案内人って何ィ？」
いち早く旅装を整えた（最も荷物が少ないとも言う）ナツミが、不思議そうに首を傾げた。
「文字通り、案内する人よ」
指をぴっと立てて何を言うかと思いきや、お約束のセラフィータ。
流石のナツミもげんなりと肩を落とす。
「だからぁ……」
「時々あるのよ、こういうことは。まぁ気にしないで」
セラフィータがにっこりと微笑んだ。
「それより、皆。早く出発したほうが良いわ。シリウスは速いから、サシャはきっとすぐに皇都に辿り着くわ」
その言葉に皆は思い思いの返事をし、鞄や武器を手にした。

怒鳴る少女の声が、恐らくは普段のものであろう静寂を取り戻しかけている神殿まで届く。
「あれ、リーフ王女の声でしょうね」
楽しそうに笑って、アリスは窓辺にたたずむセラフィータの肩に薄いストールを羽織らせた。
「……言わなくて、良かったのですか？」
「言えば、余計な『荷物』を背負わせることになるわ。そうでなく

ても、確証はないから」
「彼らはもう背負っているのでは？」
その言葉に、セラフィータは自嘲的な笑みを浮かべた。
「そうかも、知れないわね……」
窓の外の景色から眼を離し、窓枠に乗り上げて座る。
そして、自分の掌を見やる。
「……でも、今はまだ私達の世代よ。私達6人のね」
アリスの眼には、朝の光に透けるセラフィータの薄い翼がはっきりと見えていた。

パスティア皇国、皇都アインスプレシア。
全体的に豊かなこの国で、女帝のお膝元であるこの都は国内随一の繁栄振りだ。
……というのは、全てリーフが道中に5人へ教えてくれたことである。
そんな少しではあるものの事前知識を手に入れていたと言うのに、5人は城門と都を守る城壁を見上げて呆然としていた。
「……でけぇ……」
かろうじて、カズキが口を開く。
「そう？　王城都市ともなれば、普通はもっと城壁が高いものよ？」
至極当然そうに言うと、リーフは開け放たれた城門をくぐる。
それに倣って城壁の中に入ると、活気のあるざわめきが耳に飛び込んできた。
「わぁっ、マーケットだ」
ナツミがどこか嬉しそうに言う。
「アインスプレシアは、皇都であると同時に商業都市だからね。よく市が立つのよ」
リーフは何か探しているのか、キョロキョロとあちらこちらを見ながら言った。
「何か探してんのか？」

「うん、ちょっと人を……あ、いたぁ！」
少女が誰かを認めた瞬間、すぐ傍に近づいてきていたカズキに張り手を食らわしかねない勢いで手を挙げ、振り回した。
慌てて飛びのくカズキ。
代わりにケイがリーフの視線を追うと、大小取り混ぜて人影が五つある。
その内、女性らしいのは二つ。1人は長い髪をポニーテールにしており、もう1人はボックスタイプの帽子を被っている。
「あぁーっ、サシィだ！」
ナツミがはしゃいで叫ぶと、帽子の人影は立ち上がって軽く手を挙げて見せた。
そのまま他の3人に挨拶し、足元の幼子を撫でてやってから駆け出す。
迎える為に駆け寄ったナツミにじゃれつかれる姿を認めて、一同はようやく安堵の溜息をついた。

Ｐｒｏｇｒａｍ　６　　ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　６　新たな出逢い（後書き）

初稿はおそらく２００３年です。
当時、高校で「テニスの王子様」が流行っており、このロストにもじみ～にそこから着想を得たキャラクターが混じっております。今では随分違うキャラになったけれどね。

ちなみにスイが言った「限界距離」というのは、「それ以上近づいたらその動物が行動を起こす距離」のことでございます。

Ｐｒｏｇｒａｍ　７　異変

レイ　：＜戦車＞（メルカバ）……これで、４つですね

カズキ：結構調子良いよな

ジュン：全部でいくつだっけ？

ケイ　：１２だろ？

ナツミ：アゥ、まだ半分もいってないのぉ？

サシャ：あと２つで半分じゃない

カズキ：じゃあ、今日はこれでお開きにするか。明日もまた８時からな

ケイ　：あ、俺ちょっと無理　８時半過ぎぐらいならいけると思うけど

サシャ：仕事？　頑張るのも良いけど、体壊さないようにね

ケイ　：あぁ、さすがにひと冬で２度も３度も風邪引きたくないもんな　じゃあ皆、また明日

管理人：　ケイ　さんがログアウトしました。また来てくださいね。

気の抜けた音をたて、デスクトップ型のパソコンの電源が落ちる。

周りに迷惑をかけないようにと薄暗くした自室の中で、圭一はぎしりと椅子を軋ませた。

久しぶりの我が家。だが、あまりくつろげない。圭一は何となく、自分の居場所じゃないように感じていた。

何を言われようと、圭一にとっては沙紗といる方がずっと心地よく感じる。

慣れていない者にとっては彼女の性格はいささかきつく感じられるだろうが、親しい間柄の人間は、そのきつさが生来のものではなく、とある事件で身についた他者に対する怯えからくるものだ、と知っている。

圭一は微かに苦々しい笑みを浮かべ、わずかな反動と共に立ち上がった。パジャマの上に着ていたカーディガンを椅子に引っ掛け、固まった体をほぐすように伸びをすると、さも疲れたという様子で梯子を登ってロフトベッドに転がる。

少しの間ぼんやりしたあと、少年は手を伸ばして電灯の紐を引っ張った。

「怜香」

「んー？」

背後から声をかけられ、怜香はゴーグルを付けたまま振り返ることなく声の主を見た。身内に対する甘えなのか、少女はいつもの様子と違って、少しだらしなく見える。

「なぁに？　お兄ちゃん」

黒髪に和装の似合う青年――悠希は、ゴーグルを額へとずらして妹の顔を覗き込んだ。

「またやっていたのかい？」

「えへ」

ゴーグルをはずし、照れ笑いを見せる少女。

「母さんがクッキー作ったから、降りておいでって。オート……何

とか、っていう」
「オートミールクッキー？」
「そう、それ。早く降りておいで、僕は先に行っているから」
悠希は怜香の金髪を撫でると、にっこりと微笑んで部屋を出ていった。
少女はそれを見届けると、姿勢を正してパソコンに向き直り、電源を落とすべく操作する。
電源が落ちる、その、一瞬。
「――――――！」
脳裏に浮かんだのは、自分が学び舎としている蒼洋学院の南校舎。
それと、不気味に笑う1つの人影。
男なのか、女なのかは判別できなかったが、目深に被ったフードの奥の瞳はそれぞれ違った色をしているのはわかった。
片目が赤味の強い紫、片目が透き通るような深い緑。
射抜かれた、気がした。
「……まさか」
ふっと小さく笑い、吐き捨てるように呟く。
予感のはずがない。自分が見られる未来は、ほんの数瞬先、それも身近な災難ばかりである。
（ママに話してみようかな？）
そう考え、すぐにかぶりを振る。同一の能力を持つ母親に訊いた所で、収穫はなさそうだ。
そこで、ふと別の考えが思いついた。それは唐突過ぎるものだったが、それ以外に良い方法は、今の怜香には思いつかない。
「明日、如月先輩に相談してみよう」
怜香はその考えをはっきりと口に出し、気を取り直して部屋を出た。

「あの、すみません、如月先輩はこのクラスでしょうか？」
ある日の昼休み、怜香は「如月　沙紗」と言う人物を探す為に、

高等部1年A組を覗いていた。とはいえ、中等部3年の彼女とは同じ南校舎で1階上なだけである。
「あぁ、はいはい。如月ちゃん、ご指名ーっ」
「……ご指名って言い方、どうなの？」
おどけた女生徒の声に笑いながら立ち上がったのは、桜色のリボンで長い髪を纏めた少女であった。
「あれっ、いつぞやの」
「はい、姫月です。コンピュータールームで会った」
「憶えてるよ。どうしたのかな」
穏やかで透明な笑みに、怜香は訳もなく照れてしまった。
「あ、あの、ちょっと御相談したいことがあるんですが……」
伴われて廊下に出る間、沙紗に昨晩見た幻の話をする。
沙紗はゆるく握った拳を口元に当て、暫く考えている様子だった。
「……すみません、こんな話しても訳が分からないですよね……」
あまりの反応の悪さに、怜香はしゅん、と俯いた。平穏な学業生活を送るためだけの紛い物の黒髪が、少女の頬を流れて表情を隠す。
「ううん……わからなくないよ。ひょっとしたら、姫月さんは誰かが思い浮かべたイメージを拾ったのかもしれないね」
中庭に面している窓から外を眺めつつ、沙紗は言葉を口にした。
「イメージ……ですか？」
「と、言うより……そうね、思考？　想像？　そんなものじゃないかな。ただ、姫月さんの＜力＞をあたしは知らないから……これはあまり助言にならないと思う」
ごめんね、と沙紗は苦笑した。
「いえ、話を聴いて……頂いただけでも……」
そう言いながら、怜香の視線は既に思考のふちを彷徨（さまよ）い始めている。
しかし、それはぷつんと途切れた。
「怜香ー、話終わった？」

少女が1人、怜香の背中にくっついてきたのだ。
「麻里」
少々呆れた様子で振り向く怜香。
「……あぁ、お友達来たのね。じゃああたし、もう戻るよ。また何かあったらいつでもおいで」
「すいません、先輩」
申し訳なさそうに怜香が会釈すると、沙紗はいいよ、と笑って教室へと向かう。
「……ねぇ、怜香。あの先輩……何か胡散臭くない？　笑った顔が、何だか……」
麻里が怜香にそっと耳打ちした瞬間、出入り口のすぐ前で沙紗の足が止まった。
「……麻里ちゃん、そういうことは人前で言わないのが賢明よ？　聞いたのがあたしで良かったわね」
ちらりと見せた薄い色の瞳は、先程とはうって変わって冷たいものであった。しかしそれは一瞬だけの表情で、すぐに青い髪の少女に引っ張られて教室の中にまぎれる。
「「……」」
怜香が無言のまま息を飲む。急激な印象の変化は、彼女に畏怖を覚えさせるのに充分だったらしい。
「……はは、怖かったん、ですけど……」
場違いに軽い麻里の声は、怜香にはどこかおどけて聞こえた。

P．M．　8：25。
怜香のパソコンが、鈴のような軽やかな音をたててメールの受信を知らせる。
「……誰かしら、このアドレス」
題名は、「Fw：悪い」。
迷惑メールなら即刻削除してやる、などと考えながら、怜香は取り敢えずそれを開いた。

『題名：Ｆｗ：悪い
本文：
＜８時どころか、９時１０時になっても終わらなさそう。
＜という訳なんで、進めないでいてくれると嬉しいんだけどなー。
＜　　Ｋｅｉ

主語がないんだけど、『仕事が』だと思います。
皆、どうする？
サシャ』

「あぁ、サシャさんかぁ」
怜香はほっと息を吐き、返信するべくキーボードを叩く。

『題名：Ｒｅ：Ｆｗ：悪い
本文：
内容の方、了解しました。
同じパーティーなのに違うところから始まるのも可笑しな話だと思うので、
『進めない』に賛成ですね
ｆｒｏｍ　レイ』

内容を二度確かめ、メールフォームの『送信』を押す。
少々簡潔すぎたかな、とも思う。
「……『用件のみで失礼します』くらい入れた方が良かったかしら」
考えてもすでに遅いとわかりつつ、首を傾げてみたりする少女。
他人がどう思っているかはさておき、怜香の中での「魔導師レイ」は、見た目と違って老成している、少々冷めた性格の持ち主だ。
これでもロールプレイをしているつもりである。

本来の自分は、少し甘えん坊で、サックスを吹けることぐらいしか取り得がない女の子だ。周りの評価はさておき、そう本人は思っている。

「Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ」のβ版を見つけたのは、趣味のネットサーフィンをしている時だった。

どこへ行こうかとふらふらしているうちに、偶然見つけた募集の広告。気まぐれに応募したのが当選してしまい、１２番というＩＤをもらった。それが、「レイ」だ。

ゴーグルを媒介にして広がる世界は、怜香に「役割を演じる」（ロールプレイ）という楽しみをもたらした。

驚くほど鮮やかなそこで、「レイ」が初めて出会ったのが、「ナツミ」と名乗る戦士の少女。何でも初めてのものには愛着が湧くものなのか、彼女が別のプレイヤーと知り合いだということを目前で知らしめられた時には嫉妬すら覚えたものだった。

ストーリーにのめり込んで、感情移入する。怜香は比較的その傾向が強い少女だが、これ程までになるとは本人も思ってもみなかった。

ＮＰＣ（ノンプレイヤー・キャラクター）と本物の人間との区別がつかなくなる程とは！

そこまで考え、ふぅっと溜息をつくと、またちりりん…とパソコンがメール受信を知らせる。内容はサシャからの返事だった。

『題名：ＯＫ。
本文：
どうも全員同じ意見みたいだね。
じゃあ、今日はナシにして、また皆の都合が合う時に再開しよう。
それでは、また今度。
サシャ』

何となく、怜香はサシャが苦笑している姿が想像できた。昼間見た姿に想像を重ね、笑みをこぼす。

そこで、ふとある考えが浮かんだ。
向こう――如月沙紗は、私が「レイ」だと知っているのだろうか？
「……知らない、かも」
どう考えても、不確定な否定推測しか思いつかない。
「ま、いっか」
思考に区切りをつけると、怜香はパソコンの電源を落とした。

同日、Ｐ．Ｍ．８：３０。テレビ局の地下控え室。
「おい、調子どうだ？」
「イマイチ……のど飴くれ、のど飴」
「この弁当あんま美味くねぇ……ハズレだったな」
「なぁなぁ、俺のピック知らねー？」
番組収録前、この「Ｅｖｅｒｌａｓｔｉｎｇ　Ｔｒｕｔｈ」の面々はいつもこんな風に騒がしい。唯一、ギターの調弦をしている若い男を除いては。
明度の低いサングラスの奥の眼は、とても迷惑そうに細められている。
「良助、あんまりうるさくしてやんな。チューニング終わったのか？」
皆の調子を見回っていた修也が、ばたばたと走り回ってピックを探す良助に声をかけた。
「んー、さっき圭にしてもらった！」
えっへん！　と胸を張る良助に対し、ずっと弁当に食いついている海璃（かいり）は「自分でやれよな」と呆れてみせる。
「悪ィな、圭。大変だったろ」
修也が眼を向けると、圭――高村　圭一はサングラスをはずして肩を竦めた。
「確かに大変だけどさ……良助にやらせるととんでもないことになりかねないし」
軽く溜息をつく圭一に、苦笑する修也。

「チューニングといえば、孝輝いけてんの？」
「イマイチらしいぞ」
「げぇ……俺嫌だからな、いくら声似てるからってあんな叫びの多い曲の代役するの…いってっ！」
弦を爪弾きながら圭一が嫌そうに言うと、孝輝はのど飴の袋で頭をはたく。
「文句言うなよな。詰まったら頼むぜ」
「嫌だって！　それでプロかよ」
「生意気……」
その時、鋭い音が部屋に響いた。
「……いって……」
先程まで何事もなかった弦に弾かれ、圭一は驚いた表情で指に流れる血を舐めた。
孝輝が軽く溜息をついた。
「だからストリング新しいのにしとけって、修也が言ってたろ」
「した、んだけど……」
ゆらゆらと揺れている弦を見つめながら、自信なさげに言う少年。
少年、である。
涼やかな目元はまだ幼さを残しており、体つきは比較的大柄とはいえ、仕草も声も子供っぽい。
本来ならば、この場にいるのはおかしな話なのだ。圭一の父親、高村　竜也は外科医であり、圭一が１０代という若い身で働く必要はない。
その上、彼は元来愛想を振りまくのは苦手だ。
そんな彼が何故こんな仕事をしているのかと言うと、母親の為、である。
彼女は今、家にいない。５年程前、連絡先だけを残して出ていった。
圭一は、父が母を追い出したと思っている。その後すぐに涼と小夜子が来たからだ。

沙紗を好ましく思うのは、今自分の持っていないものを、彼女が手にしているからだろうか。
「おい、圭」
「あ？」
ぼんやりとしていた圭一を現実に引き戻したのは、修也の呼びかけだった。
「いつまでほっとくんだ、その指」
「指？」
指し示された先を辿ってみる圭一。
「わ」
傷が案外深かったようで、どこまでも血が流れて掌が赤く染まってきている。
「……どおりでジンジンすると思った。洗ってくるよ」
よろりと立ち上がろうとする圭一を、孝輝が「待て待て待て！」と両手で押しとどめた。
「洗ったって傷ふさがってないんじゃ同じ事だろ」
だから治癒魔法でもかけてから行け――と言われていることくらい圭一にもわかった。しかし圭一は治癒を含む水術はからっきし駄目だったりする。
「俺、水術苦手」
「お前それでも天下の蒼洋学院の生徒かよ」
圭一の素直な告白に、孝輝は額を抑えて大げさに頭を振った。
「冗談みたく珍しいよなー。水術って基礎じゃん？」
ソファのせに腰かけた良助が、けらけら笑って言う。
「基礎中の基礎で、水なら創れるんだけどな」
苦笑いで言うと、修也が「まぁ、そういう奴もいるさ」と圭一の頭をくしゃりと撫で、隣に座った。
「ほら、手ェ出せ」
「ん」
圭一の手を、修也の両手が包み込む。

「お前の手、細いなー」
「そうか？」
のんびりと会話をする2人。
治療するためとはいえ、手に手を取る様子は少々異様である。
「……2人共顔が良い分、変に似合ってて怖いよな」
今まで見ているだけだった海璃が呟くと、それを聞きつけた良助が吹き出した。
にわかに騒がしくなる控え室。
その中で、不意にテーブルの上の携帯電話が遠慮がちに音を立てた。
「あ、俺の！メールかな」
ひったくるように電話を取り上げると、予想通りにメールが入っていた。

『件名：件名なし
本文：
みんなＯＫだって。良かったわね。
つぎのＯＦＦがいつになるのか知らないけど、
やりたきゃしっかり仕事してらっしゃい。　Ｓ・Ｋ』

圭一は、メールアドレスを人に教える時、イニシャルを書いてくれるよう頼んでいる。
メッセージ表示画面にアドレスが出ないので、差出人の判別を容易にする為だ。
このメールの署名はＳ・Ｋ――「Ｓａｓｙａ　Ｋｉｓａｒａｇｉ」。待ちわびた沙紗からのものだ。約束の時間までに帰れないと判断し、送っておいたものの返事だった。
返信するべく打ち込もうとした瞬間、ドアが開いてマネージャーが顔を出した。
「皆、もう少しでリハーサルよ。準備は良い？」

「あぁ、マネさんちょっと待って。圭のギター、弦切れちゃったんだ」
海璃は圭一のギターを取り上げ、ドレッサーの椅子に座って調整し始める。
「孝輝、タオル」
「ほい」
修也は孝輝に頼み、孝輝は手近なタオルをミネラルウォーターで濡らして投げ渡す。
「ほら」
「サンキュ」
圭一がそれを受け取って右手を拭うと、携帯電話と共に目の前のテーブルに置き、代わりにサングラスを取り上げた。
携帯電話のディスプレイには、『送信完了』と表示されていた。

『件名：Ｔｈａｎｘ！
本文：
ＯＦＦがわかったらすぐに連絡するよ。
ついでに、明日英語のノート見せてくれー！（笑）　圭一』

１人の女が、どことも知れない小高い丘の上に立っていた。
「酷い嵐ね…」
こぼれ出た言葉は完全な日本語。
しかし、彼女の服装は現代日本人のそれとは全く違っていた。上質の麻布で作られた長衣（ローブ）に、厚手の皮のマント――これは雨風をしのぐ為のものだ――を着用している。
「Ｈａｚｕｋｉ！」
不意に背後から声をかけられ、葉月と呼ばれた女性が振り返った。

「Ｃａｎ ｙｏｕ ｓｅｔ ｕｐ ｙｏｕｒ ｍａｇｉｃ ｃｉｒｃｌｅ ｎｏｗ？（今、魔法陣を敷けるか？）」
黒人の男だ。同じような服装をしているが、流石にズボンも穿いている。
「Ｍａｙｂｅ．Ｂｕｔ ｉｔ ｉｓ ｓｏ ｄａｎｇｅｒｏｕｓ．（多分ね。でもかなり危険よ）」
「Ｙｅａｈ，ｒｉｇｈｔ．Ｂｕｔ ｗｅ ｈａｖｅ ｎｏ ｔｉｍｅ！（あぁ、それはそうだ。だが時間が無い！）」
「Ｈｕｍ．．．（うーん……）」
自分よりもはるかに背の高い男に対しても決して物怖じしない彼女が、痛いところを突かれて顔をしかめた。
確かに時間は無い。が、天候が悪い。
葉月としては、こんな日に結界を張るのは御免こうむりたい。
彼女が契約を結んで眷属としている風竜を呼び出すならば、この状態はこの上もなく良いものだろう。風が強ければ強い程、呼び出しやすい。
だが結界となれば話は別だ。
生まれながらの方陣術士達は、左右どちらかの掌にごく基本的な魔方陣を持っている為、結界の基盤自体はどうとでもなる。問題は符呪の詠唱時だ。風で気が散ったり、声自身が飛ばされてしまうと、結界は非常に弱いものとなってしまう。
「普段ならイメージだけの略式で済ますものを……何でこんな時に限って……」
何故、こんな時に限って嵐なのか。
何故、こんな時に限って詠唱の必要な正式なものでなくてはならないのか。
そして……何故、こんな時に、悪い胸騒ぎがしてならないのか。
「仕方が、ないわね……」
苦々しく舌打ちする葉月。
「Ｒｏｉｄ，ｗｏｕｌｄ ｙｏｕ ｄｏ ｍｅ ａ ｆａｖｏｒ

？（ロイド、頼みがあるんだけど）」
「Ｗｅｌｌ？（何だい？）」
「Ａｓｓｅｍｂｌｅ　ｅｖｅｒｙｏｎｅ　ａｔ　ｔｈｅ　ｇａｔｅ　ａｓ　ｓｏｏｎ　ａｓ　ｐｏｓｓｉｂｌｅ，　ｐｌｅａｓｅ！（出来るだけ早く、皆を門（ゲート）に集めてちょうだい！）」
雷鳴が轟く。
決意を込めた翡翠の瞳は、強い光を受けて淡く輝いた。

所変わって、日本。Ｐ．Ｍ．１１：５２。
ここはポプリポットカンパニー１２階、第一開発室。
如月理彩は、今日も今日とていつものように、残業に力を入れていた。
「如月主任、いつまでやるんですか？」
斜め後ろで雑務に追われている後輩が、泣きそうな声を上げた。
「つべこべ言わない！　魔方陣の数値はチェックし終わったの？」
「まだです……多すぎますよ」
「多いって、主要なものは高々２桁かける４の神殿１３個分でしょ。後はそれぞれの地域で数値確認すればいいんだし」
「それですよ、それ！」
こともなげに言う理彩へ、まだ少年のような後輩はびしっと指を突き出した。
「その数値確認が多すぎるんですっ」
サイズが合わないのかすぐずれる眼鏡を直しながら、その他にも不平を述べる青年。
その攻撃に片耳をふさぎながら、理彩は数値確認を手伝ってやるためにディスプレイへと目を向けた。
「……ちょっと、宵樹君。ちょっと」
「何ですか」
「エンネル共和国の５２番地、何かおかしいわよ」

その一言に気を引かれたか、宵樹は理彩の背後から手元を覗き込んだ。
「どこです？」
「これこれ」
理彩の指が、秩序立った周囲とは明らかに違うものを差してみせる。
全くもって、デタラメなのだ。
しかし宵樹は、指し示されたディスプレイではなく理彩の行動の方に首を傾げた。
「だから、どこですか」
「……」
理彩は頭痛を押さえるかのように、額に手を当て溜息をついた。
「言わなかったかしら？　私。５０番以上の番地は神殿だ、って」
「あぁ！　すぐに直します。」
ぱちん、と指を打ち鳴らし、早速デスクに向き直る青年。
「便りにしてるんだから、しっかりしてよね……」
少々呆れ気味に言うと、理彩は自分のデスクに置かれているナイフを手に取った。
目の前でゆらゆらと振る。
そして、後輩が死角になっているのを好いことに、デスク３つと通路分離れた壁に張り付いているダーツの的へと投げつけた。
タン！　という軽い音と共に、ナイフは見事に中心へと命中する。
慣れているのか、その音にも宵樹は動じない。
（流石に慣れたか）
つまらなさそうに、デスク上のダーツ・ナイフを全部取り上げる理彩。
少々乱雑に混ぜてから、１本を手に取り構える。
じぃっと的を見つめて……。
「うわあぁぁああぁあ！！」
だが、ナイフを投げる前に集中は途切れた。

振り向くと、宵樹が使っていたパソコンのディスプレイが異様な光を放っており、当の本人は「悪魔」というわかりやすいイメージを持たされたモノに襲われていた。

「く、来るなあぁっ！」

派手な音を立てて椅子ごと後ろに倒れ、上ずった声を発して腕を振り回す。

「頭、下げなさい！！」

理彩はそう言うと、立ち上がる勢いすら利用して「悪魔」にナイフを投げつけた。

宵樹の眼前にいたそれの絶命を確かめることなく、己の背後に回ったものへもナイフを飛ばす。

あるものは壁に縫いとめられ、またあるものは床へと叩きつけられる。

しかし、全ては同じように炭の粉のようになり、霧散した。

後に残ったのは理彩が投げたダーツ・ナイフと、「悪魔」達と共に出現した光の球のみ。

その白く淡いはかなげな光は、ゆうるりと理彩と宵樹の周囲を回っている。

「しゅ、主任、これは……？」

「大丈夫、これは平気。空間が安定したら、姿を現すわ」

「でも」

「それより早く、さっきの数値ずらして。私のパソコン、使っていいから」

弾む息を出来るだけ抑えて理彩が言うと、宵樹は慌てて作業に取りかかった。

宵樹のパソコンから、あの異様なまでの強い光が収束する。

「それから……『エンネル共和国南東部にある神殿は、現在トラブルが発生してセーブ機能が利用できません。予めご了承ください』って、ＢＢＳに」

「は、はいっ」

落ち着いた宵樹の行動は素早かった。
その様子を見つめながら、理彩はほどけかけた髪をうざったそうに梳く。
（……小悪魔（インプ）ごときが結界を？　まさか……）
そんなことを考えながら、彼女の目は分解し始めた光球を見守っている。
「上に報告通しますか？　このこと」
作業を終え、宵樹がおっかなびっくり上司に向き直ると、理彩は小さくかぶりを振った。
「しなくていいわ。魔法なんてもうないと思ってる、理論バカばっかりだから」
「そうですか。……僕も、理論バカかも知れませんよ？」
宵樹は相手が自分を見ていないと知りながら、そんな質問を投げかけた。
理彩は横目でちらりと見る。
「……貴方は、蒼洋の出身でしょ。別の世界の存在は信じてなくても、魔法の存在は信じてる」
その答えに、青年は薄く笑う。
ふと目をやると、光球は5つになっていた。
「何か、生きものみたいですね。5つって」
目を細める理彩。
その目前で光は収束し、瞬く間に2人の見覚えある形になった。
街中にいれば嫌というほど見るもの。
「生きものそのものよ。あれは」
それは、壮年の女性であった。

蒼洋市郊外、水野総合病院。
ナースステーションで、1人の男が夜勤の女性看護師達と雑談していた。
「高村先生、外線からコールですよ」

会話を途切れさせたのは、電話に出た若い看護師。
「僕に？」
「はい。何でも急ぎの用事だって、女の人の声で」
その言葉に、高村竜也はぴくりと反応を示した。
「ひょっとして、かっわいい女のコからのコールかなぁ？」
おどけて言う様子に、看護師達はおかしそうに笑う。
自らも笑いをこぼしつつ、竜也はカウンターの外から手を伸ばして受話器を受け取った。
「ハァイ、ご指名受けましたー♪……って何だ、りっちゃんじゃないか。どうしたの……え、今すぐ？　僕今日当直――何だって？」
竜也の顔からおどけた雰囲気が消え、代わりに緊張感が満ちる。
「うん……わかった。飛ばせば１５分程度でそっちに着くと思う。下に降りててくれる？　……ＯＫ、じゃあ後で」
がちゃり、と受話器を置く竜也に、看護師の１人が「どうしたんですか？」と問う。
「友達からだったよ。僕が医者だからってコキ使ってくれちゃってねぇ……。あぁ、橘ちゃんに声かけておくから、急患来ちゃったらそっち回しといて」
「あ、はい」
頼むよ、とウインクを投げかけ、竜也は足早に廊下の奥へと消えていった。
「はぁ～、相変わらずカッコ良いわ、高村先生……」
看護師の１人が、目を潤ませうっとりと呟く。
「でも軽いのは玉に瑕ってやつじゃない？」
「その割には浮いた噂聞きませんよね。一度でも恋バナ、聞きました？」
「あ、聞かないかも」
仕事中であるとは言っても、そこは女の子ばかりでおまけに夜勤。暇な上に口うるさい婦長がいないとなれば、彼女達の会話はエスカレートし、院内の恋愛話へとなだれ込んだ。

「で、中山先生が……」
「きゃー、本当？」
「聞かせて聞かせて！」
誰が聞く訳でもないのに、自然と小さな円陣になってこそこそと話す。
きゃあきゃあとはしゃいでいる内に、不意に1人が「あ！」と立ち上がった。
「何よ、ナースコール？」
「あ、違う違う。そうじゃなくってさ、ちょっと皆に聞こうと思ってたこと思い出して……6時のニュース、見た？」
座り直して首をかしげると、一番若い女の子が「はいはいっ」と手を挙げた。
「先輩が言いたいの、アレでしょ。この辺りの竹林で見つかったっていうハスキー犬」
「そうそう！」
「自由犬くらいどこにだっているでしょー」
脱力したような表情を見せるのは、竜也びいきの女性。
「それが妙なんです」
「へー、どんな？」
少し崩れ気味になっていた円陣が、また小さくまとまる。
「……何か、首輪って言うより首飾りって感じなのをつけていたんですよ」
「……それって誰かのイタズラなんじゃないの？」
女の子がかぶりを振る。
「そこらへんで、ハスキー犬買っている人なんて1人もいなかったんですよ」
その一言で、ナースステーションは異様な空気で満たされた。
瞬間、図ったかのようにナースコールが鳴り響き、看護師達が日常に引き戻される。
奇妙な犬のことはそれきり、口の端にすら上ることはなかった。

「主任……この人、本当に大丈夫なんですか？」
第一開発室付属の仮眠室で、宵樹は不安そうに上司に尋ねた。
「どうだかね、私は医者じゃないから……」
ベッドサイドの椅子に腰かけた理彩はそう言うと、手首を返して時計を見る。
「……医者といえば、もうそろそろよね……」
ゆっくりとした動作で立ち上がる理彩。
「主任？」
「迎えに行くだけよ。下まで」
彼女がドアノブに手をかけようとした瞬間、くるりとノブが回ってドアが開く。
「その必要、ないよ」
「あら」
ドアの影から姿を現したのは、理彩が呼び出した高村竜也その人。
「予想以上に早かったわね」
「そりゃあ、友達に急いで来いって言われれば来ますよ。往診してなくてもね」
軽い科白のわりに、竜也の表情は硬い。
「患者はどこだい？」
「そこに」
理彩はベッドに横たわる女性を指してみせる。
視点をそちらへ移した竜也は、訝しそうに眉をひそめ、次いで肩を竦めた。
「……どうも妙なことばかりだな、今日は……」
「え？」
宵樹が不思議そうに首を傾げた。
「来る途中でさ、おかしなモノ見たんだよね、実は……」
身支度を整え愛車に乗り込み、竜也の苦手なネオンサインだらけ

の町をかけていた時。
黄色になった信号を抜けてしまおうとアクセルを踏み込みかけたその瞬間、何かが信号内に飛び込んできて、竜也はとっさにブレーキを踏みつけた。
軽く何度か咳き込み、顔を上げる。
飛び込んだのは若者だろう、少し説教してやろうか……と考えていた竜也は、呆然とした。
目に入ったのは、天然の隈取りも美しい狼。
体毛が白っぽいせいか燐光を放っているように見える。
じっとこちらを見ているその目は、氷のような薄い青。
しかし何よりも目を引いたのは、その首にかかっている首飾りだ。
首輪、ではない。短い円筒型だろうそれはきらびやかで、拘束具には程遠い。
しばし見つめ合った後、狼は相手に興味をなくしたかのように横道の暗がりへ消えていった。

「……てな訳」
説明終わり、と竜也は両手を広げてみせた。
「何ですか、その狼」
「わかったら苦労しないでしょ、宵樹君」
少々お間抜けな問いを投げかけた宵樹に、理彩がすかさず突っ込みを入れる。
２人のやり取りに笑う竜也。その視界の端が、不意に動いた。とっさにそちらへと焦点を合わせてみると、横向きの安静体位から起き上がろうとしている女性の姿。
「葉月」
竜也は女性に歩み寄ると、そっと体を支える。
２人は一瞬目を合わせて微笑み合い、理彩へと向き直った。
「大丈夫なの？」
理彩が心配そうな顔を見せる。

「私はね。だけど……」
葉月と呼ばれた女性は、気まずそうに目を伏せた。
「……ごめんなさい、理彩。せっかく、『あの時』無理言って手伝ってもらったのに……」
重苦しい沈黙が流れる。
それを破ったのは竜也だった。
「結界が……壊れた？　＜真美＞（ティフェレント）の？」
無言で頷く葉月。
「『壊れた』、というより『壊された』が正解かもしれないわね」
苦々しく理彩が言う。
「あの……主任、それって、つまり……？」
宵樹は不安げに理彩に訊いた。
「つまり？　つまりはね……」
理彩は青年に対し、流し目でもするかのような表情を見せる。
そして、淡々と言った。
「世界は破滅の危機に陥っちゃったってことよ」

Ｐｒｏｇｒａｍ　７，　ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　７　異変（後書き）

初稿は２００４年3月１９日が最終。当時、受験生だったらしいです（笑）。
そういや一度、予備校にこれ書いてるノート忘れて帰ったことがある……ｗｗ
なお、作中の英語を信じちゃだめですよ！　私は英語が非常に苦手です。↑

圭一がメールに使った「Ｔｈａｎｘ」というのは、「Ｔｈａｎｋｙｏｕ」→「Ｔｈａｎｋｓ」をさらに略したものです。携帯電話でのメールというものが出てきた当初、字数制限をクリアするために出てきたそうな。昔は半角１２８文字とかだったもんな。

Ｐｒｏｇｒａｍ　８　強くなりたい！

ＭＭＯＲＰＧ（多人数型オンラインロールプレイングゲーム）において、いつも同じ相手とパーティーを組んでいる人にとっての最大の問題は、パーティーメンバーの事情にあれこれと予定を左右されてしまうことである。

ジュンは今、たった１人でフィールドをうろついていた。

と言っても、召喚士である彼のステータスは推して知るべし。レベルアップを図りたくとも、仲間がいないのではすぐにゲームオーバーになってしまうのが落ちである。

そんな現状を、彼は情けなく思っていた。

パーティーメンバー中、「魔法遣い」は自分を含めて４人。

そのうちサシャは例外の前線キャラだ。魔法剣士である彼女は、剣技も魔法も軽やかに扱う。最も、火を使うことだけは出来ないのだが。面と向かって訊いてみたことは無いが、どうもリアル事情が絡んでいるらしい。

ケイは厳密にいうと魔法遣いではなく、サシャと同じ魔導戦士だ。方陣術という特殊魔法を駆使して戦う。その反面、戦士として接近戦をするには攻撃力が低いので、サポート・防御専門といった感じである。

レイは正真正銘の魔導士で、ステータスはパーティー中最低だ。しかし、回復も属性魔法も得意なのでどんな状況にも対応できるし、何より彼女の頭の中には知識がたっぷりと詰まっている。

「役立たずは僕だけか……」

神殿を回るたびに増えていったカードを弄びながら、少年はぽつりと呟いた。

「こんにちは、ジュン」

不意にかけられた声に振り向くと、そこには息を弾ませ、笑みを浮かべた少女の姿。

「レイ？」
「良かった、追いついて。ログインしてるのに気付いて慌てて来たんですよ」
ふう、と軽く息をつくレイ。
ジュンはその言葉に、ぱちぱちと瞬きした。
「まさか、セーブしたところから走ってきたの？」
「はいっ」
レイはにっこり笑って明るく言う。
「仲間でしょう？　お供させてくださいな」
少女の笑顔とその言葉に、ジュンは笑顔で頷いた。

そして今、2人がいるのは少し前に訪ねた4つの神殿の1つ。
水を司る神殿、＜審判＞（ゲウラー）である。
ここの主は、水天使ジブリール。青みがかった銀髪と水色の瞳を持った、優雅な外見の女性だ。しかし実際は女性と言うより少女に近く、口調は丁寧ながら自分でお茶を入れて勧める程、気さくな性格の持ち主である。
「さて、と」
ようやく互いに一息つき、ジブリールは2人の客と対面するようにテーブルについた。
「一体、どうなさったのかしら？　前にお目にかかったときには6人いらしたと思うのですけれど」
「うん、確かに6人だよ。今日はちょっと聞きたいことがあって……」
ジュンがことの次第を話すと、ジブリールは「成程」と頷き、カップを降ろした。
「では、召喚士というものについて説明しますわね」
彼女の説明によると、召喚士は魔導士に分類される魔法遣いの一種であり、カードから魔法を取り出して戦うのだという。

「で、ジュン様が持っていらっしゃるのがそのカードなのですわ」
話をしている間にジュンがテーブルの上に広げた数々のカードをさして、ジブリールが言う。
「数の書かれたカードと、絵の描かれたカードがありますでしょ？」
２人が頷く。
その様子を見て、ジブリールはすっと一枚の絵札を取り上げた。
「これは『運命の輪』（ホイール・オブ・フォーチュン）。数のカードは３回程使うと魔力が空っぽになってしまうのですけれど、これらのような絵札は神殿の力を引き出して使うので、何回でも使えますの。……術士の精神力と引き換えに、ですけれど」
「精神力…」
不安そうにレイが呟く。
ジブリールは安心させるように、にっこりと笑ってみせた。
「でも、貴方がたなら大丈夫。心配ありませんわ。
さぁさ、もう皆様の所へお帰りになった方がよろしいですわ。本当はもっとお話ししたいのですけど……暗くなる前に戻らないと、道を見失ってしまいますもの」

さて、２人が神殿を後にしておよそ１時間。
仲間たちのセーブポイントへと戻るために、ジュンとレイは地図を頼りに森を歩いていた。
「今、この状態で敵が出てきたら、即アウトだよねー」
「い、嫌なこと言わないでくださいよ」
ジュンの言葉に、レイが金糸を揺らして応じる。
しかし、彼女がどれ程嫌がろうと、それが的を射ているのは間違いない。仲間の戦士達は、今ここにいないのだから。
２人にとっての唯一の救いは、このゲーム〈Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ〉のエンカウント率が、他のゲームに比べて低く、めったにモンスターが出てこないということだった。
（ど、どうか元の場所に戻るまで、何も出てきませんように……）

切実に願っても、時として幸運の女神は期待を裏切る。少年たちの祈りもむなしく、目の前の草むらが揺れた。

用心の為に身構える間もなく現れたのは、巨大な熊だ。

レイはひきつけを起こしたかのように息を詰まらせると、ジュンの背後に半身を隠す。

ジュンはふと、彼女のその行動に違和感を覚えた。前衛にこそ出ないが、いつも気丈に、的確に判断を下して戦う彼女が、どうして自分の背後に隠れるのか。

しかし混乱したのは一瞬のことで、すぐに解りやすい一番の理由に思い至った。

単純明快、怖いからだ。

いつもなら気配を察してサシャが飛び出すので、怖いと認識する時間がない。

そう理解した瞬間、ジュンの胸の中にある使命感が湧き起こった。

レイを庇う為に左手を広げ、持ちっ放しのメイスを相手に向けてかかげる。

出来れば逃げを打ちたい、とジュンは思う。勝ち目がないからだ。

足元の砂が、じりっと音を立てる。

その音に気を引かれたか、熊が両手を振り上げ、吠えた。

スローモーションのように、鋭い爪を持つ手が2人に向かってくる。

逃げたいのに、ジュンはそれを凝視したまま凍りついたように動けなかった。

「頭を下げなさい！」

唐突に、背後から知らない声が飛んできた。

ジュンは反射的にレイに飛びつき、引き倒す。

その頭上を通過して、小振りの剣が熊の肩に突き立つ。

うおおん、と熊が吠えた。

次いで飛び出したのは、すらりとした体付きの剣士。

引き抜きざまのその剣技は、サシャの力任せに振り回すようなそ

れとは違い、ずっと洗練されていて力強い。
「すぐに離れて、早く！」
剣士の鋭い言葉は、ジュンを奮い立たせた。
しかし、レイの方はそうもいかなかった。立ち上がれという少年の再三の促しにも応じない。
青年は2人の様子を見て取ると、渾身の力を込めて熊の腹を蹴り飛ばした。
熊がひるんだ隙に彼は2人の許へと駆け寄り、レイの細腰を両手で抱え上げる。我に返ったレイの悲鳴もお構いなしだ。
「走って！」
剣士の先導について走り出すが、体勢を整えた巨熊はなおも標的をジュン達3人に定め、追いかけてくる。
すぐにジュンの息は上がってきた。
（まだ追いかけてくる……！）
召喚士の体力は、剣士のそれに比べて格段に劣る。体力値もさることながら、何よりも速度が違いすぎるのだ。
対する熊の体力は、でたらめにある。
「くっ、埒があかないっ……」
剣士は舌打ちした。
「レイっ！　あいつの弱点、わかる？！」
とっさにジュンは叫んだ。
「えっ？」
「早くっ！」
きょとんとする少女に、ジュンは怒鳴り声に近い声を上げた。
「え……っと、火です、炎です！　動物だからぁ！」
慌てて、舌を噛みそうになりながらレイが応える。
「サンキュ！」
瞬間、ざざぁっと足を滑らせてジュンが止まった。
「ジュン？！」
「何をっ……」

数秒のタイムラグは、彼と2人の間に距離を作り上げてしまった。
剣士は咄嗟に少女を置いて反転する。
彼と熊と、少年の許に到達するのはどちらが早いか。
対して、危機にあるはずのジュンは平静だった。
目を閉じ、呼吸を整え、メイスをかざして呪文を唱える。
「……すべてを焼き尽くす、炎の精霊よ……」
本来、魔法を使役するのに、イメージは必要でも呪文は必要ない。
それは現実世界でもこの「世界」でも同じことだ。召喚士も例外ではない。
しかしジュンは、木谷　潤一は、幼い頃にイメージ構成の足がかりとして教えられたそのやり方を好んで使っていた。
火術特有の熱気が、ジュンの周りに集まってくる。
さぁ解放してやろう、と目を空けた瞬間、自分の鞄が光を放っているのに気が付いた。正確には、その中身か。
引っ張り出してみれば、それは1枚のカード。
「……あぁ、なるほど」
「なるほど、じゃない！」
何とか先に辿り着いた剣士が、暢気に納得しているジュンに怒鳴る。
「一体何なんですか、こんなときに」
慌てる剣士に、ジュンはにっと笑って見せた。
「こんな時だから、だよ」
もう相手との距離はいくらもない。
ジュンは体を開き気味にして、カードを目の前にかざした。
「炎の精霊よ、僕らの敵を焼きつくせ！」
彼が高らかに宣言すると、3人の視界が炎に染まった。

「ジュンくん、レイちゃん！」
2人の小さな冒険は、仲間達との合流の後、サシャからのお説教で終わりを告げた。

矢継ぎ早に怒られて耳をふさぎたくもなったが、ジュンもレイも決してしようとはしなかった。心配されていたのが、よくわかったからだ。

「はぁ……それにしても、2人とも無事でよかったよ」

ひとしきりお説教が終わると、サシャはそう言って優しく微笑った。

「もう無茶しないね」

「はぁい」

「もうしませーん」

2人が頭を下げると、サシャは満足そうに頷く。

「これで一件落着、ですね」

年長組と話をしていた剣士が、3人の許に歩み寄ってきた。

「本当にありがとうございました、えと……ナイト、さん」

呼びにくそうにしているサシャに、剣士が笑いかける。

「いえ……困ったときはお互い様というでしょう？　それに、友達の手伝いをしただけですよ、俺は」

サシャの紹介によると、彼はカズキのクラスメイトで、元々2人でβ版をプレイするつもりだったそうだ。人脈とはわかり難いものである。

「結構暇してますから、また何かあったら好きに呼んでくださいね」

サシャには聞こえないように言うと、ナイトはジュンとレイにウインクする。

かくして、ジュンとレイの2人は強力な仲間を得たのであった。

Ｐｒｏｇｒａｍ　８，　ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　８　強くなりたい！（後書き）

次の章の挿絵（？）に２００４年１１月の記述があるところからすると、初稿は２００４年の半ばあたりと推測。↑おい作者ｗｗｗ

ちなみに。

「サシャの力任せに振り回すような」剣技＝アクションゲームで言う○ボタン連打。

「洗練されていて力強い」剣技＝アビリティ使用。

何故サシャがアビリティを使いこなせていないのかは今後わかります。

Program 9 daily life, prescious time

満月が南の空高くに昇る頃、如月　沙紗はふと目を覚ました。
別に何があった訳でもない。外も、とても静かだ。
2，3度目瞬きをしても、眠気がやってくる様子はない。
寝る前にタイマーをかけた暖房はすでに冷えており、体が温まったから目が覚めた、ということでもないらしい。
沙紗は小さく吐息を零すと、完全に目が覚めてしまうのを承知で身を起こした。
いつもと比べれば大分と寝足りないはずなのに、不快感はない。むしろ、奇妙なほどにすっきりとしている。
そっとベッドを抜け出すと、沙紗は静かにカーテンを開けた。
蒼洋市は学園都市なので、夜の明かりが少ない。
満月は影をつくり出すほど明るく輝いていた。
自然と、口元に笑みが浮かぶ。
沙紗は、晴れた満月の夜が大のお気に入りだ。こんな夜は、寒くても月光浴に出かける価値がある、と思う。
きっと、何かきっかけがあれば、彼女は解き放たれた小鳥のように自由に生きていくのだろう。それこそ、真夜中に出かけることもいとわないような。
それが、彼女の危うさだった。
きっかけがないからこそ、彼女は積極的に生きることも自分を傷付けることもしない。
別の意味で、沙紗は刹那的な少女だった。
何もなければ、「いつも」の毎日を繰り返す。
ただ、今日は偶然窓の外にきっかけが転がっていた。
月影に浮かぶ、その姿。
ふとこちらを見上げたその顔は、高村　圭一だった。
（……何で?!）

帰宅中か何かで、歩いてる最中だったのだろう。その少年と少女の視線が絡み合った瞬間、お互いに目を丸くして固まってしまった。
沙紗は思わず窓の鍵を開け、半分程開いて身を乗り出した。
部屋が暖かかったせいか、冬の夜気に体が震える。
そんな沙紗の行動に、圭一は慌てて手を伸ばした。実際、どうやってとしても全然届かないので全く持って意味がないのだが。
「……」
「……」
気まずい沈黙。
そのうち、どちらともなく笑い出した。沙紗は窓枠にもたれ込み、圭一はギターケースを抱えて。
「何でここにいるのよー」
「練習の帰り。沙紗は何で起きてんの」
「何でかな」
笑って首を傾げると、圭一は「何だそれ」と笑う。
「ねぇ、圭一くん。時間ある？」
甘えるような沙紗の声。
今度は圭一が首を傾げた。
「あるけど？」
「本当？　ちょっと待ってて」
沙紗は窓から引っ込むと、パジャマの上からふかふかのセーター、更にコートを着込んだ。足にはしっかりと厚めの靴下を履く。
音を立てないようにこっそりと階下のキッチンへ入り、ポットのお湯でココアを2つ作ると、突っ掛け代わりにショートブーツへと足を突っ込んで外に出てきた。
先程とは違う視点の高さ。その世界に、圭一はいる。
「お疲れ様」
湯気の立つマグカップを差し出す沙紗。
「……サンキュ」
圭一はとまどい気味に謝意を述べると、そっと両手でマグカップ

を受け取った。
ひと口飲んで、ふっと微笑む。
「あったかいな」
沙紗は嬉しそうな笑顔を見せると、自分もカップに口をつけた。
お互いに無言だ。
だが、沙紗はそれで良かった。
彼女にとって、この時間こそが大切なものだったから。
未だ恋を知らず、圭一の想いも理解していない沙紗には、これだけで充分だった。

休み明けの、寒い朝。
一段と冷え込んだ通学路を、沙紗はせっせと歩いていた。
コンディションはばっちり、冬休みの宿題も完璧。
なのに何故億劫そうに急いでいるのかといえば、単に雪が降るほど寒いからだ。
暖房馴れした体には、少々辛い。
それにもう1つ、沙紗には気に食わないことがあった。
「おはよ、サシィ」
信号を渡ろうという瞬間、ちょうど追いついた夏美が声をかけた。
そのまま何気なく肩を叩く。
「……」
反応が無い。
「……サシィ？」
夏美が覗き込もうとすると、沙紗は呼応するようにそっぽを向いてしまった。
もう少し追ってみる。
沙紗は不本意そうに顔をしかめながら、マフラーを引き上げた。

……鼻の上まで。
「……よっぽど寒いのね、今日は」
「ほっといてちょうだい」
恥ずかしさに目元を赤らめる少女の鼻は、ほんのり紅くなっていた。

「おっはよぉ、沙紗チン！」
ふわふわとした青い髪を2つくくりにした少女が、元気良く沙紗の背をたたく。
「おはよ、雫」
いつものこと、と沙紗は振り返って応えた。
次いで意地悪く目を細める。
「宿題やってきた？」
それに対し、雫は「あうっ」と両手で胸を押さえた。
「英語と数学、最後の方見せてぇ」
「はいはい、演習のとこね」
はしゃいでいるうちに、2人は自分達の教室へと辿り着く。
別段早いわけでなく、むしろぎりぎりだ。
「おはよ」
教室にはたくさんのクラスメイトがいる……はずだった。
「……あれ？」
部屋中を見渡しても、クラスの半数ほどしかいない。
（皆遅れてるのかな？）
そう重いながら、沙紗は指先で鼻の頭をこすった。
「おはよー、沙紗、雫」
「おはよぉ」
「おはよ、梓。ねぇ、まだあたしの鼻紅い？」
その言葉に、席を立った梓は呆れたように溜息をついた。
「能天気ねぇ」

沙紗と雫は、きょとんと顔を見合わせる。
梓はもう1つ溜息をついた。
「流行ってるんだって、インフルエンザ。それもタチの悪いのが」
そこで初めて、沙紗は顔をしかめる。
「どのぐらい悪いの」
「んー、高熱に関節痛はザラらしいわよ?あんた達かかっちゃったら大変よね」
苦笑いの混じる梓の言葉に、沙紗と雫の二人は揃って肩をすくめた。
その瞬間、沙紗の薄い色の瞳に何かが映る。
(ん……?)
認識出来たのは、目瞬きするまでのほんの数瞬。
窓から見えるのは、学院の敷地のほぼ中心にある図書館棟。
その上に、背の高い影。
恐らくは人間、である——立位置の異様さを除けば。
(図書館の屋上へは、ドアがなくて上がれないのに……)
何者だろうか。そもそも人間なのか。
見極めようと——感じ取ろうと——目瞬きをこらえて意識を集中させたその瞬間。
「沙紗?」
ぽん、と肩を軽く叩かれ、沙紗の心臓が小さく跳ねる。同時にぱちっと目瞬きをしてしまい、気は散り散りになってしまった。
呆然とする沙紗。
「どうしたの、沙紗チン。何かあった?」
「……」
雫が視線の先を追っても、そこには何もない。灰色の空と図書館棟だけだ。
(もう何もない……見間違い?)
「ごめん、何でもないみたい」
2人に向き直り、沙紗はぺろっと舌を出して謝った。

ほんの一瞬感じたことをそのまま口にして、怖がらせたくはなかったからだ。
今見た人影が、人間ではありえない気配を持っていた、ということを。

ところで、蒼洋学院における移動教室の授業は、何かと大変である。
「ねぇ、次どこだっけ？」
「東校舎の２０３」
「あ、コンピュータールームかぁ」
この３人含む１年Ａ組の面々は、次の授業の為に校舎を移らなければならなかった。
「寒―いっ！」
「耐えろ、雫！」
目の前のやり取りに笑いながら、沙紗は吹きさらしの渡り廊下を歩く。
渡り廊下には数人の生徒達がいた。必然、すれ違う人々もいる。
「……あ、高村さん」
一人の男子生徒とすれ違った瞬間、梓が小さく声を上げて振り返った。
「え？」
「ほら、さっきのアーガイルチェックのベスト着た人」
そう言われた所で、今や沙紗達から見えているのは背中だ。正面に付いているはずのベストの模様など、わかるわけがない。
「本当に高村だったのぉ？」
雫がいぶかしむ。対する梓は何とか信じさせようと躍起になり始めた。
「はいはいはい、授業に遅れるよ」
沙紗は呆れたように手を打って２人を止める。
「絶対高村さんだって！見間違えるはずないもん！」

「わかったから。ほら進む！」
沙紗がおざなりの肯定をすると、梓は不満げながらも歩き始めた。
雫は雫で不満げだ。
「本当に高村だったらさぁ、沙紗チンに声かけると思うけど……」
沙紗は、隣でぶつぶつ言う雫に賛成だった。
知り合いとすれ違う時、圭一はよっぽど急いでない限り軽く声をかける。
それに加え、沙紗にとってはもう1つ疑問があった。
彼の好みの問題である。
（……アーガイルチェックなんて、着たかな？）
沙紗の覚えている限りでは、圭一はアーガイルチェックの服を着たことがない。
ただ、これは9歳までと去年からの記憶でしかないので、知らないことは大いにありうる。
（……まぁ、良いか。きっと急いでたんだろうし……）
疑問を素直に打ち消して、沙紗は教室へと急いだ。

東校舎、生徒会室。
場違いなほど鮮やかな蜂蜜色の髪をした少年が、ふと目を覚ました。
「ようやく起きたか、風助」
本年度の部屋の主、結城　国彦が呆れ気味に声をかける。
「きゃはは、起きただけすごいじゃないのさ。ねぇ、愁？」
「そうかもね」
それぞれの仕事をしていた春崎　麗（うらら）と相沢　愁が、国彦の言葉に揃って笑い出した。
国彦は頭を振り、小さく溜息をついた。
「でも、どうして起きたんだい、風助？　いつもは僕らが起こさな

きゃ起きないのに」
「んん～……」
愁の問いかけに、平泉　風助は寝惚け眼をごしごしとこする。
「……何か、聞こえた」
「何が」
「風の音……かな。すごく涼しげな」
「そう」
愁が頷く。
風助の焦点の合わない空色の瞳が、すうっと国彦の方を向いた。
「くーちゃん」
「……何だ」
気に入らない呼び方に少しだけ眉をひそめながら、国彦は首を傾げる。
「危ないよ。人間じゃない何かがいる」
ぴくり、と国彦の眉が動き、麗と愁の表情が凍る。
暫しの沈黙。
それを破ったのは、頭を掻きながら盛大に溜息をついた麗だった。
「ったく、最近は平和だったのにな～」
「仕方ないよ……いつかはこうなるって、最初からわかってたことじゃないか」
「そうだけどさぁ」
愁の取り成しにも、麗の不満そうな様子は変わらない。
「このまま一生終わると、思ってたのに……」
寂しそうな少女の呟きが、冷たくなった部屋の空気に溶ける。
「……嘆いたところで始まらない」
感情を押し殺した声で国彦が言った。
「……そうだね。まずは出来ることから、ってところかな」
愁の言葉で、空気がふっと軽くなる。
「あぁ。無駄なあがきになるかもしれないが、やらないで後悔するよりずっと良い」

国彦がそう言うと、神妙にしていた風助と麗の顔に笑みが戻ってくる。
「そうだよねっ。アタシ達がやらないで誰がここを守るんだっ！」
「そうだそうだっ！」
一転して明るくなった麗の声に、風助が迎合する。
室内が一気に騒がしくなった。
「ところで風助」
水を差したのは沈着冷静な国彦の声。
「んー、何？」
「『涼しげな風』の方は、人間なのか？」
「おー、多分ね。女の子じゃないかな」
元気良く頷く風助に、国彦は少し考え込む仕草を見せた。
「……名前は……、誰だかわかるか？」
「流石にわかんね。でも、かなり近いよ」
「そうか」
それきり黙りこむ国彦を、3人は少々騒がしくしながら見守っていた。
門番（ゲートキーパー）としての国彦が現在最良の判断を下すのは、もう少し後になりそうだった　。

「沙紗チーン、最近どうしたのぉ？暗いよぉ？」
机にべたりと伏していた沙紗は、上から降ってきた雫の声に顔を上げた。
「……そんなに暗い？」
「そりゃもう」
沙紗がのろのろと身を起こすと、雫は隣の梓の机に腰かける。
「で、どったの？」
「言うほど何があったわけでもないんだけどねぇ……」
椅子の背に体を預けて頭を掻く沙紗。

静観していた梓が、きゃはは、と笑い声をあげた。
「あれでしょ、最近高村さんとまともに逢ってないから。エンカウント率低いもんねー」
「うーるーさーい」
すかさず沙紗のデコピンが飛び、雫がにやつく。
「あ、図星なんだー」
「むぅ……」
他愛ないおしゃべり。
それに割って入ったのは、ちりりん、という小さな音だった。
「何？　今の」
「あたしの。メールでしょ」
「ケータイ？　沙紗チン持ってたっけ？」
首を傾げる雫の前で沙紗が鞄から引っ張り出したのは、シルバーの薄いノートパソコン。
「……リッチねぇ。最新じゃん」
呆れる梓。
「これよりケータイが欲しかったわよ、あたしは」
マウス代わりのディスプレイポインターを右手の人差し指と中指にはめ、沙紗は触りたそうにして　いる雫の手をぺち、と叩いた。
開いてみれば、見覚えのある携帯電話のアドレス。
「誰？　沙紗チン、誰？」
「圭一くん……」
「えぇっ？！」
勢い良く椅子を蹴り飛ばして立ち上がる梓。
「椅子はちゃんと戻しなさいね」
沙紗はさらりとそう言うと、何食わぬ顔でメールを開いた。
『件名：（Ｎｏ　Ｓｕｂｊｅｃｔ）
本文：
　風邪ひいたんで学校休む
　ノートごめん
』

内容は、たったの2行。無駄書きが多い圭一にしては珍しい。
しかしそれだけに、彼の体調の悪さが見て取れた。
「高村さんが休み……？」
不可解そうに眉をひそめ、腰をおろす梓。
その目の前に突き出されたのは、沙紗の手だった。
「梓、ケータイ貸して」
「へ？」
「早くっ」
「……はいはい」
ころりと手の中に携帯電話が納まると、沙紗はぎこちない手付きで番号を押していく。
梓は不満そうに沙紗を見ていた。
「……何で沙紗が、高村さんの電話番号知ってるんだろ。しかも見る限り、家の番号だし」
「そりゃ、沙紗チンと高村、幼馴染ってヤツだもん。そういうもんでしょ？」
「でも……」
なおも言い募ろうとする梓の横で、不意に沙紗が大きな溜息をついた。
「沙紗？」
「……いない」
「え？」
「あのバカ、学校休んでるくせにっ……まったく！」
沙紗は携帯電話を梓に投げ返すと、いらだった様子で立ち上がった。
「2人とも、ちょっと行くわよ」
「行くってどこに？！」
「……あ、待ってよ！」
さっさと教室を出て行こうとする沙紗を、2人は慌てて追いかける。

向かう先は渡り廊下。その向こうは、男子クラスがある東校舎。
「なーるほど。男子のことは男子に訊こうって、か」
早足で追いつきながら、雫が納得したように拳を掌に打ち付ける。
「急にイキイキしだしたわね、沙紗……」
複雑そうに苦笑いしながら、梓は2人の後を急いだ。

「和己くん！」
「お？」
呼ばれる声に戸口を振り向けば、そこには可愛い後輩にして幼馴染の姿。
「おー、沙紗ちゃん。どうした、そんなに慌てて」
「和己くん、ケータイ。ケータイ貸して！」
「ケータイ？」
早く早く、とせかす少女を目の前に、和己は目を丸くした。
滅多に電話を使わないこの少女が、一体何の目的で使おうというのか。
「ちょい待ち、何で？」
沙紗達が事の顛末を話すと、和己はようやく合点が行った。
「なるほどな、家にいないんでケータイにかけてやろう、と。……ちょっと待ってな」
焦る沙紗の目の前で、和己は携帯電話を開いた。軽く手で制し、どこかへと電話をかける。
少しの間があって……和己の表情がぴくりと動いた。
「……おぅ、圭一。お前今どこにいんだ？　……あぁ？　どこだそれ」
和己は少しの間相手と話してから、沙紗へと電話を差し出した。
さっきまでの勢いはどこへやら、沙紗は恐る恐る受け取った電話を耳に押し当てる。
「……圭一くん？」

『沙紗……？』
相手の――圭一の声は覇気がなく、酷く枯れていた。
沙紗の顔が、心配そうにゆがむ。
「あの、メール見た、んだけど……大丈夫？」
『あんまり良くはないな……っく』
咳き込む声。
『……で？　どうしたんだよ』
「あ、ううん。別に特に何があったワケじゃないんだけど。その……家にいないから、どうしたのか　な、って」
しおらしく話す沙紗。実は不摂生を叱ってやろうかと思っていたことはひとかけらたりとも言わな　い。
『……家に誰もいないんだったら、どこにいたって同じだろ』
小さな、ノイズ混じりの不鮮明な言葉。
しかし人の声を「聞き分ける」沙紗の耳は、それをはっきりと捕らえた。捕らえてしまった。
「え？」
『何でもない』
聞き返しても、もう2度と聞けない。
沙紗は小さく溜息を零した。
「その言い方だと、最近家に帰ってないのね」
『だからどうしたよ。あんたには関係ないだろ』
圭一には珍しい、沙紗への拒絶。
沙紗は枯れた声の中に、ささくれた感情を見た気がした。
「……今から行く。どこにいるか教えて」
『はぁっ？！』
どすんっ。
沙紗の思いがけない言葉に周囲が驚いた中、電話の向こうで何かが落ちる音が響いた。
『痛ぇっ！』
「けっ、圭一くん？！」

どこかからか落ちたらしい。沙紗は慌てて声を荒らげた。
「ちょっ……何、何っ？！」
『落ち着けよ……ベッドから落ちただけだから』
苦笑混じり、咳混じりの声が、少女を宥めにかかる。
「でも」
『大丈夫だから』
「大丈夫じゃないっ」
『……わかった、アドレス教えるから。だから来るのは学校終わってからにしろっ』
「えーっ？！」
……結局その後１０分かけて、沙紗は周りに説得されたのだった。

「よ」
「……ホントに来やがった……」
パジャマにカーディガンを羽織った圭一は、沙紗を出迎えてげんなりしていた。
彼女の手には買い物袋が下がっている。
「なーによ、その言い方。キッチン貸してね」
「好きにしてくれ」
溜息を零す圭一。だが内心、かなり喜んでいた。
何でもかんでも話せる親友ですら連れてきたことのない場所――まぁ所属事務所が借りている部屋だから、当然といえば当然だが――に、今沙紗と２人きり。
男といてはかなりおいしい状況で、しかも彼女は食事を作ってくれるという。
例え味気ない病人食でも美味しく食べられそうだった。
「なぁ、沙紗。何作るの？」
「ん？」

リビングのソファに座り込んで声をかけると、沙紗は肩越しに振り返る。
「おうどんだよ。圭一くん好きでしょ？」
「好き好き、早く食いたいっ」
「はいはい。……まったく、熱があるって割に元気ねぇ」
くすくす笑う沙紗。彼女はそのまま料理に戻ってしまった。
クッションを抱いて待つこと暫し。圭一は暇になってきた。
匂いにつられ、のそりと身を起こす。
「さーしゃ」
「きゃっ」
急にのしかかってきた重みに、沙紗は小さな悲鳴を上げた。
見れば細い肩に、意外と筋肉のついた腕が乗っている。
「……こーら」
精一杯の凄みを効かせて睨んでも、圭一はどこ吹く風。
にやにや笑いながら、華奢な体に腕を絡み付ける。
「良い匂いだな。何、シャンプー？」
「圭一くんっ」
逃げようにも逃げられない。体格も、力も違いすぎる。
「放して」
「何で？」
「何でって……」
人1人の重みに耐えかね、沙紗の膝が砕けて床につく。
圭一は座り込むと、沙紗を膝の上に抱きこんだ。
「あー、沙紗の体温気持ちいー」
「こっ……こらこらこらっ！」
髪に頬をすり寄せてくる圭一に、沙紗は怒鳴る。
「彼女、いるんでしょう？！　知られても知らないから」
圭一の体がびくついた。
次いで、ぎゅうっと腕が締まる。
「……それ、どこで聞いた？」

「え？」
うんざりしたような圭一の声に、沙紗は目をぱちぱちさせる。ゆるんだ腕をずらして見上げれば、声のとおりに嫌そうな顔。
「俺に彼女がいるって話」
「あ、あー……」
沙紗は視線を中空に彷徨わせ、記憶を掘り起こした。
「確か、梓……だったと思う、けど」
告げられた名に、圭一は眉根を寄せる。
「梓って……泉野？　いつかの」
「うん」
「……何部？」
「写真部……だけど？」
その言葉を聞いた瞬間、明らかに少年の顔が引きつった。
「……ってことは新聞部のヤツラかっ！」
勢い込んで立ち上がった彼は、直後に後悔する羽目になった。
高熱からのひどいめまいに、その長身がぐらりと傾ぐ。
沙紗は咄嗟に、圭一を支えようと手を伸ばした。
「バカね、急にたつから。自分が熱出してるの、忘れてたんでしょ」
ゆっくりと、ダイニングの椅子に座らされる圭一。
「情けねー……こんな熱くらいで……」
「こんな熱、じゃないわよ。いつも動き回りすぎなんだから、大人しくしてなさい」
こつん、と小さな音が響く。
見ればテーブルに、水をたたえたコップが置かれていた。
「あーあー、おうどんのびちゃったわよ、きっと。どうする？」
何でもなかったかのような沙紗の声に、圭一は小さく笑う。
「食う」
「食べるの？！」
驚いて振り返る沙紗。
その様子が可愛くて、圭一の頬は更に緩んだ。

「うん、食うよー。好きな人の作ったやつだし」
「……」
幼馴染のさり気ない言葉に、沙紗は目を丸くして固まってしまった。
「沙紗？」
「……彼女、は？」
圭一は苦笑いを零し、目の前のコップを手にする。
「俺が女のコと付き合ってたのって、中学のときの２ヶ月くらいだぜ？　しかもそのコ、こんなイイ　男を平手付きで振ってくれてさぁ……」
おどけた調子で言う圭一に、沙紗は思わず笑いを零した。
「何で振られたの？」
「んー、ただ『好きなコいる』って言っただけ。元々お試し期間で１ヶ月、ってのが延びてただけだ　ったし」
「それじゃあ自業自得じゃない」
あっさりと言う圭一に、笑いながら言う沙紗。校内で騒動があっただろうその時が、自身の帰国し　た時期と重なることを彼女は知らない。
「で、誤解が解けたところで言いたいことがあるんだけど」
「はいはい、なぁに？」
ようやく自分のリズムを取り戻した沙紗が、余裕ぶって髪を手で梳く。
「俺、沙紗のこと好きだ」
「だから？」
「付き合わない？」
圭一が少し身を乗り出す。
沙紗は考えるそぶりを見せ、くるりと背を向けた。
沈黙が、２人の間に訪れる。
やがて圭一が居心地悪そうに背を丸めかけた頃、沙紗が半身をこちらを向けた。

そして、極上の笑顔でこう言った。
「ちょっとの間、考えさせてちょうだい」
少し冷えたダイニングに、温かな湯気が立ち上った。

Ｐｒｏｇｒａｍ　９，　ｃｌｅａｒ！

Program 9 daily life, prescious time

初稿は２００５年４月１９日。
ナチュラルいちゃいちゃを書くのが楽しかったのを覚えてる……（笑）

もうそろそろお気づきだとは思いますが、章タイトルが英語か日本語かは章始まりの描写と連動しています。

Program 10 Dangerous Warning

「おーい、如月ー」
廊下で呼び止められ、沙紗は足を止めて振り返った。
声の主は見知った男子。初等部の頃のクラスメイトで、今は圭一のクラブメイトだ。
「やぁやぁ、相変わらず可愛いなぁ、如月。オレ様惚れちゃいそう」
おどけて格好つける少年の姿に、沙紗はくすくす笑う。
「河上くんも相変わらずね。で、なぁに？」
「うん、あのな？　高村知らね？」
「圭一くん？」
沙紗が聞き返すと、河上少年はうんうんと頷いた。
「なーんかな、朝から見てんだか見てねぇんだかわからないんだ」
彼が言うには、教室にはいないのに廊下や別の教室では見かけたりするのだそうだ。サッカー部の朝練では、「見た気がする」とも言う。
「……何それ」
「わからんだろ？　それで目下高村とお付き合いをしていると言う可憐な姫君から助言を頂こうと思ったわけだよ」
河上お得意の気障な科白に、沙紗は思わず吹き出した。
「まだ付き合ってるワケじゃないんだけどね」
そして、落ち着くために咳払いを1つ。だが頬にはまだ笑いが残っている。
「えっと、結論から言うと見てないです、今日は。昨日も熱残ってたみたいだから、まだ休んでるんだと思ってたんだけど」
「えっ？」
河上が不思議そうに片眉を上げる。
「おっかしいなぁ。高村、昨日チラッと見たぜ？」

「え、来てたの？」
「多分」
えらく頼りない返事だな、と沙紗は思った。
少し考えてから、顔を上げる。
「ちょっと探してみようか。あたしも、ちょっと圭一くんに用があるんだ」
河上もそれに同意し、沙紗は携帯電話を持っていないので、見つかったら最寄りのサッカー部員に伝言することとして、２人は真逆の方向に別れた。

「見つからないなぁ……」
南校舎で圭一が潜り込んでいそうな所――例えば最上階の音楽室や、その更に上の屋上――を探してはみたものの、影も形も見当たらない。
「圭一くんってば、行動範囲広すぎ！　見つからないじゃない！」
「俺がどうしたって？」
焦れて大声を上げた沙紗の背後から、気配もなく探し人の声が届いた。
「！！」
飛び上がらんばかりに驚いて、沙紗は振り返る。
「おはよう」
「……圭一くん……急に声かけないでよ、びっくりするじゃない」
「悪い、悪い」
一瞬詰めた呼吸を整えながら言う沙紗に、少年は悪びれずに笑う。
「で？　どうしたの」
「ん、えっとね……」
沙紗が河上が探していたと言う話をすると、「ふぅん」と気のない返事が返ってきた。
沙紗は眉をひそめた。
「……聞いてたの？」

「聞いてるさ、でも……」
少年が歩を進める。
少女は自然、その廊下の窓際に追い詰められる形となる。
窓枠がかちゃん、と音を立て、沙紗は背後の窓が全開になっていることに気がついた。
「どうだって良いだろ」
その声は耳許で甘く響いた。
ぞくりと、沙紗の体が小さく震える。
（……まるで甘みの強い毒薬のよう……）
そこで、ふとそう思った自身への違和感を覚えた。
（圭一くんが……毒薬？）
普段の彼へ「毒薬」という印象を持ったことは、今まで1度たりとてなかった。
その印象は、瞬く間に相手に対する怯えへと変わってゆく。
「け、いいち……」
「お前が、俺に用があるんだろう？」
笑いを含んだ声。
どうしたのかと問いただす間もなく、少年は沙紗の肩を掴んだ。
そして――。
「誰もいないところで……ゆっくりと聞いてやるよ！」
「――！！」
その手は、少女を6階の窓から突き落とした！

「おー、そこに見えるは我が探し人！」
「河上」
河上少年は、東校舎の4階で探し人を発見した。高等部1年生のホームルームが集まる階層である。
「あれ？　お前もう帰んのか？」
コートにマフラー、片手に鞄、その上でドアに手をかけている圭一の姿に、河上は首を傾げた。

「……今来たばっか」
その声は、まだ少し掠れていた。
「は？　冗談だろ」
「冗談じゃねぇよ。俺マジで今来たんだって」
咳混じりに言う圭一の言葉に、河上は更に首を傾げた。
「……昨日は？」
「昨日？」
「学校来たろ？」
今度は圭一の方が首を傾げる。
「来てないぜ？　昨日は病院で解熱剤打ってもらって、半日寝てたからな」
「はぁっ？！　んじゃオレが見たのは誰だったのよ？」
怒鳴る河上に、圭一は「知るか！」と怒鳴り返し、咳き込んだ。
河上は圭一の背を軽く叩いてやりながら、わざとらしく盛大に溜息をつく。
「まったく、まだカゼ治ってねぇのな。これで何日部活休んだよ？」
「数える気力もないぜ……」
圭一は何度か咳払いをすると、教室へ入って鞄を降ろした。マフラーを外し、しかし席にはつかずにどこかへ行こうとする。
「お？　どこ行くんだ、コート着たまま」
「南校舎」
「おぉっ、麗しの姫君にあいさつか！」
「何だよ姫君って」
「とぼけんなよー」
肘で圭一の脇腹を突付く河上。
圭一の方も、微かによろめきながらやり返す。
そんな風にふざけながら、ついでとばかりに河上が本来の用件を伝えた頃、２人は沙紗の教室の前まで辿り着いた。
「……そういや、今如月どこにいんのかな」
「何だよ急に」

「いやな、お前探すの手伝ってもらったんよ。南校舎うろつくの忍びないからよ」
苦笑いしながら河上が言うと、「あぁ」と納得したように圭一が頷く。
「まぁ、良いんじゃないか？　ちょっと待ってみたら……」
風が吹いた。
圭一が風の元を追うように窓の方を向いたのは、単なる気まぐれだった。
その瞬間、ほんの一瞬。
「！！」
上から落ちてきた少女が、目に映った。

その時、春崎　麗は昼食と休憩を兼ねて校庭のベンチに座っていた。
周囲には、いつも一緒の生徒会メンバーがいる。風助がおどけ、国彦が小突く、といういつもの風景を、麗は愁と共に眺めて笑っていた。
そして、見るともなしに窓の並んだ南校舎を眺めていた。換気のために開け放たれた窓が多く、昼食を食べ終わった風助と麗はその数を数え始めた。
異変が目に入ったのは、その時。
最初に気が付いたのは風助だった。
窓を数える手が止まり、その目が一瞬見開かれる。
国彦が風助の異変に気付き、何事かと確認する前に、愁が校舎に向けて走り出した。
「麗っ！」
振り返った国彦の呼び声に小さく頷き、麗も走り出す。
遅れて国彦達も走る。
麗は走りながら、片手で複雑な印を切っていく。
愁が落ちてくる少女の真下に走り込もうとする。地面との距離は、

もういくらもない！

麗は何としても間に合わなければいけなかった。「蒼」の字を頂くこの場所を、真逆の色で汚すことは許されない。

そして、何よりも……。

（誰一人として死なせるものか、この『場』を預かる者として！）

その想いが、彼女を走らせた。

「風よ、水よ、森羅万象を支える精霊達、我が意を汲みて汝が力を示さんことを！」

印を切り終わり、麗は両手を交差させると、弾かれたように天地を指し示す。

手を延べられた少女の体は一瞬中空に止まり、待ち構えていた愁の腕の中に落ちた。

「愁、離れろ！」

少女を宥める間もなく、愁は国彦の声でその場を飛び退く。

代わりにその場へ降り立った影があった。幾人もの生徒が、悲鳴と共に窓から顔を出す。

ゆらりと立ち上がるその姿に、国彦達が絶句した。

「……高村……？」

少女を降ろして背に庇った愁が、かろうじて掠れた声を絞り出した。

「圭一くん、どうして……」

少女が声を上げた。リボンが解け落ちて豊かな黒髪が流れるままになっており、薄墨色の瞳が恐怖にゆれている。

少年は、その双眸に哀れむような光をたたえ、嘲笑に声を震わせ始める。

「全く、おめでたい娘だな。この姿をしていれば誰であろうと恋しいか」

沙紗が違和感の理由に気付いたのと、少年が方陣術士特有の牙を剥き出しにし、腕を上げて自身の視界を閉ざしたのとどちらが早かったか。

（あの気配……！）

その気配は、いつか図書館棟の屋上に見つけた人影のものと全く同じものだった。

「自己紹介ぐらいしておこうか」

ゆっくりと腕を下ろしていく。

着ていた服は光と溶け、形を変えて瞬時に色づいた。

「オレはベテルギウス。世界の変革をはばむ者だ」

濃緑の長衣（ローブ）に細剣という不釣合いな格好で、緑と紫の色違いの瞳（オッドアイ）を細めて口許を歪める様子は、圭一と似ても似つかない。

顔立ちは驚くほど似通っているというのに。

じりっ、と国彦の足元で砂が鳴いた。

飛び出したのは2人同時。いつになく真剣な顔をした風助は雷を、国彦は視認できる程の冷気を手の内に携え、ベテルギウスと名乗った男に飛びかかった。

対して男は平然と、2人に向かって左手を伸ばした。

ぼおっと、その手の内に不吉な光が集まる。

「オマエ等に用はない。神殿から動けぬ門番（ゲートキーパー）どもにはな！」

警告を発する間すらないまま、＜力＞が吹き荒れた。

「くぁっ！」

「んぐっ！」

風助と国彦の体は簡単に弾き飛ばされ、2人は地面に叩き付けられる。

「国彦、風助！」

麗は2人の名を呼んで駆け寄り、愁は沙紗を庇うために踏み止まった。

「さぁて、目的を果たさせてもらおうか」

鞘走る音も高らかに、ベテルギウスは細剣を構え、疾駆した。

狙いは、ただ1人。

音高く靴を鳴らし、圭一は階段を駆け降りる。長いコートが風をはらみ、うっとうしいことこの上ない。

しかし、速度がゆるむことはない。不安に突き動かされ、気が急いて仕方ないからだ。

（まさか……まさかだよな？）

窓の外の少女の髪には、鮮やかな紅いリボンが結ばれていた。

まさか、彼女ではないか。

その考えを否定できず、圭一は風邪の抜けない身に鞭打って駆けていた。

４階から地上に降りるのには、なかなか時間がかかる。

途中、どこかの階で悲鳴を聞いた。だが構ってなどいられない。

一心不乱に駆け降りて、校庭へと続く昇降口から外へ出た。

瞬間耳鳴りがして、次いで耳をつんざくような金属音が響く。

（今の……沙紗！）

耳鳴りは、風魔術に属する波動術特有の現象だ。術士の絶対数が極端に少ないので、学校と言う狭い範囲なら大体誰だか見当がつく。

予想は、的中していた。

「沈静化」で瞬間的に大気を凍らせ、刃を押しとどめたのだろう少女が、両手を前に突き出したまま転びかかる。

「沙紗っ！」

圭一はからからになった喉で叫び、駆け出した。

体制を整えようとしていた沙紗が、呼び声に一瞬気を取られる。

それが、大きな隙をなってしまった。

圭一の手が沙紗に届くまでに、沙紗が体制を整える前に。

凶星の刃が、少女の胸に深く埋まった。

その場にいた、そしてその光景を見た誰もに、戦慄が走る。

永遠とも思える一瞬の後、その小さな背から紅が滴った。

「……あ……」

圭一の口唇から、小さな呻き声が零れた。

勢い良く剣が引き抜かれ、少女の体が支えを失い崩れ落ちる。

圭一は間一髪のところで少女を抱きとめ、その場に座り込んだ。
「チッ……余計なことを」
ベテルギウスが忌々しげに舌打ちする。
その言動は、圭一を逆上させるのに十分な効力を持っていた。
「……きっ、さまぁーっ！」
眦がつり上がり、母親譲りの＜力＞が少年の瞳を翡翠色に染め上げる。
「高村、やめろ！」
ようやく体勢を整えた国彦が叫ぶも、その声は少年に届かない。
逆にそれが引き金になったかのように、圭一の＜力＞は圧力を生み出し、強い風となって吹き荒れた。
「貴様は、絶対に許さない……」
瞳から零れた涙が、光を含んで沙紗の頬に落ちる。
「絶対に、許さないっ！」
ぎっと睨みつける圭一。
その足元の地面に、不意に光の陣が描き出された。
それは二重円に六芒星が組み合わさった、「封印の六芒星」と呼ばれるもの。
圭一が母親、高村　葉月から血と共に受け継いだものだった。
ベテルギウスはその様子にもう一度舌打ちすると、両手で印を切り音高く掌を打ち鳴らした。
暴風が彼の目前で吹き散らされる。
「――――――」
音もなく男の口許が動く。
圭一がはっと目を瞠った瞬間、風は轟音を立てて男を取り込んだ。
風が収まった後に残ったのは、傷だらけで倒れ伏す男が1人。
だが国彦達は、苦々しげに、クリアになった空間を見つめていた。
「逃がした、ね……」
筋が浮いて白くなるほど、愁は拳を握り締めていた。

誰もいなくなった部屋。
その部屋に、ベッドに横たわる少女と未だ冷めやらぬ翡翠の瞳の少年がいた。
2人の間に、言葉はない。あるのは小さく規則的な電子音と呼吸音。
少年が少女の頬に触れる。押し付けるように、けれども優しく。
だが少女は少しも動かない。感触も、冷たいとまではいかなくても、限りなく無感覚に近かった。
「沙紗……」
そっと呼ぶ声にも、反応はない。当然だった。彼女は今、圭一が咄嗟に放った＜力＞と機械の力を借りて、辛うじて生きている状態だ。
主治医となった父が言うには、「魂がない」のだという。つまり、今の彼女は温かいだけの人形だと。しかもそれすら、いつまで持つか。
圭一はその言葉に自分が刺されたようなショックを受けたが、同時に納得もした。
あの時、自分と瓜二つの曽祖父の姿を借りた男が言った言葉の意味を、ようやく理解できたからだ。
『取り返したければ、取りに来い――この娘、我が世界に預かった！』
そのことを両親――いつの間にやら母は帰ってきていて、仲直りしたのか、と問うと「出張から帰ってきた」と事も無げ言われ、これについて圭一はまだ納得できない。後でしっかりと問い詰めるつもりだ――に言うと、2人は「そういならするといい」と言ってくれた。必要があれば手伝う、とも。
圭一が拍子抜けするくらい、あっさりとした許可だった。
（てっきり、反対されると思ってたんだけどな。危ない、って）
回想に耽っていると、突然に小さなノック音がした。
「圭一、いるか？」

それは幼馴染にして大親友の、和己の声。
圭一がドアを振り返ったのと、返事を待たずにドアが開いたのはほとんど同時だった。
「集まったぜ、皆。チャットで声かけたら、すぐだ。皆来たぜ」
にやりと笑う和己。
その背後には、何となくいびつな感じがする、しかし最も頼もしいメンバーが揃っていた。
圭一は少し頬を緩めると、親友を迎え入れてハイタッチを交わす。
「サンキュー、和己。皆も」
圭一が見渡すと、それまで少し硬かった面々の表情がふとほぐれる。
1人だけまだ不安そうな少女が進み出た。すらりとした、ポニーテイルの少女だ。
「事情は聞いた……沙紗は？」
「サーシャ（Ｓａｓｈａ）」と少しだけ伸びた発音なのは、いつか聞いた遠い異国で育ったと言う名残だろうか。
圭一はふとそんなことを思いながら、半身を引いて眠る少女を手で指し示す。
「眠ってる……の？」
「まぁ……そんなところ。今は詳しく言えないけど、今は小康状態だってさ」
「そう」
ほっと胸を撫で下ろす様子は、まるで妹を心配する姉だ。
「で？　用件って何？」
和己とよく似た面差しの少年が、頭の後ろで手を組みながら問う。
「ん、あぁ……」
逡巡するように言いよどみ、居住まいを正す圭一。
「端的に言えよ、お前言葉選び下手クソなんだから」
からかう和己に、圭一は眉間に皺を刻んで見せた。しかしすぐにそれはほぐれ、不安そうな薄い笑みが浮かぶ。

「あの……急にこんなこと言ってもワケがわからないとは思うんだけど……っていうか俺もよくわかってないんだけど……その、父さんが言うのは、今の沙紗には魂がない、らしいんだよな？」

言いにくそうに紡ぎ出した圭一の言葉に、一同を包む空気が張り詰める。

「それで、あの……取り戻さないといけないんだけど、どこにいるのか……わからなくて。だからって何もしないでいられない……俺自身で、俺の手で沙紗を取り戻したいんだ」

圭一の手が、きゅうっときつく締まる。

「沙紗のおばさんと母さん達がロビー近くの会議室で話し合いしてるって言うから、これから聞きに行こうと思ってる。巻き込んで悪いとは思うけど……場合によっては、みんなの知恵と力を、貸して欲しい」

つたない言葉と共に、圭一は頭を下げた。

そして少しの間を挟み、恐る恐る顔を上げたとき。

彼の目に、皆の笑みが飛び込んできた。

「もちろんだよ、ね、皆」

「ええ、そのために来たんです。使ってください、仲間でしょう？」

小柄な2人がにっこり笑い合う。

「よっしゃ、そうと決まればさっさと聞きに行くぞ！」

「早く見つけてあげないとね。迷子になりやすいんだから、あの子。アメリカでもそうだったのよ？」

年長の2人が、圭一の肩をを軽く叩いて声をかける。

圭一の頬に、ほんのりと笑みが浮かび、沈みがちだった瞳が明度を増す。

「あぁ……ありがとう、皆！」

空からはまだ痩せた月が、皆の姿を見下ろしていた。

「あまり、芳しくないなァ」

暗い、暗い闇の奥。

ぼんやりと光る水盤の前……少年の声が、つまらなさそうに反響する。

「案外、巧くいかないものだね。精霊どもは邪魔をするし、手駒は反抗して逃げちゃうし。

あーぁ……」

はふ、と小さな溜息が零れた。次いで、小さく押し殺したような笑い声が聞こえてきた。しかし、そうは言っても聞くものは誰もいない。

「せっかく朽ちぬ体を創ってやったというのに……。あの『天空の一族』どもも、解ってないなァ。ぼくに隷属する代わりの、体じゃなかったっけ？　……ま、創り主のぼくから離れてしまえば、朽ち始めるか。それは一興……これまでも、『自分達の族長の生まれ変わりを探す』とか何とかごちゃごちゃ言って、あまり良い手駒とは言えなかったし」

ふふっ、と、心なしか笑い声が大きくなった。

「あの残留思念も、動ける体をわざわざ創ってやったのにどこかに行ったしなァ。……そう言えばあいつ、創ってちょっとしてから左腕に刺青みたいなあざが出てきたな。確かあれは、方陣術士になりたい奴が刻むマジックスペルだったかな……ま、どうでも良いけれど」

どさ、と何かが倒れる音が響く。声の主が、その場に寝転がったのだろう。光量が少なすぎて、周囲に影すら映らないために、行動の一々が曖昧になる。

しかし、彼――そう、「彼」だ――には、そんなことすら無意味だった。

何故ならば、此処こそが彼の宇宙であり、彼が「神」だからだ。

「ふふ、ふふふ……本当、解ってないなァ。従順な手駒であったなら、”新世界”で永遠の命を与えてやっても良かったのに」

笑い声が、だんだんと狂いだした。それはやがて、哄笑に変わる。

「ぼくが、このぼくこそが世界を継承するんだ！

誰にもやらぬ。
あの忌々しき精霊どもにも、あの忌々しき女神にも、誰にも渡さないっ！！」
彼の笑いの波動は、じわりじわりと世界を変え始めた。

Ｐｒｏｇｒａｍ　１０，　ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　１１　生命線と境界線

「大変なことになったな……」
「そうね」
この街で一番高い見晴らし塔の天辺。
かすかに油臭い大気の下、その２つの人影は佇んでいた。
眼下にはこの国で一番発展している工業都市が、今や遅しと目覚めの刻（とき）を待っている。
「刺したりするからよ、全く」
「刺す気なんざなかったんだがなぁ」
濃いめの灰色の髪を持つ少女に責められ、背の高い黒髪の男は居心地悪そうに頭を掻く。
妙な２人組である。そもそも、服装からしてちぐはぐ過ぎて、どういう関係で行動を共にしているのか問い質したくなるほどだ。
少女はミルク色の貫頭衣にマントを羽織り、ブレスレットやら何やら色々とつけて身を飾っている。対する男のほうは、神官衣だろう緻密な刺繍を施された濃緑色の長衣（ローブ）姿だ。その腰には、無骨な細剣が吊られている。
「で？　これからどうするの」
「そうだな……とりあえずは」
呆れた物言いの少女に対する男の言葉は、突然の乱入者によってぶつ切りになってしまった。
「やっほー、２人とも。ご機嫌いかが？」
その場違いな声の主は、更に場違いな風貌と服装をしていた。蜂蜜色の髪に空色の瞳を持った少年は、何故か校章付きのカッターシャツに濃紺のズボンを穿いている。
有り体に言ってしまえば、「世界観に合っていない」。
「……お前なぁ……来るなら来るで、先に言っておけ。いつも人気のない場所にいるとは限らないんだから」

無用な警戒をした、と大袈裟に肩を降ろす男に対し、少年は謝りながらも口許の笑みを絶やさない。必要以上に驚いたらしい少女は、胸元を押さえて口の中で呪詛めいた言葉を呟いている。

その少女が唐突に目を眇めた。

「……風助、あんたもう1人誰か連れてきたでしょ」

風助と呼ばれた少年が、おや、と意外そうに目を丸くする。

「これはこれは、気付かれるとはね」

芝居がかった物言いをすると、風助は片手を挙げ、軽く手招きする。

夜明け前の暗がりから姿を表したのは、すらりと背の高い1人の青年だった。

「彼は『地龍』。世界屈指の方陣術士さ」

紹介されたのにもかかわらず、青年は目礼1つせずにそっぽを向く。

男は意に介する様子もなく肩を竦める。が、少女の方は頭にきたようで、軽く背を預けていた窓辺から離れると、両手を腰矯めにして青年を睨めつけた。

青年は少女をちらりと一瞥すると、忌々しそうに眉根を寄せる。

「……おい、どういうつもりだ。セラフィに憑いていた奴と手を組むなんて」

「セラフィですって?」

少女はその言葉に片眉を上げかけ……はっと目を瞠った。

「あんた……六天使?!」

「あぁ、そうだよ。それ以外に『地龍』がいるかってんだ、『実体なし』（ノーバディ）のミラさんよ」

うんざりしたように言い捨てると、青年は疲れた様子で近くの窓枠にもたれかかる。嫌いな通称を言われて顔をしかめる少女などお構いなしだ。

「おやおや、早速ケンカ?　地龍ってば短気だねぇ」

「煩い」

目の前の言い合いに、少女は先程とは別の理由で片眉を上げた。
連れ立って行動しているはずなのに、何故この2人はこんな冷たい言い合いをするのだろう。というか、地龍が一方的にやたらと冷たい。
風助が男との話に戻ったのを見計らって、少女は思い切って青年に近付いてみた。
それに気付いた青年が、半歩後後退る。
「心配しなくても、実体持ってる間は他人の体に入り込めないわよ。それより、訊きたいことあるんだけど」
「……何だ？」
僅かに警戒心をにじませて、青年が眉根を寄せる。
その仕草と顔の造作に、少女は内心意外に思う。そこには、成熟しきっていない若さがにじみ出ていた。
「あのさぁ、あんた何でアイツと一緒にいるの？　仲悪そうなのに」
「……」
途端に渋面を作る青年。
またケンカになるかと少女が身構えたとき、彼はおもむろに口を開いた。
「あいつが彼女を……そらを守るって言うから共にいるだけだ。そうでなければ、誰が好き好んで添うものか」
憎々しげに低く零れたその言葉に、少女は目を伏せる。
「……あんたも理由があって、ここに留まってるんだね」
ちろり、と青年が少女を見た。
「確固たる理由があって留まるのと何の理由もなく留まるのとでは全く違うぞ」
「何よそれ、『理由がない』って私のこと？！」
「違う」
ふっと瞳に寂しさが宿ったのは、気のせいだったろうか。
「理由がないのは、この俺の方だ」
自嘲するような笑みを見せたのは、ほんの一瞬。

「おい、話はまだ終わらないのか」
少女が呆けている間に、青年はさっさと背を向けて風助に声をかける。
「ん？　あぁ、もう終わったよ。そっちを待ってたんだ」
「こちらの待ち損か、まったく」
「まぁまぁ、じゃあ行こうか」
顔をしかめる青年を宥めつつ、風助はふと2人を振り返った。
「じゃ、ね。あのコトよろしく」
出現が突然なら、消滅も突然だった。彼らが暗がりに解け、一瞬後に朝日が差し込んできたときには、すでに姿はない。
「……トリックスターが！」
吐き捨てるように呟いて、少女は脱力したように息をついた。
「で、何ですって？」
「ん？　あぁ……アレだよ、アレ」
夜明けと共に目覚めてゆく街。
男は、その中の1つの路地を背中越しに示す。
まだ暗いそこに、ゆっくりと降り積もる光のかけら達。
それはゆっくりと、少女特有の優しい形を作り上げていく。
「『迎えが来るまで彼女を守れ』。
期せずして、オレが言ったことと一致したワケだな」
「あいつに『期せずして』なんてあるもんか」
少女の視線の先で、もう1人の少女は地に伏していた。服はぼろぼろで、膝当ては片方割れ、服と共布の帽子もない。
そんな姿で、ただ1つしっかりと何かを握り締めていた。
碧（あお）く深く輝く、小さな小さな何かを。

さらさらと、梢の擦れる音が聞こえる。心地良い音。
ここはどこだろう。子供の頃、大のお気に入りだった一本桜の空き地に似ている。蒼洋市には春になると町をあげてのお祭りがある。
だから沙紗は、桜が咲くのがとても楽しみなのだ。

そういえば、あの桜はどうなったのだろう。この国に帰ってきてから、あそこに行っていない。

梢を渡る風が涼しくて気持ち良い。そのせいか、風の匂いが少し違うのがどうにも気になって仕方がない。

理由は、大体わかる。多分、あの臭いのせいだろう。

「……油」

その小さな自分の声で、沙紗は目を覚ました。

明るい部屋だ。木の枝に遮られて柔らかくなった日差しの加減からして、昼過ぎあたりだろう。

身じろぎすると、素肌を冷たく何かがすべる。不快感はなく、むしろ気持ちが良い。絹か何かだろうか。

沙紗はいつもの癖で、陽を避けるように寝返りを打った。

「んうっ……！？」

途端に胸に痛みが走り、反射的に背を丸める。

その時、誰かの手がそっと沙紗の肩を押さえた。

「まだ、動いてはいけないよ……その傷で生きているのが不思議だそうだから」

その手は沙紗の体を優しく仰向かせると、緊張を解かせようと頬を撫でる。

涙のにじむ目を開くと、身なりの良い優しげな男が映った。

「君を見つけたときは義体かと思ったんだけれどね。驚いたよ、抱き起こしたら思い出したように血が溢れてきたから」

沙紗が不思議そうに瞬きすると、それが通じたのか男はふわりと微笑む。

「お腹が空いただろう。食事はここでするかい？　それとも……」

「若様、あまり矢継ぎ早に申されても、姫君はお返事が出来ませんわ。

それから、姫君をお食事に誘われるのでしたら、せめてお召しが済んでからになさいませ」

いつの間にか部屋に入っていた侍女の声に、「若様」と呼ばれた

男は大いに肩をそびやかせる。
「や、やぁ、ルゥ。いつの間に来ていたんだい」
「つい先程、若様が姫君に触れられた時ですわ。さぁさ、お召しが済むまで殿方は部屋から出てくださいませな」
その言葉を沙紗が耳にし、理解するまで約5秒。
そして、自分の体に目をやって……。
「……っ、きゃあぁー！！」
胸元を包帯で覆われただけのあられもない姿に、一拍遅れて悲鳴が響いた。
慌てた侍女に男が追い出されたのは、言うまでもない。

傷に障りがないようにと締め付けるところの殆どない服を着せられ、鎮痛剤と解熱剤を貰い、ようやく動けるようになっておよそ1時間。
沙紗は男とともに晩餐（ディナー）の席についていた。
「それにしても、久しぶりに面白い反応を見たものだね」
冷製スープが満たされたグラスに口をつけながら、男は先程の沙紗の悲鳴にそう評価を下した。
会食用のやたら長いテーブルの端、男の斜め前の主賓席に座らされた沙紗は、恥ずかしそうに頬を紅く染めて俯く。
「すみません、思いっきり叫んじゃって……」
小さくなる沙紗を見ながら、男は「いいや」と笑いを零す。
「済まないどころか、思ったより元気なのがわかった安心したよ。丸々2日眠っていたからね、もう目を覚まさないかと思っていたところだったし」
「そんなに……？」
男の言葉に、沙紗は目を瞠る。
ふと男は真面目な顔を作り、テーブルの上に両手を組んだ。
「ねぇ、どうしてあんなところにいたのか、教えてくれるかい？」
「あんなところ？」

「職人通りの裏手だよ。……覚えていないのかな？　ぼろぼろの格好で、折れた剣を背負って倒れていたんだよ」

そう言うと、男は軽く手を上げて女官を招き寄せ、沙紗は持っていたという物を全て持ってこさせた。

剣を持つ者にはあるまじき肩もあらわな服は最早ぼろきれ同然で、ひどい染み――恐らくは彼女自身の血だろう――が付いている。鎧として着込んでいたプロテクターは何かが貫通した痕があり、膝当ては割れ欠けて……。

紋様ひとつ付いていない質素な長剣は、ほぼ真っ二つに折れていた。

沙紗は震える手を伸ばし、剣を受け取る。それは半分になっていても、少女の手には重いものだった。

「不安かな？　やっぱり、剣って相棒だよね。今、腕利きの鍛冶師を探させているから、もう少し……」

「あの、すみません」

持っていられない剣を膝の上に降ろしながら、沙紗は男の言葉を遮った。

その視線に、自然と男の背筋が伸びる。

「お訊きしたいことがあるんですが」

「何かな？」

「その……ここは一体、どこでしょうか」

その一言で、部屋の空気が僅かに変わった。

男は訝しげに眉根を寄せた。

「君は……ここがどこだかも知らずに来たのかい？」

「自由意志で来たんじゃないんです、あたし。意識を失うまで……そうよ、気絶する前まで、あたしは学校に……」

起きてから曖昧だった記憶が、バラバラのパズルを適当にはめ込んでいくように再構築され、沙紗の中に蘇ってくる。

そして、彼が学校で意識を失った原因が、まざまざと思い浮かんできた。

「……っそうよ、あの男……っ！」

立ち上がりかけて顔を歪めたのは、心理的なものではなく身体的なものだった。胸の傷がきしむように痛み、浮いた膝から剣が滑り落ちて耳障りな音を立てる。

男は慌てて沙紗を座らせるために寄り、女官はすばやく剣をとって鞘に収める。

「いくら痛み止めが効いていても、怪我が治っているわけじゃないんだよ?！　無茶をしないで……ほら、深呼吸をして。痛み止めの水薬を持ってこさせようか?」

言われた通りに深く吸って吐いてを繰り返しながら、沙紗は首を横に振った。そうしながら、自分の記憶をゆっくりと思い返していた。

妙な箇所がある。自分を刺した男の顔の記憶なのだが、驚きの感情として処理された記憶と映像としての記憶とが全くかみ合わない。（おかしいな……確かに圭一くんの顔と全く一緒だったのはショックだったけど、記憶をすりかえるほどのショックだったかな……?）

痛みが引いても疑問は後を引く。人間の脳というものはあまりに酷いストレスを感じると記憶自体を改竄したり消去したりすると言うが、今回のことはそれほどとは思わない。

そんなことを考えていて、沙紗は自分が呼ばれていることに暫く気付くことができなかった。

「……い、おいっ、君?！」

「え?」

ようやく呼び声に気がついて顔を上げると、男は明らかにほっとした顔を見せた。

「あぁ、良かった。気分が悪くなったのかと思ったから」

「大丈夫です。心配かけちゃってごめんなさい」

沙紗が小さく頭を下げる。

男は沙紗に笑い返すと、女官達に向かって軽く手を上げてみせ、席についた。

「では、食事の続きといこうか。……そうだ、待っている間に君の名前を聞かせてもらえるかい？　『君』というだけじゃ失礼だろう？」

どう？　とおどけたように手を広げる様子に、少女は初めて笑みを見せた。

「沙紗……っていいます。如月　沙紗」

「サ……待って、もう一度」

「沙紗です。　さ、しゃ」

「サ……サ、ヤ？」

眉を寄せる男とそんな問答を繰り返す。が、男は結局沙紗の名を呼びきれず、最も発音の近い「サーシャ（Ｓａｓｈａ）」という呼び名を選んだ。

「いやぁ、難しい名前だね。言葉がパスティア人のようだったからって、甘く見ていたよ」

「パスティア？　パスティア皇国ですか？　女王が統治するっていう」

「そうだけど……あれ、違ったかな。訛りがあまりないから、そうかなって思ったんだけど……ま、良いか。

私はイーデン。そうとだけ呼んでくれて構わない」

テーブルに肘を突き手を組んで、イーデンはにっこりと笑った。

とりあえず支えなしで歩けるようになった頃、沙紗はイーデンに連れられて商店街を訪れていた。手を引かれているから良いものの、未婚女性の習慣だからと頭から被されたヴェールのおかげで、視界が狭くて歩きにくい。

「……これ、脱いじゃ駄目ですか」

「やめておくことをお勧めするよ。最近、治安が悪くなってきていてね……丸腰で路地裏に引きずり込まれたくはないだろう？」

淡々と言う口調に言わんとすることが理解できて、沙紗は大袈裟に身を震わせた。

その様子に、イーデンは小さく微笑む。
「ふふ、大丈夫だよ、私がいるから。さ、おいで。どんなドレスが似合うかな……ん？」
不意に通りの向こうが騒がしくなる。遠目に見たところ、どうも1人の少女に数人の男が絡んでいるようだ。
イーデンが沙紗を隠すように移動し、目を細める。
「タチの悪い奴らだな、いつも何かしらの騒ぎを越している。近付いては……あっ、こら！」
ぐいっと背の高いイーデンを押しのけ、沙紗は騒ぎの中心へと歩いていく。その間に、周囲やイーデンの制止も聞かずにヴェールの留め具を払い、足元まで慎ましやかに覆う長衣（ローブ）の裾を絡げ、そして……くるりと半身をひるがえし、真正面の男の背を豪快に蹴り飛ばした。
「うぉわっ！」
蹴られた男は見事に顔面を石畳にぶつける。
「誰だっ」
「……女？」
仲間らしい数人が、小柄な沙紗を振り返って面食らう。
対する少女は裾を落とすと両手を腰溜めにし、胸を張ってみせた。
「あなた達、女の子1人に寄ってたかって、恥ずかしくないの？！」
一般的正論だが、それを背後で聞いていたイーデンは文字通り頭を抱えた。
「まったく……」
黙ってはいないだろう、とは思っていた。この数日で交わした言葉はまだ少ないが、性格はある程度掴めている。心から他者を案じ、不正に厳しく、猜疑心は強いのに一旦決めたら全身全霊で他人を信じる。こんな濁った湖のような社会の中では、怖がりな彼女は生きにくいだろうに。
（しかし、『らしい』な。この数日しか彼女を識（し）らないが、よくわかる）

幽かな苦笑いを浮かべると、イーデンは上着の留め紐を寛げて肩袖を抜いた。そうすると、左腰に吊った軍刀（サーベル）があらわになる。鞘走らないように柄をしっかりと押さえ、イーデンはひゅっと息を吸い込んだ。

「これは何の騒ぎか！」

予想外の大きな声に、一同が肩をそびやかせてイーデンを振り返る。

「げっ、南の丘の……」

「逃げろ、警邏隊だ！」

蜘蛛の子を散らすように、とは正にこのことだろう。男共は、沙紗に蹴飛ばされた男を担ぎ上げると、一目散にばらばらの路地へと逃げていった。

最も、追う者はいない。沙紗は絡まれていた少女が無事ならそれで良かったし、この街で警邏隊長をしているイーデンに至っては本日非番で、追っても骨折り損なだけだ。

あとに残ったのは騒ぎが収まって日常に戻った通りの風景と、買い物の帰りだったのだろう、初めに果物の籠をひっくり返したまま呆然と立ち尽くして2人を見ている少女だけだった。

足元にころりと転がっていたリンゴを拾い上げ、沙紗は少女に手渡した。

「はい、もう大丈夫だよ」

「あ、ありがとうございます……」

沙紗の笑顔につられたか、少女もほっと笑みを見せる。

逆にイーデンの表情は渋い。

「何事もなかったから良かったものの、相手が反撃してきたらどうするつもりだったんだい？」

「結果オーライって言うでしょ？　良いじゃないですか、何もなかったんですし」

悪びれもしない沙紗に、目下保護者であるイーデンは深く深く溜息をついた。

そんな2人の様子に、果物を拾っていた少女はくすくす笑う。
「あの、もしお時間よろしかったら、うちの神殿によっていただけませんか？　ささやかなりともお礼したいので……」
「時間は良いのだけれど、礼をされる程大層なことはしていないよ？　それに、私たちは神事に関わらぬ身だから聖別されていない」
「あら、誰も気にしませんわ、そんなこと。気が咎めると言われるのでしたら、聖油を差し上げますし」
「しかし……」
「良いじゃないですか、イーデンさん。あたし、神殿って見てみたいな」
いかにして角が立たぬよう断ろうと苦心していたイーデンを脱力させたのは、沙紗ののほほんとした一言。
「あのねぇ……」
「ふふっ、良いですよ。歓迎しますわ」

ソラ、と名乗った少女は、2人を＜知恵＞（ホマー）という名の神殿へと連れてきた。
活気があるところだな、と沙紗は思う。巡礼者か参詣者か、何人もとすれ違った。
（ゲームでの神殿とは大違いだねぇ……）
高くきっちりと組まれた石の柱を見上げ、沙紗はほぅ、と溜息を零す。
「どうかしました？」
「あ、ううん。装飾が綺麗だなーって思って」
細やかな彫刻にそっと手を触れて意識を凝らすと、それが魔除けの呪文、あるいは方陣だと言うことがわかってくる。
「……大事にされてるのが、よくわかる」
沙紗がそう言うと、ソラはにっこり笑う。
「えぇ、ここは大切な場所だから」
誇らしげにそう言うと、応接間らしいこぢんまりとした部屋に2

人を案内し、ソラはお茶の用意に姿を消した。
イーデンはソファに座り、ふぅ、と息をつく。沙紗も同じように隣に座る。が、好奇心たっぷりの目はきょろきょろと室内を見回している。ふらふらと歩き回るのは時間の問題だろう。
「サーシャ、良いかい？　頼むから大人しく……って言っているそばから！」
ものの5分と経たないうちに、沙紗は立ち上がって部屋の隅っこの方へと足を向けていた。どうやら、いろいろ並べてある文机が狙いのようだ。
呆れたように2、3度首を振って、イーデンは沙紗の許へと向かう。
「世話が焼けるねぇ、この姫君は。どうしたんだい？」
「変なものがある」
そう言う少女の手には、木枠の写真立てが抱かれている。
「写真……いや、絵かな」
「写真だと思いますよ、これは」
少々色褪せてはいるが、それは確かに沙紗が見慣れたカラーフォトだ。
だがイーデンには馴染みがないらしい。
「そんな訳がないだろう？　この工業国家であるフィアート国ですら、まだ写真に色をつける技術はないよ」
「……ほら、やっぱり変だ」
確信をもったようにはっきりと言う沙紗を、イーデンは不思議そうに見やる。
「それ、不思議でしょう？」
「！！」
突然の声に、思わず2人して肩をそびやかす。
その様子にくすくす笑うのは、ティーポットなどのお茶の用意をワゴンに乗せてやってきた女性だった。
「天空様のお言いつけで、お茶の用意をしに参りました」

軽く膝を折って会釈し、女性は手際よくカップやクッキーの皿をテーブルに並べていく。
「あの……」
「はあい？」
沙紗が声をかけると、女性はほんの一瞬手を止めてにっこり微笑む。
「これ、何でしょう」
「さぁ？」
思い切って問いかけたのに、答えは何ともあっさりその一言。思わず脱力する沙紗に、女性は愉快そうだ。
「ごめんなさい、本当に知らないんですの。ただ、天空様がここにお降(くだ)りになられた時、すでにお持ちでしたのよ」
「それがどうしてこの部屋にあるんですか？」
「当然でしょう、ここは天空様の自室ですから」
「えっ？」
沙紗が目を丸くしたその時、どこからかしゃらん、と軽い音が誰かの来訪を告げた。その誰かに対し、女性は深く頭を垂れて礼を尽くす。
「隠すつもりはなかったのだけれどね。……ありがとう、あとはやるわ」
それは紛れもなくソラの声。だが、その姿の変わり様は一体どうしたことか。
長い黒髪に青味の強い鈍色の瞳だったはずなのだが、今やその髪は括られた両サイド以外は肩にも届かず、透けるほど薄い銀色だ。服装といえば、あっさりした簡素なワンピースから上等そうな長衣(ローブ)に着替え、繊細な刺繍が施されたショールを羽織っている。先ほどの軽やかな音は、そのストールについた飾りが発したものらしい。
「天空様、久々の外出はいかがでしたか？」
「悪くはなかったわ。世間的には少し騒がしくなっていたようだけど」

ゆったりとした所作でソファに腰を降ろすと、少女は女性を下がらせ、改めて沙紗とイーデンに座るよう促した。
沙紗は気まずげに写真立てを文机に立て直すと、早足で元いた場所に戻ってきた。イーデンの方は大股にソファを回り込んで座りなおす。
「写真を、見ていたの？」
「あ、はい……」
ほんのり微笑んで問う天空（ソラ）に、沙紗は小さくなって頷いた。
「良いのよ、別に見られて怒るようなものじゃないから。大切なものには変わりないけど」
「あの不思議な写真が、『大切なもの』？」
イーデンが不可解だと言うような表情で口を挟む。
「私の故郷では、あれの方が普通なんですよ」
そう言うと、天空は文机に向かい、写真立てを手に取った。
「昔、大事な大事な家族達と、撮ったものなんです」
だがそこに、彼女が写っている気配はない。写っているのは、３０代ほどのやけに若々しい格好をした女性と、黒髪にオリーブ色の瞳の青年、そして何人もの子供達だけだ。
（……？）
沙紗の脳裏に、ちらりと違和感が走る。だが、それは形にはならなかった。
「天空様！」
先程の女性が、慌てふためいて駆け込んできた。
「どうしたの」
「お客人共々、お逃げください！　魔物が……！！」
女性の腕から、血が滴る。
天空はショールを裂いてその傷を縛ると、眦を決して駆け出した。
「天空様！」
「ここは私が預かる場所、私が行かないで誰が行くの！！」
沙紗もついていこうと立ち上がり……かけたが、イーデンがそれ

を捕まえた。
「待ちなさい」
「でも……」
「行くなとは言わないよ。止めても行くのだろう？　ただ……」
イーデンは立ち上がりがてら、上着のうちから短剣を取り出した。
「これを持っていなさい。ないよりマシだからね」
細くて軽い、突剣（レイピア）を思わせるそれを受け取ると、沙紗は少しでも身軽になるためにヴェールを脱ぎ捨てた。

音を頼りに駆けつけた先は、阿鼻叫喚の場と化していた。
血肉に飢えた怪物達。
子供を守るため身を挺さんとする母親。
血まみれで倒れ伏す神官。
むせ返るような、血の臭い。
沙紗は思わず口許を覆う。
イーデンは一瞬顔をしかめはしたものの、警邏隊の隊長という立場で慣れているのか、すぐに要救助者の許へと向かう。
天空は翼の意匠を絡ませた杖（ロッド）を手に、怪物を片っ端から潰しにかかっている。
そして、誰かが何かをする度に、石の床が、敷物が、祭壇が、何より人が、血を浴びていく。
沙紗は、動けなかった。自分から行くと言っておきながら。
一体何なのだろう、この惨状は。
胃のあたりから何かがこみ上げてくる。沙紗は、それを押さえるのが精一杯だった。
そんな彼女に狙いを定めた怪鳥が、彼女めがけて凄まじいスピードで突っ込んできた。
「……あ」
助けも呼べなかった。自分を守るために、腕を上げることも。
しかし怪鳥は美味そうな獲物を前にたたらを踏んだ。

「大丈夫?!」

その鋭い鉤爪を弾いたのは天空だった。どういう訳か、彼女の背にはその身を覆わんばかりの大きな、透き通った翼がある。

緊張の糸が切れてしまったのか、沙紗の膝はがくっと砕ける。

泣き出しそうに顔を歪め、天空は沙紗を抱き寄せた。

「あの子の娘だからどれ程のものかと思ったけど……当然よね、今まで本当に戦ったことなんてないものね。ごめんね」

ようやく体勢を整えた怪鳥が、もう1度向かってきたのはその時だ。

天空がはっと気付いて杖(ロッド)を振り上げるが、タイミング悪く間に合わない。

だが2人が傷付くことはなかった。見えない力場に怪鳥は押し留められ、一瞬の後にパン、と弾けたのだ。

沙紗は一瞬、期待した。圭一が来てくれた、と。しかし、振り返った先にいたのは、見も知らない青年だった。

「大地?!」

「そら、一体何があったんだ」

血臭に顔を歪ませて膝をつく青年は、天空と同じく銀の髪と、オリーブ色の目をしていた。顔立ちと目の色からして、写真に写っていたあの青年だろう――髪の色が違うが。

場違いながら、沙紗は天空の宝物だという写真を見たときに感じた違和感の理由に思い至った。

写真というものは過去を留めるものであり、そこに写るものは常に過去であるはずだ。しかし、それに写っていたのは、30代ぐらいの女性――あれは、天空ではなかったか?

時間は戻らない。人の見た目もそうだ。

ならば何故、今目の前にいて青年と話している天空の姿は、若々しい10代後半の娘姿なのだろう。

「……状況は大体飲み込めた。魔物どもを追い払えば良いんだな?

……ひとまず、祭壇の方へ。壁を背にした方が守りやすい」

「えぇ」
天空に腕を捕まれ立たされて、沙紗の意識がようやく現実へと戻ってきた。
「沙紗、良い？　走れる？」
庇護者が現れて落ち着いたか、沙紗は小さく頷いてみせる。
走り寄った先に、期せずしてイーデンが追いついた。
「すまない、エデンの憑坐（よりまし）としての力が使えれば、もう少しはマシなものを……」
「仕方ありませんわ。よっぽど巧妙に場を作らない限り、憑坐の＜力＞はその神殿内でしか使えないものですから」
苦渋の表情を見せるイーデンに、天空がせめてもの慰めの言葉をかける。
「しゃべくってる間に固まれ……っ、何？！」
怒鳴りつけたはずの青年が、明らかに引きつった顔になる。
彼の視線を追った天空の目に、絶望の色が浮かんだ。
「おい、冗談だろ……セラフィは、＜基層＞（イエソド）は解放されたはずじゃ……」
呆然と呟く青年。
「そん、な……グリフォンまで、なんて……もうお終いよ、今この神殿に守護獣はいないのに……立ち向かえるはずないわ！」
先程まで気丈に振舞っていた天空が、ヒステリックに叫ぶ。
その間にも、鷲の頭に獅子の体を持つ優雅な姿は見る見るうちに大きくなり、魔物群がる神殿へと一気に舞い込んでくる。
「散れっ！」
咄嗟（とっさ）にイーデンが叫んだ。
青年が天空の細腰を抱えて飛び退く。イーデンも沙紗へと手を伸ばしかけるが、風圧に耐えかね自分が逃れるので精一杯だった。
「サーシャっ！！」
声が聞こえたようにも思ったが、沙紗の周りではいろいろひしゃげる音がして定かではない。

（あぁ、死んだかも……）
うずくまって、沙紗はそう思った。
しかし、いつまで経っても予想される衝撃が来ない。
＜あぁ良かった、潰さなくて。そこの小さなお嬢さん、無事でいらして？＞
代わりに来たのは、低い女声の響きだった。
呆然とする沙紗。
＜お嬢さん？＞
「あっ、はい、無事です！」
＜大変結構、そうでなければ、わざわざ我が召喚の主（あるじ）の意志を曲げてまで来た意味がございませんもの！　さぁ、小さな一の姫。私の前足にしっかりと捕まっておいでなさい＞
のそりと身を起こすと、あのひしゃげた音は信徒用の椅子が潰されたときのものだということがわかった。しかしそんなことを気にしている暇はない。沙紗は必死でグリフォンの前足に駆け寄ると、母を見つけた迷子のようにしっかとしがみついた。
（何だろう、この感じ……懐かしい気配がする……）
ふかふかの羽毛に頬を埋めながら、沙紗は場違いな安心感を覚えた。
やがてそれは、現実のものとなる。
＜神々と精霊の閨（ねや）を荒らし、汚（けが）す者達よ。これを手向けに、神の御許へとお行きなさい！＞
しっかりと瞑ったはずの目の奥に、かぁっと明るい光が差す。
それが収まった頃に目を開けてみると、魔物達は一掃されていた。
そして。
「サシャ！」
頭の上から降ってきた声は、懐かしい仲間のものだった。
「……ジュンくん？！」
グリフォンの背から飛び降りてきたのは、服装こそ多少違うが間違いなく慣れ親しんだ彼――召喚士、ジュンだ。

あぁ、そうか。あの気配は慣れ親しんだ彼のものだったのか。そう理解すると同時に、沙紗の唇から安堵と混乱がない交ぜになったような吐息が零れた。

「良かったぁ、無事で！」

「ジュンくん、どうして……それに、その格好……？」

破顔するジュンに対して、沙紗の驚きも当然だ。彼女にとってここは冷たい現実であり、夢でも何でもない。ましてや、死んでも生き返るようなゲームなどでも。

だが目の前の少年の姿は、紛れもなく「Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ」のものではないか！

「あぁ、これ？　先発隊、ってヤツだよ」

「でもその格好、ゲームのじゃ……」

「うん」

困惑する沙紗に、ジュンは神妙に頷く。

「あのね？　驚かずに聞いて欲しいんだ」

「……？」

「今僕は、ポプリポットカンパニーの１２階の……ねぇ、兄ちゃん、部屋何番だっけ？　ゴメン……えっと、第一開発室ってところにいるんだ。で、パソコンの前に座ってる」

「……何の冗談？」

沙紗の頬が、明らかに引きつる。

ジュンは静かに首を横に振った。

「冗談じゃないんだ。僕の真後ろにはナツミもいるし……あっと！　ゴメン、なんでもない、通路には吹神さんって人がコーヒー配って歩いてる……あ、どうも。それに……僕の目には、つまりゴーグルに映ってる画面だけど……サシャの姿は、ゆらゆら揺れてるポリゴンの人形なんだ」

「あ、あたしには、ジュンくんの姿は生身の人間に見えるよ？」

「そりゃね。だってそっちにいる人たちにとっては、その世界は本物だもの」

沙紗の目が、驚愕に見開かれる。
ジュンは一息入れてから、慎重に話し始めた。
「僕らも、今日始めて聞かされたんだ。『Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ』は……違うな、『ラグナロク・アルカディア』はバーチャル・リアリティでもなんでもない、本物の世界だ、って……」
少年の口から出てきたのは、にわかには信じられない話だった。
「……どういう、こと？」
「解らない」
小さくかぶりを振るジュン。
沙紗の足許が揺らぐ。背後に天空が来てくれなければ、彼女はその場に卒倒してしまったかもしれない。
「どういう……どういうこと？　これは現実？　それとも偽物？　あ、あたしは一体……」
「沙紗」
自分の存在を確かめるように頬に手を当て、体を支えることを忘れてしまったかのような沙紗を、天空がそっと支える。
「大丈夫、あなたはここに……ここに、いるのよ」
「ソ、ラ……」
ぎこちなく首を巡らせて、沙紗は天空を見た。
「気をしっかり持ちなさい。あなたの気持ちが揺らいでしまったら、その体は消えてしまうかもしれないわ。そうなれば、誰にもどうしてあげることも出来ないのよ。死なないけれど、死んだも同然になる……それがイヤなら、しゃきっとしなさい」
「う、ん……」
自分の体が細かく震えているのは、沙紗にも良くわかった。冬近しい季節に薄着であるせいではない。
恐怖心からだった。自分はとうに死んでいるのかもしれない、今は生きていてもすぐに消えてしまうのかもしれない。そして、２度と元の場所には還れないのかもしれない――。
「サシャ」

そんな彼女を元気付けるかのように、少年が軽く肩を叩く。
「如月主任って、サシャのおばさんなんだよね？　その人から、これ……お守りだって」
差し出されたそれは、石を連ねたブレスレット。
「これ……何？」
「わからない。だけど、サシャに逢えたら必ず渡してくれって」
ブレスレットを受け取り、俯いた沙紗の目元がじんわりと潤む。
「……早く帰りたい」
泣き出してしまった少女を前に、少年は暫くおろおろしていたが、やがてぐっと表情を引き締めると、その小さな手を両手で包み込んだ。
「うん、もう少しだけ待ってて。必ず皆で迎えに来るから」
こくん、と沙紗は力なく頷く。
「絶対だよ」
「うん」
「皆に早く来てって言っといてね。……圭一くん、にも」
「……うん、わかったよ」
その言葉に、ようやく沙紗の口許がほころんだ。
（何だか、ケイや兄ちゃんが構いたくなる気持ちわかったような……しかし、こんなことしたって知られたら、ケイに殺されるかな……）
内心冷や冷やしながら、ジュンは沙紗の笑顔を見守っていた。

騒ぎが収まった頃、片付けに忙しい神殿を遠くから見下ろす者達がいた。
「だぁーれも部外者がいたことに気が付いてないわね」
「その部外者がいつの間にか消えていることにもな」
少女の言葉に、ゆっくりと剣を拭いながら男が応える。
「まぁ、好都合じゃないか。あの……沙紗、だったか？　あの娘を

守るのにも、な」
　少女の顔が不満そうに歪む。
「確かにそうかもしれない。だけどねぇ、私達の本来の目的は『彼女』を探すことよ。そこらへんわかってる？　“荒波”（アラナミ）」
　男が意地悪く微笑（わら）う。
「わかっているとも、“夕凪”（ユウナギ）。忘れちゃいないさ」
　少女の短い髪をさらさらと撫でる手は、先程まで剣を握ってきたということを感じさせないほど優しい。
「そのために俺達はここにいるんだ。例え未来永劫留まることになろうとも、俺はずっと、お前の傍らにいるさ……」
　少女を抱き締める男の手は、何よりも力強く、同時に儚かった。

Ｐｒｏｇｒａｍ　１１，　ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　１２　Ａｆｆｅｃｔｉｏｎ

雪消月（ゆきげづき）の夕方、ポプリポットカンパニー１２階、第１開発室。
新作ゲームのβ版を公開中で大忙しのここが、今現在全く別のこと――いや、ある意味では方向性は似通っている――で東奔西走していた。
「さぁて、皆。どうだった？」
開発責任者であり室長の如月　理彩が、テストプレイヤーのアンケート調査と称して連れ込んだ数人の少年少女達に声をかけた。
彼らは１００人いるうちの、ほんの数人。その方面に精通している者ならば、この事態が明らかに可笑しいことなどすぐにわかっただろう。オンラインゲームのテストなど、全員に結果を聞かなければ意味がない。
「収穫ナシっす」
「俺も同じく」
「私もです」
「Ｍｅ，ｔｏｏ……（ワタシも……）」
出てくるのはがっかりするような報告ばかり。茶髪の少年は肩を竦め、涼しげな顔立ちの少年は首を横に振り、ゴーグルをはずした緋色の眼の少女は申し訳なさそうに俯き、ポニーテイルの少女は見ているほうが釣られそうなほど落ち込んでいる。
しかしそんな中、ただ1人の少年が、成果を持ち帰っていた。
「えっと、ありました」
周囲の視線が、一気に少年へ――潤一へと集まる。
口々に真偽を問う中、理彩は冷静に事実を確認すべく、近場の後輩に目を向ける。
「本当なの？　宵樹くん」
「はい、彼がログアウトする3分前から、ＩＤナンバー００が認識されています。やっぱり主任の言ったとおり、でしたね」

ぎしりと椅子をきしませながら、吹神　宵樹が感嘆の声をあげた。
「まぁ、ね……これでひとまず、あと数日くらいは安心、かな……」
（……あれ？　いつもはこれでもかってくらい天狗になるのに。『ふふん、恐れ入ったでしょ』とか『このくらい私には当然よ！』とか……）
褒めたのに神妙な顔をしている上司に、呆れる準備をしていた宵樹は内心首を傾げた。
「……高村さん」
宵樹の考えていることは露知らず、理彩がそう呼んで振り返ったのは、２０年来の友人である高村夫妻ではない。その隣に満身創痍で座っている、彼らの息子に良く似た痩せ気味の男だ。
彼は高村圭一郎といい、齢百を数える頃だというのに、その外見は時を止めたかのように若々しい。見た目では信じられないが、圭一の曾祖父である。
「何かい？」
「＜門番＞（ゲートキーパー）としての貴方に問いたい。現状、どうご覧になりますか」
「……良くはない、な」
騒がしい子供達を眺めながら、生成りの長衣をまとった男は芳しくない答えを返した。絆創膏だらけの手を組み合わせ、渋面を作る。
「満月が近いからな、そろそろ圭一の術も限界だろう。出来るだけ早く助けてやりたいが……お嬢ちゃんはどこに居るんだったか？」
「トレースの限りでは、今は＜燭台＞（メノラー）と＜知恵＞（ホマー）の間を行ったり来たりしているようです。＜知恵＞（ホマー）にいるのは“天空”……風見女史ですし、何とかなるとは思うんですが……」
そこまで言うと、理彩は重い溜息をついた。末っ子の安否が心配で仕方ないのだ。
「……すまんな、俺が傲慢だった。この身に取り込めれば１人でもヤツを抑えられると思ったばっかりに、こんな……」

「じいさんやめてくれよ！　沙紗が死んだみたいに聞こえる」
話を聞いていたらしい圭一が、少し白い顔で心底嫌がるように声をあげる。
「そうよ、お祖父ちゃん。あんまり自分を責めずに」
葉月が、うなだれた背をそっと擦る。
「終わっちゃったことだもの、次の策を考えましょ」
「あぁ……」
圭一郎が苦い笑みを浮かべたのを見て、理彩は気を取り直して音高く手を打ち鳴らし、子供達の注目を集める。
「はいはいはい、君達こっち注目！　ほらそこ、うるさいわよ」
１０代の聞かない盛りばかりが集まれば、注意してもなかなか静まらない。
「えっと、皆……話は理解してくれてるわよね？　私的なことで申し訳ないんだけれど、……？」
理彩が言葉を切る。
大人達が何事かと理彩の目線を追うと、１人の少年が手を挙げていた。
「そのこと、俺達もちょっと相談してみたんですけど」
高村　圭一。
彼はこの「Ｌｏｓｔ　Ｂｌｕｅ」において、最も危険な遊び方をしていた2人のうちの1人だ。他のユーザーがコンピューターというインターフェイスを通して間接的に別世界と触れ合っていたにも関わらず、圭一と沙紗だけはあの仮初めの方陣――ログイン画面の扉に書き込んであった、あの蒼い魔法陣だ――を＜術＞として読み取ってしまい、精神（こころ）だけとはいえ完全にあの世界を我が物としていたのだ。
そのせいだろうか、先ほどの探索も他の7人と比べ物にならないほど調べた範囲が狭かった。逆に最も範囲が広かったのはグリフォンの力を借りた潤一だ。そのグリフォンは途中でトレースが面倒になる程に複雑な行動を採ってくれたが、そのために幸か不幸か偶然

にも「サシャ」という目標にぶち当たったのである。
「話してみてくれる？」
理彩の促しに、圭一は軽く頷いて口を開く。
彼の提案は、今までと同じくゲームとして世界に触れることを前提としたものだった。実働隊は４～５人、内１人をオペレーター代わりにし、残りは沙紗を保護して、迎えの者が到着するまで守り通す。
「……なかなか、無茶な作戦ね」
理彩はきっぱりと断言した。
「だからこそキャラクターデータというユニットの方が都合良いんです。誰にも怪我させるわけに行かないし、俺もイヤだから」
断言されても、圭一は退かなかった。それが最上の案だと言わんばかりの顔で、理彩を見つめる。
（まるで子供ね……本当、聞かん気と負けん気の強いこと）
理彩は気付かれないように、その落ち着いた翡翠色の視線から目をそらした。母親譲りの美しい＜力＞の証。合理的に次善の案を出そうとする大人達は、彼をまっすぐ見られないに違いない。
「……で？　君が言うその作戦では誰が迎えに？」
わざと意地悪い声での問いに圭一が答えるまで、一呼吸分の間があった。
「俺が、行きます」
その一言で、空気が変わった。
彼の言葉に過剰なほど反応したのは、関係者として探索に呼ばれていた生徒会の３人と、彼の母親である葉月だ。
「本気か、高村？！」
「馬鹿言ってるの、わかってる？」
国彦と麗が、何とか思いとどまらせようと声をあげる。
葉月は蒼白な顔で、隣にいる夫の腕に縋っていた。
「馬鹿でもなんでも、俺が行く。俺なら、行ける」
圭一の目は真剣そのものだ。冗談ではないことは、誰でも理解で

きた。
「高村、考え直してくれないか。あの世界は君が思ってるような生易しい世界じゃない」
愁が圭一の肩に手をかけた。
「今でも戦乱状態のところだってあるんだ、いくら君に多少ケンカの心得があったとしても、強い魔力を持っていたとしても、下手な所に降りたら怪我だけじゃ済まないんだよ！？」
声を荒らげて肩を揺さぶっても、その瞳の色が変わらない。
「……じゃあ、ほかに何が出来るって言うんだよ」
圭一の目が不意に細まり、間髪入れずに愁の胸倉を掴み挙げた。
「何が出来るって言うんだよ！　今この時にも沙紗は大変な目に合ってるかも知れないじゃないか、痛い思いして泣いてるかもしれないじゃないか！　もう嫌なんだよ、目の前で大事な人がぼろぼろになってるのに、助けることが出来ないなんて！！」
それは、幼い頃から燻っていた思いだった。
まだ十にもならない頃、圭一達は3人して火事に遭ったことがある。あの時、一番酷い火傷を負ったのは、一番小さな沙紗だった。
圭一の大事な小さな沙紗。彼は彼女を守るためだけに、その＜力＞を磨いたのだ。
「……わかったわ」
圭一の決意を目の当たりにして、理彩が溜息交じりに承諾する。
「良いんですか、主任さん？」
「良いも何も、それしか策がないでしょ、結城君。タイムリミットまで、時間がないわ」
少々大袈裟に肩を竦め、圭一の手を降ろさせる理彩。
圭一の表情が、僅かに明るくなる。
生徒会の3人は、溜息に悪態と忙しない。
パーティーメンバーは互いに手を打ち合い……和己は圭一と手を打ち鳴らすと、がっちりと腕を絡めて手を握り合った。
「やるからには、気張っていけよ。沙紗ちゃんのこと、お前に任せ

た」
「あぁ。頼りにしてるぜ、親友」
「おう、任せろ」
満月まで、あと数日。時間はそろそろ、余裕がない。

「良かったのかい？　りっちゃん」
子供達を先に帰らせ、閑散とした部屋の中、竜也が難しい顔で友人に問う。
「何が」
「圭一のことさ」
傍らで資料整理を手伝っていた葉月と宵樹が、理彩の顔色をうかがう。
「何を今更……大体、捜すのはともかくとして、見つけたら圭一くんに便宜を図ってやってくれって言ってきたの、そっちじゃないの。それとも……なぁに？」
理彩の口許に、意地の悪い笑みが浮かぶ。
「『神殿』絡みだからって私が突っぱねると思った？」
「……ちょっと」
竜也は決まり悪げに微笑う。
「だってりっちゃん、『神殿』が絡んでくるとすごく神経質になるから」
「まぁ、そうだけど……今回は多分、絡んでこないでしょ。今はまだ話が小さいし、『破門』された私の娘のことだから」
とんとん、と書類をそろえ、ファイルに挟み込む理彩。
「……主任」
静観していた宵樹が口を開く。
「いい加減、何の話か教えてくださいよ。１人だけカヤの外で、さっぱり解らないんですけど！」
憤然とする宵樹。
そんな後輩を、理彩はガラス玉のような目で見た。

「聞いて解るの？」
「聞かないよりずっとマシです！」
睨み合う2人。竜也と葉月ははらはらと見守っている。
ややあって、理彩の口許がふと緩んだ。
「……良いでしょう。ただし、長い話になることを覚悟しときなさい。途中から話して納得させられる自信ないもの」
「は、はい！」
宵樹はぴしっと居住まいを正した。

「世界の均衡が崩れて、様々な騒動が起き始めた理由……直接の原因は如月の件だろうが、事の発端は多分、かなり昔のことだと思う」
日もとっぷり暮れた帰り道、国彦は説明の端を発した。
「サシィのおばさんが作ったゲームじゃなくて？」
夏見の言葉にかぶりを振る愁。
「あれは均衡を崩した1つのきっかけに過ぎないよ。大元は……もっと別のところにある」
「じゃあ大元って何なのさ？」
潤一の問いに、国彦達3人が顔を見合わせる。どこまで話したものか、と戸惑っているようだ。
「……世界の根源に関わる話さ」
「！」
口を開いたのは、高村　圭一郎その人だ。
「老師、それは……」
「どうせ大人になれば神官候補として嫌でも叩き込まれるんだ。なら今言ってやれ」
「ですが」
「上層部なんざ構うこたねぇ。俺達を平気で使い潰そうとするタヌキどもなんざな」
淡々と言う圭一郎の前で、国彦が年相応の動揺を見せる。
その時、圭一はいささか乱暴に曾祖父の肩を掴んだ。

「じいさん、神官って何の話だ」
圭一郎がにやりと微笑う。
「おーおー、早速食いついたな」
「いつ噛みついてやろうかと思ってたんだよ、じいさん。あんたには訊きたいことが山程あるからな」
牙を剥き出しにして、圭一は目の前の、自分と瓜二つの顔を睨む。
「……そもそも、あんたが俺のじいさんだって言われても信じられない」
一同は固唾を飲んで見守った。ある者は圭一が焦れて怒り出さないかと、ある者は圭一郎がどう答えるのかと懸念を抱きながら。
「＜門番＞（ゲートキーパーズ）……魔力の強い最上位の神官は、遅かれ早かれいずれこうなる」
そう言うと、圭一郎は少し寂しげに笑む。
「嫁さんとガキ置いて神殿に引っ込むのは寂しかったよ。お前にわかるか？　圭一」
圭一の手が力なく落ちる。経験の浅い彼にすら、その言葉の生々しい意味が理解できたのだ。
「＜門番＞の時は永い……知ってる奴らが死にきってもまだ余る。俺達ですらそうなんだ、まして世界の要に据えられた６天使たちはどれほどだろうな……」
「っ！」
その言葉に、怜香は弾かれたように仲間を見渡した。その顔は怯えた色を滲ませており、夏美が彼女をなだめようと肩を軽く叩いてやった。
「まさか、まさか次は私達ですか？　＜基層＞（イエソド）にいたセラフィータさん、私達のこと『待ってた』って言って……！」
「いや、それはないよ。当代は３０年程前に代替わりしたばかりだそうだから」
怜香の言葉を遮り、優しく声をかけたのは愁だ。
「……話を戻そうか。大丈夫かい、お嬢ちゃん？」

少女が頷くのを確認してから、圭一郎は再び口を開く。
「仮にも蒼洋学院の生徒なんだから、天空姫（てんくうき）と地龍神の創世神話くらい知ってるな？　全員。話は……」
「Ｗａｉｔ，　ｗａｉｔ！（ま、待って待って！）」
小さな怜香の肩を抱いたまま、夏美は声を荒らげる。
「キリスト教みたく『お伽話』じゃないの、アレは？！」
「残念ながら、お伽話じゃないのさ。この世は二柱（ふたばしら）の創りし御世（みよ）、俺達は御方々の慰みに創られた子供達……ってな」
「『慰み』って言い方はどうかと思うぜ、じいさん」
歌うような圭一郎の言葉に、圭一が呆れ顔で茶々を入れる。
「で？　その創世神話のどこが関係してるって？」
「……圭一、お前あの話聞いて、何の疑問も持たなかったのか？」
先刻まで薄く笑みを浮かべていた圭一郎の顔が、不意に引き締まった。
「疑問って……？」
「馬鹿者。よく考えろ」
圭一と和己が顔を見合わせる。が、答えが出てくるはずもない。
「……め、女神様がお隠れになったって、ことですか……？」
おっかなびっくり、小さな声で応えたのは、未だ青白い顔をした怜香だ。
「さっきまで怖がってた割に賢いな、お嬢ちゃん」
大正解、と圭一郎はにっこり笑う。
「そう、そこなんだよ。天空姫は仮にも創生の女神だぞ、神に死があるのか？　加えて……人がどうこうできるような存在だろうか？『聖典』には、人の手で女神が亡くなられたから、彼女の魔力を人が受け取った、なんて書かれてるが、全く筋が通らんと俺は思うね」
沈黙が流れる。
「……確かにツジツマが合わないわ。『あの世界』が現実だとして、魔法が遣えないヒトがいるなんて」
仲間を代表するように、夏美が言った。

「その反面、『この世界』のヒトは全てが魔法遣い……よネ？」
「そう、この『祝福の地』（ブレスド・プレイス）は、女神の死の恩恵を受けなかったと思い込んだ人間たちが起こした迫害戦争の折に、創られた世界だからな」
圭一郎の補足に、和己が口を挟む。
「そんなこと1人で出来るんなら、神サマ2人も要らなくねぇ？」
その言葉に、圭一郎が苦笑いを零した。
「おいおい少年、お前今世界中のオンナノコ敵に回したぜ？　そういう問題じゃねぇんだよ。問題はそこじゃなくて……」

「この疲れきった世界が、再生も新たな誕生もないまま滅ぶかもしれないこと」

意外な横槍に、誰もが耳を疑った。互いに顔を見合わせて、唯一誰とも目が合わなかった圭一へと視線が集中する。
透き通った翡翠の瞳は、ぼんやりと遠くを見つめていた。
「天空姫の力は＜誕生＞と＜再生＞……女神の力ないまま創られた『祝福の地』には、もう時間がない……なのに、女神の娘は見つからず、女神を起こす方法もない……」
訥々と、圭一は言葉を紡ぐ。和己は突然豹変した親友の様子に、ごくりと喉を鳴らした。
「……圭一？」
「……あ、悪い。意識飛んでた」
遠慮がちな呼びかけに、圭一はばつの悪そうな様子を見せる。そこには、ついさっき見せた奇妙な印象はかけらたりとも残っていない。
瞬間、びしっという鋭い音と共に、圭一は額を押さえてのけぞった。
「痛ぇっ！」
「馬鹿者、人が説明してやってる時に立ったまま寝るな」

原因は圭一郎だった。彼が、圭一の額を指で弾いたのだ。
「じいさんちょっとは手加減しろよ」
「ゲンコじゃなかっただけマシと思え。……あーぁ、ったく。話終わらんうちに解散地点じゃねぇかよ」
圭一郎はさもうっとおしそうに頭を振って圭一に背を向けると、他の7人に対して口許に指を立ててみせた――「口外無用」、と。
「ガキ共はとっとと帰れよ。特に圭一、お前向日町なんて学区のすみっこに住んでるんだからな」
「はいはい。……あれ、じいさんは？」
「市外に出て涼のところにでも行くさ。兄貴の竜也と違って子供は小夜子1人だしな……おら、散れ散れ。本気で遅くなるぞ」
曾祖父の追い払う動作を受けて圭一が歩き出すと、少年たちはばらばらと帰りだした。
「おい、圭一。メシどうする？」
「マックにでも寄るよ。姉貴帰ってないと思うし」
「ならうちに食いに来れば？　1人分くらい……」
暢気な普通の会話が、次第に遠ざかっていく。孫娘の息子とその友人達を見送る圭一の目が、ふと細まった。
「……結城、だったか。どう思う？」
「はっ？」
突然に話を振られた国彦が、何のことかと目瞬く。
「圭一だよ。『覚醒』……したと思うか？」
国彦を見やる圭一郎の目の奥には、「疑惑」よりも「心配」の気配が濃い。
「……わかりません。前世を『思い出した』というには、高村……お孫さんの言葉は端的過ぎます」
「＜門番＞にしか知らされないような知識の類でも？」
「それでも。波動術士のように、敏感なタチのもいますから」
国彦の言葉に、圭一郎の目がわずかに細まる。
「そうだな。そうだと良いんだが……」

小さく呟かれた言葉は、ひどく寂しげだった。

その日の夜半過ぎ――蒼洋市郊外、水野総合病院。

この時、「面会謝絶」というプレートが掛けられた一室に、誰にも気付かれることなく入り込んだ人影があった。

蜂蜜色の髪が、ドアの隙間から漏れる光にわずかな反射を見せる。

「……ごめんよ、如月さん」

若々しい声に似つかわしくない憂いを滲ませ、「彼」はそう呟いた。

機械につながれてベッドに横たわる少女からは、何ひとつ反応は返ってこない。

「彼」は、そっと少女に歩み寄った。あともう少しで触れられる、という位置で、指先に生まれたかすかな痛みに阻まれる。

「つっ！」

「彼」の目前で、少女はほんのりと輝く。今にも消えてしまいそうなその燐光は、ふわりと周囲に広がると、六芒星の円陣を描き出した。

「太古の昔に存在したという地龍の民（たみ）の、『封印の六芒星』か……この気配は、高村、かい……？」

その問いに応じるかのように、円陣はほんの一瞬その光を強くし、消えた。

「彼」の表情が、俄かに険しくなる。

「もう、保てないのか？！」

振り返った窓にかかる月は、そろそろ満月に近い。

魔法陣を媒介とする術は、その形状のために月の満ち欠けの影響を受けやすい。満ち欠けでの魔力の増減は方陣術士ならば男女ともに等しく訪れる現象だが、その影響の仕方は術や本人のバイオリズムによって様々だ。例えば、「彼」の魔力は月の満ち欠けとは逆の増減を見せる。新月が最も強くなるのだ。

「彼」は高村　圭一に対する月の影響は知らないが、この延命術へ

の影響はよくよく知っていた。術者自身の生命力を無理矢理植え付ける（リンクさせる）その術は、被術者のそれと馴染むまでにいささか長すぎるほどの時間を要する。得てしてそれは被術者の体力が回復すると共に時間を置く意味がなくなるのだが、今のように魂のない状態では体力は回復しない上に、本来ならば削られた生命力の補填のために植え付けられた分さえ生体維持に回されるため、満月に近付くごとに効力を失っていく。つまり、少女に掛けられた術はもう効力がないのだ。機械の補助があるといっても、死に逝くのは時間の問題だろう。

ぎり、と「彼」は歯軋りした。

「……如月さん、待っててくれ。例え何があろうとも、僕の責任において必ず君をここに連れ帰る！」

「彼」の足元に、ぼんやりとした光が生まれる。

そのとき、見回りに来た看護師が、がらりとドアを開けた。

「誰かいるの？！　……あら？」

声を聞きつけてきたはずだったのに、その部屋のどこにも、こんこんと眠る少女以外の姿はなかった。

ふと気が付くと、圭一は何もない場所を歩いていた。

何もない、と言うよりは何も見えない、と言うべきなのかもしれない。圭一の目に映るのは、ただ自分の体だけだからだ。その他は、足元の地面すら見えない。

そう、地面であることだけは確かだった。裸足の足に、小石が痛い。

（何で俺、こんなところを……？）

久々の友人宅での夕食の後、圭一は普通に帰宅した。その後は一歩たりとも外には出ていないはずだ。溜まっていた宿題を片付けた後、風呂に入ってさっさとベッドに潜り込んだのだから。

単純に考えればこれは夢だろうが、それにしては感触がリアルす

ぎる。
（……何に、呼ばれた？）
圭一は咄嗟にそう考える。そのとき、自分が何かを握り締めていることに気がついた。止まらない足をそのままに手を上げてみれば、それはペンダントの形をしたお守り（アミュレット）だった。同級生の茉雪を拝み倒して手に入れた、「言霊珠」（ことだま）というものだ。
それは、ほんのりと光を発していた。蛍のような柔らかなエメラルドグリーンの光は、ゆっくりと明滅を繰り返している――心臓の、鼓動のように。
「……沙紗……」
足が、止まった。
いつの間にか、周囲の様子は様変わりしていた。月明かりの薄青いトーンに沈む風景は、新緑の頃の青臭い匂いに満ちている。
「俺は本当に、何に喚ばれたんだよ……」
圭一は小さく息をつくと、下生えの草を掻き分けて歩き出した。がさがさと無遠慮に枝葉を鳴らす。
「誰……？」
唐突な少女の声に、圭一は心臓が飛び出すかと思うほど驚いた。しかし同時に、とてつもない安堵感を覚えたのも事実。圭一の耳はそれほど良くはないが、大事な少女の声くらいは聞き分けられる。
「沙紗っ！」
歓喜に叫びたいのを必死で押さえ、圭一は開けた庭へと飛び出した。
果たして、予想通り。月明かりに浮かび上がる驚きに満ちた顔は、間違いなく沙紗のものであった。
「……っ、圭一くん！？」
息つく間もなく抱き締めると、少女の口から戸惑いの声が漏れる。その反応に、圭一は知らず詰めていた息をそっと吐き出した。
「良かった、無事でっ……」

苦しいほど自分を抱き締める圭一が、小さく震えている。それに気がついた沙紗は、一言も発せずに圭一の背を抱き返す。
「……柔らかい」
「圭一くんっ？」
思わぬ発言に沙紗が眦を吊り上げると、圭一は小さく笑った。
「はは、本当に沙紗だ。……安心した」
ふと見上げた顔は、喜びと切なさがない交ぜになったような表情をしている。
「……もう、2度と会えないかと……思った」
「……そんな訳、ないじゃない」
あまりにも気弱な発言に、沙紗は小さく微笑んだ。
「あたしを助けてくれたの、圭一くんでしょ？」
圭一の頬に、心底ほっとしたような笑みが浮かぶ。
「上手くいってたのか」
「え、ちょっと、あたしが助かったの偶然？」
「あっはっは、流してくれ」
沙紗の追及を逃れるべく、先手を取って身をひるがえす圭一。沙紗はともすれば頬が緩みそうになるのを抑えて、大袈裟に溜息をついた。
「全く、いつも真面目にやればいいのに、妙なところでちゃらんぽらんなんだから……」
「仕方ない仕方ない、適当に手を抜くのが俺の処世術なんだし」
「もう」
そこで、はたと思い出す。重大なはずの問題を。
「……圭一くん、あなたどうしてここにいるの？」
「は？」
唐突な問いに、ぽかんと口を開ける圭一。
「まさかゲームとして（ログインして）じゃないでしょう？　服が普通すぎるもん」
「あー、それか。……俺もわからないんだよ。何に喚ばれたのか、

……？」

圭一は、アミュレットを握った手を見た。熱を感じたような気がしたのだ。それに反応して、沙紗も鼻先を近づける。

「何？　それ」

「茉雪にな、創ってもらったんだよ。『言霊珠』（ことだま）ってやつ。……ひょっとして、こいつが俺を連れてきたのかなぁ」

開いた手の中で、言霊珠が淡く輝く。圭一は、眠る前に掌へ巻きつけた細い鎖をほどいて、沙紗に差し出した。

「……持ってて、くれないか？　その……沙紗を迎えに来るときの、道標になるように」

揃えて出された沙紗の手に、しゃらりと繊細な音を立てて、言霊珠が落ちていく。そのとき、２人の手が微かに触れ合った。互いに気付かないほどの触れ合いだ。

だが、それは言霊珠に変化をもたらした。

「！」

２人の目前で、言霊珠はわずかに光を増す。今にも消えてしまいそうなその燐光は、ふわりと周囲に広がると、六芒星の円陣を描き出した。

「な、何……？！」

困惑する沙紗。その肩を、圭一がそっと押さえる。

「大丈夫、落ち着いて。何もない」

……確かに、表面上何もなかった。円陣は一瞬光を強め、すぐに消えたのだ。

圭一がにっこりと微笑む。

「これで、ひとまずは安心、かな？　それ渡せたし、偶然とはいえ術の強化も出来たみたいだし……ジャスト、時間みたいだな」

「あっ……」

沙紗の目の前で、圭一の手が透け始める。

「圭一くん！」

「すぐに行くから。それまで、……」

待ってて、と言い切る前に、圭一の姿は夜闇に溶けた。

「……来たな」

気配を察し、イーデンが目を開けた。

「地の使い、もう良いぞ。精神体の固定は、我1人でもどうとでもなる」

そっけないその言葉に、傍らで方陣術の詠唱をしていた声が途切れた。それと同時に、剥き出しの左腕に描かれた光の筋もその光量を弱める。暗みを帯びた色であることから察するに、それは刺青（タトゥー）ではなかろうか。

「まさか、こんな風に術をお使いになるとは思いませんでしたわ、エデン様」

溜息混じりの声は、天空のものだ。

イーデン――＜創生＞のエデンは、彼女の言葉に喉の奥で笑った。

「おや、他者の術を使って別の者を喚（よ）び寄せるのがそんなに不思議か？　希代の波動術士の血を引くそなたが、そう言おうとはな」

「波動術は何でも出来る訳ではありませんし、例えそうだとしても私（わたくし）は祖先の力をほとんど受け継いでおりませんから。かの方の血は、我らが娘の末の子に……」

闇を見透かし、天空の目は1人の少女に向けられる。

「本当に、大きくなって……」

泣き出しそうな天空の肩を、地龍がそっと抱いた。

エデンは微笑ましげに2人を見やり、引き合わせた少年と少女に視線を移す。

「……なぁ、天空、地龍。あの2人、妙に気が馴染んでいるな。もう体を交えたのだろうかな？」

「……っ、下品！」

「大地」

からかいの言葉に予想通り噛み付いた地龍に、エデンは軽く笑っ

て手を閃かせた。
「冗談だ。大方、治癒術の苦手な方陣術士お得意の、精気転移だろう？　満月が近いからどうなることかと案じていたが、術士本人が触れたことで何とか杞憂に終わったな。……だが」
エデンの目がすうっと細まり、剣呑さを帯びる。
視線の先には、最早少女の姿しか残されていなかった。夜風に、肩までもない不揃いな髪が揺れている。
「問題がこれからだぞ、天空、地龍。良くない兆しが、世界に満ち始めているようだ」
２つの気配が、身を竦める。
「……では」
「うむ……彼奴が、動き出したようだ。我らが『母』を、『殺めし』者がな」
エデンは２人を気にせず、淡々とそれを口にした。
「彼奴はあれに気がついた。天空姫の成したまえた最後の姫に」
地龍がぎり、と歯軋りする。
「……あの娘を気にかけてやれ。身体的に弱っている上に、防御手段もない。何か調えてやるのが良いだろうな」
そう言うと、エデンは足音なく自らの憑坐（よりまし）が住まう建物に消えていった。
残された２人は、寄り添ったまま動けないでいた。
「……守って、あげられるかしら」
天空が、ぽつりと呟いた。
「やれるのか、じゃない。俺達がやるんだ。他に誰がやる？」
地龍は憤ったように強く言うと、天空――妻の体をきつく抱き締める。
「誰１人として欠くものか。あの子の家族を……俺達の、家族を」

さて、更に場は移り――あるいは戻り――、蒼洋市。
子供達に遅れること数時間、高村　竜也とその妻葉月は、久々の

逢瀬を惜しむかのように、家路を急ぐことなく辿っていた。といっても、車だ。

「りっちゃん、本当に神殿側に頼らない気かな」

もったいなさそうに呟く竜也に、葉月は苦笑で応じる。

「そうじゃないかしら。破門されて以来、存在自体毛嫌いしているもの」

「まぁ、わからないでもないんだけどね？　そうでなくても、彼女にとっては良い思い出ないだろうから」

交差点の信号がちょうど赤に変わり、竜也はブレーキを踏んでサイドを引いた。

人通りなく静かな道路で、カーラジオがやけに耳につく。

「……ねぇ、葉月？」

「ん？」

「りっちゃんは……どうしてあんなもの作ったんだろう？」

何かに焦れたように、ハンドルを指先で叩く竜也。

夫の疑問の意図がわからず、葉月は首を傾げた。

「どうして、って……仕事でしょう？」

「確かに理由の一つだね、それは。そうじゃなくて、世界観の方」

信号が青になり、車はゆっくりと発進する。

「どうして、アレにしたんだろうね？」

「……あぁ」

ようやく得心がいった葉月。その顔に、わずかに陰が差す。

「現実に即しすぎてる、ってことね？」

竜也が頷いた。

「葉月、何でか予測つく？」

「さぁ……付き合いが長いって言っても、理彩は内面を見せない子だったからね。真実何を考えているのかは、全然わからないわ」

妻の肩を竦める気配に、竜也は苦笑を禁じえなかった。

「その唯一理解できるのは、医療研修で海の向こう、か」

「如月君でもわからないかもよ？　本当に何も話さない子だもの、

理彩は……良い子なんだけどね」
葉月は大げさに溜息をついた。
「……そういえば、理彩ってば如月君に連絡入れたのかしら。もしまだなら、私がツテを伝ってした方が早いわよね」
「そのツテが神殿組織内のものならやめておくべきだね。いくら早くても、どこかで意図的に情報を止められかねない。それだけならまだしも……」
「あ、そうか」
「全く、危ないなぁ」
幼い頃からどこか抜けている従妹（いとこ）の言動に、竜也は呆れ顔を見せる。
葉月は拗ねたように頬を膨らませた。
「竜くん、酷い」
「たまの再会でしょ、普段ほっとかれてる身としては意地悪のひとつくらいしたくもなるよ」
一転してにやりと笑う竜也。葉月は申し訳なさそうに俯いた。
「ごめんなさいね。＜門番＞（ゲートキーパー）のお役目で、貴方達に余計な苦労させてしまって」
「別に……仕方ないさ。それも承知で結婚したんだから」
「でも……ごめんね、竜君」
葉月の手が、竜也の肩に触れる。
互いに黙り込む2人。
「本当に良いって。僕はりっちゃんを破門させた裕介ほど短気じゃないよ。……いつ、帰ってこれる？」
「わからない。任期が終わったら、本当に帰れると思うわ」
竜也は呆れた風に息をついた。
「任期が終わって、神殿が君を手放すかなぁ？」
「大丈夫でしょ、意地でも退職もぎとってみせるわ」
茶目っ気たっぷりに葉月は笑ってみせる。
それに釣られて、竜也も頬を緩ませた。

Program 12, clear!

Ｐｒｏｇｒａｍ　１３　音無き狼煙（のろし）

秋。枯色の野辺に、部族の者達が徐々に集まってくる。
今日は、観月を兼ねた収穫祭だ。今年が作物の実りこそ少なかったが、昨年からの蓄えも神々が与えてくださった森の実りもある。丁寧な祝いをすれば、十分に冬を越せるだろう。
「――さまっ！」
ふと呼ばれて振り返ると、今年姉になったばかりの幼い少女が、その両手に零れんばかり――というか、既に何本か零れている――の薄（すすき）を抱えてにこにこしている。
「これで足りる？　もっとつんでこようか？」
「いいや、ありがとう。御苦労様」
薄の束を受け取って礼を言うと、少女は嬉しそうに飛び跳ねた。
「さぁ、祭場へ行こう。祭に遅れてしまう」
「おいも煮て、おそなえするんだよね？　お月さまも神さまもおいしいって言うかな」
「きっとね。ほら、お行き」
薄を１本だけ持たせて背を押してやると、少女はそれを振り回して駆けていった。
「素晴らしいことになっているな。髪に穂がついている」
笑い混じりの楽しげな声。振り向けば、翡翠の瞳を持つ最愛の夫がそこに立っていた。
「あぁ……ようやく見つけた。族長がいなければ、祭が始められない」
「何を言う、族長はお前だろう。俺は元々他部族で、あくまでも補佐だぞ」
「ふふ。元が何であれ、夫婦である以上同じだろう？」
上目を使って見上げると、彼はふと笑って手を取った。
「では……行こうか、――」

ぱち、と沙紗は目を覚ました。
「今の……夢？」
やけにリアルな夢だった、と沙紗は思う。今もまだ、夢の中で触れられた手に、ぬくもりが残っている気がする。
「……っていうか、あの人誰……？」
圭一とよく似た瞳を思い出す。何気なく頬に触れると、妙に熱い。
（欲求不満、ってやつかな……あたしが？）
渋面を作る沙紗。
だが、深く考えることは無かった。こつこつ、とノックの音が聞こえたからだ。
「サーシャ、起きているかい？」
「あっ、はいっ」
慌てて起き上がりガウンを羽織ると、イーデンがタイミング良くドアを開いた。
「やぁ、おはよう。良く眠れた？」
「はい。でもちょっと寒かった、かな？」
わざとらしく肩を抱くと、イーデンはくす、と笑う。
「すまないね。客人がいないときは昼の執務室の代わりに使っている部屋なものだから、どうにも暖房が弱くてね。君が良ければ毛布を足そうか」
「大丈夫ですよ、寝るにはちょうど良いし。……ところで、どうかしたんですか？　朝ご飯前に来るなんて」
ベッドを折り、胸元を掻き寄せて首を傾げる沙紗。
イーデンは神妙な面持ちで沙紗と視線を合わせる。
「うん、それなんだけれどね……どうかな、食事の後に街へ行かないかい？　この間はちゃんと案内してあげられなかったしね」
見る見るうちに沙紗の表情が輝いてくるのを、イーデンは面白そうに眺めていた。

「うわーっ！」
見晴らし塔を中心として彩られた街の姿に、沙紗は歓声を上げる。
「外出にはちょうど良い時期だったね。祭が近くて、店の棚が充実している」
「そうなんですか？」
「うん、これなら、君にいろいろと調えてあげられそうだ」
少女がふらふらと離れていかないように注意を向けながら、イーデンはゆったりと辺りを見回す。一応目的は店を見るためだが、警邏隊での習い性なのか、ついつい暗がりに目をやってしまう。
ふと気がつくと、沙紗は数件先でヴェールの品定めをしていた。イーデンは軽く息をつくと、ゆったりと追いついて手元を覗いた。
「何か気に入った？」
「……あんまり」
残念そうに肩を竦める沙紗。
「ふふっ、じゃあ他のところにも見に行こうか。何があるかな？」
幼い子供をあやすようなイーデンの道化に、沙紗も楽しげに応じる。暫し2人は、日差し溢れる商店街をのんびりと歩いた。
「……それにしても、もったいないなぁ」
ふと、どうしても気になることに沙紗は眉根を寄せた。
「すっごく綺麗なところなのに、油の臭いが気になる」
「あぁ、グリースか何かかな。近場の職人通りに、義体工房が多いから」
イーデンはあっち、と指差してみせる。沙紗はそれを見ながら、首を傾げた。
「そういえば、義体、って何ですか？」
「義手・義足というものがあるよね？　それにモーターや電極を組み込んで、自分の意志で動かせるようにしたものを俗に『義体』と呼んで区別しているんだ。切っても折っても痛くないし血が出ないから、兵士や傭兵から需要が高いんだよ」
「そ、そうですか……」

うそ寒げな表情で、沙紗は視線を彷徨わせる。
（……ん？）
「ん、どうした？」
突然耳を押さえて辺りを見回す沙紗の様子に、今度はイーデンが首を傾げる。
「何か、聞こえたような……」
「……？　私には、何も聞こえないよ？　気のせいではないかな」
「んー……そう、みたいです」
首を巡らせて音源を探していた沙紗が、不満げに鼻を鳴らす。それを見ていたイーデンは、どこか楽しげに喉を鳴らした。
「まぁ、良いじゃないか。……あぁ、ここだ。おいで」
誘われるまま、沙紗はとある店に足を踏み入れる。中には帯剣した兵士や戦士がぞろぞろしていた。
面食らったように、沙紗の目が丸くなる。そんな彼女に、イーデンはそっと耳打ちした。
「良いかい？　あまり動かないようにね」
沙紗が顎を引くだけの首肯をすると、イーデンはにっこりと微笑んで彼女の肩に触れ、奥にあるカウンターへと向かった。
「おや、警邏隊長どの。頼まれていたミスリルの剣、仕上がってますぜ」
「ありがたい、見せてもらえるか？」
そんな会話に耳を傾けながら、沙紗はぐるりと店内を見回した。
様々なものが置いてある。細身の細剣（レイピア）や飾り気のない戦槌（ウォーハンマー）、鏡のごとく磨き上げられた丸楯に、漂ってくる「波」からして何らかの呪文が織り込まれているらしいスーツまである。
（こういうところも、面白いなぁ……あ、あの剣はいわく付きかな？　何かひりひりする）
沙紗は波動術士だ。彼女の目は＜力＞持つものの発する光を捉え、彼女の耳は人が聴かないものを捉える。辛うじてそのオンオフを制御できる少女は、今、＜力＞を全開にして光と音を愉しんでいた。

そちらに気を向けすぎていたのかもしれない。彼女は、後ろから誰かが近付いてきたことに気が付かなかった。

「……っ！！」

がばりと羽交い絞めにされ、口の中に何か詰め込まれたと気が付いた時にはもう遅かった。喉許に、ひやりとした感触がある。

「おっと、動くなよ。死にたくなかったらな」

沙紗は身を竦めた。いくら何でも、2回も刃物にどうこうされてはたまらない。

それにしても。

（何で誰もこっちに見向きしてくれないのよー！？）

声の主は、内心パニックを起こして本当に動かなくなった沙紗を戸口へと引きずっていく。

「お待たせ、サー……サーシャっ？！」

剣を手に振り返ったイーデンは見たのは、閉じていく戸口のドアと、異様な輝きを宿したアミュレットが床に落ちた瞬間だった。

ひくり、と腕の中の気配が動いた。

「どうした？　凪（ナギ）」

起きたのかもしれない、と思い、男は抱き込めた少女の顔を覗き込む。未だ彼岸と此岸（しがん）の境にいるのか、少女の薄く開かれた瞳は虚ろだ。

「……が」

「夕凪（ユウナギ）？」

「何か……懐かしい、気配が……」

不明瞭な言葉が紡がれ、男は不思議そうな顔をする。彼は殺気のような荒々しい強い気は敏感に感じ取れるのだが、反対に日常的な、優しく薄い気配にはとことんまで鈍い。

対して、抵抗なく腕に抱かれている少女は、その方向にすこぶる強かった。極接近戦はからっきしであるものの、一族の血を強く引く術士である彼女は、後方に下がって守られているだけでも特に問

題はない。
「どうしたんだい？」
同じ部屋で本棚を漁りに漁っていた少年が、２人の傍らに膝をついた。そのときには、既に少女は眠りに落ちている。
男はゆるりと頭を振った。
「何でもない、ただの寝ボケだろう。最近、体力がとみに落ちているようだからな。夢と現（うつつ）の境がはっきりしていないんだ」
「本当に？」
訝しげな少年に、男は軽く顎を引いてみせる。
「多分な」
「また自信なさげな」
「お前が守れと言った娘に初めて遭った頃か、その辺りから妙な風は見せていたが……疲れているんだろう、我らがこうなってから、もう大分立つから」
少女が寒くないようにと、自分が羽織っているマントを掻き合わせる男。その様子を見るともなしに眺めていた金髪の少年は、本当に何もないのだろうと判じると、ゆっくりとした動作で立ち上がり、また本棚の物色に戻った。
「……なぁ、お前は先頃から何をしているんだ？」
「ん？　見ての通り調べもの」
男の表情が、苦虫を噛み潰してしまったかのように歪む。
「当たり前のことを返すな。こんなでかい、しかも首都の中心部にあるような大学図書館で、一体何を調べ出そうとしているんだと問うているんだろうが！」
「図書館ではお静かにー。はい」
ふざけた調子で男をいなし、少年は開けたページを相手に見せた。
「読めん、よこせ」
そう言って伸びてくる手に、少年は驚きの表情を見せる。
「おや、目が悪い？　それとも文盲？」
「どちらかといえば後者に近いな。我らはお前達の言う『未開部族』

だ。字を持たない」
「じゃあ、渡しても読めなくない？」
読もうか？　と問う少年に、男は鼻を鳴らす。
「馬鹿にするな。仮にも天空の一族だぞ。一族得意の波動術を用いて情報を読み取るくらい、出来る」
男はリーチを活かして座ったまま本を奪い取ると、ページをじっと注視した。
「……黄泉がえり？」
「へぇ、波動術って知らない文字も読めるのか。これは羨ましいな」
「で、なくて。これをどうするつもりだ？」
訝しみながらも本を返し、男は首を捻る。
「お前に黄泉がえらせたいほど情を向けた相手がいるとはな」
少年は頭を振り、戻ってきた本に目を落とす。
「そういう相手なら話は楽だったんだけどねぇ……僕のせいでこうなったんだ、僕が始末をつけるのが筋ってもんだろう？」
淡々と言葉を並べる少年。男はそこから正確な意図を読み取り、おもむろに口を開いた。
「あの娘か」
ぴくり、と少年の肩が震える。
「ならばその書物はやめておけ。それは死霊返し（ネクロマンシー）の知識だぞ」
「……」
ぱたん。
「流石に、まだ死んではいないもんね……」
うそ寒げな空笑いを零し、少年はその本を本棚に戻す。その様子を眺めていた男は小さく笑い……ふと、真剣な顔を見せた。
「お前、何を躍起になっている？」
今度こそ、少年の動きが止まった。
「……躍起に？　僕が？」
硬い動きで振り返る少年に、男は頷いて返す。

「軽い言動が多いから達観しているように見えるが、端々に焦りが見える。お前は我らのように永い時を見てきたわけでもあるまい。その姿になって、まだそう世代を重ねていないだろう？」
「何を、根拠に」
「根拠など、お前から伝わってくる『波』で充分だ。我等と同じ、人でない身体（からだ）……だが時をそれほど重ねておらず、故にたった１つの何かを見据えて焦っている。そして、何より気になるのは」
反応を見ているのか、男は言葉を切って唇を舐める。
「……お前、何故『感情』しかない？　魂（こん）をどうした？」
決定的な疑問を投げかけ、男は口を閉ざした。
そのまま一言も一音もないまま、２人の間を沈黙が支配する。
それを破ったのは、拗ねた顔付きの少年だった。
「……さっすが、爺様なだけあるね。年の功ってやつ？」
「伊達にいわゆる先史時代から『生きて』ないさ。……それで？」
得意げな男の促しに、少年は向き直って軽く頷く。
「うん……僕は、『彼女を助けたい』っていう、感情の残滓だけで存在し（生き）ているのさ」
「残り滓、ねぇ……」
男はつまらなさそうに鼻を鳴らし、ふと思い立って眉根を寄せた。
「まさかお前、自分の存在を全て犠牲にしたのか？」
「ないないない。それはない」
軽く手を振って否定する少年。
「気が付いたら、この姿でこの時代……っていうのも可笑しいけど、いたんだよ、『ここ』に。心配せずとも、魂自体はすでに転生してる。しかも、すぐ近くにね。もう君達は逢ってるよ、ベテルギウス……いや、“荒波”（アラナミ）？」
少年の意外な言葉に、男は訝しんで己の記憶を漁る。
「わからないかなぁ？」
少年は苦笑いを零すと、外套から片袖を抜いて男に示す。そこには、薄青い染料で刺青が施され、ある種の呪術的な紋様が描かれて

いた。
「？　よくある術士の強化呪文（マジック・スペル）じゃ……っ！」
男は目を瞠った。何故なら、そこには強化するだけならば余分な、使えなければお荷物にしかならない術式が刻まれていたからだ。
それは、生まれながらの方陣術士でないものが、なろうと決心した時刻むもの。そして、男はそれをつい最近、全く同じ形で目にしていた。
「まさか、まさかあいつか？　あの男が？」
軽いパニックを起こした男の脳裏に、聞くともなしに聞いていた言葉が甦った。

『あいつが彼女を……そらを守るって言うから――』

「わかったみたいだね？　そう、『地龍』と呼ばれている彼……『千早　大地』が、転生した僕の『魂』だよ」
「じょっ……っ」
大声を出しかけ、男は慌てて口を噤むと腕の中の少女を見る。眠りが深いのか、少女は身動きひとつしない。
少年は苦笑する。
「冗談でこんなこと言えるもんか」
「しかし、しかしだなぁ……ならばあの娘のことはどうなる？　先頃は筋だの何だのと言っていたが、そちらこそ筋が通らんだろう。お前達……いや、『お前』が言う『そら』とかいう女と、『沙紗』という娘は関係ないだろうが。そうでなくとも、１人を気にかけ、更に１人とは、あー、被害？　負荷？」
「リスク？」
「そう、リスクが大きすぎるぞ」
男は早口でまくし立てると、少年の動向を待った。
「んー……何て言えば、わかりやすいかな。僕が文字通り感情ひとつで動いてる、っていうのは、わかってるんだよね？」

「あ、あぁ。意志持つ残留思念――『幽霊』のようなものだろう？　要は」
少年の唐突な話題転換に、男はきょとんと瞬く。
「それが先頃の話とどう繋がる？」
「これから言うよ。えっと、だからね？　感情ひとつで動いてる…存在してるっていうことは、『本体』が近くに入るとそっちに引きずられちゃうっていうことなんだよ。つまり、彼が如月さんを気にかけてるから僕も気になるの。わかる？」
「……はぁ？」
男は眉をひそめて訝しむ。
「信じなくても別に良いさ。変えようのない事実だし」
「というか、尚更わからん。あの男は何故あの娘に固執する」
「さぁ、それは……、？」
言葉を切り、少年は窓を見た。男も視線を追って窓の方へと顔を向けるが、別段変わった様子は見受けられない。
「どうした、風助」
「……少し、騒がしくない？」
「あぁ、言われてみれば」
確かに、外の喧騒がほんの少し大きくなったように感じる。
「ん～？　何よ、このやかましいの……」
突然、男に抱かれていた少女が不愉快そうな声を上げた。男は予期せぬことに肩をそびやかせる。
「お、起きたのか、凪」
「こんなうるさいの、赤子でもすぐに起きるわ。何事？」
「わからん」
少女の問いに首を振る男を尻目に、少年は丹念に磨かれた窓から外を覗いた。
１人の男が、大層慌てた様子で何かを呼ばわっている。少年は、その男に見覚えがあった。
少年と同じように覗きにきた少女が、あっと声を上げた。

「あれ、南の丘の神官長じゃない。警邏隊長兼務の」
「如月さんを連れてった人だよね、確か。……どうかしたのかな」
2人は眉間にシワを寄せて首を捻る。男はその様子に小さく息をつくと、ゆっくりと立ち上がった。
「『案ずるより生むが易し』という言葉があるそうだが？」

「君達、女の子を見なかったか？！」
大通りに面した図書館から出てきた若者たちに、イーデンは声をかけた。
「女の子？」
「あぁ、膝丈の長衣（ローブ）に白いストールをかけた15、6の娘だ。あるいはフードを被っていたかもしれないが……」
首を傾げた金髪の少年に、早口で問いかけるイーデン。しかし答えは芳しくなく、彼はがっくりと肩を落とした。
「全く、一体どこに行ったというのだ……いくら何でも、お転婆が過ぎるぞ」
呆れた様子で嘆くイーデンの言葉に、少年が片眉を跳ね上げる。
「お転婆？　如月さん、よっぽどのことがない限り走りもしない子だけどなぁ……？」
少年の呟きに、今度は濃緑の長衣（ローブ）にマントを羽織った男が渋面を作る。
「……あの娘、一体どういう性状の持ち主なのだ？　お前らの話が食い違って、全くわからん」
少年があいまいに微笑む。
「まぁ、人によって見える面が違うから、こんなことにも……何してるの？　ミラ」
視界の端でそわそわと周囲を見回す少女に、少年は声をかけた。
少女は頬を紅潮させ、いつまでも落ち着かない。
「……凪？」
「近くに……」

「？」

「近くに、地龍の＜力＞の気配がする……！」

男3人の頭に疑問符が浮かぶ。

「凪、一体どうしたと言う？　まさか、近くにいるとでも？」

「いいえ、そうじゃないわ……純然たる＜力＞……『祈り』だけが固められて……」

少女の視線が空を彷徨い……止まった。イーデンが胸に抱いている包みの上だ。

「どうやら、気配の元はそこにあるようね。それは？」

「……剣だが」

「見せて」

少女が手を伸ばす。が、触れることはなかった。寸前にイーデンが少女を睨み、その手を叩き落したのだ。

「触れるな、死人！　穢れを移されたくない」

「！　気付いて……っ」

「気付かぬと思ったか？　私はこれでも神官だ。……君達もだぞ。何の為に存在しているのかは知らないが、こちらに触れぬ限りは見逃してやる」

厳しいイーデンの言葉に、男は感嘆して目を瞠り、少年は仕方なさそうに肩を竦めた。ただ1人、納得できていない少女はあからさまな反抗心を見せる。

「あんたがそうでもねぇ、こっちは『はいそうですか』で済まないのよ！」

濃い灰色の髪の下、年ふりた紫の瞳が光る。その眼光に気圧され、イーデンは1歩退いた。そのとき、バランスを崩した包みから、輝きを放つペンダントが零れ落ち……ぱちっ、と軽い音と共に、屈んだ男の手に収まった。

「ひょっとして、これか？」

蛍火が宿っているかのごとく、下げ飾り（ペンダント）は輝きを放っている。

「返せ！」
「少し検分したいだけだ。すぐに返す」
いきり立つイーデンを片手で制し、男は瞑目すると自らの＜力＞を解放した。幻の風に吹かれ、俯き気味の前髪が揺らめく。
（ふむ、これは確かに馴染みのある気配だな、懐かしい……）
刺激された記憶中枢が男の脳裏に描き出したのは、彼らが敬愛していた「天空の一族」の族長、「天空」の伴侶たるものの姿だ。瀕死の父親と彼を集落に匿い奇異なる縁（えにし）を結んだ時、彼の部族は既に散り散りになっており、言葉が通じないので暫くの間は宥めることはおろか話を通じることすら難しかったことを、昨日のことのように思い出す。
（懐かしいなぁ、地龍……天空と共に、最後まで我らを護ってくれた。最後まで我らを信じてくれた）
記憶の海で、男は人知れず涙を流す。
（しかし何故、今更お前の『祈り』をこの手にするのだ？　何故……）
天空は、もういない。彼らが護ろうとしてくれた「天空の一族」の、完全なる一族の血を引く直系も、既に存在しない。歓喜とともに地龍の血が一族に混じり、また一族自体が滅ぼされたとあっては、ほんの数人生き残ったもの達が血を守るのは難しかったのだ。
不意に、波紋が広がる。これは、最愛の妻の気配だ。口にすればきっと怒られるので彼女には内緒にしてきたが、娘息子たちよりも、彼女のことを愛している。
（どうした、夕凪）
（どうしたもこうしたも、遅いから）
視界に入る自分の手と、半身ずれて同じ手が目に映る。ということは、彼女は自分達2人だけに通じる波動術の共鳴による感覚共有と、今の身体になって手に入れた「実体なし」（ノーバディ）としての憑依能力を混雑して遣っているのだろう。
（すまない。実世界どれほど経った？）

（刹那（７５分の１秒）ほど）
（もうそんなにか。しかしまぁ、『少し』にはまだ余裕がありそうだ）
また、波紋が広がる。どうやら夕凪が、男のおどけた物言いに笑ったものらしい。
（まぁ、それはともかく。ちょっと気になったことがあったので追いかけてきたの）
（気になること？）
（えぇ、些細なことなのだけれど……）
（言ってみてくれ）
（……新しすぎる、気がするの）
妻の言葉に、男は面食らった。
（何と……ではこれは地龍のものではない、ということか）
こくん、と彼女が頷いた。
（では、誰のものだろうかな？　凪、気配を辿れるか？）
問うと、自信たっぷりに笑む気配が返ってくる。
（私を誰だと思っているの？『探査』（サーチ）にかけては天空にだって負けないわ！）
三度（みたび）、波紋が広がる。しかし今度のものは男の内には響かず、空間に直接広がっていった。
幾重にも幾重にも、音なき軌跡が広がっていく――外に向かって。
（……この街の中に、同じ＜力＞の気配を感じるわ。それに混じって、風の匂いもする……）
（風？）
（枯れた喉を潤すような、涼やかな風の匂い……、？）
（……？）
彼女が、何かを違和感として捕らえた。男も一瞬遅れてそれに気付く。
（これは？）
男が眉間にシワを寄せ、夕凪が盛大に溜息をついた。

「……何してるの？　あの娘……」
「？！」
側で2人の様子をうかがおうとしていた少年が、予期していなかった少女の言葉に驚き、肩をそびやかせた。イーデンは3人の様子を憮然とした表情で見つめている。
「……風助、あの娘は後ろ手に縛られて転がされているのを喜ぶタチか？」
一足遅れて覚醒した男が、ペンダントを手の内で転がしながら問う。
「な、何を突然……、っ！！」
少年が息を飲んだ。
「一体何の話だ、唐突に」
焦れたイーデンは噛み付こうとするのを制し、男は肩を竦めた。
「さしゃ、と言ったな？　あの娘。どうやら何者かに囚われているようだ」

（人の話し声……）
沙紗が目を覚ましたのは、窓の閉まった薄暗い部屋の中だった。体がきしむ。どれほどの時間、この埃っぽく硬い床に転がされていたのだろう。沙紗は不愉快そうに眉をひそめる。
「……！」
「……、……！」
唯一の出入り口と思われるドアの向こうから、何かひどい剣幕でがなり立てる声が聞こえていた。恐らく、この声で起きたのだろう。言葉としてはちゃんと聞こえてこないが、音量はかなり大きい。
沙紗は意識的に目を閉じた。起きていると知れたらどんな目に合わされるかわからないし、集中したかったせいでもある。そういう点で彼女は冷静だし、経験者だった。
（あの時は、3日経ってた。今回は……お腹空いたけど、耐えられなくはない）

暗がりで目を閉じると、意識と無意識の境がわからなくなってくる。思考と記憶の境が混ざり始め、似て非なる光景を思考の海に浮かび上がらせた。

アメリカでの記憶だ。

アメリカ合衆国は豊かな大国であり、大多数の人は満足な平和と生活を謳歌している。しかしながら犯罪も多く、誘拐（Ｋｉｄｎａｐｐｉｎｇ）は多発ランキングで3指にはいる。更に残念なことには、そのまま行方不明（Ｍｉｓｓｉｎｇ）および変わり果てた姿になることも多い。他の子供たちとともに3日で、しかも生きたまま救出された沙紗は非常に幸運だったのだ。

そのころから、沙紗は他人にあまり関心を持たなくなった。人付き合いに際し、極端な選り好みをするようになった。以降に出来た友人も多少いるものの、沙紗はあまり深入りしようとはしない。

（……って、今はそんなことどうでも良いから。集中しなさい、沙紗！）

心の中で自分を叱咤し、沙紗は自分にしか理解できない波動術のスイッチをＯＮにする。

瞬間、沙紗の目に映っていた世界が一新された。光はより強く、闇はより深く、現実と幻がない交ぜになる。

（さて、あの声は一体どこから聞こえてくるのやら）

微かな空気の振動を辿り、沙紗は耳を澄ました。

（『――ったく、本当に使え――、えぇっ？

サ――女（じょ）を攫ってこいと似顔絵まで渡し――のに、フタを開けてみれば人違い！　どう責任をとるつもりだ！』）

ひくり、と沙紗の頬が引きつった。

（……じゃ、何よ。あたしは人違いで攫われたって訳？　良い迷惑！）

殴り込みをかけたい気持ちに駆られたが、沙紗は何とかそれを押しとどめ、努めて体を弛緩させる。

そこで、沙紗の思考に何かが引っかかった。

（『サ……女』……彼らは、誰が狙いだったの？　じょ、女……長女？　バカか、あたしは。攫ってくるような人物だっての……あたしに似た、攫ってメリットがあるような人、多分お金持ちよね。……ん？　お金持ち？　それはともかく、ハイクラスの家か、脅迫が効くような相手なのは確かかな。じゃあ、名前は？　さ、サ……サシャ、はあたしの名前……ん、『サのつくハイクラスの人』？）

『サーリアおねぇちゃまじゃないの？』

不意に思い出した幼い少女の声に、沙紗は目を見開いた。

「出奔中のサーリア＝リーゲル次期パスティア女王陛下……！」

パスティア皇国は神事・軍事・行政の全てを女帝が司る国であり、次期皇位継承者は皇座に就く前に数ヶ月から数年の間同盟諸国を遍歴するのだという。そして今、秘密裏ながらその時期なのだということを、セレスタイン＝リーゲル――彼女が皇女だと聞いたとき、サシャ達は本当に驚いた――を送り届けた際の返礼時に教えられた。

なるほど、それならば自分が間違われたのも頷ける。何しろ沙紗とサーリア皇女は、血の繋がった妹達でさえ一目二目ではわからないほど似通っているのだから！

「こ、こうしちゃいられないっ……！」

誰かに、警告しなくては。

沙紗ははやる気持ちのままに身をよじった。が、ころころ転がってばかりで、起きあがるのもままならない。

「も、もうちょっと緩くならないかな、このっ……」

「手伝おうか、お嬢さん？」

うつ伏せになった沙紗の耳に、恐怖を運ぶ声が届いた。

「いつから起きていたのかな？　サーリア王女ととってもよく似たお嬢さんは」

先ほど怒鳴っていた声の主は、猫撫で声と共に沙紗の髪を撫でる。その手はつぅ、と下に下りてくると、少女の小さな頤（おとがい）をぐっと引き

上げた。
「おやおや、これは」
憐憫の表情を浮かべる男と、怯えに凍りついた少女の顔が正対する。
男が微笑んだ。
「怖いねぇ、可愛い可愛いお嬢さん？　怖くなくなるお薬はいかが？」
沙紗は必死で首を横に振る。
「おやおや、それは残念だ……代わりに薬を嗅いでもらおうか」
男の手がさっと挙がると、手下の1人がコンパクトのような容器から布切れを取り出した。乱暴に沙紗の腕を取った手下は、一言も発さぬままそれを沙紗の口許にあてがおうとする。
「いっ、嫌ぁ！　誰かっ……っ」
布切れの「薬」は、クロロホルムのような強い麻酔の類らしい。抵抗空しく、沙紗の意識は急速に闇に落ち込んでいく。
「無駄だよ、君の望む『誰か』なんてここにはいない。せめて君を高価な値で買ってくれる、優しいダンナを望むことだな……最も、それが君の望む優しさとは限らないけれど」
くく、と男の喉が鳴った。
「おい、お前等。くれぐれも『商品価値』を落とすような真似をするなよ。こんな上物、競りにはなかなか乗らないんだからな」
圭一くん、助けて。
冷酷な男の声を聞きながら、意識の最後の一欠けらで沙紗は祈っていた。

どくん、と、不自然に心臓が跳ねた。
（何だ……？）
2時間目の授業中、圭一はうとうとした状態から一気に覚醒した。普通なら、それは何のこともない。頬杖が外れたとか首が落ちたとか、よくあるからだ。

しかし、今のはそれと違う。いつもなら気まずいような心地と引き替えに動悸は落ち着いていくが、今日はいや増すばかりだ。

「じゃあ、次の問いを高村……高村？」

数学教師の中立（なかだて）が、胸を押さえて蒼白な顔をした圭一を見咎めた。それを機に、周囲の生徒達が圭一を見やる。

「どうしたの、高村」

隣人の不穏な様子に、相沢　愁が席を立った。

「……高村」

「わ、わからない。何か、心臓が……」

愁が助けを求めるように中立を見る。中立は心配そうな顔で圭一の様子を見に来た。

「持病はなかったよね、高村？　相沢は、前兆か何か、見た？」

「いいえ、急にです」

「どうしたのかね……一応病院に行ってらっしゃい。早退届書いてあげるから」

その言葉に、圭一は困ったような視線を返す。

「っても俺、単位……」

「そんなもの、補習のテストでこの間のごとく良い点取ったら埋めてあげられるから。良いから早く行っといで、ほら」

中立は焦れたように圭一の腕を取って立たせると、彼の重いスポーツバッグを持たせて教室から追い出した。

圭一は中立に頭を下げ、のろのろと廊下を歩いていく。彼の姿が見えなくなった頃、中立はようやく息をついた。

「あー、やれやれ。ほら皆、授業続けるよ。席に……」

しかし、中立の言葉は中途で途切れた。圭一が消えた方向と逆、南校舎の方から駆けてくる足音のためだ。

「こらー、授業中だぞ」

「す、すみませ、ごめんなさい……」

足音の主は、眼鏡をかけた小柄な少女だった。彼女は廊下に顔を出して中立の前で止まると、息が整わないまま何かを言おうとして

咳き込んだ。
「ほらほら、落ち着きなさい。どうしたの」
中立に背中をさすられ、少女は何度も頷く。そして、一際大きく深呼吸すると、急いた様子で口を開いた。
「あ、あの、ケイ……じゃなくて高村先輩、いますか？　お話があるんですけど」
「高村？　あぁー……さっき帰したところなんだよ、調子悪そうにしててね」
「さっき……」
呆然とする少女。その目は見る見るうちに潤み、大粒の涙が零れ出す。
今度は中立が慌てる番だった。
「ほ、本当についさっきだから！　今から行けば追いつくかもしれないから、ね？」
「中立先生、僕が彼女と一緒に行きましょうか？」
おろおろする中立の肩を叩き、愁が声をかける。
「よく高村と一緒になるので、通りそうなルートも大体わかりますし」
「……お願いするよ、生徒会役員さん」
愁の助け船に乗り、中立はほっと息をついた。

「――何だって？」
信じられないものを聞いた、とばかりに眉をひそめ、愁は足を止めた。
「だから、沙紗さんが大変なんです、ってば！」
姫月　怜香は愁を数歩追い抜き、振り返って大声を上げる。
「冗談だろう？　神殿にいる限りは安全だって、如月さんのおばさんが……」
「それこそ冗談でしょう！　毎日毎日暇してられるほど、大人じゃないんですよ？！」

その言葉の意味に、一拍遅れて思い至り、愁は舌打ちした。
「街に出たのか、買い物だかなんだか知らないけど……まったく」
うんざりした様子の愁。彼は長々と溜息をつくと、改めて怜香に向き直った。
「そう言えば、どうして如月さんが大変だって知ったの？」
「『幻視』（ヴィジョン）です」
「幻視？　……あぁ、君は『予見者』なのか」
怜香は頷く。
「失礼だけど、制度はどれくらい？」
「十中八九は当たります。母ほど頻繁ではないですが」
「そう……それで、何でその一大事を僕らじゃなくて高村に？」
愁の問いは、彼にとっては極当たり前のものだった。彼の所属している蒼洋学院生徒会は、文字通り学内で最上位のはずであり、故に最高のトラブルシューターであるべきだ、というのが彼の持論だからだ。むろん、そこには自分が＜門番＞（ゲートキーパー）であるという自負も含まれている。
そんな彼の言葉に、怜香の顔は見る間に険しくなってくる。
「女の子の感情の機微に鈍感な人に、沙紗さんを助けに行ってほしくないですっ！　見せ場はヒーローに譲るべきでしょうっ？！」
「はぁ？」
思いっきり乙女チックな――彼にとっては何故そうなるのか意味が不明な――言葉に、愁が眉をひそめたその時。
「きゃっははは！　愁の負けだねぇ」
とっても楽しそうな笑い声が、２人の頭上から響いた。
「……麗（うらら）？」
すぐ傍の、木の上からだ。麗は大振りの枝に寝そべるようにして、まだにやにやしている。
「うんうん、確かにお姫様は騎士（ナイト）が助けに行くべきだよ。ね、くーちゃん」
「その呼び方はよせ」

「結城っ、いつの間に……！」
気がつかないうちに背後に立っていた国彦の姿に、２人は絶句した。しかもその隣には、身の丈に余る杖を弄ぶ白衣姿の女性までいる。
「杉原さんまで！」
呆れた様子の愁に、図書館司書・杉原　和音（かずね）は鷹揚に頷いた。
「中立先生からお話を聞いてね、我らが＜至高天＞（プリムム・モビーレ）の神官長は、＜門＞（ゲート）を開こうと決心されたそうだよ」
ね、と同意を求める和音に、生真面目な表情で国彦が頷く。
「例の救助作戦の決行が、少し早まっただけだ。如月さんも気にしないだろう。愁、高村を捕獲して祭場に来い」
「面倒事は僕かい、あーあー」
「仕方ないだろう、姫月さんには事の次第を聞かなければいけないんだから」
国彦から視線を向けられ、怜香はぴし、と背筋を伸ばす。
和音はその様子に小さく笑い、少女の肩を軽く叩いた。
「そんなに硬くならなくていいから、ね？　高村少年が来る前に、簡単な説明をしてくれれば良いの」
「は、はいっ」
ガチガチの怜香に、麗が吹き出す。そして、一旦枝に座り直したかと思うと、軽やかな動作で地上に降り立った。
「さ、行きますか！　準備もあることだし」
「どこへですか？」
怜香の疑問に、麗は茶目っ気をたっぷり込めてウインクを返した。
「図書館棟の地下深く、我らが＜至高天＞の祭場へ！」

先人の遺した書物曰く、世界には礎（いしずえ）が在るのだという。その数、見えるものが１２と、隠されしものがひとつ。
そしてその礎には、世界を支える精霊が住まうのだと。

怜香はその内のひとつを目の当たりにし、呆然としていた。
「……ここ、本当に蒼洋学院ですか……？」
彼女をどう扱っていいのかわからず、先導してきた国彦が頭を掻く。
彼は今、祭礼用の長衣（ローブ）を着ていた。透き通るほど淡い、アクアマリンのような色合いのそれは、要所要所に緻密な刺繍が施されている。
遠巻きに2人を眺めながら、同様に長衣を着込んだ和音は着々と準備を進めていく。
「結城君くん、方陣の開く先はどうしようか？　＜燭台＞（メノラー）か＜知恵＞（ホマー）を無理矢理開かせるかい？」
「如月本人の正確な位置がわからない以上は、それが最も安全なのかもしれませんが……姫月さん、君が『幻視』したのはどういうものだったか、もう1度言ってみてもらえないか？」
水を向けられた怜香は、眉間にしわを寄せてこめかみを叩く。
「木造の小屋と、そこから出てくる男の人が何人か……その内の大きな1人が、沙紗さんを担いでいます。そこで場面が切り替わって、次に見えたのは大きな会堂みたいな建物でした。身形の良さそうな、でもなんか下品に見える人達が集まってきていて……それで終わりです」
「手がかりがほとんどないな……いや、やろうと思えば絞り込むくらい出来ない訳ではないが、フィアート国はそんなに小さい国じゃないから時間を食いすぎる……」
「でも、急がなければ相当にマズい状況ではあるよねぇ。下品で身形のいいやつらが集まって何するって、やっぱり闇オークションじゃないの？」
「！！」
和音と同じく準備をしていた麗の言葉に、一同の顔が緊張に引きつった。
「どうする？　くーちゃん。適当にアタリをつけて、飛ばす？」

「いや、見当違いの場所だったらフォローしようがないから、それは避けるべきだろう」
「だけど場所を絞り込むだけの時間はない……。これはもう、天然方陣術士の高村くんと、彼女の繋がりを信じるしか方法はないかもしれないね、結城くん？」
「しかし……」
３人の議論を眺めながら、怜香はぼんやりと考えていた。先ほど国彦達に説明していた「幻視」のことである。
怜香は彼らに、ある決定的な一言を言っていなかった。
（『圭一くん、助けて』……）
怜香の「先見」は、ほんの少し先の未来――もしくは限りなく未来に近い今――を視る能力だ。これだけでも全国屈指の名門教育機関から招聘を受ける＜力＞だが、彼女のそれは輪をかけて特殊なものだった。
普通、「先見」は視覚情報のみを手に入れるものだが、怜香はそれに加え、聴覚情報を手にすることもある。いつだったか、部活中に部室へ飛び込んできたボールによって誰も怪我することがなかったのは、これのおかげだ。
「結城、高村連れてきた！」
怜香は弾かれたように、いつの間にか俯いていた顔を上げた。
視線の先にある扉を乱暴に開いたのは愁だ。その後ろに、どこか青褪めた顔色の圭一がいた。
「話は、軽く相沢から聞いた。いつでも行けるぜ」
自らを労わるように胸を押さえてはいるものの、その笑みが自信に満ちている。
国彦はその様子に安堵したものの、不安の表情を覗かせた。
「大丈夫か？」
「……、あぁ。どうせ術も俺もそろそろ限界だった。ちょっと早まっただけさ」
「それもあるが……」

なおも追いすがるようにかけられた言葉で、圭一は既に敷かれていた方陣へと踏み込む寸前で止まる。
「何だよ」
国彦を振り返る圭一。石造りの薄暗い部屋の中、彼の翡翠の瞳ばかりが明るい。
「沙紗を連れ帰るのは俺だ。誰にも、譲らない」
そう言うと、圭一は肩にかけたバッグから透明な棒を取り出し、それを弄りながら方陣に入った。途端に方陣を構成するラインが、淡い光を発する。
国彦は大げさに頭を振って、溜息をついた。
「わかった、まかせよう。どうせ如月の居場所もわからなくて、お前とのつながりだけが頼りなんだしな」
その面倒くさそうな物言いに、その場にいた誰もが小さく吹き出した。
（らしくない……恐らく自分が行きたかったんだろうねぇ、彼は）
和音が微笑ましげに目を細め、国彦を見やったその時、方陣が鮮やかに輝きを放ち始めた。どうやら圭一の方の準備が終わったらしい。その口許が何かを呟いているが、光が生み出す幻の風にかき消され、怜香達の耳には届かない。
怜香ははっとして身を乗り出した。境界を形作る魔法円の外陣に触れかけた彼女の細腰を、和音が慌てて両手でもって捕まえた。
「ケイ、沙紗さんを助けてあげてください！　沙紗さんを本当の意味で助けられるのは、彼女が助けを求めた貴方しかいないんです！」
圭一は一瞬きょとんとしたが、すぐに口許を綻ばせて親指を立ててみせる。と同時に、彼の姿が一際輝く光に飲み込まれた。
後に残ったのは、石造りの薄暗い祭場と、怜香達５人。
「……情報隠匿かい？　姫月さん」
疲れた様子で問う愁に、怜香はぷいっとそっぽを向いた。
「だから言ったんじゃないですか、『女心のわからない人に行って

ほしくない』って！」

　愁の首ががくっと落ちたのを、女2人が笑う。さしもの国彦も笑いながら、高らかに両手を打ち鳴らした。

「さぁ、後は放課後になるのを待つばかりだ。大人しくしてＨＲをとっとと終わらせてもらって、出来るだけ早く『こちら側』から高村のサポートをしてやらなければな」

Ｐｒｏｇｒａｍ　１３，ｃｌｅａｒ！

Ｐｒｏｇｒａｍ　１４　予兆

「……本当に、ここなのか？」
イーデンは、目の前に広げられた地図の１点を指し、眉をひそめた。
それを見た少女が、尊大な態度で鼻を鳴らす。
「信じる信じないはあんたの勝手よ。疑わしいなら部下を使って適当に探せば？」
ぐっと詰まるイーデン。少し離れて様子を見ていた男２人が、顔を見合わせて苦笑いを零した。
（あぁ、嘆かわしい。この街の守護たる私がこのザマか……）
現在、４人は街の中央に程近い警邏隊の詰所にいる。イーデンはそこの会議用のテーブルの上座――普段から慣れ親しんでいる、隊長の席だ――で盛大な溜息をついた。
対して、少女はテーブルの上に斜（はす）に腰掛け、地図を睥睨している。
「で、どうするの？　急がないとマズいと思うけど」
「……どういう意味だ」
訝しげに眉をひそめるイーデン。
「あの娘は手を縛られて床に転がされていた。ということは、傷がついても攫った者にとっては特に問題は無いということだろう。どうなるかわからんぞ」
２人の様子を見かねた男が口を挟むと、それを合図としたように、金髪の少年が動いた。ひそやかな足取りで、地図を置いたテーブルに近付く。
「なら、考える暇はあんまりないね。どうつっこむか、……？」
ふと、少年が顔を上げ、戸口へと目を向けた。
「……騒がしいわね」
外の喧騒を聞きつけた少女が少年に追従したのと、木造の簡素なドアが開いたのとはほぼ同時だった。

「失礼します、隊長！」
「何事だ、カーティス」
カーティスと呼ばれた男はイーデンに軽く頭を下げる。そして、何とも言いにくそうな顔で口を開いた。
「その、ですね……おかしな格好の男が、最寄りの神殿の神官長に会わせろ、と言ってですね……確か、イーデン隊長がそうですよね？」
「あぁ……確かに、最寄りの神殿は＜燭台＞（メノラー）で、私が長だな。神官長ではなく、祭司長だが」
イーデンは少し考えるそぶりを見せると、椅子に深く座り直して片手をひらめかせた。
「会おう、通してくれ」
「はっ」
カーティスは敬礼すると、身をひるがえして出ていく。暫しの後に戻ってきた彼が連れていたのは、黒い外套を着込んだ若い男だ。血の気のあまりない顔色と翡翠の瞳が、妙に目を引く。
どこの国の者かわからない、というのが、イーデンの抱いた第一印象だった。ベルトを多用した細腰の長衣（ローブ）は、フィアートやその周辺のものではない。顔立ちの印象としてはパスティア人を思わせるが、全体的な雰囲気は到底結びつかない。
（変な言い方だが、『世界観に合っていない』男だな……）
そこでふと、目の前の少年の様子がおかしいことに気が付いた。俯き加減でこちらを見ていない黒衣の男を凝視して、口をぱくぱくさせている。
「……たっ」
「？」
「高村！！」
ぎくしゃくとした動きで男を指差し、少年は叫んだ。それに反応した男は顔を上げ、目を丸くすると胸を押さえていた手を少年と同じように動かす。

「平泉?!　お前何でっ……!」
「それはこっちの科白だ!」
どうやら互いに互いの存在が意外だったらしく、2人はイーデン達のまえで大騒ぎを始めた。
呆然としているイーデンを尻目に、少女はテーブルを降りて永年の伴侶に寄り添う。
「……気が付くと思う?」
耳打ちされた男は、一瞬意味を図りかねた。だがすぐに思い至り、肩を竦める。
「あいつは見た目で判じる性分のようだ。だから多分、気が付かない」
その言葉に、少女の頬が緩む。どうやら、正体が露見することを恐れていたようだ。男は宥めるように彼女の肩を軽く叩き、まだ騒いでいる2人を眺める。
いい加減耐えかねたイーデンが、盛大な音を立ててテーブルを殴った。
「騒ぐ前に用件を言え!　何もないならつまみ出すぞ!!」
見事、水を打ったように部屋は静まった。
興奮して頬をほんのり紅色に染めた黒衣の男が、気まずさにこほんと咳払いをする。
「……あんたは?」
「＜燭台＞（メノラー）を預かる祭司長、イーデン＝トラウセンだが。そちらが会いたいと言うから時間を割いたのだぞ」
居丈高なイーデンに、男はばつが悪そうに前髪を掻き上げた。
「えーっと、だな……」
「用件の前に名を名乗れ」
「え?　あぁ、高村。高村　圭一。用件は至って単純だ……が、その前にひとつ」
男は一瞬口を閉じ、眦を決してイーデンを見据えた。
「どうしてあんたが、沙紗に渡した『言霊珠』（ことだま）を持っ

ている？」
「……っ、？」
イーデンは動揺を抑え、平静を装って首を傾げる。
「何のことだ？」
イーデンの胸の内には、少女の安全を願ってはやる気持ちがあった。だから、目の前の男が何者かわからない以上、話すべきではないと考えたのだ。
が、結果として、イーデンは男を――圭一を、怒らせることになってしまった。そこにいる一同が誰も対応できない程、恵一は素早く動く。
「……っざけんじゃねぇぞ、てめぇっ！」
「高村！」
イーデンの胸倉を掴んだ圭一に、少年が血相を変えた。
「俺は自分の＜力＞の軌跡を辿ってきた。それでここに辿り着いたんだから、あんたが『言霊珠』を持っている以外に考えられない！　沙紗をどこへやった？　無事じゃなかったらタダじゃ済まさないぞ！！」
圭一はひと息でそう言うと、肩で大きく息をつく。
対するイーデンは少しの間呆気に取られていたが、その間に、圭一から発される気配が妙に馴染みあるものであることに気が付いた。懐を探ると、ペンダントは未だに幽かな蛍光を放っている。
「サーシャを、探しに来たのか」
先程とは打って変わって穏やかに問うイーデン。圭一は一瞬、きょとんとした。
（サーシャ？　……あ、『沙紗』か）
そこで圭一は、今更ながらに自分が当然のように日本語を使っている事実に気が付いた。
パソコンを通しているのならば、翻訳ソフトで説明がつく。だが、今の自分は生身だ。ということは……彼らと自分は同じ言語を操っているということになる。

ありがたいが強烈な違和感と共に、圭一は頷く。
「……ん、あぁ。探しに来たというか、迎えに来たというか……」
「そうか。なら……これが君に返そう。我ながら、神経を尖らせすぎていた」
イーデンは圭一の手をそっと振りほどくと、その手にペンダントを落とし、「疑ってすまない」と軽く頭を下げた。圭一も応えて会釈を返す。
息を詰めていた3人が、ほっと息をつく。
「……そういえば、さ。高村、どうしたの？　何か調子悪そーに見えんだけど」
金髪の少年――平泉　風助は、圭一の肩を叩いてそう問うた。
圭一は軽く肩を竦め、返されたペンダントを自分の首にかけて一息ついた。
「ん、ちょっと、な」
ごまかすように軽く笑い、圭一は言霊珠（ペンダント）をぐっと握り締める。
（頼むぜ、あともう少し保ってくれ）
この言霊珠に宿る＜力＞は、元々は彼のものだ。だから、ギリギリまで削られた魔力を多少は補ってくれるだろう。最も、魔力を保つために削られた体力はどうにもならないだろうが。
上がり気味の呼吸は、何とか気にならない程度にまで落ち着いた。
そんな圭一の様子を、ずっと観察していた者がいる。濃い灰色の髪に紫の瞳を持つ、あの少女だ。
（どうして、どうして地龍の＜力＞と同じ気配を、こいつが持っているの……？）
圭一はそのことには、少しも気が付かなかった。

木立の茂みに隠れるのは、性に合わない。
圭一はイーデンの隣で身を縮めながら、人知れずそう思った。
「で、さ……警邏隊の奴らはともかく、何であんた達まで来たんだ」
「単なる気紛れのお節介さ。気にするな」

濃緑の長衣（ローブ）をまとう男がひらひらと手を振る。圭一は小さく鼻を鳴らすと、手元の透明な棒を手持ち無沙汰に弄りまわす。
「……そういえば、さ。高村」
「ん？」
「それが、君の相棒？」
金髪の少年、風助が手元を指し示すのに、圭一の思考は一瞬空転した。そして、数秒経ってからようやく問いの理由に思い至る。
「……あ、そうか。俺、魔導の授業の時にはこいつ使わないもんな」
「うん、だから見覚えなくて、確証無かったんだよねー。短いし」
「持ち運びには便利だぜ？」
おどけて棒に口付ける圭一。少年は思わず吹き出した。
「似合いすぎるからやめてくれー！」
笑い転げる少年を横目で見ながら、イーデンは額に手を当てて盛大な溜息をついた。
「……大事の前に少しは静かに出来んのか、お前達……」
全く同様の理由で同じく溜息をついた少女が、ふと片膝に乗せていた頬杖を外して顔を上げる。
「凪？」
少女の様子に気がついた男が、その肩に手を置いて視線を追う。
今彼らは、少女の尽力によって目星を付けた公会堂のような建物の裏手にいる。フィアート国屈指の商家である「オリエンタル商会」お抱えのオークション会場らしい。イーデンにとっては、事あるごとに神殿へ莫大な寄付を寄越してくることで、名前だけは馴染みあった。
その建物の裏口に、荷車を押した一団がやってきていた。荷物は棺のように大きな、木箱。
「行くか？」
男が得物の柄に手をかけ、振り返らぬままイーデンに問う。
イーデンはかがんだまま1歩前進し、男を手で制した。
「待ってくれ、不正を働いているという現場を押さえたい」

「あんたこの後に及んで信じてない訳?!」
いきり立つ少女。イーデンはかぶりを振って返す。
「公的権力というのはそういうものだ。現場か証拠を押さえなければ、介入できない」
心底うんざりした風のその言葉に、圭一と風助が顔を見合わせる。
「ケーサツも大変だなぁ」
「そうだねぇ、事件にならないと動けないなんて」
そんなのんびりした会話をこっそり交わし、2人はスタートのタイミングを決めるはずのイーデンを見やった。
「逆に言うと、事件ならねじ伏せられるんだよね」
「そうだな」
圭一は特殊警棒を扱うかのごとくに棒を振った。音もなく自身の身長以上にのびたそれを確認すると、抱え込むように身に添わせ、呼吸を数え始めた。

場内が暗くなり、何かが運ばれてくる気配がすると、客達は色めきたった。
普段はまっとうなもの――相当に出自が怪しいものばかりだが、あえてそう表しておく――を出品しているこのオークションだが、この演出が入ると違ってくる。
「今日の目玉は何なのだろうね?」
「珍獣かしら。ねぇあなた、良いものでしたら是非落札してくださいね」
そんなひそやかな会話が、あちらこちらから聞こえてくる。
彼らは皆、悪事の片棒を担いでいるとは思っていない。あくまでも「善意の第三者」だといってはばからない者達ばかりだ。
興奮と歓喜が最高潮になるのを見計らい、オークショニアはスポットライトを壇上の「商品」に当てた。それは、深紅のベルベットに隠されている。
「皆様、大変お待たせいたしました。こちらが本日の目玉でござい

ます！」
　ばさりと音を立て、大判の布が取り去られる。客席からは歓声とどよめきが溢れてきた。
　それは、長椅子に眠る少女だった。
　白皙の美貌、とはいかないが、象牙色の肌は瑞々しく、張りがある。濡れ光るような黒髪は、比較的薄い髪色の多いフィアートではロマ（流浪の民）にすら珍しい。伏せられた睫毛は長く、唇はほんのりと色付いている。
「まぁ……」
「これは、なかなか」
　驚き半分、戸惑いが半分、と言ったところか。場内は静まりつつあるが、さわさわと小声で論議する気配は消えない。
「皆様、ご安心ください。これは『生き人形』、動き出したとて何の不思議もございますまい。落札し、お持ち帰りいただいた後はどのようになさっても……」
　オークショニアのその一言で、独身貴族を気取っている男達の目の色が変わった。
　オークショニアの口上は尚も続く。
「しかもこの『人形』、かの麗しの国、パスティア皇国の姫君と瓜二つ！　これほどの品は大陸広しといえどもそうはありますまい！　さぁ、オークション開始です。初めは５０万から！」
　その値段に目を剥く者も、いるにはいた。物価の比較的安いフィアートでは、５０万というのは本当に大金だ。これだけあれば、全身をぎりぎりまで義体に、しかも手に入る最高のものにしてもまだおつりが来る。
　だがそれも、歯止めにはならない。
　札が次々に上がり、あっという間に値が大台に乗った。それでもまだ上がる。
「１５０万！　１５５、１６０、いませんか？　おられなかったら……」

「いないのならば、私が２００出そうか」
落札が宣言される寸前、客席の背後から光が指した。
「今のは南の丘の……！」
「警邏隊？！」
「馬鹿なっ」
警邏隊が突入してくるという予期せぬ事態に、場内は瞬く間に狼狽の声で満ちていく。中には、オークショニアを罵る声もあった。
イーデンは腰帯に差している軍刀（サーベル）を鞘ごと引き抜くと、切っ先を突き立てるように絨毯張りの床をついた。
「ご一同、お静かに。悪足掻きはせずに、私の指示に……、！？」
場内を見渡したイーデンが、言葉を詰まらせる。視界の先には、オークショニアをやっていた男の姿。
その手は今にも、眠れる少女に――沙紗に、触れようとしている。
（人質にする気か？！）
はやる気持ちのまま、イーデンは駆け出そうとした。が、１歩踏み出しだところでバランスを崩す。誰かに押されたのだ。
「……っ！？」
思わず中空を見上げたイーデンの視界は、その一瞬だけ闇に閉ざされる。それが圭一の長衣（ローブ）――黒いロングコートだと気がついたときには、彼はイーデンを飛び越え、大きなストライドを活かして沙紗の許へと駆けていた。
男と圭一、どちらの手が先に少女に触れるか。距離が近い分、男の方に利がある。
圭一の瞳が激情に煌いた。
「沙紗に、触るなぁっ！！」
裂帛の気合とともに、圭一の左手から光が零れる。それは瞬く間にふくらむと、見た者の目を眩ませた。
「高村っ！」
焦った金髪の少年が叫ぶ。呼応したように光は収まると、黒衣の少年はぐったりとした少女の体を抱え、睨みを効かせていた。

（まずい……！）

叫んだ少年の顔から、血の気が引いた。眠り続ける沙紗に魔力の殆どを注ぎ込んでいる圭一が、限界を迎えていることに気がついたのだ。

明らかに圭一の様子はおかしかった。ほんの数メートルの距離でひどく息が上がっており、少女の体重を支えきれないのか膝を突いている。もう、動けないようだった。

彼が動かない以上男は動けず、男が何をするか予測がつかない以上イーデン達も動けない。一種の膠着状態だ。

それを破ったのは、意外な声だった。

「……何と、情けのない……これが、我らが苦しめられようとも愛した故郷の者らの、なれの果てか……？」

小さな、愛らしい声。誰もがその声と言葉に耳を疑った。

圭一は、腕の中の存在を凝視する。彼の目の前で、少女はふらりと視線を彷徨わせ、小さく息をつく。そして、おもむろに右手を口許に寄せると、躊躇無くその指先に噛み付いた。

「っ？！」

息を呑む圭一。

「適当な刃物が、なかった」

少女は淡いアクアマリンの瞳を圭一に向けて苦笑いすると、噛んで血を滲ませた傷口を彼の唇にこすりつける。

「薬を吸って濁ってはいるだろうが、それでもないよりはずっとましだろう？　さぁ」

方陣術士の牙は、血を吸い魔力の糧とするためにある、という。そのこと自体は圭一も識っているが、あくまで知識であって、試したことはない。勿論、可愛い沙紗に披露してみせたこともない。ならば、この少女は何故そのことを識っているのだろう？

されるがままになっていた圭一は、呆然として呟いた。

「……誰、だ？」

その視線は、少女の双眸に定められていた。

「あんたは、誰だ……？」
その瞳の色に見覚えがない。自分の記憶が確かならば、あの可愛い幼馴染は青味の強い薄墨色の瞳だったはずだ。揺れ動く激情を湛える瞳は、ここまで薄い、凍える蒼ではなかったはずだ。
少女は、また小さく苦笑いした。
「わからないのならば、良いから。……『ちりゅう』」
愛おしげに囁かれた言葉を最後に、少女の体から力が抜けた。
圭一は慌てて抱きなおす。
「……う、うわぁあぁ！」
硬直状態から解けた男が、隠し持っていたナイフで圭一に斬りかかった。
反応が遅れた圭一の頭上で、甲高い金属音が鳴り響く。
「ぼさっとするな、さっさと立て！」
鋭い声は、濃緑の長衣をまとう男だ。何の飾り気も無い無骨な細剣は、ナイフを弾いてオークショニアの首へと向けられている。
圭一は一瞬呆けていたが、血の付いた口唇をひとなめすると立ち上がった。少し勢いをつけ過たようで逆によろめき、イーデンの連れていた警邏隊員に押し包まれる。
（方陣術士の回復法は知ってたけど、まさか、ここまでとは……）
差し出された外套で少女をくるんでやりながら、人知れずひんやりとした思いを味わう圭一。
「隊長、お先に失礼致します」
「あぁ。先刻指示した通り、＜燭台（メノラー）＞ではなく＜知恵（ホマー）＞へ案内してやってくれ。天空殿には伝えてある」
「はっ。隊長はどうなさいますか」
「ふむ」
部下の問いに、イーデンは少し考える素振りを見せる。
「こちらを片付け次第伺いたいと、伝えておいてくれ」
「了解」
敬礼し、圭一の背を押す部下を、イーデンは手を振って見送った。

そして。

「無事に着いていたようだな。……おや、他のは？」

先に到着していた圭一に続いて通された応接室で、イーデンは先客に問うた。

テーブルに本を何冊も広げて書き物をしていたらしい少年は、顔を上げると肩を竦めて見せる。

「何か、『用事があるから退散する』、だってさ」

「そうか」

彼らの正体を知っているイーデンは、大体の理由を察して気のない返事を返す。それきり、会話がなくなった。お互いに今日が初対面で、しかもその原因が先程の騒動となれば、気まずいことこの上ない。

イーデンは暫くの間、圭一の対面で静かに座っていた。

「……なぁ、先程から何をしている？」

「んっ？」

唐突に声をかけられ、圭一は目を丸くする。

「あぁ、数学の宿題。明日当たりそうだし」

「ほぅ……少し、書物を見せてもらっても良いか？」

興味しんしんで書物――数学Ａの教科書に手を伸ばすイーデンに、圭一は少々苦い顔をする。

「あんま触って欲しくないなぁ」

「扱いには注意するぞ？　書物の知識は貴重だからな」

「いや、今やってる問題、そのページなんだよ。例題の解説も書いてあるから、今持ってかれるとキツイ」

「ふむ」

納得いかない顔をしつつ、イーデンは手を引っ込める。その代わり、圭一の手元を観察することにしたようだ。

対する圭一は、そんなことはお構いなしに――流石に内心、見られていることが気にはなっていたが――、目の前の問いに組み付い

ている。ノートの空白に計算を書いたり消したり、シャーペンの芯を出したり戻したりと悪戦苦闘中だ。
「それは何だ？」
「はっ？」
またも突然の問いに、圭一は反射的に眉根を寄せた。
「……どれ？」
「その、字を書いているやつ。いや、白い本ではなく、お前の持っているものだ」
ノートを取り上げかけていた圭一は、イーデンが指差すシャーペンに目を向ける。
「これ？　シャーペン。クリック式の鉛筆だな」
「……？　すまない、エンピツがわからない」
「えーっ？」
どう説明したものかと、圭一は頭を掻く。
「んー……、確か炭と粘土を混ぜて焼いたやつじゃ……あれ、鉛も入ってたっけ……？　俺もあんまり知らないんだよな。とにかく、ゴムでこすると消える筆記用具だよ」
ノートを裏表紙から開き、シャーペンとともに差し出す圭一。
イーデンは嬉々としてペンを掴むと、―「Ｅａｄｅｎ　Ｔｒａｕｓｅｎｎ」《イーデン・トラウセン》と綴った。
「書きやすいな、これは！　この紙も羊皮紙と違ってすべすべしていて、素晴らしい」
うっとりとペン先を見つめる様子に嫌な予感がした圭一は、イーデンが何かを言う前に口を開いた。
「やらないぞ」
「む、何故わかった」
「わからないやつがいるかよ、そんな目ェキラキラさせて！」
「……残念だ」
イーデンは小さく溜息をつき、ペンをノートの上に降ろした。が、指先は名残惜しげにペンの胴を撫でている。

「せめて、機構を見たいなぁ……解体しては？」
「絶・対・ダメだっ！　バラしたが最後、戻らない気がする」
イーデンの物騒な発言に、圭一は身を乗り出して両手で大きな×印を作ってみせた。対するイーデンは舌打ちをし、未練がましくシャーペンを睨んで手を引っ込める。
その時だ、部屋の入り口の方から、忍び笑いが聞こえてきたのは。
「仲が良いようで、結構だな」
青味がかった銀髪の、背の高い男だ。袖なしの単衣にジャストサイズのパンツを合わせ、左肩から上着のように一枚布をかけている。ちょうど時代劇で見る、片肌脱ぎのようなシルエットだ。
男は、２人に手招きした。
「昼食の準備が出来たと言うので、呼びに来た」
「……沙紗は？」
応じず気色ばむ圭一に、先程の笑いで和んだオリーブ色の目を細める男。
「大丈夫だ。少し寝かしておいたらぽかっと目を覚まして、開口一番腹が減った、だとさ。準備した量が足りないかもしれないと、料理番が頭を抱えていたぞ」
その様子を思い出したのか、男はくっくっ、と笑う。
圭一も苦笑いする。
「沙紗らしいなぁ。あーぁ、俺も腹減った！　早く行こうぜ」
「あぁ。荷物はどうする？」
「お、忘れてた」
２人は圭一が広げていた本やノートを手早く片付け、先導する男に従って部屋を出た。

「あ、圭一くん！」
「よう、沙紗」
食堂の目前で、廊下の真逆から少女が駆けてくる。
「可愛いカッコだな」

着の身着のままで学院の制服である圭一に対し、沙紗はスタンダードな真っ白のワンピース。腰の切替えから下にはレースがふんだんに使われていて、沙紗の動きと相まって見た目にも軽やかな印象だ。共布のボレロにも同じようにレースが飾られている。

上から下まで動く圭一の視線に、沙紗は頬を膨らませた。

「服だけぇ？」

「何だよ、沙紗が着てるから可愛いんじゃん。ご不満？」

微笑と共に投げかけられた圭一の言葉。沙紗の頬が、今度はぽんとバラ色に染まった。

圭一がぷっと吹き出す。

「おいおい、これくらいで紅くなるなよー」

「誰のせいよっ」

噛み付く沙紗に、恵一は声を立てて楽しそうに笑う。彼は、１０代の女の子らしく自分が言うことの一々に反応する沙紗が可愛くて仕方ないのだ。対する沙紗も圭一を憎からず思っているので、圭一の一挙一動ついでに一言が気になって仕方がない。

くすくすと、沙紗に追い越された形になっていた天空が笑う。

「はいはい、２人共。お喋りは後にして早く部屋に入りなさい」

『はぁーい』

天空の母親のような物言いに、２人が揃って良い子の返事を返す。

「祭司長殿は一番奥へ。お前達も詰めて座れよ」

「何であんた、そんなに偉そーなんだよ。ったく」

ぐだぐだ言いながらも素直に長テーブルに詰めて座る圭一。男は何も言わずにニヤリと微笑う。

「ねぇ、ソラ。今日のお昼御飯って何？」

圭一の隣に着席した沙紗が、対面に座る天空にはしゃいだ声で問いかける。その時、圭一が「あ！」と声を上げた。

「どうした、タカムラ」

イーデンが首を傾げる。

「やっば、俺弁当２つともあるよ、今日」

「は？」
圭一の言葉に声で反応したのはイーデンだけだったが、他の3人も目が点になっている。
「2つ？」
「2時間目終わったら食おうと思ってたの。あーぁ、どうしよっかな」
「待て待て、お前は日に何度食事を取っている？！」
イーデンが目を剥いた。
恵一は持参のスポーツバッグから包みを2つ取り出しながら、けろっとした顔で口を開く。
「んー、多い時は1日5食とか？」
「朝昼3時に夜深夜……」
唖然とした天空の口からポロっと零れたのは、昔懐かしいCMの文句。
「流石に深夜は食わないよ。……つーか、」
周囲を見回して息をつき、圭一は半眼になった。
「何か勘違いしてるみたいだから弁明しとくけど、5食食うのは朝練昼練正練フルで出た時だぞ」
沙紗が「あぁ」と納得顔になる。
「そっか、圭一くんサッカー部だもんね」
「そ。早い時は朝5時とかに起きるからな。それに5食ったって、2食はまともに食べないで、菓子パンとかハムサンドとか、おにぎり1個とかそんなレベルだし」
「なぁんだぁ、びっくりした」
大袈裟に胸を撫で下ろして見せる沙紗。誤解の解けた3人は、自身の心境を重ねて苦笑い。
圭一も笑って返し、包みを2つとも広げた。一方は稲荷寿司が3つ、もう一方は4つと色とりどりのおかずが入っている。
「あ、いいなぁ！　おばさんが作ったの？」
覗き込んだ沙紗が羨望の声を上げる。

「うん。半分食う？」
当然のように差し出された弁当に、沙紗は目を輝かせた。嬉々として手を伸ばす彼女を、天空達は微笑ましげに眺めている。
「おかずも分けるから持ってて。……沙紗、これあげる」
「あ、こら、ブロッコリー嫌いだからってこっちによこさないの！」
「……食うのはともかく、もう少し静かに出来んのか、２人共」
流石に見かねてか、イーデンが口を挟んだ。前菜のスープを並べに来た女官達が、くすくす笑っている。
「良いじゃないですか、イーデン様。楽しくて」
天空がにこやかにとりなす。
なおも何か言おうとしたイーデンを、圭一が箸を振って遮った。
「昼食（ランチ）なんてダベって何ぼだろ、イーデン。カタイこと言うなよ」
「圭一くん、口にモノ詰めてる時は喋らない！」
沙紗の怒声に、圭一の首が亀のように引っ込む。
男はくく、と笑った。
「見事な負けっぷりだな。もう尻に敷かれているのか」
「うるせぇ」
圭一はべぇっと舌を出し、弁当をやおら傾ける。沙紗は何も言わなかったが、溜息をついて軽く頭を振った。

大騒ぎの昼食からおよそ半刻後。
「くあぁっ、よく寝たぁ」
日当たりのいい庭の大きな木の下、圭一は大きな欠伸とともに午睡から目を覚ました。寝違え気味の首を鳴らしていると、くっくっと笑い声が耳に届く。同時に、日が陰る。
「本当に良く寝ていたな」
顔を上げると、銀の輝きが目に入った。圭一が目を細めると、男は片膝を突いて圭一と視線を合わせる。
「どうだ、少しは回復したか」
「あぁまぁ、それなりに。昼寝程度だしフルとはいかないけど、飯

もしっかり食ったし？」
「良いことだ。がっつり食ってしっかり寝る、体力回復でも魔力回復でも有効な手段だ」
男は満足げに数度頷いて、すっくと立ち上がった。
「あんた、何しに出てきたんだ？」
「ん？」
首を傾げる圭一に、男は平らかな腹をさすってみせる。
「腹ごなしに、鍛錬をな。女達に釣られて少々食いすぎた」
おどける男に、圭一は声を立てて笑う。
「お前も付き合うか？　といっても、まずは着替えか」
「制服のまんまじゃダメかな」
「駄目とは言わんが、破れても汚れても知らんぞ」
「……服、何か貸してくれ」
「そうこなくてはな」
男はニヤリと笑うと、「ついて来い」と手招きした。

「でぇいっ！」
甲高い金属音と共に、火花が散る。
衝撃に顔をしかめる圭一。
噛み合っているのは、鈍い銀色の槍と透明な杖だ。圭一は力を込めて押し切ろうとするが、なかなかどうして足が進まない。
男の口許が歪む。と同時、男の体が沈んだ。
「んなっ」
「甘い」
ガチガチになっていた圭一の体が、無様にひっくり返る。
「ってぇー……」
「得物に頼るな。いざという時には身ひとつしかないんだぞ」
銀槍で肩を叩きながら、男は圭一に手を差し出す。
圭一はその手を掴み、引っ張られるまま立ち上がった。
「不意打って足払いかけたくせによく言うぜ……」

「それが戦術ってものだ」
不平を言う圭一に、意地悪く笑う男。圭一は不貞腐れた顔で髪を梳き……不意に腰を落として杖を横に薙いだ。
男は事も無げに広報へ飛び退く。
「応用が早いのは大変に良い。が、素人だな、やっぱり」
「っくー！」
地団駄を踏む圭一に、男が声を立てて笑う。
「素直だなぁ、お前」
「うるせぇっ」
「誉めてるんだぞ。ほら、来い来い」
男が指を立てて招くのに、圭一は頭に血をのぼらせて突進した。

そんな男2人を、テラスから眺めている女2人。
「まーたやってる」
ここ3，4日、男2人は暇さえあればチャンバラをしていた。
天空はカップを並べながら苦笑する。
「毎日飽きないわねぇ」
「ね」
沙紗はスコーンやクリームの皿を並べるのを手伝いながら、圭一を見やる。
「でも、圭一くんってば全然上達してないような……あ、またかわされた」
「大地は相手が上達しても、それを感じさせないからね。昔っからそうなのよ、おかげで宥めるのに苦労したわ」
天空の目が、懐かしむように細められる。
沙紗は誰を、とは聞かなかった。きっと、自分の知らない人だから。
「飽きないといえば……沙紗。あなたも毎日良く来るわね」
「だって、イーデンさん構ってくれないんだもん。それに、圭一くんがこっちにいるし」

沙紗は拗ねた様子で胸元の言霊珠（ペンダント）を弄る。
天空はこっそりと微笑んだ。
（気を利かせたつもりなのね、彼は）
大方、仕事が忙しくて相手をしてやれないので、好きに遊びに行ったら良い、とでも言ったのだろう。イーデンは魔術的な感応力は人並みだが、少女の自覚のない感情の動きには敏感だったようだ。
「……ソラ、何笑ってるの？」
怪訝な顔で天空を覗き込む沙紗。天空は両手で自分の頬を包み込む。
「え？　あぁいえ、何でもないわ」
若い子達が微笑ましくて愛しくて、と言ったら、この子は何と言うだろう。怒るだろうか。拗ねるだろうか。それともっと別の表情を見せるのか。
「さぁ、スコーンが冷めてしまうわ。そろそろ……」
その時、ギィン！　と凄まじい音がした。
沙紗と天空、２人共が肩をそびやかせて目を瞑る。
「……また、すごい勢いで切り結んだわね」
先程の音は、互いに全体重を乗せて真正面からぶつかったものらしかった。
１８０ｃｍを少し上回る男と、１８０ｃｍ間近の圭一。体格の似通った２人は物理的な力量は拮抗しているだろう。切り結べば、いつまでも終わらないか一瞬で片が付くかのどちらかである。
動かない２人を、沙紗達が固唾を飲んで見守る。
がさ、と葉擦れの音がした。それを探るように、圭一がほんの一瞬視線を外す。
瞬間、動いた。
男が力を緩め、足払いをかける。
が、それは不発に終わった。タイミングよく圭一が飛んだのだ。バランスを崩したのか狙ったのか、圭一はやや突っ込み気味に宙を舞う。

「っと！」
男は慌てて槍を引き、刃先を地へと向けた。万が一にも圭一を斬り付けてしまわないためだ。
隙に突っ込む形になった圭一は、男の肩に手をつくと、そこを支点にくるりと体を回転させた。部活と体型維持のために鍛えた筋力の賜物だ。圭一が選んだ丈の長い上衣が翻り、男の視界を一瞬覆う。
圭一の足が地に着き、2人は背中合わせになる。男は本能の告げるまま、下げていた刃先を横後方に振り上げた。
ガギッ、と槍と杖が噛み合う。男の瞳に、幽かな焦りが浮かぶ。
また膠着状態かと思われた時、乾いた拍手の音が割り込んできた。
「やぁ、良いものを見せてもらった」
「イーデン！」
にこやかに木の陰から出てきた青年に、圭一は呆気に取られた声を上げる。男も緊張の糸が切れたのか、槍を下ろして深く呼吸をする。
「……邪魔をしてしまったようだな」
「ホントにな。……痛っ！」
からかう口調で返すや否や、圭一は後ろ頭を平手で叩かれる。平手の主は当然、先程まで圭一の相手をしていた男だ。
「失礼な物言いをするな、ガキ」
「てめぇ……」
「涙目のキレイな顔が凄んでも怖くないぞ。ようこそ、祭司長殿」
槍を手にしたままだが、男は歓迎の意を込めて両手を広げてみせる。
イーデンは目礼を返し、テラスに出ている沙紗達に微笑みかけた。
「こんにちは、天空殿はご機嫌麗しゅう」
「イーデン様も」
天空は両袖を合わせて一礼する。しがらみのない沙紗は、気楽に手を振っていた。
「イーデンさん、お仕事終わったんですか？」

「何とか裁判手続きも終わってね。今日はもう」
「やった」
諸手を上げ、素直に喜ぶ沙紗。
放っておかれた圭一が、イーデンの後ろを通ってテラスに上がる。ふてくされた顔をしている彼に、男がからかうような視線を向ける。
「仕方ないだろう。高校生のガキと大人の男、格の違いって奴だ」
「指摘されるとムショーに腹立つ」
憮然とした表情で、圭一はポットを1つ開けてみた。湯気と共にふわりと立ち上った香りに、圭一の目が丸くなる。
「これ、コーヒーだ」
「えっ、ホント？」
意識がポットの中身に向き、沙紗は急ぎ足で圭一の隣に立つ。
「昨日はあったかいミルクだったのに」
「良いコーヒー豆が手に入ったのよ。嬉しい？　紅茶の苦手なお2人さん」
2人の返答は火を見るより明らかだった。目の輝きが違う。少女達のあまりのわかりやすさに、大人達は思わず顔を綻ばせた。
「さぁさ、お茶会にしたいから、圭一と大地は手を洗っていらっしゃい」
軽く手を叩きつつ言う天空に、男は頷いた。
「あぁ、わかった。行くぞ、ガキ」
「ガキ言うな！　いちいち腹立つヤツだな、あんたー」
2人の背を、3人の笑い声が追っていく。

「ぷはぁっ！」
頭から水を被り、豪快に頭を振って水滴を跳ね飛ばす圭一。その横で鍛えた上半身を晒した男が、喉を鳴らして笑う。
「良くやるわ、お前」
「だって汗かいたしさ。シャワーといきたいけど、そうはいかないし」

言いながら、圭一は手桶を石造りの泉に放り込んだ。この泉は絶えず地中から清浄な水が湧き出ており、神殿を作る際に建物と同じ石で囲ったものなのだという。

「確かに。ここの風呂はやたらデカイが、シャワーがない」

水の入った手桶を圭一から受け取り、男は汗を拭いた布を洗う。

「しかしお前、良いのか？　パンツびしょ濡れだぞ」

「なーにを今更」

圭一はからりと笑った。彼は今、男から借りている服を全部脱ぎ、下着1枚だけの姿だ。成長期の体はまだ筋肉が薄く骨っぽい印象が否めないが、水を浴びて光を弾く様は健康的で、良い具合に張り詰めている。

対して男の方は、いわゆる「男の体」をしていた。格闘家ほどがっちりとした感はないが、全身は質の良い筋肉に覆われていて、肉食獣の風情がある。

「今更といえばさぁ」

「何だ？」

「あんたの名前は一体どれだ」

本当に今更で唐突な問いに、男は目をぱちくりとさせた。

「……名乗らなかったな、そういえば」

「だろ？　だから俺、あんたの名前がわからないんだよ。『地龍』って呼ばれてる時と、『大地』って呼ばれてる時があるよな？」

濡れた髪をがしがしと拭きながら問う圭一に、男が頷く。

「あぁ……では、改めて名乗ろうか。＜栄光＞（ホド）を司る『地龍』、千早　大地だ。……少し、気恥ずかしいな。こういうのは」

はにかんで何とも言えない表情を見せる男――地龍に、圭一はにかっと笑う。

「じゃ、改めてよろしくな、地龍……で、良いんだよな？」

「あぁ、こちらこそ、な」

地龍の手と圭一の手が、がっちりと握り合う。

「さて、いい加減に服着て戻るか。パンツ乾いたか？」

「あんたさっきからそればっかりだなー」
笑い声を響かせながら、ばたばたと服を着る2人。
異変は、その時起こった。
先に気が付いたのは、偶然空を見上げた圭一だった。
「……なぁ、地龍。あれ、雨雲かな？」
「雨雲？」
圭一が何気なく指差す先に、地龍が視線を滑らせる。
それは確かに、にわか雨を降らせるはぐれ雲のように見えた。
（……雲？）
雲にしては黒すぎる気がして、地龍は目を凝らす。
「――圭一、来い！」
「え？」
「来い」の意味がわからず、圭一は一瞬呆けた。
地龍は焦れて、まだちゃんとは服を着ていない少年の手首を引っ掴む。
「良いから来いっ」
「一体何だよ！」
引っ張られるまま駆け出す圭一。
テラスに戻ると、天空と沙紗は緊張した面持ちで2人を待っていた。
「あれ、イーデンは？」
「イーデンさんは、警邏隊の詰め所に行ったよ。『先行する』って」
圭一の問いかけに答えた沙紗の目は、不安の色にかげっている。
地龍が忌々しげに舌打ちした。
「奴等だけじゃ無理だろう」
「……大地、まさか」
「その『まさか』だ。そら、沙紗達を頼んだぞ。＜栄光＞（ホド）の守護獣を連れて行くからな」
地龍から矢継ぎ早に発される言葉が、天空の顔色をみるみる蒼白にしていく。

「だ、駄目よ、駄目よ大地！　お願い……っ」
悲壮な面持ちで、天空は地龍の胸に取りすがる。
地龍は一瞬切なげに目を眇めたが、すぐに表情を引き締めると、天空の両肩をそっと押しやった。
「どちらにせよ、行かなくてはどうしようもない」
「大地っ！」
ヒステリックに声を上げる天空。
地龍の表情が、痛みをこらえるようなものに変化した。同時に、天空の肩に置いた手にぐっと力がこもる。
「……っ、聞き分けろ、『天空』！！　お前がそんなことでどうする、お前がそんなでは、２人を不安にするだけだろう！」
天空がはっとする。ふと首を巡らせれば、沙紗は圭一に寄り添っていて、落ち着かない表情を見せていた。圭一は肩に触れる沙紗の手を、宥めるようにそっと握っている。
視線を戻すと、地龍は小さく頷いた。天空は口唇を噛むと、不承不承ながらも気丈な顔で頷き返す。
「頼むぞ」
地龍の手が名残惜しげに天空の肩を滑り、離れた。
３人に背を向け、そのまま発つかと思われたその時。
「……待ってくれ、俺も行く！」
その足を止めたのは圭一だった。天空は「何を言うか」といわんばかりの顔で彼を振り向き、沙紗は無言でその横顔に視線を注ぐ。
地龍はにやりと口許を歪め、振り返った。
「良いだろう。さっきの続きだ、実戦で鍛えてやるよ」
圭一が頷く。
沙紗の手に、力がこもった。無言の抗議だ。
「……カッコ、つけさせろよ」
沙紗だけに向けられる、わずかに引きつった笑み。沙紗は少しの間圭一を見つめていたが、決意が変わらなさそうなのを見て取ると、渋々手を放した。

圭一は目元を和らげると、沙紗の「短い」髪を一房指先に絡ませて口付けた。
「……無事じゃなかったら、許さないから」
「あぁ」
圭一が泣きそうな沙紗に背を向けたところで、地龍は＜栄光＞（ホド）の神殿守護獣――己の眷属を喚び起こすために指笛を鳴らした。
高く澄んだ音に呼応するように、何かの気配が辺りに満ちる。
「よう、炎華」
＜お久しゅう、主＞
地龍の声に応じたのは、しっとりと深い声。
コマ落としのフィルムを繋げたように突如として現れたその声の主は、深い紅色をした炎の鱗をまとっていた。炎の竜だ。
「説明の時間が惜しい、とにかく乗せろ」
炎華と呼ばれた火竜は、溜息をついた。
＜また唐突なことを……伴侶殿はよくもまぁ我慢の効く……＞
哀れみと同情のこもった瞳が天空を見やる。沙紗が見た天空は、苦笑いをしていた。
「炎華」
焦れた地龍が軽く叱責の声を飛ばすと、炎華は膝を折り、身をかがめた。
＜どうぞ、主。事情は視ておりましたので把握しています＞
「だったら最初から素直に乗せろ、減らず口」
＜そっくりそのまま、そのお言葉返しますよ＞
くくく、と炎華が笑う。
地龍は苦虫を噛みつぶしてじっくり味わったような顔で炎華の背に乗り上げ、圭一を引きずり上げた。
「しっかり掴まっておけよ、圭一」
地龍がそう言うが早いか、炎華はゆっくり立ち上がると一声吼える。

「気をつけて、2人共!!」
負けじと声を張る天空の一言に押され、炎の竜は空へ駆け上がった。

「ち、意外と速いじゃねぇか」
舌打ちする地龍の視線が、町の中心にある物見塔に注がれる。そこには、得体の知れない異形のものが噛り付き、咆哮を上げていた。
「何だ、あれ?!」
「魔物だよ」
レンガが多く茶色っぽいはずの街並みが、あちらこちら黒々と塗りつぶされている。よく見ればそれはうごめいていて、圭一の脳裏に昔ビデオで見たアメーバの捕食行動を思い起こさせた。
「気持ち悪いだろう? 奴等はな、奴等だけは創世の折に作られなかったはずのモノなんだ」
蒼褪めた圭一に、地龍は淡々と告げる。
「奴等には男も女も、大人も子供も、人間も動物も、生き物もそうでないものも関係ない。見たものは全て『食い物』だ、わかるだろう?」
圭一の喉が、ごくりと動く。
「なぁ、圭一。お前、奴等をどうしたい? カッコつけた手前、放っておいて良いものか?」
「良くは……ないよ」
「なら、どうする? 逸らすか、遠ざけるか、滅するか……或いは逃げるか?」
「逃げられるかよ!」
遥か眼下からの悲鳴に、少年の絶叫が混じる。
「俺達の後ろには沙紗がいるのに、逃げられるかぁっ!」
「……その意気だ」
無表情だった地龍の口許に、薄く笑みが刻まれた。
「良いか、圭一。お前の方陣術はかなり攻撃的に出来ているとは言

え、お前には攻めの戦いは出来ない。ならば、やるのは守りの戦いだ」

「あぁ」

圭一が頷く。

「槍を扱う技術を叩き込んでやれなかったのは少々痛いが……まぁ、お前は生まれついての方陣術士だ、本能で何とかなるだろうよ」

「アバウトだなぁ、おい」

思わず零れた圭一の突っ込みに被さり、地龍の高らかな笑い声が後を引く。

それに惹かれたかのように、竜の背に乗る二人を目敏く見つけた怪鳥が、凄まじい速度で向かってきた。

「所詮はそんなものよ！　その場に適応し活路を見出したもの勝ちだ、戦いも、日々の生き死にも、何だってなぁっ！」

地龍はためらうことなく、怒号と共に怪鳥の眉間に槍を突き込んだ。怪鳥はひび割れた悲鳴を引いて落ちていく。

槍を払った地龍が、ぴっと親指を下に立てた。

「炎華、降ろせ。ここいらで良い」

＜しかし主よ、下では人の子らが善戦していますよ？　あれは……＜燭台＞（メノラー）の神巫（かんなぎ）ですか＞

「神巫？」

炎華の言葉に首を捻り、圭一は足の下を見下ろす。そして、あっと声を上げた。

「イーデン！」

「身を乗り出すな馬鹿、落ちるぞ！」

下を覗いて目を剥いた圭一を手で制し、地龍は炎華の体を軽く蹴る。炎華は素直に従い、人々の頭上すぐへ滑るように下降した。

「わぁっ、何だあれ？！」

「新手か……っ？」

部下達の動揺する声で、イーデンはふと顔を上げた。周囲には、何体もの怪物（モンスター）の死骸が転がっている。殆ど全て彼が打ち倒したもの

であり、それと引き替えに彼の息は完全に上がっていた。愛用の軍刀（サーベル）もそろそろ切れ味が鈍い。

「あれは……」

目に入ったのは、鮮やかな炎の紅。一瞬火の手が上がったかと思ったが、中空に浮かぶその姿形はいつか見たことがある。

「炎の龍……確か、＜栄光＞（ホド）の神殿守護獣か。しかし、誰が？」

血と汗で汚れた頬を袖口で拭い、イーデンは駆け出した。

それに気がついた圭一が、炎華の背で手を振り上げる。

「よう、イーデン！　……うぉわっ」

バランスを崩し、落ちかける圭一。イーデンが呆然としている前で少年の首根っこを捕まえたのは地龍だ。

「この馬鹿―っ！　この状態で手を放す奴があるかっ」

＜……＞

炎華は自分の背の上で何が起きたのか察すると、小さく溜息をついて前肢を一方だけ地に突いた。地龍が上手く位置を調整し、圭一は炎華の前肢を伝ってつるりと滑り降りてきた。地龍自身も、その後を追うように降りてくる。

そして、槍の柄尻で圭一の頭を小突いた。

「怪我人を増やす気か、素人」

「悪い……」

小突かれた所をさする圭一。自分が悪いとわかっているので、反論はしない。

「……何故……」

イーデンが、ようやくそれだけを口にした。

地龍はにやりと笑む。

「少ない増援で悪いな、＜燭台＞（メノラー）の祭司長殿。比較的近い＜知恵＞（ホマー）は女ばっかりだからなぁ、炎華と志願してきた馬鹿を連れてきたぞ」

「そうではなくて」

ぺらぺらと喋る地龍を、イーデンは遮った。彼が聞きたいのはそこではなく、何故炎華を連れてこられたのか、だったからだ。
地龍は謎めいた微笑のまま、口を閉じる。代わりに、槍の柄で自らの肩を軽く叩いていた。
イーデンの目が、徐々に見開かれてゆく。が、彼が目にし理解したものを口にする前に、地龍の視線は上空へと向く。
「……そろそろ、炎華の睨みも効かんか。圭一、構えておけよ」
「杖で構えるも何もないけどな」
口答えをしながらも、圭一は自分の身長よりも大きい杖を両手で掴む。
＜主、私は？＞
どこか面白がるような炎華の声。地龍は面倒そうにひらりと手を振る。
「好きに食い散らせ。人に被害が出なけりゃ、それで良い」
＜承知！＞
見た者の目に、龍の口許がにやりと歪んだように映る。彼らがそれをはっきり確認する前に炎華は一声咆哮を上げ、威嚇に盛大な炎を吐いた。
＜久方振りの食事だ。容赦はしない、覚悟せいよ魔物ども！！＞
その力強い、人外のものであるが故の力強すぎる言葉に、人々は怖気づき、また鼓舞される。
イーデンはぱっと部下たちに視線を滑らせた。そして、目的の人物を発見すると声を張り上げる。
「カーティス、警邏隊の内魔導戦士以外を撤退させ、避難路の確保に努めろ！」
突然の命令にカーティスは目を剥く。
「しかし隊長っ、それでは私があなたから……」
「良いから行け！　市民の保護が第一だ、カーティス。魔のモノは、魔の者に任せろ」
腹心の部下の言葉を遮り、イーデンは軍刀を拭って振り上げた。

「力有る者は私に続け、行くぞっ！！」
炎にひるまず向かってきたモノ達に、イーデンはちゅうちょなく突っ込んでいく。
ごった返す通りに、人の流れが2つ出来た。引く流れと、押す流れ。押す流れは勿論イーデンとその部下達だ。地龍と圭一も、そちらに混ざっている。
地龍は豪快に槍を振り回しているが、少々戦いにくそうにしている。背後の圭一を庇っているためだ。
圭一は、戸惑っていた。
「圭一、避けろ！」
地龍の叫びにはっとして、圭一は後ろに飛び退く。先程まで彼がいた場所に飛び込んできた小鬼（インプ）は、乱食いの歯を剥き出して圭一を威嚇する。圭一が咄嗟に杖で眉間を着くと、小鬼は身の毛もよだつような声を上げ、ぴょんぴょんと逃げてしまった。
（……下手くそ）
地龍は舌打ちする。
圭一は動きが悪い。小鬼に囲まれて右往左往していて、見ているほうがはらはらする。地龍も気が気でない。
（まぁ、当然か）
格好つけても子供は子供。怪物を見た瞬間凍りついてしまって逃げることも出来なかった沙紗よりは多少ましか。
「動きを良く見ろ、圭一」
「動き？！」
「そうだ、基本だよ。圭一、お前の大好きなサッカーと同じだ。相手の動きを読め。サッカーとの違いは、避けるか、ぶつけるかしかない。よく見ろ、ほら！」
地龍が声を荒らげ、圭一はまたその場を飛び退いた。そこに双頭の大鴉が突っ込み、地龍の槍がそれをしとめる。
「地べた走ってるヤツの動きを読むのは難しいが、それに比べれば飛んでるヤツなんざ簡単だ。見ただろう？　ヤツら特攻かけると軌

道修正が出来ないんだ」
　宙に向かって槍を振る地龍。ぐにゃりとした大鴉の体が吹っ飛び、元同族を巻き込んで石畳に落ちた。
「な？」
「それ、出来るのはあんただけだと思うぞ」
　にやりと得意げに笑う地龍に、呆気に取られた圭一が真顔で突っ込みを入れる。
「ま、経験の差か？　おら、もう一群来るぞ！」
　身を翻し、槍を突き出す地龍。
　対して圭一は……ひくり、と頬を引きつらせた。そして、何を思ったのか、単身駆け出す。
「んなっ！」
　自分の横をすり抜けた影を、地龍は咄嗟に捕まえようとして手を伸ばした。が、一瞬かすめただけで空振りに終わる。
　そして、自分の心配が無用だったことを知った。
　トンと軽く地を蹴ると、瞬時に伸ばされた圭一の足が人型を模した魔物の横頭を捉えた。バキッ、と不愉快な音を立て、魔物は地に伏す。
「うっ……とーしぃんだよ、こんちくしょーっ！！」
　大声で叫び、中指を立てる圭一。そのあまりの気迫に、魔物はおろか味方も引いた。
（……キレたか。見事な蹴りだ）
　地龍は思わず苦笑する。なるほど、圭一は下手に武器の扱いを仕込むよりも蹴りを追求する方が良かったようだ。
「な、何なんだあいつ……」
「気が触れたのか？」
　イーデン配下の隊員達が、怪訝な顔で圭一に視線を集める。
　圭一は周囲のことなどお構いなしで、杖を棍棒代わりに道を開き、邪魔なものを蹴散らしていく。
「だあぁぁっ！」

気合一閃、石畳の隙に杖を突き立てた圭一は、それを支点にしての回し蹴りで魔物を一掃するという芸当まで披露してみせる。
まるで即席の舞台のように、少年の周りが円形に開けた。
（こんなものか）
現状に満足し、圭一の口の端がふとつり上がる。
「……っ！！」
さわりと項を逆立てるような何かを感じ、地龍の顔が引きつった。
「ふ、伏せろ！　皆伏せろぉっ！！」
「地龍殿？」
「お前も伏せろ、イーデン！」
怪訝な顔をするイーデンに食らい付き、地龍は彼を引き倒す。
「痛てっ！　一体何を……」
「あいつ、ステップの軌跡で方陣組み上げやがった。一気に来るぞ！」
一気に来る、という言葉に、人々は慌てて石畳に縋りつく。
地龍が慌てて声を上げたのは、とある知識に拠っての判断だ。
今でこそ方陣術は記述式であり、故に魔導士にとっては極基本的な術とされている。しかし本来は、舞踏のようにステップで自らを高め、その軌跡を陣として利用したのではないか、という説がある。事実、そうやって結界術を行使するもの立ちもいる。即席ならぬ、足跡結界というものだ。
しかしこのときの圭一には、そんなことは関係なかった。彼はただ、本能――多分、正確には違うだろう。だが彼の生きてきた17年の中にない知識を、他にどう表現するべきか？――に素直に従っただけなのだから。
圭一は視界に入っていた人間が見えなくなったのを確認すると、ごく軽く地を蹴った。円形に開けた石畳に、翡翠の光条が走る。
「精霊の恵みにして、破壊の申し子、赤き天の鉄槌……」
少年の脳裏に、ちらりと恐怖が揺れる。炎への……死への、恐怖だ。かつての我が家を舐め尽くし、彼と幼馴染2人の命を喰らいか

けた炎は、彼の心の最奥に未だ燻っている。
消えることのない恐怖、癒えることのない疵だ。
だが。
（大丈夫だ、ちゃんと制御できる）
眦を決して前を見据える。魔力を高める詠唱を終え、最後のステップを踏み切ると、方陣内へと流れ込む魔力は風となって圭一を取り巻いた。
翡翠の光が、紅蓮に染まる。
「火術方陣……爆炎華！」
白熱した炎が吹き上がり、見た者の目を焼いた。
実の所、それを目にした者は多くない。ある者は生存本能によって、またある者は庇われて地に伏せ……自分達の上を熱い風が吹いていったと思った頃には、立っているのは長衣の少年ただ1人だけだった。
「……何という……」
自分の頭を押さえていた地龍の手を降ろさせ、イーデンが呆然とした声を出した。
「あれが、圭一が持つ＜血＞の力か……敵には回したくないな」
空笑いを零す地龍。イーデンも思わず頷く。
圭一は、杖を構えたまま微動だにしない。
（もう何もないか？　いや、でも……）
視界に入っているのは人間ばかりだ。あのおぞましい魔物達は綺麗さっぱり灼かれたらしい。
だが、敵意や殺意を強く向けられた時に感じる、肌がひりひりするような感覚が収まらない。
額から流れた汗がゆっくりと頬を伝い、顎から地へ落ちた時、その理由が姿を表した。
ぱち、ぱち、ぱち……と、やる気のない拍手が通りに響く。
「やぁ、見事だねぇ」
心底楽しそうな声だ。圭一達は声の主を探すべく、周囲を見回す。

空が、歪んだ。
「ふふふ……見事見事。流石、かの麗しの父母（ちちはは）から祝福を受けた身だ」
くるりと、空がめくれる。そう思ったのは一瞬で、気が付いた時には、中空に1人の男が佇んでいた。
白銀の長い髪、極上のアメジストのような深い紫の瞳の男は、対照的に黒のような深過ぎる藍色のような、そんな深い色の布地をふんだんに使った装束をまとっている。随所に施された金銀の縫い取りが、上品に映える。
「何者だ……？」
未だ地に伏す地龍が、小さく息を飲んだ。
（この俺が、気圧されている……）
目をそらせない。気配から察するにイーデンも同様のようだった。
「……何の、つもりだ」
圭一の口から、憤りを含んだ声が零れる。
「お前だろ、今の騒ぎの元凶！　こんな街中で、メチャクチャしやがって――我が一族を滅ぼしただけでは飽き足らぬというのか！」
男の目が、意外そうに丸くなった。対峙する圭一も、感情に任せて言ったはずの言葉に、気味悪そうにしている。
空気が、硬直する。
「……くっ、ふふっ……」
真っ先に立ち直ったのは、男の方だった。体をくの字に曲げての小さな笑いが、やがて哄笑へと変貌した。
「はっ、ははは、とんだ道化だ！　あれほどの術だからあるいは、と思っていたが……記憶は未だ、かの男の物ということか」
嘲るような笑みを顔に浮かべ、男はゆるりと手を振り上げる。
ポッ……と小さな光が灯る。それは見る間に、白熱した火球へと成長した。
「……興醒めだ。小さいとはいえ僕の障害になるかもしれない羽虫には、消えてもらうよ」

男の手が、無造作に振られた。特に狙いを定めた訳でもないのに、火球は正確に圭一目掛けて飛んでくる。

圭一は対応できていない。

「圭一っ！」

「タカムラ！」

地龍とイーデンが叫ぶ。

圭一は、杖を捨てて両腕で顔を覆った。

地龍が地を蹴り、その杖に手を伸ばす。

（間に合えっ！）

杖にさえ触れられれば、こちらの勝ちだ。圧縮呪文で結界を張れば、防御は出来る――個人調整するのが魔法具の常なので波長は全く合わないだろうが、恒常的に使う訳でなし、＜術＞1発程度なら経験で捩じ伏せられる。

しかし、目論見は外れてしまった。地龍の手は後1歩届かない。彼より一瞬早く、細い手がそれを取り上げる。

男の顔色がわずかに変わり、笑みが消えた。

「凍て付く空（くう）よ、集え！　清（さや）けき水よ、我を助けよ！」

軽やかな声が紡ぐ、素早く素朴な呪文（スペル）。だが効果は抜群で、火と水がぶつかる凄まじい音と共に、辺りはたちまち水蒸気で満たされ、視界が白く閉ざされる。

「……裏切り者が……」

全く無表情の男の唇が、憎々しげに声を零す。

「裏切り者だと？　……元より仲間であったつもりもない」

応じたのは、若い娘の声だ。その声に聞き覚えのあるイーデンが、はっとした顔をする。

＜術＞の作用で偶然出来た即席の霧が、ゆっくりと晴れていく。

そこにいたのは、濃い灰色の髪をした少女だった。白い貫頭衣に柔らかなマントを羽織り、細い手足は腕輪などで飾っている。

圭一は見知った姿に、小さく息をついた。

「助かったぜ」

「気を抜くな、まだ終わっていない」
男に目を向けたまま、少女は素っ気無く返して圭一に杖を押し付ける。
男の口の端が、ふとつり上がる。
「その身で、僕に歯向かうというの？　僕が与えてやったその身と＜力＞で？」
その目に侮蔑の色が浮かぶ。
少女の紫眼が苛烈に煌いた。
「敵わぬかどうかは、その身でとくと味わうが良い！」
周囲に強い風が巻き上がった。圭一達は思わず顔を覆う。
「私は人を悪く言うことは好まない。身を汚す言葉を慎むようにしている……だが、お前だけは、お前だけはいくら罵倒しても満足まで程遠いわ！」
少女の激情を巻き込んで、風が刃となって男に襲いかかる。が、陽光に煌く髪の一筋も断つことは出来なかった。
男は現れた時と同様、忽然と消えたのだ。高々と響く哄笑に、少女が舌打ちする。
「ほぅら、やっぱり敵わない……ッ！」
息を飲む気配。次いで、ぱらりと空の一部が割れた。その向こうに、眉をひそめた男の顔が見える。
「なっ……どういうことだ?!」
イーデンは気味が悪そうにそれを凝視する。
「隠れ蓑の術ごときで回避できると思ったか。波動術士の探査力を舐めるな」
少女の頬に、凄みのある笑みが刻まれた。その手に、極小さな旋風がゆらゆらと揺れている。
「我等が＜力＞は肉体のものに非ず。私の力はお前のものではない！」
「……フン」
男は忌々しそうに目を細め、少女から目をそむけた。

「人ならざる身がよくぞそんな口を聞く……ならばもう利用価値もない。せいぜいその身をいとえ、次に見える時が貴様の最後だ」

呪詛を吐くような、憎々しげな言葉。破られたマントを腕にくるりと巻き取ると、男の気配は唐突に消えた。肌がひりひりするような重圧も感じられなくなる。

呼吸を数度数えて気配が復活してこないのを確認すると、少女は手の中の旋風を握りつぶした。

そして、その体がぐらりと傾ぐ。

「あっ、おい！」

慌てた圭一が少女を抱きとめたときには、彼女の意識は既になかった。

イーデンは、呆然と立ち上がる。

「……一体、何がどうなっているというんだ？　何が起こるというんだ……？」

その問いに答えられる者は、いない。

相当に衰弱していた少女は、＜知恵＞（ホマー）の一室で昏々と眠っている。時折苦しげに顔が歪むが、ベッド脇に付き添っている沙紗と圭一に気付いて目を覚ます様子はない。

天空は廊下から扉の内を覗き、少女を運び込んだ時から何ひとつ変化がないことを認めると、静かにその場を後にした。そのまま、地龍とイーデンの待つ自室へと向かう。

「そら、どうだった」

地龍の問いに、天空は小さく頭を振る。

「ほんのちょっとも意識が戻っていないみたいよ。大分と弱っているのね」

随分と心配そうな天空の言葉に、両腕を組みむっつりと押し黙ってソファに身を預けているイーデンの眉が動く。

「……随分と、あの死人に入れ込んでいる様子で」

ややぞんざいで不機嫌なイーデンの言葉は、自身が祭司長として

預かる神殿＜燭台＞（メノラー）はこの＜知恵＞よりも格上であり、また自分達が世界を守る要なのだという矜持からに他ならない。

「すべての席は私（わたくし）が負います。ご迷惑はおかけしません」

天空は神妙な顔で、袖の中で両腕を合わせる最敬礼の姿勢をとる。

イーデンの渋面は張れない。

「そうは言っても、１度穢れを負えば浄化には長い時がかかるのだぞ。死の穢れならば尚更だ。天空殿、そなたはそれを理解していてなお、あの穢れの塊とも言うべき死人を招き入れ、清浄であるべき神殿を穢、す、と……」

声を荒げ腰を浮かせたイーデンは、しかしすべてを言い切ることは出来なかった。彼を阻むように、銀の輝きがその喉元に突きつけられている。

「口を慎め、若造が」

冷やかな声は、地龍のものだ。

「わ、私を若造だと……っ」

「普通の人間と特殊な人間を見分けられた点は誉めてやる。あぁ、その点はとても良い。だがな」

ふと、その目が細まった。

「お前はまだ神殿のシステムをわかっていない。そんなヤツ、若造で充分だろう」

言葉同様、地龍の目が冷ややかに光る。外見にそぐわない年ふりた厳しさが見え隠れする。

「結界は、どんな意味があると思う？」

「意味……だと？　そ、そんなもの決まりきっているではないか。神聖なる場に穢れを入れないために……」

しどろもどろで答えるイーデン。

彼は、自分が知識不足だとは露ほども思っていない。むしろ、神官となるべく生家を離れ幼い頃から修行を積み重ねてきたからには、民間の人間よりもずっと神殿のことに、ひいては世界のことに深い知識を持っていると自負している。だからこそ、自分のなすことに

自信があったのだ。
だが今、目の前の男にそれを崩されかけている。自分と同じか、下手すると自分よりも年下にみえる、この男に。
「……まさか、何か別の意味があるのか？」
「別の意味というか……お前の認識よりも、もっとひどい、というかな。
神殿に張られている結界は極特別なものだ。限られた人間以外は生者さえ受け付けず、1度でも死の匂いを纏ったものは、それがどんな理由であれ容赦なく炎の洗礼を浴びせ掛けるシロモノだ。参拝者や数多の神官らに精油をやるのは、天使という名の＜門番＞（ゲートキーパー）と同じ匂いを纏わせて、結界に『限られた人間だ』と誤認させるためだ。
俺が言いたいことは……解るよなぁ、イーデン＝トラウセン？」
イーデンはごくりと喉を鳴らした。背筋を冷や汗が流れていく。
「……大地」
それまで傍観していた天空が、地龍の背をそっと叩いた。
地龍は何事かと問うように、片眉を上げて妻（天空）の顔を見る。彼女が神妙な顔で小さく頷くと、地龍は何かを感じ取った様子で銀槍を引き、そっぽを向いた。
「沙紗達を見てくる」
素っ気無く言い、地龍は出て行った。
イーデンはほっと息をつく。
「助かった、天空殿」
「助けた訳ではありませんよ、イーデン様。私は私の言い分を聴かせようと思って」
天空はぴしゃりとはねつけた。彼女には珍しい冷ややかな声が、彼女の怒りをイーデンに伝える。
「先程の説明を聞いても、まだお気付きになりませんか？　彼女の内に宿る＜力＞は、私らの血統と同じモノですよ」
「……！」

「私は滅多に怒らない人間ですが……流石の私でも、身内への御言葉は耳に障りましたわ」

そう言うと、天空は不愉快そうな表情でイーデンを見やった。

「私のやり方が気に入らないというなら、今すぐここから出て行きなさい。たとえ貴方が上級神殿の祭司長であろうとも、世を司る6つの精霊から直々に任じられた私に命じる権限はない」

イーデンは、全く知らない他人から叱責を受けている気分で身を竦ませた。

そして、思い出す。目の前にいるこの女性が、外見に見合わず長い時間を生きていることを。

（この人は、一体何をその目に映してきたのか……）

子を生み成した事もなさそうな見た目で、自分の倍は生きている女性。彼女は、少々居心地悪そうな青年の様子に小さく息をついた。

「出て行く気がないのなら、ついてらっしゃい」

先程よりは大分と和らいだ声をかける天空に、イーデンは軽く首を傾げる。

「何処へ？」

「宮へ客人が来たわ。出迎えをしなくては」

天空は意味ありげに微笑むと、ショールを軽やかに翻した。

こんこん、とノックの音が響いた。

「沙紗、圭一」

呼び声に振り返ると、ドアに手をかけた地龍の姿が目に入る。

「そいつ、どんな様子だ」

「全然ダメ」

圭一が憮然とした顔で手を振り、否定の意を示す。

地龍は訝しげに片眉を上げると、2人の背後からベッドの少女を覗く。

「水術（回復魔法）は効くかね。圭一は苦手らしいが、沙紗はイケるだろう？」

「それも……」
しょんぼりと、沙紗は俯いた。
「あたしも水術のほうはあんまり得意じゃないから、波動術の＜活性化＞を試したんだけど……すごく体を悪くしてるみたいで、全然効果がなくて……」
「……そうか」
生き物への＜活性化＞は、対象の活きの良さ――言い方は悪いが――が肝心だ。見るからに衰弱しきっている少女には、生命力を活性化してやろうとしてもなかなか難しいだろう。
「しかたないさ。頑張ったんだから、後は待とう？　な？」
圭一は努めて明るく言うと、沙紗の肩を軽く叩いた。沙紗は小さく頷く。
その時、またノックの音が響いた。先程地龍がノックした時より、いくらか軽い音だ。
「良いぞ」
地龍が応じると、静かにドアが開く。
「そら」
「お客様を、連れてきたの。２人いたんだけど、１人はちょっと外で待ってもらってるわ。……さ、どうぞ」
ドアの隙間から天空が体をずらすと、濃緑の長衣（ローブ）をまとった男の姿があった。その後ろにイーデンが控えているのだが、何も言うまいとしているのか表情はとても硬い。
圭一が、あっと目を丸くする。
「あれ？　あんた特攻に参加した……」
「すごい覚えられ方だな」
男が苦笑いした。対して圭一が、悪びれずににかっと笑う。
「……ねぇ、圭一くん。特攻って？」
「え？　覚えてないのか……って、そうか。あの時、様子おかしかったもんな、沙紗は」
オークション会場に突入した時のことを思い出し、圭一は肩を竦

める。
　対して沙紗は、眉をひそめた。
「あたしに大怪我させた人と、あたしを助けるのに力を貸してくれた人が同一人物なんて、すっごい皮肉ね」
「うっ」
　男が怯む。圭一は信じられないという顔で男と沙紗を見比べた。
「……あ、あれは不可抗力だったんだ。偶然というか……」
「偶然でもなんでも、怪我は怪我です。死にかけたんだから」
　取り付く島もない沙紗の言葉に、男は途方にくれて頭を掻いた。
　波動術士である彼女だ、正体を誤魔化すという点において万に1つもこちらに分がないのはわかっていた。だから、隠すつもりなどない。ないが……。
　この青味を帯びた薄墨色の瞳に――あの透明な藍玉（アクアマリン）の瞳に――にらまれるのは、今も昔も、怖い。
「言い訳は……聞いてはもらえんよなぁ……」
　男の抱いた懐かしさトハ裏腹に、緊迫した空気が流れる。イーデンなど、男が何か一言でも発そうものなら頭ごなしに罵倒の言葉を浴びせそうだ。圭一は相変わらず沙紗と男の2人を交互に見ているし、天空も少々心配そうに状況を見守っている。
　少しして、沙紗がふぅ、と息をついた。
「……何か、言うことは？」
「え？」
　予想外の言葉に、男はきょとんと目を丸くした。
　沙紗はベッドサイドのいすに腰掛けたまま、両手を腰に当てる。自分は怒っているのだ、と相手に示すように。
「怪我させた相手に、何か言うことは？」
「あ、あぁ」
　気まずげに視線を逸らす男。
「あー、その……すいませんでした」
　口ごもりながらも素直に頭を下げる様子に、沙紗は「よし」と頷

いた。
「……良いんだ、それで」
圭一の問に、沙紗は軽く肩を竦める。
「良くはないし、聞きたいことはいー……っぱいあるんだけど、それよりこの人とこの人の気配がすっごく似てるのが気になる」
沙紗は無遠慮に、ベッドの少女と男をそれぞれ指差した。
「何か、変なんだよね。生きてる感がないっていうか」
男はわずかに目を瞠ると、軽く手を打ち鳴らした。
「いや、見事。あの時にも思ったが、波動術士としては凄腕だな」
「……隠そう繕おうとは思わないのか？」
あまりにあっさりと沙紗の言葉を肯定した男に、イーデンは怪訝な目を向ける。
男はふと微笑う。
「隠したところで利はない。波動術士に取り繕ったところで、早晩しっぺ返しを食らうだけさ。そうだろう？　“夕凪”（ユウナギ）」
その呼び声に応じたように、少女の目蓋がひくりと震えた。
「あっ」
沙紗と圭一が、２人して声を上げる。
一同の目の前で、少女は一際大きく呼吸をすると、その目蓋をようやく開く。ややぼんやりとした様子で、紫眼は暫し宙をさまよった。
「凪」
「……“荒波”（アラナミ）」
自分に焦点を合わせ、呼び声に応じた少女の様子に、荒波と呼ばれた男はほっと息をついた。
「大丈夫か？」
「えぇ、まだ……」
（『まだ』？）
掠れた少女の声は、確かにそう言った。どういう意味だろうと沙紗は考えるが、問いかける間は与えられなかった。

原因は、夕凪と呼ばれた少女の方にある。彼女はその紫の瞳に沙紗を捉えるや否や、驚愕の表情で身を起こし沙紗の両腕に取りすがったのだ。

「っ、天空！」

「え？　ちょっ……」

弱っている相手を無下にも出来ず、沙紗は目を白黒させる。傍らにいる圭一は、驚きに目を剥いて固まっていた。他の3人は呆然としており……ただ1人、荒波だけが訳知り顔で見守っている。

「天空、天空ごめんなさい。私、わからなくって……っ」

泣きながら、ごめんなさい、と繰り返す相手に、沙紗はとりあえず人違いだ、と言おうとした。だが、その言葉を喉に通そうとするとどうにも引っかかって出てこない。

仕方なく、ぎこちなく手を上げて少女の頭を抱き寄せ、その灰色の髪を撫でた。

「良いから。……良いから」

きっとこの人は、何か大変なことを胸に抱えて生きてきたのだろう。それが何のことなのか、遇って間もない自分には皆目見当がつかない。だが彼女にとっては重大なことこの上ないものなのだろう。生者でも、死者でもないモノに身をやつすほど。

伝わってくる、人には到底持ち得ない異質の波動。それがじんわりと指先をしびれさせるが、沙紗は慰めの手を休めない。

その様子をじっと見ていたイーデンは、ふと天空のほうを見た。

「天空殿」

「なぁに？」

天空は首を傾げる。

「その、良いのだろうか？　あなたと勘違いしているのでは……？」

先程の叱責がまだ効いているのか、イーデンは遠慮がちに問う。

天空は少し考えてから、口を開いた。

「間違えるなら……先代や先々代の＜門番＞（キーパー）か、記伝上の人物でしょう。『天空』の名は、私1人の名ではないから」

「記伝上の人物……？」
イーデンは首を捻る。脳内の事典をひっくり返してみるが、思い当たる歴史人物はいない。
「……我らの長(おさ)だ、“天空”は」
口を挟んだのは、荒波だった。
「長？　軍か何かの筆頭だったのか？」
イーデンの言葉に、荒波は軽く笑う。
「軍ではないよ。族長……我ら『天空の一族』の、族長だった。あれが呼びつづけているのは、彼女の名さ」
イーデンは目を瞠った。
「『彼女』？　女性が、長だと？」
「実力社会だったからな。天空は族長の家に生まれた娘で、上には兄がいたし、下には弟妹が数人いたのだが……誰も彼女に敵わなかったなぁ。家族はもとより、部族の者も」
荒波は懐かしげに目を細める。
「そんな＜力＞を持ちながら、それにおぼれることなく自らを律し部族の者らを愛した彼女を、慕わぬものはいなかった。だからだろうか、あれが“地龍”と添うことになった時、多くの男共が涙を呑んだものだよ」
“地龍”というまたも聞きなれた名に、イーデンはちらりと地龍を見やる。が、当人は気付いていないのか興味がないのか、沙紗達をじっと見ている。
「で……その者、今は？」
「さぁな」
イーデンの問いに、あっさりと首を振る荒波。
「戦傷で体を弱らせて亡くなって以来だ。転生体に逢ったことはないし、そもそも魂(こん)の行方など、誰も知らんよ」
懐かしみと痛みをはらむ眼差しに、イーデンは気まずげに目線を下げた。
「戦傷で、か……辛いことを思い出させたな」

「気にするな。もう、すべては遠いことさ。……しかしな、どれだけ経っても、あの男のことはどうしても許せなくてなぁ」

男の瞳が凍る。

「やっとのことで難を逃れて新天地に次代を生し、ようやく平穏に暮らしていたというのに……！　我らを蝕んだあの男、戦渦に巻き込み、挙句の果てには我らを傀儡（かいらい）と成したあの術士……力に溺れて神を害し、在る限り世界と敵対する者！

一族のために一矢でも報いてやりたい。仮令我が身が砕け散ろうとも」

年ふりた男の目は、虚空を――この場にいない憎き仇を、睨みつけていた。

（一体、どうなっているんだろう）

しん、と静まり返った＜知恵＞（ホマー）の庭先で、圭一は愛用の杖を振りつつ考えていた。

もう３０分は経とうか。単調な動作とともに、ぐるぐると頭の内を掻き回している。

……実を言えば、考え事をするつもりはなかった。最初はただ単に、寝つきの悪さを解消したくて庭に出てきたのだ。圭一は普段健康的なサッカー少年なので、ちょっと体を動かさないと気持ち良く眠れなくなる。

が、それで運動に素振りを選んだのはまずかったらしい。地龍に勧められたのだが、慣れていないし、流れる汗が夜気（やき）に冷えて気持ち悪い。そんな諸々の不快感を頭から締め出したくて、考え事を始めたのだ。

この現状は何なのだろう。いつの間にか、沙紗とともに巻き込まれていた現状は。

圭一は、沙紗を保護できたらさっさと帰るつもりだった。そのために、仲間たちがサポートに来るのをゆっくりと待つつもりだった。

元々の計画ではサポートメンバーが先に来るはずだったとはいえ、進行はおおむね良好だ。
が、待てど暮らせど皆は来ない。そのうちに、気紛れを起こして市街の防衛に向かってみたら、いつの間にか自分は騒ぎの渦中、しかもほぼど真ん中に立っていた。
好きな女の子に格好つけたかったのは事実だが、これは面倒すぎる。
冷たい男と言わば言え。今は、沙紗さえ無事なら他はどうでも良い。
（……さて、何をどうやって切り抜けるか……）
力いっぱい、杖を振り落とす。びゅん、と風を切る音が響き、圭一の体がわずかに前へ傾ぐ。
「圭一くん」
不意に耳へ届いた呼び声に、圭一はテラスを振り返った。
薄手の生地で出来ているらしい長衣（ローブ）の裾を夜風に遊ばせ、沙紗が笑顔で手を振っている。
「沙紗」
「地龍さんから、ここだって聞いて」
軽やかにテラスを降りて駆け寄ってくる沙紗に、圭一はぎょっとした。
「……沙紗、それネグリジェじゃ……」
「うん」
沙紗はあっさりと頷く。
「……何で？」
「あれ、言ってなかった？　あたしもこっちに泊まるんだよ」
何やらご機嫌な様子で教えてくれる沙紗に、圭一は内心頭を抱える。この目の前でにこにこしている思い人は、ひょっとするといわゆる「中身」を着ていないのではないだろうか。
これではうかつに手を触れられない。
「圭一くん？」

悩める少年を見上げて首を傾げる沙紗に、圭一ははたと我に返った。百面相をしていたかもしれない頬をつるりと撫で、咳払いをする。

「寒くないか？　そんな薄着で」

「うん、寒くない」

その返答に、圭一は訝しんで片眉を上げた。

沙紗は肩を竦める。

「多分、この体が『借り物』だからじゃないかなぁ。感覚、薄いの」

「あ、そうか。ゲームのキャラデータに、感覚って必要ないもんな」

納得し、大袈裟に頷く圭一。

沙紗はくすくす笑う。

「……あ、そうだ。地龍さんから伝言だよ。『明日っから覚悟しとけ』……だって」

「げ、勘弁してくれよ」

心底嫌そうな圭一の言葉に、沙紗は楽しそうに笑っていた。

Ｐｒｏｇｒａｍ　１４，　ｃｌｅａｒ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0573x/

Lost　Blue

2011年11月30日23時49分発行